

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書16

—信濃町内 その2—

せいこうさんそう せいこうさんそう にしおか かのき うえのはら
星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫ノ木・上ノ原
おおくぼみなみ ひがしうら うらのやま ほりのき おおだいら
大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平B
ひなたばやし ひなたばやし ななつぐり ふこうだ
日向林A・日向林B・七ツ栗・普光田

縄文時代～近世

本文編

2000

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター

『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16-信濃町内その2-』縄文時代～近世

正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、ご訂正くださいますようお願いいたします。

本文編

頁	行	訂正前	訂正後
1	6	実施	実施
	22	埋葬遺構など	遺構をとる
9	12	<1行挿入>	[SY] 竪跡
10	13	貝殻履縁文	貝殻履縁文
11	3	楔形石器 (Pe)	石錐 (Dr)
	4	<1行挿入>	楔形石器 (Pe) 石器の上下両端から剥離痕が観察されるもの。
	10	舟底形石核	舟底形石核
13	17	(野尻古人類学考古グループ)	(野尻湖人類考古グループ)
17	18	<1行挿入>	野尻湖人類考古グループ1987『野尻湖遺跡群の旧石器文化1』
23	13	1個体	1個体
25	3	Se	ES
	11	再加工のある剥片	2次加工のある剥片
	14	直力斧	直刃斧
	26	Gw	GS
28	18	コーピック	コーディック
	27	拡張	拡張
31	33	磨石や石斧	磨器や有基尖頭器や陸起線文土器
	34	斧形石斧・磨石	磨器や有基尖頭器や陸起線文土器
	34	局部磨製の斧形石斧	陸起線文土器や有基尖頭器
44	30	楔状石器	楔形石器
46	11	片刃平盤形	片刃で平らな刃形
	11	片刃丸盤形	片刃で丸みのある刃形
59	17	<1行削除して書き換え>	4 いわゆる舟底形石器と異なる舟底形石核が出土している。
60	30	コーピック	コーディック
62	左段8	森崎弥	森崎弥
84	25	三角錐状石器	三角錐形石器
	29	径3.2	径3.2
91	38	遺跡	遺跡
99	30	『銀形鑑』	『銀形鑑』
101	16	コーピック	コーディック
106	右段27	パリオサーベ	パリオサーヴェイ
	左段30	<1行削除>	
119	8	35.	35%
135	12	5は五角形	5は五角形
149	29	ゆるくの字	緩くくの字
153	15・16	報告	報告
154	5	約6 km	約2 km
	25	七ヶ泉遺跡、普光田遺跡、日向林A遺跡と合わせて設定した(第1図)。	I区とII区を遺跡範囲内に設定した(第32図)。

頁	行	訂正前	訂正後
158	12	協同測量者	協同測量社
163	2	2.42×0.9	2.42×0.9m
172	1	遺構は確認されている。	遺構は確認されていない。
	2	埴子築系	埴子築系
173	第43表11・12	半截竹管文	半截管文
175	21	鶴田正順	鶴田典昭
204	12-15	安山岩	無斑晶質安山岩
	1	安山岩	無斑晶質安山岩
205	35	磨頭	磨頭
	19	創期初頭	草創期初頭
237	17	無斑晶質安山岩	無斑晶質安山岩
	21	破蓋	両刃
252	36~38	<削除>	
255	第62表石器組成	埴子型尖石斧	埴子型石斧
	12	信濃埋	信濃町
269	17	柳葉型	柳葉形
	21	斧形石斧	斧形石器
270	31	島久保	川久保
273	15~16	問題の求	問題の探求
	19	字会	字界
276	23	道之	道之助
	29~31	関 孝一	関 孝一
279	2	埋蔵文化財発掘調査発掘報告書	埋蔵文化財発掘調査報告書
	3	『真埋蔵文化財センター紀要』	『長野県埋蔵文化財センター年報』
	4	長野県文化財センター	長野県埋蔵文化財センター
	25-26-27	宮坂英次	宮坂英次
281	38	縄文草創期	縄文草創期
	27	縄文	縄紋
282	30	縄文	縄紋
	30	『科学読光』14-12	『科学読光』14-13
	35	宮坂英次	宮坂英次

図版編

頁	図版番号	遺構名	記号	訂正前	訂正後
凡例			△	石斧	斧形石器・石斧
10・11	図版10・図版11	SQ01~SQ03	●		土器
			○		剥片(フレーク)類
			□		石核
			☆		閉器
			★		搔器
			◆		槍先形尖頭器
			Ⓚ		石錐
			Ⓒ		磨石
			Ⓣ		有基尖頭器

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書16

—信濃町内 その2—

せいこうさんそう せいこうさんそう にしおか かのき うえのほら
星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫ノ木・上ノ原
おおくほみなみ ひがしうら うらのやま はりのき おおだいら
大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平B
ひなたばやし ひなたばやし ななつぐり ふこうだ
日向林A・日向林B・七ツ栗・普光田

縄文時代～近世

本文編

2000

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター



野尻湖周辺全景



星光山荘B遺跡出土遺物

序

信濃町は黒姫山麓にあって新潟県と境を接し、俳人小林一茶の里として知られる高原の町です。観光地として知られる野尻湖は、野尻湖調査団によって継続されている湖底の発掘でも知られています。この発掘は全国から参加者を集め、ナウマンゾウやオオツノシカなどを狩った人々の生活のようすや当時の自然環境があきらかにされつつあります。また、化石が発見される湖底の遺跡だけではなく、湖の周辺に広がる野尻湖遺跡群も、日本の旧石器時代を代表するような遺跡の密集地として知られています。

信濃町を縦断して建設される上信越自動車道の工事に先立ち、長野県埋蔵文化財センターは、平成5年から7年まで発掘調査を実施しました。調査対象地が野尻湖遺跡群を縦断するものであったため、旧石器時代の大量遺跡を数多く調査することになりました。なかでも、日向林B遺跡などでは、新聞紙上等で大きく報道された発見もありました。同時に、これらの遺跡では縄文時代や平安時代の資料も数多く出土しています。旧石器時代がとくに注目されて、現地調査時にはあまり報道されることもありませんでしたが、これらも質・量ともに今後の研究にとって重要なものです。整理作業は各年度の冬期間に続き、平成8年から11年まで継続して実施され、今年度をもって終了することになりました。

本書では、信濃町内で行われた上信越道関連の発掘調査のうち、旧石器時代を除いた縄文時代・平安時代などの遺構・遺物を掲載しました。とくに星光山荘B遺跡の隆起線土器・それに伴う豊富な石器群、日向林B遺跡の表裏縄文土器など、縄文時代の草創期から早期にかけての豊富な内容は、全国的にも注目されています。つたない報文ではありますが、本書は基準資料として永く活用されるものと思います。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団・長野県高速道局・信濃町・同教育委員会など関係機関、地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業に御協力いただいた多くの方々、直接の御指導を賜った長野県教育委員会の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成12年3月31日

財団法人 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
所長 佐久間 鉄四郎

例 言

- 1 本書は上信越自動車道建設工事に伴い平成5～7年にかけて発掘調査された、長野県上水内郡信濃町星光山荘A・星光山荘B・貫ノ木・西岡A・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平B・日向林A・日向林B・七ツ栗・普光田遺跡の調査報告書である。
- 2 本書は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 信濃町内その2 縄文時代～近世』全2分冊（本文編 図版編）である。
- 3 発掘調査および整理作業は、日本道路公団より長野県教育委員会を通じた年度毎の委託事業として、財団法人長野県埋蔵文化財センター（平成5～9年）および財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター（平成10・11年）が実施した。
- 4 上記遺跡の概要は、『長野県埋蔵文化財センター年報』10・11・12・13等で紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は本書を以て訂正する。
- 5 写真図版の航空写真は（株）こうそく・（株）写真測図研究所・（株）アイシー・（株）協同測量・（株）新日本航業に撮影を委託したものである。
- 6 遺物写真は西嶋 力調査研究員が撮影を担当した。
- 7 石器実測は一部を（株）アルカ・（株）こうそくに委託した。
- 8 表裏縄文土器の観察・分類は矢澤健太郎が行い、中島が補足した。
- 9 本書の旧石器時代編と共通する節や項については大竹・谷が担当し、縄文時代編に編集して掲載した。
- 10 本書の編集執筆は中島が行い、土屋が全体を校閲した。
- 11 発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのかたがたのご指導ご協力を得た。本文編にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。
- 12 本報告書で報告した記録および出土遺物は、報告書刊行後長野県立歴史館に移管する。

凡 例

- 1 本報告書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記の通りで、該当個所のスケールの上に記してある。
 - 1) 主な全体図、遺構配置図、遺物分布図
全体図 1 : 1000 1 : 2000 1 : 4000 遺構配置図 1 : 400または1 : 800 遺物分布図 1 : 800
 - 2) 主な遺物実測図
土器拓本 1 : 2 土器 1 : 4
石器 土製品 3 : 4 1 : 2
- 2 本報告書全体図・遺構配置図における該当項目は次の通りである。
高速道路路線部：破線 調査範囲：実線 遺跡範囲：網点のスクリントーン
- 3 本報告書に掲載した遺構配置図における遺構は図中に凡例を示した。
- 4 表で示す石器の器種名は第1章第2節遺物の分類で示した記号を用いた。
- 5 本報告書の石器属性表や石器組成表などで使用する石材の記号は次のとおりである。

記号	石 材	記号	石 材	記号	石 材	記号	石 材
Ob	黒曜石	SS	珪質頁岩	Ch	チャート	Rh	流紋岩
An	安山岩	Ag	玉髓	Sa	砂岩	Se	蛇紋岩
Sh	頁岩	Qu	石英	Sl	粘板岩	Ho	ホルンフェルス
ST	珪質頁岩	GT	緑色凝灰岩	Ja	鉄石英	凝砂	凝灰質砂岩
Tu	凝灰岩	Ts	凝灰質頁岩	Cr	水晶	Ge	下呂石

本文目次

序
例言
凡例

第1章 調査の概要	1	
第1節 調査の経過	1	
1 調査に至る経緯と経過	2	
2 調査体制と調査期間	3	
3 指導者・協力者		
4 調査参加者		
第2節 調査の方法	7	
1 発掘調査の方法		
(1) 試掘と調査区の設定	(2) 遺跡名称と遺跡記号	
(3) グリッドの設定と呼称法	(4) 遺跡記号と遺構記号	
(5) 遺物の取り上げと記録方法		
2 整理の方法		
(1) 遺物整理方法と収納		
(2) 遺物の分類について		
第3節 遺跡周辺の環境	12	
1 遺跡の地理的環境		
2 遺跡の歴史的環境		
第2章 星光山荘A遺跡	18	
第1節 遺跡の調査と概要	18	
1 遺跡の概要		
2 調査の概要		
(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過	
(3) 調査結果の概要	(4) 基本土層	
第2節 縄文時代の遺構と遺物	21	
1 遺構		
(1) 土坑	(2) 集石	(3) 遺物集中部
2 遺物		
(1) 土器	(2) 石器	(3) 石製品
第3節 その他の遺物	26	
旧石器時代の石器		
第4節 まとめ	26	
第3章 星光山荘B遺跡	28	
第1節 遺跡の調査と概要	28	
1 遺跡の概要		

2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過
	(3) 調査結果の概要	(4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	31
1	遺構	
	(1) 土坑	(2) 遺物集中部
	(3) 集石	(4) ブロック
2	遺物	
	(1) 土器	(2) 石器
第3節	平安時代の遺構と遺物	50
1	遺構	
2	遺物	
第4節	自然化学分析	52
1	隆起線文土器の放射性炭素年代測定	
2	古地磁気学的手法による炉跡推定と礫群の残留磁化測定	
第5節	まとめ	58
第4章 貫ノ木遺跡		
第1節	遺跡の調査と概要	60
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過
	(3) 調査結果の概要	(4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	63
1	遺構	
	(1) 土坑	(2) 集石
	(3) 遺物集中部	
2	遺物	
	(1) 土器	(2) 石器
第3節	平安時代の遺構と遺物	85
1	遺構	
2	遺物	
第4節	近世の遺構	86
第5節	土坑の化学分析	86
	貫ノ木遺跡のSK25・36のリン酸分析	
	(1) 概要	(2) 分析方法
	(3) 測定結果と若干の考察	
第6節	まとめ	90
第5章 西岡A遺跡		
第1節	遺跡の調査と概要	93
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過
	(3) 調査結果の概要	(4) 基本土層

第2節	縄文時代の遺構と遺物	97
1	遺構	
	土坑	
2	遺物	
	(1) 土器	(2) 石器
第3節	まとめ	100
第6章 上ノ原遺跡		
第1節	遺跡の調査と概要	101
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過 (3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	103
1	遺構	
	土坑	
2	遺物	
	土器	
第3節	近世以降の遺構	104
	(1) 炭焼窯	(2) 溝
第4節	まとめ	105
第7章 大久保南遺跡		
第1節	遺跡の調査と概要	106
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過 (3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	108
1	遺構	
	(1) 土坑	(2) 遺物集中部
2	遺物	
	土器	
第3節	まとめ	109
第8章 東裏遺跡		
第1節	遺跡の調査と概要	110
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過 (3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	118
1	遺構	

	(1) 集石	(2) 遺物集中部	
2	遺物		
	(1) 土器	(2) 石器	
第3節	古墳時代の遺物	142
	土器		
第4節	平安時代の遺構と遺物	143
1	遺構		
	(1) 住居址・建物址	(2) 土坑	
2	遺物		
第5節	まとめ	153
第9章 裏ノ山遺跡			
第1節	遺跡の調査と概要	154
1	遺跡の概要		
2	調査の概要		
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過	(3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	156
1	遺構		
	遺物集中部		
2	遺物		
	(1) 土器	(2) 石器	
第3節	まとめ	157
第10章 針ノ木遺跡			
第1節	遺跡の調査と概要	158
1	遺跡の概要		
2	調査の概要		
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過	(3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺物	160
第3節	平安時代の遺構と遺物	160
1	遺構		
2	遺物		
第4節	まとめ	167
第11章 大平B遺跡			
第1節	遺跡の調査と概要	169
1	遺跡の概要		
2	調査の概要		
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過	(3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	172

1	遺構	
	遺物集中部	
2	遺物	
	(1) 土器	(2) 石器
第3節	弥生時代の遺構と遺物	174
1	遺構	
	遺物集中部	
2	遺物	
	後期後半の土器	
第4節	まとめ	175
第12章 日向林A遺跡		
第1節	遺跡の調査と概要	176
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過 (3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺構と遺物	179
1	遺構	
	(1) 遺物集中部	(2) 集石 (3) 土坑
2	遺物	
	(1) 土器	(2) 石器
第3節	土坑の化学分析	210
	土坑のリン酸分析	
	(1) 概要	(2) 分析方法 (3) 測定結果と若干の考察
第4節	まとめ	214
第13章 日向林B遺跡		
第1節	遺跡の調査と概要	215
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過 (3) 調査結果の概要 (4) 基本土層
第2節	縄文時代の遺物	219
	(1) 石器	(2) 土器
第3節	まとめ	220
第14章 七ツ栗遺跡		
第1節	遺跡の期の調査と概要	221
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法	(2) 調査経過 (3) 調査結果の概要 (4) 基本土層

第2節	縄文時代の遺構と遺物	224
1	遺構	
	(1) 集石 (2) 土坑	
2	遺物	
	(1) 土器 (2) 石器 (3) 土製品	
第3節	弥生時代の遺物	240
	土器	
第4節	平安時代の遺構と遺物	240
1	遺構	
	(1) 住居址 (2) 建物址 (3) 櫓列	
2	遺物	
	(1) 住居内遺物 (2) 遺構外遺物	
第5節	その他の遺構	246
	中世の遺構	
	土坑	
第6節	自然化学分析	246
	七ツ栗遺跡の放射性炭素年代測定結果	
第7節	まとめ	247
第15章	普光田遺跡	
第1節	遺跡の調査と概要	248
1	遺跡の概要	
2	調査の概要	
	(1) 調査範囲と調査方法 (2) 調査経過 (3) 調査結果の概要 (4) 基本土層	
第2節	縄文時代の遺物	248
	(1) 土器 (2) 石器	
第3節	まとめ	250
第16章	成果と課題	
第1節	星光山荘B遺跡について	251
第2節	表裏縄文土器について	257
第3節	土坑について	265
第17章	結語	269
参考文献		272

挿 図 目 次

第1図 グリッド呼称法

第2図 野尻湖周辺の地形

- 第3図 野尻湖周辺の遺跡分布図
 第4図 信濃町各遺跡基本土層図
 第5図 星光山荘A・B遺跡全体図・グリッド設定図
 第6図 星光山荘A遺跡遺構配置図・基本土層図
 第7図 星光山荘B遺跡遺構配置図・基本土層図
 第8図 星光山荘B遺跡跡線文土器胎土別分布図1
 第9図 星光山荘B遺跡跡線文土器胎土別分布図2
 第10図 星光山荘B遺跡礫周辺土8の段階交流消磁結果
 第11図 星光山荘B遺跡礫周辺土R-1の段階交流消磁結果
 第12図 星光山荘B遺跡SH01の残留磁化測定(75 Oe交流消磁時の磁化)
 第13図 星光山荘B遺跡SQ05の残留磁化測定(75 Oe交流消磁時の磁化)
 第14図 貫ノ木遺跡全体図
 第15図 貫ノ木遺跡遺構配置図1
 第16図 貫ノ木遺跡遺構配置図2
 第17図 貫ノ木遺跡遺構配置図3
 第18図 貫ノ木遺跡SK25の全リン酸・全カルシウム含有量(mg/100g)
 第19図 貫ノ木遺跡SK36の全リン酸・全カルシウム含有量(mg/100g)
 第20図 西岡A遺跡全体図
 第21図 西岡A遺跡遺構配置図
 第22図 上ノ原遺跡全体図・遺構配置図・基本土層図
 第23図 大久保南遺跡全体図・遺構配置図
 第24図 大久保南遺跡土坑
 第25図 大久保南遺跡SQ01出土土器
 第26図 東裏遺跡全体図・基本土層図
 第27図 東裏遺跡遺構配置図1
 第28図 東裏遺跡遺構配置図2
 第29図 東裏遺跡遺構配置図3
 第30図 東裏遺跡遺構配置図4
 第31図 東裏遺跡古墳時代土器
 第32図 裏ノ山遺跡全体図・遺構配置図・基本土層図
 第33図 裏ノ山遺跡縄文時代土器
 第34図 針ノ木遺跡全体図・遺構配置図
 第35図 大平B遺跡・日向林A遺跡・日向林B遺跡・七ツ栗遺跡・普光田遺跡調査区分割設定図
 第36図 大平B遺跡全体図・遺構配置図・基本土層図
 第37図 日向林A遺跡遺構配置図
 第38図 日向林A遺跡SK109・110・142の全リン酸・全カルシウム含有量(mg/100g)
 第39図 日向林A遺跡SK150・189の全リン酸・全カルシウム含有量(mg/100g)
 第40図 日向林B遺跡遺構配置図
 第41図 七ツ栗遺跡遺構配置図
 第42図 七ツ栗遺跡縄文時代土製品
 第43図 七ツ栗遺跡弥生時代土器
 第44図 普光田遺跡全体図・基本土層図
 第45図 普光田遺跡出土遺物
 第46図 長野県内縄文時代草前期遺跡分布図
 第47図 長野県内出土の種子象系石斧
 第48図 表裏縄文・燃糸文土器出土遺跡分布図

挿 表 目 次

- 第1表 野尻湖周辺遺跡一覧
 第2表 信濃町の遺跡基本土層表
 第3表 星光山荘A遺跡土坑属性表
 第4表 星光山荘A遺跡縄文時代土器属性表
 第5表 星光山荘A遺跡縄文時代石器属性表
 第6表 星光山荘B遺跡土坑属性表
 第7表 星光山荘B遺跡遺構別遺物組成表
 第8表 星光山荘B遺跡縄文時代土器属性表
 第9表 星光山荘B遺跡材質別器種別石器数表
 第10表 星光山荘B遺跡縄文時代石器属性表
 第11表 星光山荘B遺跡平安時代住居土坑属性表
 第12表 星光山荘B遺跡平安時代遺物属性表
 第13表 星光山荘B遺跡放射性炭素年代測定結果
 第14表 貫ノ木遺跡土坑属性表
 第15表 貫ノ木遺跡縄文時代土器文様別表
 第16表 貫ノ木遺跡縄文時代土器属性表
 第17表 貫ノ木遺跡縄文時代石器組成表
 第18表 貫ノ木遺跡縄文時代石器属性表
 第19表 貫ノ木遺跡平安時代住居土坑属性表
 第20表 貫ノ木遺跡平安時代遺物属性表
 第21表 貫ノ木遺跡全リン、全カルシウムの分析結果
 第22表 西岡A遺跡土坑属性表

- 第23表 西岡A遺跡縄文時代土器属性表
 第24表 西岡A遺跡縄文時代石器属性表
 第25表 上ノ原遺跡土坑属性表
 第26表 上ノ原遺跡縄文時代土器属性表
 第27表 大久保南遺跡土坑属性表
 第28表 東裏遺跡草創期無文土器・石器属性表
 第29表 東裏遺跡縄文時代土器文様別組成表
 第30表 東裏遺跡縄文時代土器属性表
 第31表 東裏遺跡縄文時代石器組成表
 第32表 東裏遺跡縄文時代石器属性表
 第33表 東裏遺跡古墳時代土器属性表
 第34表 東裏遺跡平安時代住居址属性表
 第35表 東裏遺跡土坑属性表
 第36表 東裏遺跡平安時代遺物属性表
 第37表 裏ノ山遺跡縄文時代土器属性表
 第38表 裏ノ山遺跡縄文時代石器属性表
 第39表 針ノ木遺跡縄文時代石器属性表
 第40表 針ノ木遺跡平安時代住居址属性表
 第41表 針ノ木遺跡土坑属性表
 第42表 針ノ木遺跡平安時代遺物属性表
 第43表 大平B遺跡縄文・弥生時代土器属性表
 第44表 大平B遺跡縄文時代石器属性表
 第45表 日向林A遺跡土坑属性表
 第46表 日向林A遺跡縄文時代土器文様別組成表
 第47表 日向林A遺跡縄文時代土器属性表
 第48表 日向林A遺跡縄文時代石器組成表
 第49表 日向林A遺跡縄文時代土器属性表
 第50表 日向林A遺跡全リン酸・全カルシウムの分析結果
 第51表 日向林B遺跡縄文時代遺物属性表
 第52表 七ツ栗遺跡土坑属性表
 第53表 七ツ栗遺跡縄文時代土器文様別組成表
 第54表 七ツ栗遺跡縄文時代土器属性表
 第55表 七ツ栗遺跡縄文時代石器組成表
 第56表 七ツ栗遺跡縄文時代石器属性表
 第57表 七ツ栗遺跡弥生時代土器属性表
 第58表 七ツ栗遺跡平安時代住居址属性表
 第59表 七ツ栗遺跡平安時代遺物属性表
 第60表 七ツ栗遺跡放射性炭素年代測定結果
 第61表 菅光田遺跡縄文時代遺物属性表
 第62表 縄文時代草創期長野県内遺跡地名表
 第63表 長野県内表裏縄文土器出土遺跡表

第1章 調査の概要

第1節 調査の経過

1 調査に至る経緯と経過

本書所収遺跡の発掘調査は、日本道路公団（以下、公団）による信濃町における上信越自動車道建設に関連して行われたものである。長野県においては、高速道路に関係する埋蔵文化財保護は長野県教育委員会が対応しており、その発掘調査は長野県埋蔵文化財センターが実施している。

信濃町内の上信越道建設に伴う発掘調査は、平成5年度から平成7年度の3年間にわたり、計14遺跡で行われた。信濃町内ではこの高速道路と交差する国道18号線妙高野尻バイパス建設に関連した建設省関東地方建設局長野国道工事事務所による調査報告書「貫ノ木遺跡・西岡A遺跡」は平成9年度に刊行済みである。

本書は信濃町内の上信越道建設に伴う14遺跡縄文時代以降の発掘調査結果を縄文時代～近世編として刊行する。また、旧石器時代の遺物が多量に出土した遺跡については、平成11年度中に七ツ栗・日向林B・大平B遺跡旧石器時代編（第1分冊）、裏ノ山・東裏・大久保南・上ノ原遺跡旧石器時代編（第2分冊）、貫ノ木・西岡A旧石器時代編（第3分冊）として分冊して刊行される。また第5分冊目として信濃町内遺跡基礎データ編も同時に刊行される。

調査範囲は、国道新設部分・高速道と橋脚接する部分・現国道拡幅部分・取り付けの県道・町道改良部分など、工事内容・時期・現況などがさまざまであった。そのため、調査区の設定・調査方法・調査時期など、埋蔵文化財調査の観点から不適合な点もあろうが、最善を尽くした結果であり、当初の目的は達成したと思われる。周辺も含めての調査区域・調査年度は別項に記した。

調査中に14遺跡の中で調査の縮小や、遺跡名等の変更があった。下記に列記する。

1 普光田遺跡は範囲内に遺物の散布を見たが、非常に密度の薄い遺跡であり、入念な試掘を行ったが、圃場整備遺構などで削平され、遺構など検出されず、調査範囲を縮小した。

2 星光山荘遺跡においては当初の周知範囲よりも300m南側に新たな地点を発見し、北側の地点を星光山荘A遺跡、南側を星光山荘B遺跡として調査を行った。

3 日向林遺跡においては、日向林B遺跡として調査を行ったが、信濃町教育委員会では北西側の範囲を日向林A遺跡として登録しており、北西部分を日向林A遺跡として報告する。

4 貫ノ木遺跡を調査中、西岡遺跡の北西側約300m地点に平安時代住居址1棟を発見し、周知の調査範囲から若干異なるが、貫ノ木遺跡として報告する。

なお、今回の調査区外の遺跡が広がっており、同遺跡の別地点と区別するため、今回の調査地点名をそれぞれの遺跡の高速道路地点としておく。また、高速道路地点を「H地点」として表記する。ただし、本書で扱う遺跡については、現状で混乱をきたすため、「H地点」の表記は省略する。

当センターにおいては、須坂以北の上信越自動車道・中野市内のいわゆるオリンピック道路の調査に対応するため、平成3年から中野市立ヶ花に中野支所を設置した。中野支所は翌年4年から中野調査事務所となり、信濃町内の発掘調査終了を待って、平成8年3月閉所された。以後整理作業は長野調査事務所にて引き継がれた。

各遺跡の調査年次は下項に記す。発掘および整理は年度ごとに公団が県教育委員会に委託し、県教育委

第1章 調査の概要

員会が当センターに最委託して実施された。発掘調査の契約面積は下記の通りである。

年度	遺跡名	調査契約面積
平成5年度	信濃町 普光田遺跡	1,000㎡
同	七ツ栗遺跡	1,700㎡
同	日向林B遺跡	5,000㎡
同	東裏遺跡	36,000㎡
同	貫ノ木遺跡	10,000㎡
平成6年度	信濃町 七ツ栗遺跡	800㎡
同	日向林A遺跡	12,000㎡
同	大平B遺跡	4,000㎡
同	針ノ木遺跡	4,000㎡
同	裏ノ山遺跡	8,500㎡
同	東裏遺跡	4,000㎡
同	上ノ原遺跡	3,500㎡
同	貫ノ木遺跡	29,900㎡
同	西岡A遺跡	6,900㎡
平成7年度	信濃町 七ツ栗遺跡	2,500㎡
同	日向林B遺跡	500㎡
同	東裏遺跡	4,000㎡
同	大久保南遺跡	3,500㎡
同	上ノ原遺跡	4,000㎡
同	貫ノ木遺跡	9,400㎡
同	西岡A遺跡	13,000㎡
同	星光山荘A・B遺跡	4,000㎡

2 調査体制と調査期間

調査体制および調査期間は以下の通りである。

平成5年度

調査体制	事務局局長	峯村忠司
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	中野調査事務所所長	関 孝一
	同 庶務課長	高野幹郎
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	渡辺敏泰 林 正則 (普光田遺跡・七ツ栗遺跡・日向林B遺跡)
		岡村秀雄 酒井健次 常長虎徹 久保田秀一郎 (東裏遺跡)
		鶴田典昭 山本 浩 臼田広之 (貫ノ木遺跡)
		前田利彦 (東裏遺跡・貫ノ木遺跡)
		谷 和隆 (普光田遺跡・七ツ栗遺跡・日向林B遺跡・貫ノ木遺跡)

調査期間	普光田遺跡	平成4年6月24日～平成4年7月2日
	七ツ栗遺跡	平成5年4月19日～平成5年6月18日
	日向林B遺跡	平成5年4月19日～平成5年10月29日
	東裏遺跡	平成5年4月19日～平成5年12月10日
	貫ノ木遺跡	平成5年6月21日～平成5年11月19日

平成6年度

調査体制	事務局局長	峯村忠司
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	中野調査事務所所長	関 孝一
	同 庶務課長	高野幹郎 6月より村山茂美
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	谷 和隆 常長虎徹 竹内聖彦(七ツ栗遺跡・日向林A遺跡・大平B遺跡) 寺島俊郎(針ノ木遺跡・裏ノ山遺跡・東裏遺跡) 神林忠克(裏ノ山遺跡・東裏遺跡) 久保田秀一郎(裏ノ山遺跡・上ノ原遺跡) 鶴田典昭 石原州一(上ノ原遺跡) 大竹憲昭 日田広之 奥山宗春 片山 徹 代田 孝 鈴木孝則 (貫ノ木遺跡・西岡A遺跡) 小田切清一(H向林A遺跡・貫ノ木遺跡・西岡A遺跡)
調査期間	七ツ栗遺跡	平成6年10月3日～平成6年10月31日
	日向林A遺跡	平成6年6月20日～平成6年12月9日
	大平B遺跡	平成6年4月18日～平成6年6月17日
	針ノ木遺跡	平成6年10月3日～平成6年11月4日
	裏ノ山遺跡	平成6年4月18日～平成6年11月11日
	東裏遺跡	平成6年11月14日～平成6年12月13日
	上ノ原遺跡	平成6年10月24日～平成6年12月9日
	貫ノ木遺跡	平成6年4月21日～平成6年12月9日
	西岡A遺跡	平成6年4月21日～平成6年10月31日

平成7年度

調査体制	事務局局長	峯村忠司
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	中野調査事務所所長	関 孝一
	同 庶務課長	村山茂美
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	谷 和隆(七ツ栗遺跡・日向林B遺跡・東裏遺跡)

第1章 調査の概要

		前田利彦 竹内聖彦（七ツ栗遺跡・日向林B遺跡・東裏遺跡・上ノ原遺跡）
		片山 徹 久保田秀一郎 三木雅博（大久保南遺跡・上ノ原遺跡）
		石原州一（上ノ原遺跡・星光山荘A・B遺跡・西岡A遺跡）
		酒井健次（星光山荘A・B遺跡）
		柳沢佑三（七ツ栗遺跡・日向林B遺跡・東裏遺跡・上ノ原遺跡・貫ノ木遺跡）
		大竹憲昭 神林忠克 奥山宗春 小田切清一 鈴木孝則（貫ノ木遺跡）
		代田 孝（西岡A遺跡・星光山荘A・B遺跡）
調査期間	七ツ栗遺跡	平成7年4月15日～平成7年8月4日・10月20日～10月31日
	日向林B遺跡	平成7年4月5日～6月14日
	東裏遺跡	平成7年7月18日～10月13日
	大久保南遺跡	平成7年4月5日～平成7年8月12日
	上ノ原遺跡	平成7年8月17日～平成7年11月28日
	貫ノ木遺跡	平成7年4月3日～平成7年11月30日
	星光山荘A・B遺跡	平成7年5月16日～平成7年9月8日

平成8年度

整理体制	事務局局長	青木 久
	同 総務部長	西尾紀雄
	同 調査部長	小林秀夫（兼長野調査事務所所長）
	長野調査事務所所長	小林秀夫
	同 庶務課長	戸谷 功
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	大竹憲昭 神林忠克 谷 和隆 柳沢佑三

整理作業内容 遺物の分類・実測

平成9年度

整理体制	事務局局長	青木 久
	同 総務部長	山崎悦雄
	同 調査部長	小林秀夫（兼長野調査事務所所長）
	長野調査事務所所長	小林秀夫
	同 庶務課長	戸谷 功
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	大竹憲昭 谷 和隆 藤森俊彦 調査員 中島英子

整理作業内容 遺物の分類・接合・実測

平成10年度

整理体制	所長	佐久間鉄四郎
	管理部長	山崎悦雄（兼長野調査事務所副所長）
	管理部長補佐	宮島孝明
	調査部長	小林秀夫
	調査第二課長	土屋 積
	調査研究員	大竹憲昭 谷 和隆 調査員 中島英子

整理作業内容 遺物実測図・遺構図のトレース 図版組み 写真撮影

平成11年度

整理体制	所長	佐久間鉄四郎
	管理部長	山崎悦雄（兼長野調査事務所副所長）
	管理部長補佐	宮島孝明
	調査部長	小林秀夫
	調査第二課長	土屋 積
	調査研究員	大竹憲昭 谷 和隆 調査員 中島英子

整理作業内容 図版組み 原稿執筆 編集・校正

3 指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導ご協力を得た。お名前を記して感謝したい（敬称略・五十音順）。

会田 進	阿部芳郎	安齋正人	安藤政雄	池谷信之	稲田孝司	大竹幸恵
岡村道雄	岡本東三	小野 昭	織笠 昭	角張淳一	金子直行	木崎康弘
栗島義明	小池義人	小菅将夫	小林達雄	近藤洋一	酒井潤一	佐藤宏之
佐藤雅一	茂原信生	島田和高	白石浩之	鈴木次郎	鈴木忠司	須藤隆司
砂田佳弘	諏訪間順	高見俊樹	竹岡俊樹	田中 総	谷口康浩	辻本崇夫
堤 隆	鄭 漢徳	戸沢充則	中島庄一	中島 宏	長沼 孝	永峯光一
中村由克	野口 淳	朴 英哲	橋本勝雄	藤野次史	保坂康夫	松沢亜生
宮坂 清	宮坂光昭	宮崎朝雄	宮下健司	宮田栄二	望月静雄	望月明彦
矢島國雄	山田昌久	領塚正浩	綿田弘実	渡辺哲也	信濃町教育委員会	
㈱アイシー	㈱アルカ	㈱協同測量	㈱こうそく	㈱写真測図研究所	㈱新日本航業	
㈱ズコーシャ	中野土建㈱	㈱パレオ・ラボ	㈱北條組			

4 調査参加者

(1) 発掘調査参加者

青井祐一	青木文雄	青木洋子	青木義和	青柳正一	青柳貴義	青山智恵子	青山弘美	青山嘉汪
明石ハツ	赤塩純治	秋本 仁	麻田紀子	浅沼喜一郎	畔上ちよ子	天尾洋子	荒井 明	荒井恵子
荒井三郎	荒井久子	有賀保訓	飯島隆夫	飯田静夫	池田和昭	池田和子	池田きよ子	池田公吾
池田 強	池田ひで	池田博之	池田 陸	池田祐一	池田良高	石井賢一	石川 治	石川清子

第1章 調査の概要

石川はつ子 石川峯子 石沢悦次 石沢善蔵 石沢たま 石田寿文 石田要三 石野清治郎 市川 武
 市川由一 伊藤管子 伊藤久美子 伊藤彦市 稲田敏恵 井上司郎 今井 侃 今井百合子 岩下昭吉
 岩下とい 岩村五十鈴 上杉俊美 植中高見 上野貴美子 上野松雄 牛木悦次郎 宇田国男 内田 守
 内堀はるえ 内堀基次 江口陽子 遠藤美代子 大川和子 大川成司 大川理恵 大木森雄 大熊直二
 大澤孝枝 大沢由子 大塚千代子 大峽真純 大原二保子 岡田あき子 岡田 勳 岡野美由紀
 岡野康子 小川春義 荻原敬蔵 荻原千代子 荻原当子 荻原みな 荻原ゆり 奥戸トモエ 奥村和子
 小崎延子 小田切吉夫 小野沢千秋 小野沢時子 小野順子 小日向一 菟田哲生 風巻泰助
 風間たき子 風間真津子 柏熊康弘 片山恒子 勝田早苗 勝山みつの 加藤充也 金井 仁 金井和久
 金井清里 金井五朗 金井宮男 金井雅子 金井道子 金子康子 上島啓作 川口耐子 川村喬一
 川村幸彦 木内征子 岸田 務 岸田 昇 岸田志づ子 岸田義夫 北沢栄造 北沢甲三 北沢孝美
 北沢武雄 北沢富幸 北沢まさ 北島久美子 北原清子 北原ひさえ 北村智子 北村由美 草間保雄
 久保田貴美江 久保田哲子 熊谷たづ子 熊木ケイ子 倉石久子 倉澤浩子 栗田柁雄 栗山 勝
 黒岩澄男 黒岩信治 黒田哲郎 黒田敏夫 公平千鶴子 小金井都子 小坂仁造 小坂幸子 小島多喜子
 児玉四利信 小沼 泉 小橋ふみ子 小林栄子 小林計雄 小林和子 小林和弘 小林勝次 小林定子
 小林繁男 小林節子 小林たえ子 小林 保 小林千里 小林紀子 小林富蔵 小林彦彦 小林初子
 小林春枝 小林昌子 小林美智子 小林賢成 小林嘉子 小林仁子 小林芳子 小林義治 小宮山武男
 古森順次郎 小山周一 小山富江 近藤美恵 近藤由美子 西条桃恵 齐藤 静 齐藤憲興 齐藤花子
 酒井 泉 酒井 優 酒井今朝吉 酒井千代 酒井紀子 榊原公美 坂口二郎 坂口秀美 坂田与一
 桜井 忠 佐藤 甲 佐藤綱枝 佐藤さち子 佐藤高明 佐藤千代子 佐藤哲也 佐藤ナミ 佐藤隆司
 佐藤弘子 佐藤幸人 佐藤喜子 佐藤和郎 塩入善仁 塩崎 巖 塩崎きみよ 塩谷谷みどり
 静谷明子 静谷邦子 静谷さつき 静谷良人 実延章子 篠崎恵美子 篠澤きよ 芝波田真由美
 志原三千夫 渋沢幾久恵 渋澤伸治 渋澤とし子 渋沢春代 島田善美 清水タマキ 清水菜穂美
 清水隼人 白井隆太郎 須賀真理子 菅谷澄子 杉山明美 鈴木 起 鈴木健一 鈴木道子 須田有子
 須藤久子 春原弥惣治 関 克也 関 増行 関川幸子 関塚 恒 関谷照二 関谷シン 関弥太郎
 関谷花江 善財 弘 高木けさ子 高木美代子 高沢正富 高嶋 馨 高相三男 高野明子 高野陽子
 高野陽子 高橋浦一 高橋喜久治 高橋里美 高橋 静 高橋周三 高橋昭二 高橋節子 高橋隆昭
 高橋知代江 高橋信子 高橋 格 高橋 深 高橋富美江 高橋 勝 高橋安正 高橋芳枝 武井スミ子
 竹井正光 竹内 康 竹内和雄 竹内さくゑ 竹内せつ 竹内寅雄 竹内良子 竹内晴江 竹内三男
 竹内ゆき子 武田初枝 竹田保夫 竹花民夫 田子定夫 田崎金一 辰野重男 田中朝治 田中格一
 田中幸太郎 田中周衛 田中せつ江 田中孝志 田中迪子 田村 哲 田村昭治 田村多恵子 埴原康信
 塚田 宏 塚田牛二 塚田悦子 塚田てい 月岡恵美 築田隆司 土倉裕子 土屋寅治 土屋照英
 土屋と志 坪井五郎治 坪井ふみ子 寺島厚二 寺島尊夫 伝田正樹 傳田米三 東条寅雄 常田節子
 常田安方 徳武 洋 徳武孝文 徳嵩勅子 徳武博幸 徳竹ミサオ 徳竹喜春 徳永徳一 徳永利夫
 豊森知弘 内藤美佐子 中川 中島袈裟夫 中島亮之進 中島忠夫 中島よつえ 中條忠治
 中野聖夫 長橋喜一郎 長原和子 永原今朝男 永原シズエ 中村一郎 中村華佐夫 中村のぶ子
 中村博恵 中村 弘 中村又二 中村美由紀 中村洋介 中村よし子 中村芳子 中山和江 中山安雄
 成田三郎 新野源吾 西澤 紘 根岸チノ子 根岸由恵 野口由夫 野村久子 野村竜太郎 野本秀男
 橋内賢裕 橋本静子 長谷川悦子 長谷川和朗 長谷川繁信 長谷川真平 長谷川芳恵 畠山 智
 畑山茂治 服部恵美子 服部カツ子 服部喜三郎 服部つや子 服部敏雄 服部正志 花岡形夫
 馬場知則 早川貞治 早川恵美 早川嘉寛 原 いち 原 美知子 原田忠直 原山一弘 原山正子

張間政信 東 貢 樋口のり子 口詰甲子 日向 應 平塚 勝 平塚喜恵子 平塚せつ子
 広瀬しず子 深沢政雄 深谷 亘 福岡邦友 藤木明子 藤木利高 藤沢大樹 藤城昂子 藤田桂子
 藤牧久男 藤本敏男 藤原尚子 布施 亨 踏分 実 降旗 茂 降旗まつ子 古澤二千代 北条辰男
 保坂勝子 保坂吉次 堀川 章 牧 一誠 巻柄智也 牧千代子 巻柄恵子 牧野タマエ 牧野鉄児
 真篠美晴 増田昭子 待井春子 町井まつ 町田俊雄 町田登美子 町田友雄 町田英子 町田幸重
 松井ひめ子 松尾よし子 松木由美子 松沢常蔵 松田正一 松野クライレイネ 松橋千里 松村明子
 松本幹雄 丸本市郎 丸山悦夫 丸山ちよ子 丸山浩美 丸山三喜雄 万場義秋 三澤貞利 水越玉子
 水橋多喜男 三井薫夫 三井良雄 湊 喜一 湊美佐子 宮川朝子 宮川 久 宮崎正枝 宮崎良雄
 宮沢誠子 宮沢ツネ子 宮澤 亨 宮沢ひさみ 宮沢 盈 宮沢美代子 宮下金一 宮島武次郎
 宮本和明 宮本鈴子 宮本澄子 宮本義章 向山弥重子 村上安子 村田今朝一 村田達哉 村田宗之
 村田やすの 村松修司 本嶋しず 本嶋輝也 森田千代江 森山千鶴子 矢沢とし子 矢澤ゆき子
 矢島弘子 柳沢純子 山尾洋美 山岸有夫 山口久江 山口 守 山崎キョシ 山崎清美 山崎けさお
 山崎小道 山崎千代和 山田啓子 山田ヨキ 山本 昭 山本智恵子 山本知良 山本房子 山森澄江
 湯本英雄 横田節子 横山真理子 吉池シマエ 吉川 西 吉川榮子 吉川しげ子 吉川忠吉 吉川富枝
 吉澤聖子 吉澤平一郎 吉沢元典 吉澤由香 吉沢好夫 吉田米子 若井みや子 若林次郎 綿田茂実
 渡辺昭一 渡辺益男 渡辺三千代 綿貫良人 割田武治

(2) 整理作業参加者

阿部 敬 荒井かち 荒井恵子 新井晴美 市川ちず子 岩泉辰子 内田 仁 内田陽一郎
 内山恵美子 内山清子 大橋理奈 大林久美子 門内政広 河崎裕 川本真由美 北沢三枝子
 北森梨恵子 蔵田愛子 小林奈美江 駒村和子 佐藤桂子 須藤友美子 高久昌子 高城大輔
 高柳すえ子 滝沢久子 武田友子 玉井久雄 塚田祐子 寺門義範 寺田真木子 戸枝周平
 戸谷邦隆 中沢祐一 中島 透 野口 淳 野沢久子 平井義敏 藤原泰子 堀木照美
 堀本香代子 丸山和子 丸山園枝 三上義子 三木陽平 峯村恵子 峯村敏子 宮川優作
 宮坂美樹 宮崎正枝 宮野尾和子 宮本幸江 村田雅子 矢澤健太郎 欠田美智子 柳原澄子
 柳沢るり子 山科 哲 山田理恵 横田節子 横山 真 吉川孝子 吉川耕太郎 吉田米子
 吉田 望 渡辺恵美子

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 試掘と調査区の設定

本調査に先がけて長野県教育委員会及び、長野県埋蔵文化財センターにより高速道路路線範囲内の試掘調査が行われ、その結果に基づき調査範囲を設定した。

調査対象区は畑地などの耕作地が少なく、大半が山林であったため、遺物の有無を地表面で捉えることは不可能であった。そのため本調査に先立ち、未周知範囲を中心に用地のほぼ全域で、試掘調査を行った。

(2) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡名には下記の略号を用いた。遺物、写真他の記録簿の注記等はこれによる。

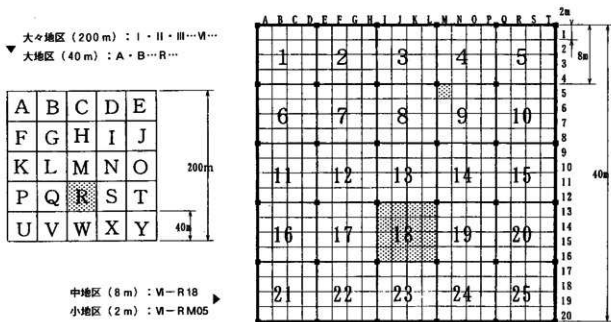
星光山荘(せいこうさんそう) A遺跡 MSK-A 星光山荘(せいこうさんそう) B遺跡 MSK-B

第1章 調査の概要

貫ノ木（かんのき）遺跡	MKN	西岡（にしおか）A遺跡	MNA
上ノ原（うえのはら）遺跡	MUE	大久保南（おおくぼみなみ）遺跡	MOK
東裏（ひがしうら）遺跡	MHU	裏ノ山（うらのやま）遺跡	MUR
針ノ木（はりのき）遺跡	MHR	大平（おおだいら）B遺跡	MOD
日向林（ひなたばやし）A遺跡	MHT-A	日向林（ひなたばやし）B遺跡	MHT-B
七ツ棠（ななつぐり）遺跡	MNN	普光田（ふこうだ）遺跡	MFK

(3) グリッドの設定と呼称法（第1図）

グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準として大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。大々地区は、調査地区全体を200m×200mで区画を設定し、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…とローマ数字で表記した。大地区は、この大々地区を40m×40mの25区画に分割し、A～Yまでのアルファベットで表記した。中地区は、大地区を8m×8mの25区画に分割し、1から25までの算用数字を用いた。小地区は、大地区を2m×2mの400区画に分割し、西から東へA～Tまでのアルファベットを用い、南北軸上に北から南へ01から20までの算用数字を用いた。両者の組み合わせで「A01」のように小地区名とした。



第1図 グリッド呼称法

(4) 遺構記号と遺構番号

記録・注記の便宜を図るため遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代などにかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は原則として検出時に決定するため主として平面的な形態や遺物の分布状況など指標としたもので、図示も遺構の性格を示すものではない。整理段階で遺構名称の変更が生じた場合は発掘時の遺構記号・遺構番号は欠番とし、新しい遺構記号・番号を追加した。また調査時に重複した遺構番号が付されているものも、重複した番号を新しい遺構記号・番号に追加した。本書で報告する遺構番号は前述の理由から飛び番号が生じている。したがって最終遺構番号=遺構数とはならない。

なお、本書で用いた遺構番号は当センターで共通して用いているもので、以下の通りである。

[SB] 2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。(竅穴住居址、竅穴状遺構)

[ST] SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配列されるもの。(掘立柱建物址、礎石

を利用した建物址)

[SA] SBより小さな落ち込みや石が、列として配置されるもの。

[SK] 単独若しくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さな掘り込み。(土坑、陥穴・貯蔵穴・井戸・粘土探掘坑等)

[SD] 帯状の掘り込み。(溝・河道他)

[SF] 単独で存在し、火をたいた址が面的に広がるもの。(火床・炉址)

[SH] 石が面的に集中するもの。(集石)

[SQ] 遺物が面的に集中するもの。(ごみ捨て場、祭祀址、旧石器時代石器製作址)

[SM] 墳墓・墓跡など。

[SX] 以上の遺構記号およびSL(水田・畑址)、SC(道路)、SM(古墳・墳墓)の諸記号に該当しない不明遺構。

さらに、SB・STの掘り込み(柱穴)などにはPを付した。

(5) 遺物の取り上げと記録方法

旧石器時代の遺物が主体となった遺跡では、遺物の取り上げに際して、測量会社に委託して光波トランシットを用い、端点測量を行なった。

縄文時代以降の遺物は、遺跡により、測量会社に委託した光波トランシットを用いた単点測量を行った遺跡や遺構別に手取り測量を行った遺跡、地区別に取り上げた遺跡などさまざまである。遺物取り上げに因しては、それぞれの章で記述する。

2 整理の方法

(1) 遺物整理方法と収納

本書では、注記終了後石器・礫・石器・金属器等に分類し、それぞれの遺物を時代別時期別に分類し、それぞれの整理事業を進めていった。

金属器は錆落とし後、台帳記入し保存処理を行なった。石器は時代別時期別に分類後それぞれの時期によって接合作業を行なった。石器は縄文時代草創期・早期のものが多く、接合面の観察を将来的にできるよう極力接着による復元作業を取りやめた。そのため図上復元は行なったものの、接着による復元土器が少なく、遺物写真も多くは破片のままの撮影となった。

また、土器に実測番号を付した。実測番号=固体番号として認識している。

石器は、旧石器時代のものが多く、明確に時期の違う器種を除き、Ⅱ層より上部のものを縄文時代以降として分類した。しかし、剥片類や砕片類等は時期を明確にすることができないものも存在した。

遺物の管理は、石器・礫・土器の大別に従い、それぞれ収納している。

(2) 遺物の分類について

遺物については、当該遺跡で分類の基準を示した。

1. 縄文時代土器の分類

本書での縄文土器の分類は文様別に行なった。具体例は本文を参照していただきたい。

草創期無文 植物繊維痕を僅かに含む、無文の土器。旧石器時代終末期の石器と共存する土器。輪積みの痕跡のない土器。内面指頭圧痕がある。

隆起線文 縄文時代草創期の土器で、蚯蚓腫れのような隆起線を施文した土器。

第1章 調査の概要

- 爪形文 縄文時代草創期の土器で、爪で施文したような連続する文様がある土器。
- 表裏縄文 縄文時代草創期終末から早期初頭の土器で、口縁部の表裏に縄文が施文されている土器。
- 表縄文 表裏縄文土器の一群。内面に指頭圧痕などあり、施文方法や胎土など表裏縄文と類似する土器。表裏縄文土器の胴部破片もこれに類する。
- 裏縄文 表裏縄文土器の一群。口縁部の内面に縄文が施文されているが、外面は施文されていない土器。表裏縄文土器の口縁部文様帯無文の土器片がこれに類する。
- 表裏押型文 表裏縄文の胎土に類似する回転押型文の土器。口縁部内面にも回転押型文が施文されている。
- 押型文 縄文時代早期の回転押型文土器で、山形文、楕円文、格子目文、ネガティブ楕円文、平行状線文などがある。
- 無文 縄文時代早期中葉の土器。器面がミガキやナデのような調整で滑らかな無文の土器。
- 沈線文 縄文時代早期中葉の沈線で施文した土器。
- 貝殻腹線文 縄文時代早期中葉の沈線文系土器群。沈線文の間に貝殻腹線部を押して施文した土器。大分類として沈線文の中を含めた。
- 櫛歯状工具による条痕文 縄文時代早期中葉の土器。口縁部に櫛歯状工具で条痕を施文した文様。沈線文系土器群と条痕文系土器群の中間の土器群と思われる。子母口式併行の土器と考えられ、大分類では条痕文を含めた。
- 条痕文 縄文時代早期後葉の土器。胎土に多量の繊維を含有している土器。絡条体の縄文側面をひき、条痕としているものも含む。
- 絡条体圧痕文 条痕文土器の口縁部文様帯に絡条体の縄文の側面を圧痕した土器。大分類では条痕文とした。
- 羽状縄文 縄文時代早期終末～前期前葉の土器で、繊維を多量に含む。結節するものと結束するもの等がある。一部早期終末にあたるものも含む。
- 縄文 縄文時代前期の縄文を施文している土器。繊維を含有しているものと繊維を含まないものがある。繊維を含むものは前期前葉～中葉のもの。繊維を含有しないものは前期中葉から後葉の土器。竹管文土器の胴部下半部文様を含む。
- 竹管文 縄文時代前期中葉から後葉の土器。胴部下半部の縄文部分を「縄文」として記載しているものもある。
- 晩期土器 口縁部文様帯が無文（ミガキ調整）で、胴部に条痕施文されているもの。「氷式」土器。

2. 縄文時代石器の分類

本書でおこなった石器の器種分類の基準を以下に示す。完形品、器種としての2次加工が認められる石器の破片について1点とカウントする。また、接合するものはあわせて1点とする。各器種の具体例は本文を参照していただきたい。

槍形尖頭器 (Po) 主として平坦な加工により先端および、周縁が作り出されている石器。加工は先端部のみではなく、器体全体に及ぶ。

石刃 (Bl) 目的をもった技法により連続して剥離された両側縁が平行する縦に長い石器。平面形は似ていても偶発的に剥離されたものや、剥離に連続性が認められないものは縦長の剥片としこれと区別する。

搔器 (ES) 連続する加工により、厚い刃部が作り出されている石器。平面形は円形、拇指状を呈するものが多い。刃部の角度が45度以上のものを搔器、以下のものを刮器とし分別することとする。

削器 (Sc) 連続する加工による刃部を持つ石器。形態や加工は様々である。

彫器 (Gr) 槌状剥離によって作り出された彫刻刀面を持つ石器。

楔形石器 (Pe) 2側縁もしくは1側縁の加工により錐状の先端部が作り出されている石器。

二次加工ある剥片 (RF) 器種としての認定ができなかったが、二次加工が認められる剥片。

微細剥離のある剥片 (UF) 使用痕の可能性の高い微細な剥離が認められる剥片。

斧形石器の剥片 (AF) 斧形石器加工の際の剥片。

剥片 (フレーク) (Fl) 石核などから打ち剥がされた石片。

砕片 (チップ) (Ch) 剥片剥離や加工時に出る非目的な細かい石屑。剥片との厳密な区別が難しいために、本報告では約1cmの長さを基準とし、それより小さいものを砕片とした。

船底形石核 (Bo) 両面を剥離加工した石器。底面が船底形をしている。

石核 (Co) 剥片を剥ぐための母体、または剥いだあとの石塊。

斧形石器 (Ax) 相対する2側縁に主として平坦な加工が施され、石器の長軸に直交するような刃部を持つ石器。従来、「局部磨製石斧」と呼ばれているものがこれに含まれるが、研磨の認められないものや、用途が木材の伐採以外にもあったと考えられる点から斧形石器という呼称を用いる。欠損しているものについても、接合がなく素材からの両側縁への加工が認められる場合は1点として認定している。剥離後に加工が認められないものは調整剥片、そこに研磨面が認められるものについては刃部剥片として捉えている。

打製石斧 縄文時代早期以降の打製の斧を打製石斧とする。

磨製石斧 縄文時代早期以降の局部磨製石斧ではないほぼ前面を磨いている石斧を磨製石斧とする。

礫器 (PT) 礫を素材とし、粗い加工によって刃部が作り出されている石器。

敲石 (Ha) 敲打痕が認められる石器。ハンマー。

磨石 (GW) 磨面のある石器。

凹石 (Pa) 礫面に凹を設けたもの。

本報告書では次のように素材別で分類した。

- Aタイプ 円礫を素材としたもの。
- Bタイプ 角礫・亜角礫を素材にしたもの。
- Cタイプ 磨石を素材としたもの。
- Dタイプ 敲打痕をもつ石器を素材としたもの。

砥石 (Wh) 砥ぎ面のある石器。

有茎尖頭器 (TP) 両面調整加工の基部に茎を持つ尖頭器。形状より分類される。

石鏃 (AH) 矢の先端につける石製の鏃である。

石錘 円礫の両端を縄掛け用の剥離を施したもの(礫石錘)。

石皿 (SD) 中央を凹めた皿形の石器。中には扁平な川原石を使用し、縁を持たず、磨き面から縁辺まで変化の乏しいものも含まれる。

特殊磨石 磨石の中で、三角形もしくは蒲鉾上の石の底面を磨き面とする特徴を有するもの。

スタンプ形石器 川原石の下半分を打ち欠き、この平坦な底面を使用面とした石器。平坦な底面に磨耗痕やその縁辺に打痕があるもの。

なお、器種名の()内は本書で使用されている石器の略号である。

3. 平安時代土師器・須恵器・灰輪陶器の器種の分類

第1章 調査の概要

土師器・須恵器 還元焙焼成のものは「須恵器」とし、酸化焙焼成のものは「土師器」とする。

本書では、平安時代以降の土師器はすべてロクロ挽きである。

内黒土器 土師器の中で内面黒色処理をしたもの。

主な器種は次のように分類する。

杯 高台のない、皿よりも器高があるもの。

碗 高台の付いた杯形土器。

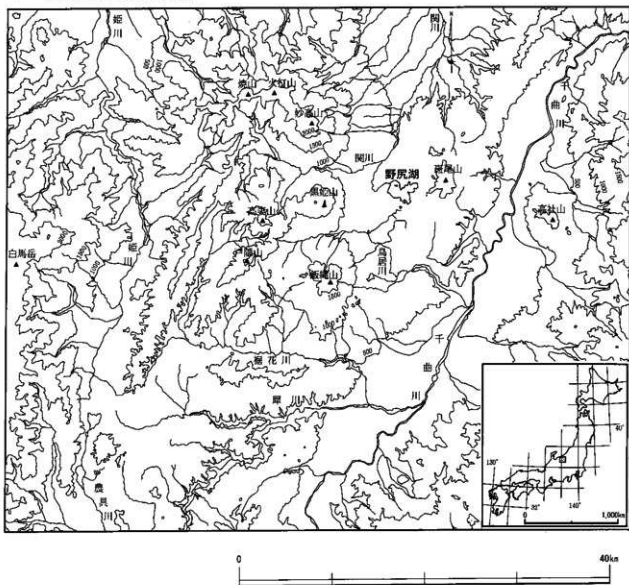
皿 器高がなく浅く、口径が広く、底部から口縁部に向かって大きく開くもの。

甕 主にロクロ土師器の甕である。本書では大半が砲弾形の底部である。

小型甕 甕の小型なもので、本書では平底のものである。

第3節 遺跡周辺の環境

1 遺跡の地理的環境 (第2図)



第2図 野尻湖周辺の地形 (40000分の1)

野尻湖は長野県の北端上水内郡信濃町にある。古代から北国街道として開け、沼辺の駅が設けられ、野尻湖は日本海と長野盆地をつなぐ交通の要所である。湖の南西側は妙高山、黒姫山、戸隠山、飯綱山が並び、東側には斑尾山が存在し、通称北信五岳といわれる火山に囲まれている。野尻湖からは2本の川が流れ出ている。野尻湖の西岸から流れる池尻川は関川に合流し日本海に注ぐ。野尻湖南岸の針ノ木池から流れ出る烏居川が西南に向かって流れ、千曲川に流れ込んでいる。千曲川は、新潟県側に入り信濃川と名称を変え、日本海に注いでいる。

野尻湖周辺には火山の影響によりローム層が堆積している。斑尾山は約70万年前から約55万年前まで活動期にあった。飯綱山の火山活動は約34万年前と約20万から15万年前であり、約6万年前に水蒸気爆発を二度起こしている。黒姫山は約25万年前から活動を開始し、約4万5千年前まで噴火している。妙高山は約30万年前から活動を開始し、約4200年前も噴火活動していた。焼山の火山は約3000年前から現在も活動中である。

今から約7万から6万年前に黒姫山から池尻川に向かって泥流が起き、斑尾山西麓で川を堰き止め野尻湖は誕生した。その後仲町丘陵の隆起と湖東方向の沈降によって、形が現在の野尻湖として変化した。

野尻湖の遺跡は、西岸の丘陵地には多くの遺跡が見られる。特に旧石器から縄文時代の遺跡が多く分布している。これらの遺跡は「編年的、地域的に有機的つながりを持つ遺跡群として理解するために」（野尻湖人類考古グループ 1987）野尻湖遺跡群と呼称されている。最近では、野尻湖周辺の旧石器から縄文時代草創期までの遺跡をまとめたものを野尻湖遺跡群として使用している（野尻湖人類考古グループ 1994）。

2 遺跡の歴史的環境（第3図・第1表）

野尻湖はナウマンゾウの化石が湖底から発見されたことがきっかけとなり、古くから学術調査がおこなわれてきた。近年になって、町教育委員会や県教育委員会（埋文センター）により数多くの遺跡が調査されるようになり多大な成果が発表されている。

現在確認されている野尻湖周辺における最古の人類遺跡は立ヶ鼻遺跡であり、中部旧石器時代（約5～4万年前）に相当する。立ヶ鼻遺跡からは、ナウマンゾウなどの動物化石と共に石器や骨角器などが出土している。立ヶ鼻遺跡以外では仲町遺跡で確認されているが、こちらも湖成層からの出土であり、陸上の風成層からはまだ確認されていない。

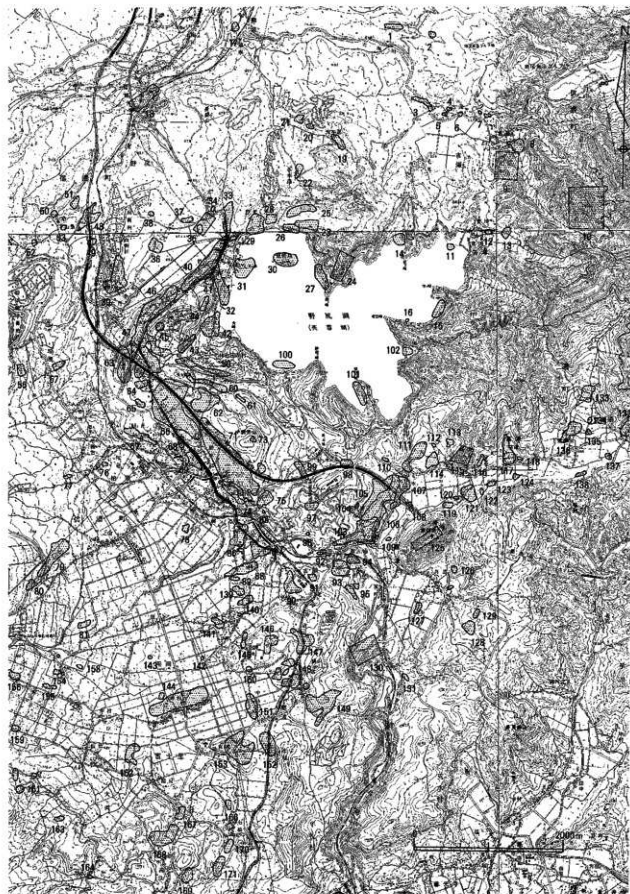
上部旧石器時代に入ると遺跡が激増し、野尻湖遺跡群が形成されるようになる。全国的に見ても遺跡数は多く、遺跡規模も大きな遺跡群となっている。

約2.5～2.4万年前の始良丹沢火山灰（A T）降灰以後も多くの遺跡が存在している。また、系統が異なると思われる複数の石器群が存在するようになる。それぞれの石器群がある程度の時間幅をもって登場し、異なる系統の石器群が同時期に存在していた可能性も高いと考えられる。

上部旧石器時代終末期には断片的ではあるが、多くの遺跡で神子柴系石斧が発見されている。また、ナイフ形石器や槍先形尖頭器の石器群と比べると遺跡数は少なく、規模も小さいが細石器の石器群も存在する。

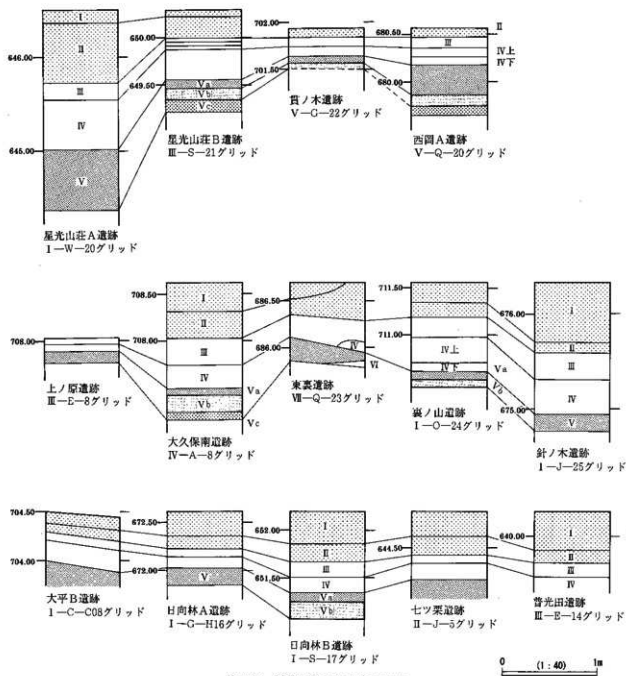
縄文時代草創期にも人間の生活の跡が確認された。東裏遺跡と日向林B遺跡では無文の草創期初頭と思われる土器が旧石器時代終末期と思われる石器と共存している。また、星光山荘B遺跡では隆起線文土器片とそれに伴う石器類が多数に発見されており、その他にも爪形土器を出土する仲町遺跡など数遺跡が確認されている。

草創期終末から早期初頭の表裏縄文土器や表縄文土器の出土量は特に多く、日向林A遺跡では8000点に



第3図 野尻湖周辺の道跡分布図

第1章 調査の概要



第4図 信濃町各遺跡基本土層図

層名	色調	Hue	特徴	野灰淵発掘調査図	年代	
I	黒色	7.5YR1.7/1	表土・耕土など			
II	黒色	7.5YR1.7/1	細粒火山灰層 粘性はなく比較的柔らかい	柏原黒色火山灰層		
III	黒褐色	7.5YR4/2	細粒風化火山灰層 漸移層ロームがブロック状に入り込み下部ほど多い	モヤ	1.75	
IV	黄褐色	10YR5/6	細粒風化火山灰層 ソフトローム やや粘性がありやわらかい	上部II上部~下部	1.45	
V	a	褐色	10YR4/4	細粒風化火山灰層 粒子がやや粗く粘性があり やや黒い AIを含む	上部II最下部	2.15
	b	暗褐色	10YR3/4	細粒風化火山灰層 黒色帯 粘性がありしまりがよい	黒色帯上部	2.75
	c	褐色	10YR4/6	細粒風化火山灰層 Vb層より色調が明るくVb層をブロック状に含む	黒色帯下部	3.55

第2表 信濃町の遺跡基本土層表

上の資料が出土している。また、縄文早期の押型文土器、無文土器、沈線文土器、条痕文土器など多くの遺跡からやや纏まって出土している。その後、七ツ栗遺跡など縄文時代前期中葉頃までの遺物は多く発見されるが、中期以降になると非常に少なく、遺物が断片的に出土する程度である。現在のところ信濃町野尻湖周辺の縄文時代遺跡からの住居跡の発見はなく、土坑や陥し穴、集石遺構などが残されているのみである。

弥生時代・古墳時代の遺跡は非常に少なく、断片的に土器片などが出土するのみであった。平成11年度に当センターで調査した信濃町川久保遺跡（池尻川低地部）では、古墳時代初頭の遺物が大量に発見された。信濃と越後の国境の遺跡として今後北信地方の古墳文化の成立上大変注目される遺跡となろう。

平安時代になると再び遺跡数が増える。大規模な集落は発見されていないが住居が数件発見され、小規模な遺跡が点在するようになる。

中世には野尻湖周辺に集落が点在するようになる。高田平野から長野盆地を結ぶ経路となっている。（各遺跡の位置、時期については第3図、第1表を参照）。

引用・参考文献

- 赤羽貞幸 1996 「野尻湖の生い立ちとその変遷」『アーバンクボタ』35
 酒井潤一 1996 「野尻湖と最終氷期の研究」『アーバンクボタ』35
 信濃町誌編纂委員会 1968 「信濃町誌」
 地学団体研究会編 1996 「新版地学辞典」平凡社
 野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告』第2号

第2章 星光山荘A遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

本遺跡は長野県上水内郡信濃町大字下山桑2611-6ほかに所在する。野尻湖の北西約2kmに位置する。遺跡分布図には星光山荘遺跡と記載されている。黒姫山から続く山麓が、野尻湖から流れ出た池尻川によって斬られ、段丘となる縁辺に立地する。西から東へ緩やかに傾斜するが、小規模な河川が池尻川へ流出し、この丘陵を削って平坦部と鞍部が連続した地形となっている。

星光山荘（大阪星光学院所有）建設の際、縄文早・前期の遺物が確認されているが1993年度まで調査は行われなかった。遺跡範囲は今回の調査により明確となった。調査区は、星光山荘の一帯で、西から東へ緩やかに傾斜している。調査区の東側は微高地となり、1993年度試掘調査で縄文時代前期の土器や石器が確認されている。南側は沢、北側は谷となっている。標高は650m～640mを測る。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法（第5図・第6図）

調査範囲は星光山荘の東側一帯で、調査面積は4,000㎡である。

試掘により遺物の確認された東側微高地を中心に調査は行われた。調査区北側部分は遺構・遺物は検出されず、V層上部まで2m×2mマスでグリッド掘りを行った。この地区では旧石器時代の石器も出土しなかった。調査区東側では、表土層からII層上面まで重機で土上げを行った後、土坑が検出され、土坑の調査が中心に行われた。土坑は底面まで調査ができるものは行い、深いものに関しては危険が伴うため、土坑を半削して調査を行った。また底面に小ピットのあるものについても、記録を取った後に半削して、記録保存した。

土坑が検出された東斜面の凹地を挟んだ東側微高地では、II層以降手掘りを行い、縄文土器や石器など分布を確認した。しかし遺構は検出されず、V層上面まで手掘り作業を行った。この地区においても旧石器時代の遺物は確認されなかった。

調査区南東側に自然流路は確認されたが、現在も沢である。この調査範囲は幅約10m、長さ約30m、深さ2mである。自然流路に人頭大の礫が分布し、この中に縄文時代早期・前期の土器・石器、平安時代土師器片が混入していた。本遺跡の集石はこの自然流路の底面で検出され、自然流路下まで調査した。

(2) 調査経過

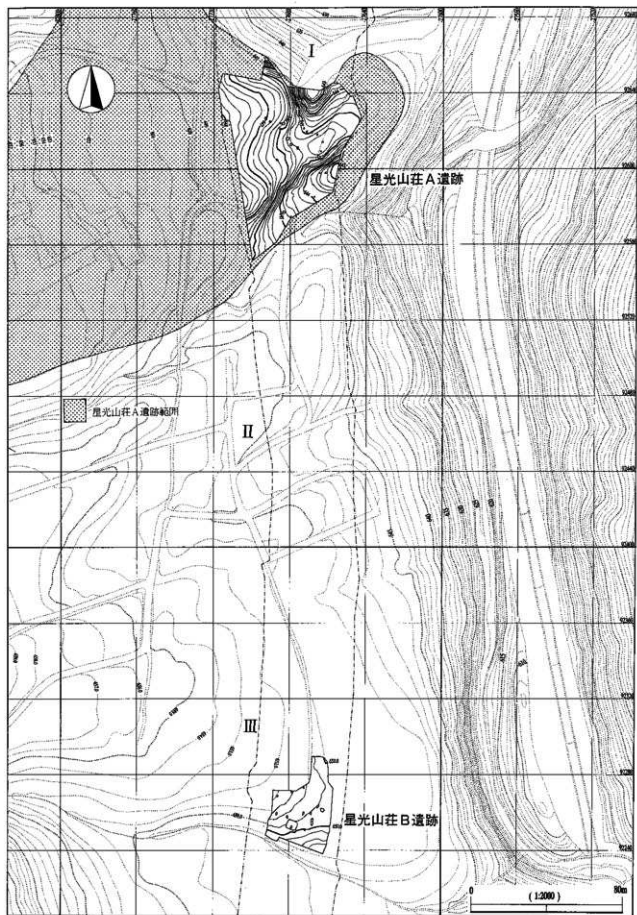
調査期間 1995年5月16日～7月31日

工事工程の都合上調査は星光山荘北側から東へ続く道路の両側、調査区中央部、北東の微高地の部分を5月中に終了させた。

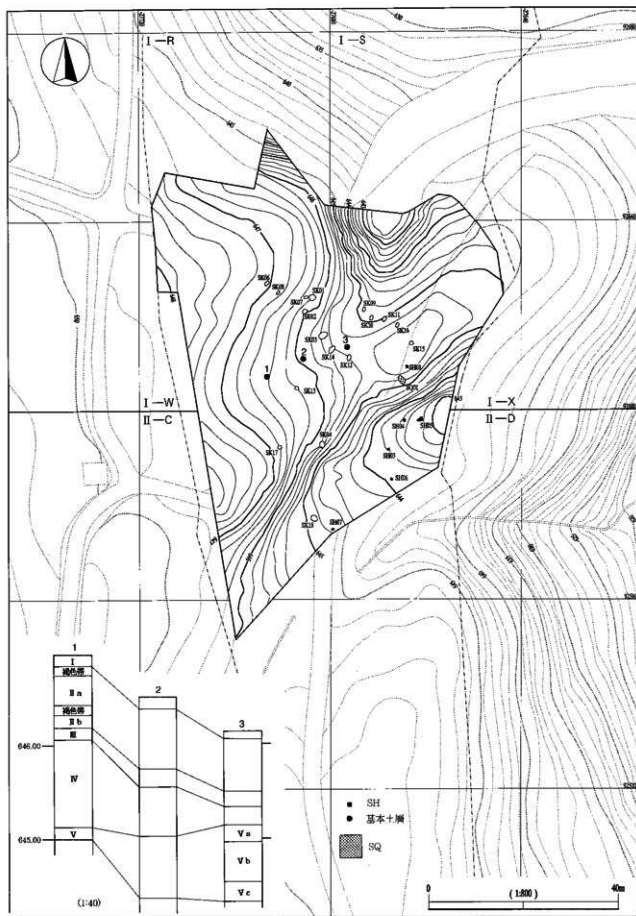
道路北側では遺構・遺物は、検出されなかった。

道路南側では土坑を数基確認した。土坑が分布する斜面の凹地を挟む対岸の微高地では、縄文時代前期の土器・石器を確認した。遺構は確認されなかった。

II D区の南東部からII Cの南東部かけて自然流路を確認。流路南側は現在も沢となっているため、調査



第5図 星光山荘A・B遺跡全体図・グリッド設定図



第6圖 星光山莊A遺跡遺構配圖・基本土層圖

範囲は幅10m、長さ約30mであった。深さ約2mあり、底面には人頭大の礫が大量に分布する。この流路中礫に混じり縄文時代早・前期の土器・石器、平安時代土師器が出土し、集石も確認された。

(日誌抄)

4月24日 試掘開始	6月2日 SK05完掘
25日 土坑掘り下げSY01(炭焼き跡と判明)	7日 SK04・07完掘
26日 絡状体庄痕文土器片10数点出土 表土剥ぎ	16日 SK09検出
5月9日 黒色土の落ち込み検出 落ち穴の可能性あり	20日 新たな集石を検出
16日 道路北側Ⅲ層上面検出 作業開始	22日 SK09・10・11完掘
17日 SK02・03検出	23日 SH01検出 SK12完掘
18日 プレハブ南側(Ⅲ区)重機による表土剥ぎ	28日 西岡Aから全員合流
24日 SK01～03掘り下げ SQ01検出(縄文前期)	7月7日 SK08完掘
25日 SK01～03完掘	10日 SK13完掘
26日 SK06検出	19日 SK14完掘
29日 新日本航業遺物の取り上げ 地形測量	25日 SH04検出 SH03、SK15・16完掘
30日 SK04～05検出	26日 SH05・06検出
6月1日 SK06完掘 SK07検出 SH01検出	27日 SH07・08掘り下げ MSK-A作業終了

(3) 調査結果の概要

星光山荘A遺跡は星光山荘の東側一帯で、西から東へ緩やかに傾斜し、標高は650m～640mである。縄文時代早期と前期の土器や石器が出土し、礫群6ヶ所、土坑17基、遺物集中部1ヶ所が検出された。住居址は検出されなかった。

(4) 基本土層(第4図、第2表)

星光山荘A遺跡の基本土層は下記の通りである。縄文時代早期から前期の遺物はⅡ層中からⅢ層上面にかけて出土している。1点のみ旧石器時代の槍先型尖頭器(図版7-1)がⅢ層上面から出土している。

I 1	10YR2/2	黒褐色土			スコリヤ80%含有
II a	10YR2/1	黒色土	柏原黒色火山灰層	8	2.5YR5/3 におい赤褐色土 岩盤
	10YR7/6	明黄褐色土	明黄褐色粒(キビダング)多量	9	10YR5/6 黄褐色土 5～10mm径の石粒・赤褐色の
II b	10YR2/1	黒色土	柏原黒色火山灰層		スコリヤ多量
III	7.5YR7/6	橙色土	橙色土と黒色土混合 モヤ層	10	10YR5/6 黄褐色土 V層に類似
IV	7.5YR7/6	橙色土	V層との区別が明確でない	11	2.5YR6/6 極暗赤褐色土 砂状の粒の集合 黒色や黄褐色の粒多量
V a	10YR5/8	黄褐色土			
V b	7.5YR5/6	黄褐色土		12	10YR6/3 におい褐色土 密で細粒
VI a	7.5YR5/8	明褐色土		13	10YR6/6 明黄褐色土 褐灰色スコリヤの粒含有
VI b	10YR6/6	明黄褐色土	5～10mm径のスコリヤ含有	14	10YR5/8 黄褐色土
VII	2.5YR4/8	赤褐色土	スコリヤ層 5～10mm径の		

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

(1) 土坑(図版1～図版3)(第3表)(註1)

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	分類	備考
SK	1	1.46×1.30	36	N-83° -W	2	
SK	2	1.10×0.92	116~142	N-48° -E	1	
SK	3	1.90×1.34	124~158	N-60° -E	1	
SK	4	1.42×1.10	20	N-0°	11	
SK	6	1.12×0.62	72	N-45° -E	1	
SK	7	0.97×0.50	84~118	N-82° -E	1	
SK	8	1.00×0.52	82~94	N-34° -E	1	
SK	9	1.06×0.58	82~105	N-19° -E	1	
SK	10	1.02×0.66	98~114	N-29° -E	1	
SK	11	1.08×0.72	98~141	N-35° -E	1	
SK	12	1.80×1.02	116~150	N-42° -E	1	
SK	13	0.82×0.72	36	N-60° -W	2	
SK	14	1.40×0.80	120~158	N-10° -E	1	
SK	15	0.88×0.76	106	N-66° -E	3	
SK	16	1.04×0.60	92~106	N-27° -E	1	
SK	17	0.88×0.75	9	N-0°	16	SH02が変更
SK	18	1.28×1.18	32	N-51° -W	17	SH08が変更

第3表 星光山荘A遺跡 土坑属性表

土坑は17基検出された。形態は5分類に分けられる。(括弧内は第16章第3節の分類)

第1類は平面形などにより更に3分類される。

第1a類(土坑分類第1類)(図版2):平面形態は楕円形あるいは隅丸の長方形で、底面形態は隅丸長方形である。断面形態は箱型で、深さ1m前後。底面に1本の逆茂木痕の小ビットがある。陥穴と推定される。SK02・06~11・16がこの類の土坑に相当する。検出面はⅢ層上面からⅢ層上部である。SK06は坪堀中に確認したため、上部20cmあまり破壊している。

第1b類(土坑分類第1類)(図版3):平面・底面形態が第1a類より不整形な土坑をこの類とした。SK03・12・14をこの類とする。深さ110~120cm前後と深い。第1a類と同様底面に逆茂木痕の小ビットが見られる。遺跡中央部ではSK03・14・12は隣接する。第1a類のSK02とSK12の間に位置している。第1a類と同様陥穴と考察する。

第1c類(土坑分類第1類)(図版2):平面形態は円形、底面形態は長方形である。その他断面形態・深さ・大きさなど第1類と同様であるが、底面に逆茂木痕の小ビットがない。SK15がこれに相当する。位置は東側小丘稜頂上部にあたる。検出面は第1a類と同様Ⅲ層上面である。長軸の方向も北東方向である。

第1類の配置は、2つのグループに分類できる。第1グループはSK06・08・07・02・03・14・12が本遺跡北西側斜面に並列し、第2グループはSK09~11・16・15が本遺跡北東側に並列している。土坑の主軸はSK07を除き北東方向である。SK07は東西方向が長軸である。第1類は東西の小丘稜を結ぶ獣道にこれら土坑が設けられた可能性がある。

第2類(土坑分類第2類)(図版2)平面は円形か楕円形で深さ20~30cm前後の浅い土坑をこの類とする。SK01・04・13の3基がそれに相当する。土坑内の出土遺物は無い。SK01・04はⅢ層上面から検出され、断面形態が錐錐状である。SK13はⅢ層下面から検出され、断面形態が箱型である。

第3類(土坑分類第17類)(図版1):集石を伴う土坑をこの類とする。SK17・18がこれに相当する。SK17はⅡC9区の沢跡北側に位置する。Ⅱ層面で検出し、0.6×0.5mの不整形なや円形の形態で、底面が凸凹の深さ0.1mの浅い土坑である。土坑内は焼土炭化物を含有する黒色土が堆積しており、土坑表面に炭化物が集中して薄く堆積し、拳大の焼石も上面に散漫に検出された。掘り込みの様子から伊跡のような利用をされた土坑と思われる。

SK18はⅡC・ⅡD区の沢跡にかかる道路をはずしたⅡ層最下部から検出。0.3m~0.5m重さ15~20kg

大の角礫が積み重ねられた状態で出土。覆土は黒色土で、断面は深さ0.6mのトライ状で底面がたいらである。上面の礫を取り除くと、南面にU字形を呈して竈のように配石されている。配石墓とも考えられるが骨の痕跡は確認されなかった。

(2) 集石 (SH01・03~07) (図版1) (註2)

SH01はIX区の沢跡が始まる地点に位置する。Ⅲ層面に掘り下げたところで検出した。0.6m×0.6mのほぼ円形の形態で径5~15cm位の赤化した角礫が充填している。炉跡と思われる。

SH03~SH07も調査区南東側ⅡD区の沢状の部分に位置し径0.5mのもの、SH05のような径0.4mと径0.6mの二つの円形集石が並んだもの2タイプが検出された。しかし、これら集石は円礫を用いており、礫が赤化していない。周辺や集石内に炭化物や焼土などが見られず、堆積状態や自然流路の底面から検出されたことなどから判断して自然石が斜面に落ち、集石状に堆積したものと思われる。

(3) 遺物集中部 (SQ01) (図版1)

小丘陵の頂上部がやや平坦部になった南東側IX区の斜面の先端に位置する。約1.3m×0.8mの小範囲に土器は分布し、南東側に斜面にやや流れるように分布する。土器は1固体のみである(図版6-29)。置き去りにされた土器がつぶれて斜面に流出したものと思われる。

2 遺物

(1) 土器 (図版5-1~27, 図版6-28~40) (第4表)

1. 条痕文 (2~8)

繊維多量の条痕文土器である。2~5は口縁部である。2は口縁部に指先による刺突が見られる。4の口縁部下は絡条体圧痕文である。縄文時代早期後半条痕文系の土器である。

2. 縄文 (9~27)

繊維が多量に含有する縄文土器である。9は表裏に縄文が施文されている。外面は斜走、内面は羽状に施文されている。内面胴部上半部まで所々に縄文が施文されている。草創期縄文土器の表裏縄文土器との違いは、多量に繊維を含み、繊維を引っ張ったような条痕部分も見られる。底部は尖底と思われる。縄文時代早期終末~前期初頭の土器と思われる。

図版番号	図名	遺構・区分	遺物番号	表裏番号	古物小番号	小ドリッド	スケール	文様	部位	文部構成	色澤(外)	胎土	焼成	備考
図版5	1	ⅡD	62	8		009	1/3	竹管文			にぶい-粘	繊維少、赤化、硬い		縄文早期後半
図版5	2	ⅡF	47	26		515	1/3	条痕文	口縁		粘	細白色砂多量、繊維多量	有	縄文早期後半
図版5	3	ⅡF	28	27		516	1/3	条痕文	口縁		粘	白色細砂多量	有	縄文早期後半
図版5	4	ⅡC	20	11		-	1/3	条痕文	口縁	竹管文	明黄-粘	繊維多量、細白色砂多量		縄文早期後半
図版5	5	ⅡD	56	22		007	1/3	条痕文			粘	灰石、石灰質砂多量	有	縄文早期後半
図版5	5	ⅡD	133	22		008	1/3	条痕文			粘	灰石、石灰質砂多量	有	縄文早期後半
図版5	5	ⅡD	259	22		008	1/3	条痕文			粘	灰石、石灰質砂多量	有	縄文早期後半
図版5	6	ⅡD	277	19		A11	1/3	条痕文			明黄-粘	砂多量、小石まじり	有	縄文早期後半
図版5	7	ⅡX	68	37		008	1/3	条痕文			明黄-粘	繊維多量、小石を含む	有	縄文早期後半
図版5	8	ⅡF	54	28		715	1/2	条痕文			粘	白色細砂多量	有	縄文早期後半
図版5	8	ⅡF	8	28		515	1/3	条痕文			粘	白色細砂多量	有	縄文早期後半
図版5	9	ⅡD	217	25		806	1/3	縄文 多量 条痕文		11箇~ 胴部	にぶい 黄-粘	白色細砂多量	有	縄文前期初頭

第4表 星光山荘A遺跡 縄文時代土器属性表 (1)

(註1) SK05は欠番

(註2) SH02は欠番

図版番号	図No	遺構・区分	遺物 番号	発掘 番号	発掘 小号	小グリッド	スケール	文 類	部位	文種構成 文種	色調 (色調 の)	胎土	焼成 状況	備考
図版5	9	ⅡD	167	25		K06	1/3	織物多量 表裏織文	口縁～ 胴部	表裏織文	にぶい 黄	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版6	10	ⅡD	212	24		C08	1/2	織物多量 表裏織文			にぶい 黄	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版6	11	I X	417	34		C17	1/2	織物多量 表裏織文		表裏織文	にぶい 黄	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版6	12	I X	337	35		O09	1/3	織物多量 表裏織文		表裏織文	にぶい 黄	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	13	I X	318	39		L08	1/3	織物多量 表裏織文		絞状口縁	明 雫	細砂粒含有、白色粒少量	有	織文前期初葉
図版5	14	ⅡD	272	14		H04	1/2	織物多量 表裏織文		口縁	明 黄 雫	細砂粒少量、微細雲母多量	有	織文前期初葉
図版5	15	ⅡD	172	13		B04	1/2	織物多量 表裏織文		口縁	黄 雫	赤褐色粒含有、細砂粒多量	有	織文前期初葉
図版5	16	ⅡD	132	15		D06	1/3	織物多量 表裏織文		口縁	暗 雫	雲母と石英粒多量	有	織文前期初葉
図版5	17	Ⅱb	274	17		-	1/3	織物多量 表裏織文		口縁	にぶい 黄	細砂粒含有、白色粒少量	有	織文前期初葉
図版5	18	I X	323	36		L06	1/2	織物多量 表裏織文		絞状口縁	雫	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	18	I X	324	36		L06	1/2	織物多量 表裏織文		絞状口縁	雫	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	18	I X	436	36		N04	1/2	織物多量 表裏織文		絞状口縁	雫	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	19	I X	136	4		L15	1/3	織物多量 表裏織文		羽衣(結 末)織文	暗 雫	細砂粒含有、白色粒少量	有	織文前期初葉
図版5	20	ⅡC	2	21		L00	1/3	織物多量 表裏織文			にぶい 黄	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	21	I X	153	5		K11	1/3	織物多量 表裏織文		羽衣(結 末)織文	にぶい 黄	細砂粒含有、白色粒少量	有	織文前期初葉
図版5	21	I X	152	5		J10	1/3	織物多量 表裏織文		羽衣(結 末)織文	にぶい 黄	細砂粒含有、白色粒少量	有	織文前期初葉
図版5	22	ⅡD	133	16		C08	1/2	織物多量 表裏織文			暗	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	22	ⅡD	241	16		C08	1/2	織物多量 表裏織文			暗	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	22	ⅡD	131	16		C08	1/2	織物多量 表裏織文			暗	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	23	I W	32	31		T16	1/3	織物多量 表裏織文			暗	織物多量、砂粒少量	有	織文前期初葉
図版5	24	ⅡD	223	9		B10	1/2	織物多量 表裏織文		織文	にぶい 黄	白色細粒多量	有	織文前期初葉
図版5	25	I X	74	38		M06	1/2	織物多量 表裏織文		明 黄 雫	細砂粒含有、白色粒少量	有	織文前期初葉	
図版5	26	ⅡD	96	22		D07	1/2	織物多量 表裏織文			雫	長石、石英細砂粒多量	有	織文前期初葉
図版5	26	ⅡD	133	22		C08	1/2	織物多量 表裏織文			雫	長石、石英細砂粒多量	有	織文前期初葉
図版5	26	ⅡD	259	22		C08	1/2	織物多量 表裏織文			雫	長石、石英細砂粒多量	有	織文前期初葉
図版5	27	ⅡD	259	22		C08	1/2	織物多量 表裏織文			雫	長石、石英細砂粒多量	有	織文前期初葉
図版5	28	ⅡD	130	1		D08	1/4	糸織文	口縁～ 胴部	暗雫	織物多量、長石多量	有	遺物多量、織 文の早期	
図版5	29	I X	307	3		H17	1/4	織物多量 表裏織文	口縁～ 胴部	にぶい 黄	織物多量、小石含む、長石多 量、やや暗い	有	遺物多量、織 文の早期	
図版5	30	ⅡD	11	6		B04	1/4	竹管文	口縁～ 胴部	にぶい 黄	小石多量含む、白色石英含 有、やや暗い	有	織文前期後半	
図版5	30	ⅡD	268	6		D10	1/4	竹管文	口縁～ 胴部	にぶい 黄	小石多量含む、白色石英含 有、やや暗い	有	織文前期後半	
図版5	30	ⅡD	223	6		D10	1/4	竹管文	口縁～ 胴部	にぶい 黄	小石多量含む、白色石英含 有、やや暗い	有	織文前期後半	
図版5	30	ⅡD	12	6		B04	1/4	竹管文	口縁～ 胴部	にぶい 黄	小石多量含む、白色石英含 有、やや暗い	有	織文前期後半	
図版5	30	ⅡD	156	6		D10	1/4	竹管文	口縁～ 胴部	にぶい 黄	小石多量含む、白色石英含 有、やや暗い	有	織文前期後半	
図版5	31	I W	43	32		S16	1/3	織物多量 表裏織文			にぶい 黄	細砂粒含有、白色粒少量	有	織文前期初葉
図版5	32	ⅡD	1	23		161	1/3	織物多量 表裏織文			暗	織物多量、小石含む、砂粒含 有	有	織文前期初葉
図版5	33	ⅡD	174	20		M04	1/3	糸織文		沢 黄 雫	緑黄色粒多量、赤褐色粒含 有、細砂粒含有	有	織文早期終末	
図版5	34	ⅡD	215	18		K04	1/2	糸織文	底面付着	明 黄 雫	砂粒少量	有	織文早期終末	
図版5	35	ⅡD	11	10		H04	1/2	竹管文	口縁	暗 赤 雫	砂粒少量	有	織文前期中葉	
図版5	36	ⅡD	60	7	b	B06	1/2	竹管文	胴部	明 赤 雫	よくしまっている、細長石 多量	有	織文前期中葉	
図版5	37	ⅡD	99	7	a	B06	1/2	竹管文	胴部	明 赤 雫	よくしまっている、細長石 多量	有	織文前期中葉	
図版5	38	ⅡD	127	7	a	D08	1/2	竹管文	胴部	沢 雫	よくしまっている、細長石 多量	有	織文前期中葉	
図版5	39	ⅡD	60	7	d	B06	1/2	竹管文	胴部	沢 雫	よくしまっている、細長石 多量	有	織文前期中葉	
図版5	40	ⅡD	59	7	a	B06	1/2	竹管文	胴部	明 赤 雫	よくしまっている、細長石 多量	有	織文前期中葉	

第4表 星光山荘A遺跡 縄文時代土器属性表 (2)

(2) 石器 (図版7-2~13、図版8-14~21、図版9-22~31) (第5表)

1. 石畿 (AH) (2~6)

遺跡全体では10点出土している。図化されたものは凹基無茎形(2~6)のもの5点である。2~4は凹基部が弧状になっている。4は裏面に主要剥離面を残し周縁の押圧剥離で整形している。5は幅の狭い

二等辺三角形鎌で、凹基部は弧状になっている。6は形態が3などに類似するが、先端が欠損し、腹部が厚く、未製品の様相が残る石鎌である。図化されなかった石鎌は欠損品と未製品である。

2. 搔器 (Sc) (7・8)

7は黒曜石製、8は珪質凝灰岩製。

3. 磨製石斧 (11~16)

11は砂岩製小型の磨製石斧である。長さ70mm幅35mm厚さ9mmの小型短冊形をしており両刃である。

12は安山岩製敲石である。器表面は礫面で、磨かれた面のようにツルツルと光沢している。しかし磨製面や擦痕など明確に観察できなかった。刃部は一部欠損しているが礫面の長軸縁辺表裏からの打痕がある。

13は安山岩製打製石斧である。両側縁に剥離が加えられ短冊形石斧の基部を作成している。頭部と刃部を欠損している。

4. 再加工のある剥片 (RF) (14~16)

14は主要剥離面側の一縁辺に、15・16は二側縁に小剥離が行われているやや厚みのある剥片である。

5. 打製石斧 (17~20)

17~19は形態が撥形の底辺部に刃部を持つ直刀斧(トランシェ様石器)である。縄文時代早期末の特徴を持つ。3点とも礫面を残す。17は先端が尖る。

20は短冊形の石斧である。側縁に礫面の打面を残す。板状に剥された横長剥片を素材として用いている。17~20は側縁に潰したような加工は見られない。

6. スタンプ形石器 (21)

横断面三角形で、両側縁を特殊磨石同様磨面とした棒状の礫下半を打ち欠き、打ち欠いた面を底面として敲打したと思われる石器である。底面の縁辺には小剥離痕があり、底面の平坦な部分はやや磨耗が見られる。石器の頂部には敲石としても併用したと思われる敲打痕が残る。

7. 凹石 (Ps) (22~25)

22~25は両面に凹を持つ円礫を利用した凹石である。凹は中央に縦並びに2個あけられている。25は正面凹石に使用后磨石として再利用されている。22~25は凹が浅いものが多く使用頻度の少ない物が多いようである。

8. 磨石 (Gw) (26・27)

26・27は円礫を利用した磨石で、26は長楕円形の小板型で、正面と側辺部を磨面としている。側辺の磨面は約18mm幅である。27は扁平な円形で、片面だけを磨面としている。石材は26が安山岩、27が砂岩である。

9. 特殊磨石 (28~31)

通称穀摺石である。本遺跡では形態的に3分類される。

第1類 28は断面円形の長楕円形の礫を用いている。表面を磨り面とし、磨り面は正面裏面側面と3部位利用され、磨り面は幅35~40mmにわたっている。長軸の両端を敲石としている。敲打面は押し叩いたように表面平らになっている。敲石として使用後に磨石として使用している。石材は安山岩。

第2類 29・31は断面三角形の長楕円の礫が利用されている。

第3類 30は断面卵型の楕円形を呈する礫を利用し、両側縁部を磨面としている。磨面は約18~20mm幅である。長軸の端部的一方を敲石として利用している。この敲打面も28と同様押し叩いたように表面平坦になっている。

第2章 星光山荘A遺跡

図版番号	図No	遺構・区分	遺物番号	小メソッド名	出土層位	器種	材質	スケール	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	蔵存量	欠損部位	備考
図版7	1	I X	365	Q07	Ⅱ	Fe		3/4	103	46	11	45	100		
図版7	2	ⅡD	332	I08	Ⅱ	Al	Ch	3/4	28	19	4	1.41	100		
図版7	3	ⅡD	66	I07	Ⅱ	Al	Ob	3/4	24	18	3	1.04	75	長さ	
図版7	4	ⅡD	30	G04	Ⅱ	Al	Ob	3/4	23	16	2	0.76	100		片記間違いない C20ではない
図版7	5	I X	226	K10	Ⅱ	Al	Ob	3/4	25	13	3	0.61	75	長さ	
図版7	6	ⅡD	209	D10	Ⅱ	Al	An	3/4	24	20	7	1.53	75	長さ	
図版7	7	ⅡD	286	A12	Ⅱ	Sc	Ob	3/4	24	20	8	2.77	100		
図版7	8	ⅡD	196	F06	Ⅱ	Fe	ST	3/4	30	22	10	6.19	100		
図版7	9	ⅡD	235	K07	Ⅱ	Dr	An	3/4	38	19	7	6.94	100		
図版7	10	I X	53		Ⅱ	碧玉	Ag	3/4	29	15	5	6.31	100		
図版7	11	I X	463	C17	Ⅱ	磨製石斧	Se	1/2	70	26	9	40	100		
図版7	12	ⅡD	67	P07	Ⅱ	Fla	安山岩	1/2	77	39	14	66	100		
図版7	13	I X	237	W11	Ⅱ	打製石斧	An	1/2	48	29	12	22.5	25	長さ・幅	知照形
図版8	14	ⅡD	283	A11	Ⅱ	Fla	An	1/2	65	67	12	45	100		
図版8	15	I X	424	F11	Ⅱ	Fla	An	1/2	70	70	19	76	100		
図版8	16	I X	421	M09	Ⅱ	Fla	An	1/3	43	69	15	36	100		
図版8	17	I X	347	P09	Ⅱ	打製石斧	An	1/2	76	46	13	36	100		トランシエ
図版8	18	I X	474	P09	Ⅱ	打製石斧	An	1/2	80	62	21	85	100		トランシエ
図版8	19	I X	248	P09	Ⅱ	打製石斧	Tu	1/2	167	64	21	122	100		トランシエ
図版8	20	I X	211	K10	Ⅱ	打製石斧	An	1/2	124	61	22	150	100		知照形
図版8	21	ⅡD	72	G04	Ⅱ	スタンツ彫石器	Sa	1/2	126	60	60	500	100		
図版9	22	ⅡD	189	J07	Ⅱ	Fla	Sa	1/2	87	71	69	410	100		
図版9	23	I X	333	M09	Ⅱ	Fla	安山岩	1/2	96	72	34	310	100		
図版9	24	I X	190	N06	Ⅱ	Fla	安山岩	1/2	75	61	46	250	100		
図版9	25	I X	177	M06	Ⅱ	Fla	Sa	1/2	95	76	34	320	100		
図版9	26	ⅡD	180	L04	Ⅱ	GS	安山岩	1/2	106	77	44	590	100		
図版9	27	I X	218	L11	Ⅱ	GS	Sa	1/2	166	93	38	819	100		
図版9	28	I X	277	O07	Ⅱ	特磨燧石	安山岩	1/2	120	63	62	680	100		
図版9	29	I X	433		Ⅱ	特磨燧石	安山岩	1/2	126	72	60	760	100		
図版9	30	ⅡD	220	B06	Ⅱ	特磨燧石	Sa	1/2	173	76	73	980	100		
図版9	31	I X	266	O12	Ⅱ	特磨燧石	Sa	1/2	146	66	68	760	100		焼レキ

第5表 星光山荘A遺跡 縄文時代石器属性表

(3) 石製品 (図版7—10)

10は玉髓製の管玉状石製品である。長さ29mm幅15mm厚さ5mmで穿孔部は上下から開けてある。穿孔径は平均6mmである。

第3節 その他の遺物

旧石器時代石器 (図版7—1、第5表)

本遺跡においては縄文時代以前の遺物は当石器以外出土していないため本報告書において旧石器時代であるが縄文時代以降編にて掲載した。

1は木葉形の安山岩製槍先形尖頭器である。遺跡の北西側舌状台地の先端部IX10 (IXQ07) 区のⅢ層から単独で出土した。基部の2本の先端からファシットが入っており、男女倉遺跡のいわゆる「男女倉型彫器」と同類のものである。長さ104mm、幅47mm、厚さ11mm。

第4節 まとめ

本遺跡では土坑を17基検出した。そのうち底面に逆茂木痕がある土坑第1a類と深さ1m以上の土坑第

1b類の12基は陥穴と推定している。列をなす1類の第1グループと第2グループはほぼ同時期の土坑と考えられる。こうした列をなす土坑はあまり注目されていない。好対照をなすランダムな配置の土坑群とは異なった鑑法を考える必要があろう。

陥穴を用いた類には、「待ち伏せ型」と「追い込み型」の二者が考えられる。本例の場合その数が少なく、若干無理があるが、並列して列をなすタイプは追い込み型と考えて良いのではないだろうか。

本遺跡の集石のほとんどは自然流路の河床に分布する。一見、人為的な様相をみせるが、自然流路によって運ばれた可能性もあり、集石と断定しがたい。

自然流路の際、SQ01の東側で焼土が単独で検出された。信濃町では焼土のみが単独で、斜面に残る例が数多くある。これらは、火山灰などが凹地にたまったものと推測されている(註)。遺跡の北東平坦面からは縄文前期初頭の繊維土器が多く検出されている。逆に南東側斜面では前期の竹管文土器が多く出土している。前期初頭の縄文土器が多く出土する北東平坦面には打製石斧やトランシェ様の打製石斧など、各種の石器が出土している。これらは前期初頭の石器群と考えてよいであろう。

本遺跡では住居など長期間の居住が想定される遺構が認められず、少量の土器や石器が発見されたのみである。おそらく、短期間の居住が行われたのであろうと考えられる。これらの遺物と陥穴の関係が注意されるところである。仮に、陥穴が遺物と同時期と考えることができれば、狩猟を中心とした活動が行われた遺跡と考えることができよう。

これまで、こうした小規模な遺跡は重要視されていない。縄文時代人が集落(長期滞在型遺跡)を中心に活動していたのではあろうが、本遺跡のような小規模(短期滞在型遺跡)も、縄文人の活動を考えるうえで重要な遺跡である。長期滞在型の遺跡と短期滞在型の遺跡が組み合わさって、ひとつの生活圏を構成していたと考えるからである。そして、短期滞在型の遺跡は縄文人の生業と密接に関連した遺跡と考えられ、注目されなければならない遺跡であると考えられる。

(註) 本例もそうした一例ではないかと考える。

第3章 星光山荘B遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

本遺跡は上水内郡信濃町大字下山桑2611-6ほかに所在する。星光山荘B遺跡は星光山荘A遺跡の南約300mに位置し、調査予定地外であったが、道路建設にあたり切り株伐採作業中に縄文晩期土器片が発見され、調査を行うこととなった。調査当初、星光山荘Ⅲ区として調査を行った。その後星光山荘Ⅲ区の部分を星光山荘B遺跡とし、星光山荘A遺跡（旧星光山荘遺跡）とは別に星光山荘B遺跡として調査し、記録保存することとなった。

星光山荘B遺跡は、星光山荘A遺跡と同様に黒姫山から続く山麓が池尻川によって切られ、段丘となる縁辺に立地する。この段丘は舌状に池尻川に向かって張り出している。標高は652m～650mでほぼ平坦な地形である。調査区の南側には小さな沢が流れ、北側はかつて沢であったと見られ、鞍部となっている。現況は山林である。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法（第7図）

調査は、伐根部から縄文晩期の土器（SQ04・SQ05）が出土したため、手取りによる遺物取り上げが行われた。当初試掘段階で遺物や遺構が確認されなかったため、V層面まで重機によるトレンチ掘りが行われ、その際縄文草創期の土器・石器の集中部が出土し、急きょ手掘りの慎重な調査が行われた。遺物は（株）写真測図のコービックによる遺物取り上げが行われた。

縄文草創期の遺物はⅢ層下部まで出土し、その遺物が稀薄になった地点から本格的な遺構検出が始まった。

Ⅱ層面から平安時代の焼失住居址が1棟南側より検出された。平安時代の住居址覆土土器は一括遺物として取り上げ、床面直上より手取りによる遺物取り上げが行われた。

また、Ⅲ層上面から土坑が検出されたため、遺構調査を行った。北西方向からは土坑が3基検出され、土坑の調査が行われた。また中央東西に4基の土坑が検出され、遺構調査と遺構記録が行われた。覆土観察不可能な深い土坑や、底面に小ピットのあるものは、危険防止のためと覆土確認のため、重機による半割調査が行われた。

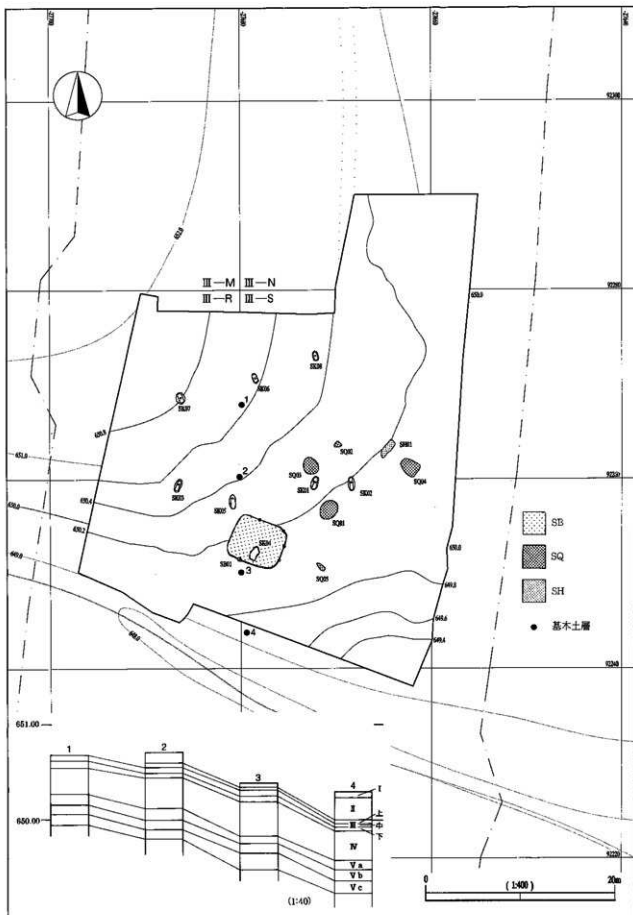
急きょ調査が拡張して行われたため、調査範囲は遺物や遺構が最終的に確認できなくなる地区までとなり、調査面積は約4,000㎡となった。

(2) 調査経過

調査期間 1995年7月27日～9月14日

本遺跡は1993年度に当センターと文化課によって、試掘調査が行われている。当センターの試掘は、調査区の東端に南北トレンチが入れられた。文化課の試掘はセンターのトレンチから西へ30mほど離れた南北トレンチが入れられた。いずれも遺物や遺構は確認されなかった。

Ⅱ層上面から平安時代住居址が1棟検出され、縄文時代晩期面では土器集中部が1基検出され、晩期面



第7図 星光山荘B遺跡遺構配置図・基本土層図

調査終了後、Ⅲ層までトレンチを入れ確認したところ、局部磨製石斧が出土した。このため調査はⅢ層まで掘り下げ続行した。Ⅲ層面より、隆起線文土器・有茎尖頭器・石槍・石錐・砥石など縄文時代草創期の遺物が多数出土し、精査しながらⅣ層面まで調査を行った。

(日誌抄)

7月27日	Ⅲ区(晩期土器集中SQ04)掘り下げ 作業開始	8月23日	S K01~03 検出
8月1日	Ⅲ区完掘 重機によりⅣ層までトレンチを入れる	24日	遺構外のⅢS06の石器類を検出
	SQ02を検出	25日	S K01~03 完掘
2日	礫群SH01・SQ05を検出 SQ01を検出 S	28日	SQ完掘
	B01を検出	29日	S K04 検出
3日	SQ04 検出	9月4日	S K04 完掘
4日	大久保南へ応援を出す	5日	S K05 検出
7日	大久保南へ応援を出す	6日	空掘
8日	SH06完掘	7日	S K06完掘
10日	樋口昇一先生・会田進さん来訪	8日	S K07 検出
17日	SH03 検出 Ⅲ区をMSK-Bとする	11日	S K07 完掘
21日	野尻湖調査団人類考古グループ見学	12日	S K08 検出
22日	Ⅲ区掘り下げ S K01 検出	13日	S K08 完掘 作業終了

(3) 調査結果の概要

星光山荘B遺跡は、A遺跡から300m南の平坦部で、標高652m~650mの地点である。調査区南端で、平安時代の住居址1棟を検出した。竪穴式住居址であり、住居の中央に向かって放射状に炭化材が倒れており、焼失家屋と思われる。また縄文時代晩期面では、遺跡東側に1個体潰れた状態の晩期の土器が出土(SQ04)した。晩期遺物の総点数は73点で、この時期の土器や石器はⅢS2・S7区から散発的に出土した。また、調査範囲の北側(3基)と中央部(4基)に、稜線を跨ぐように東西に並ぶ7基の土坑を検出した。すべて逆茂木痕を底面に残す縄文時代の陥し穴土坑であった。

晩期面下部より石斧や隆起線文土器など縄文草創期の遺物を検出した。遺物の分布範囲は東側に集中した。遺物集中部は3ヶ所(SQ01~SQ03)、集石は1ヶ所(SH01)であった。その他の住居址など縄文時代草創期の遺構は検出されなかった。また、隆起線文土器と局部磨製石斧などの石器類も同一層から出土し、これらの遺物は縄文草創期の同時期の遺物と考察される。

(4) 基本土層(第4図・第2表)

本遺跡の基本土層は次の通りである。平安時代の住居址はⅡ層上面から検出。縄文時代晩期~早期もⅡ層上面から出土。土坑もⅡ層中から検出された。縄文時代草創期の遺物は、Ⅱ層下面よりⅢ層中より出土している。

基本層	Hue	色調	特徴	IV	7.5YR7/6	明褐色	やわらかい
I	7.5YR2/2	黒褐色	表土層	Va	7.5YR5/6	明褐色	10YR4/4褐色粒含有堆積密
Ⅱ	7.5YR3/3	暗褐色	柏原黒色火山灰層	Vb	10YR5/8	明褐色	1cm径の粒多
Ⅲ上	7.5YR3/4	暗褐色	7.5YR5/6暗褐色土斑に10%混入	Vc	10YR4/6	黄褐色	硬く密に堆積Vc層より赤身が強い
Ⅲ中	7.5YR5/6	明褐色	黒色土70%混合のモヤ層	VI	10YR5/6	黄褐色	赤スコリアを混合
Ⅲ下	7.5YR5/6	明褐色	黒色土50%混合のモヤ層	VII	7.5YR4/8	明褐色	スコリア 赤スコの岩盤

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

(1) 土坑 (図版13、第6表)

本遺跡では土坑は8基検出され、土坑の形態から2分類された。(括弧内は第16章第3節の分類)

第1類(土坑分類第1類):平面形隅丸長方形あるいは楕円形で、底面形も同様で、断面は箱型。底面中央部に逆茂木痕のピットがあり陥穴土坑と思われる。本遺跡ではSK01~03・05~08がこの類の土坑である。検出面はすべてⅢ層上面である。これらの土坑の配置は二グループに分かれる。第1グループ(SK07・06・08)は、遺跡の北側東西に位置し、主軸が北西方向で、高低差2m間隔で並列している。第2グループ(SK03・SK05・SK01・SK02)は、遺跡の中央東西斜面に位置し、主軸は真北あるいは北東向きのものが多く、高低差約2m間隔で並列している。土坑内の出土遺物はない。

第2類(土坑分類11類):平面形態細長い不整形で底面も不整形である。SK04がこの分類に相当する。覆土は黒色土の単層であり、断面は5~16cmの浅い階段状で、底面平らな土坑である。平安時代の住居址を壊した形で検出され、平安時代以降の土坑と思われるが明確ではない。性格は不明。土坑内からの出土遺物はない。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	分類	備考
SK	1	1.14×0.74	78~108	N-14° -E	1	
SK	2	1.46×0.72	88~114	N-0° -	1	
SK	3	1.45×0.68	90~110	N-19° -E	1	
SK	4	1.48×0.80	26	N-23° -E	11	
SK	5	1.50×0.64	80~116	N-6° -W	1	
SK	6	1.10×0.54	70~88	N-19° -W	1	
SK	7	1.24×0.92	83~107	N-19° -W	1	
SK	8	1.04×0.58	62~88	N-14° -W	1	

第6表 星光山荘B遺跡 土坑属性表

(2) 遺物集中部 (図版10~図版12)

本遺跡の遺物集中部は2時期5ヶ所で検出された。SQ04は縄文時代晩期であり、SQ01~SQ03・SQ05の4ヶ所は縄文時代草創期である。

なお、調査中から整理作業中に変更された遺構名は次の通りである。石器集中①はSQ02に変更、剥片集中②はSQ01に変更。剥片集中③は遺構外として遺構名を削除した。SH06はSQ04に変更、SH07はSQ05に変更、SH08・SH09は削除した。

1. SQ01 (図版10)

BL02内(ⅢSE12)Ⅲ層上面から検出、Ⅲ層下面に礫の集中を確認。約0.25×0.2mの範囲で礫が重なるように5点出土し、その周辺にフレークや磨石や石斧が出土している。SQ03の3m南方向に位置する。礫は亜角礫で人頭大の2個体と2個体の握り拳大の礫が重なるように出土し、その周辺にフレークや斧形石斧・磨石が径2m内に散漫な分布を呈している。時期は局部磨製の斧形石斧など石器の様相から縄文時代草創期の遺構と思われる。

2. SQ02 (図版10)

Ⅲ層上面で検出。BL02の北西端(ⅢSE09・F09)で、約0.8×0.4mの分布範囲で10点の石器が出土した。10点はやや固まった状態であった。遺物の垂直分布幅も狭く同一時期のものと思われる。10点中槍先形尖頭器が1点(56)、削器4点(104・124・93・121)、搔器1点(87)、スタンプ形石器1点(154)、U・フレーク2点、フレーク1点等が出土している。槍先形尖頭器など石器の様相から縄文時代草創期のものと思われる。疎な分布であり、落ち込みは確認されず、周辺に炭化物・焼土も、チップ類も検出されなかった。したがって調理場や、石器製作址と考えがたい。

3. SQ03 (図版11)

Ⅲ層上面で検出。BL02中央部(ⅢSD10)で、約1.7×1.2mの範囲内で、土器6点、石器16点が出土した。石器は石錐2点(62・63)、小剥離痕のある剥片2点(135・133)、槍先形尖頭器2点(50・47)、有茎尖頭器1点(25)、搔器(82・77・78)、石斧調整剥片1点(図版51—132)の8点が相模倒しのように重なり合い、削器2点(105・114)、磨石1点(158)、敲石1点(159)がその周りで出土した。石器の様相から縄文時代草創期のものと思われる。落ち込みは確認されず、周辺に炭化物・焼土も、チップ類も検出されなかった。しかし、遺物の重なり方から、人為的な行為の可能性があると思われる。

4. SQ04 (図版12)

Ⅱ層中に遺跡の東側(ⅢSI10)約2m範囲に土器片が散在していた。1個体の土器(図版31-197)が中心部から1mの範囲内に遺物が移動しているが、潰れた状況で集中しているものと思われる。土器片から縄文時代晩期の集中部である。

5. SQ05 (図版12)

BL05の南東隅(ⅢSE15)Ⅲ層から検出。円礫と亜角礫7点に囲まれて、中央部に土器が集中した。土器片は約20片(一括資料として取り上げ)が出土した。1片は縄文時代晩期の土器片、他の土器片は縄文時代草創期の隆起線文の細片であった。

また、礫は加熱された様子はないが、周辺に炭化物があり、岩石の「段階交流消磁」の結果と、土壌サンプルの「残留磁化測定」にて、受熱を2度受けた可能性が指摘されている(第4節参照)。礫は土器の堆積より約30cm上面にあり、土器も上下幅約30cmレンズ状の堆積幅があることなどから、小土坑あるいは小落ち込みが存在したことが想定される。以上のことからこの集中部は縄文時代草創期の炉跡の可能性はある。

(3) 集石(SH)

集石は1ヶ所検出された。

SH01は発掘調査中SH02として取り上げた遺構であるが、整理作業においてSH01として再登録した。発掘調査中登録されたその他のSH遺構番号に関しては、遺構の再検討を行い、SH番号を削除した。

SH01 (図版11)

Ⅲ層上面から検出し、Ⅲ層下部に礫底面が集中した。BL03内(ⅢSH09・SI09)の中央に、2.1×0.4mの長方形に「コ」の字形に配石したように分布する。主軸は北東方向で、左右に人頭大の礫が直線的に並び、左右の礫間の主軸北東側に、約45×20cm大の大礫が横長に配している。北側右列内側に石槍(図版34-32)が出土した。石槍の出土から縄文時代草創期の遺構と思われる。落ち込みは確認されなかったが、周縁に若干炭化物が分布していた。

SH01の残留磁化測定は、受熱を2度受けた可能性があり、受熱後動いた可能性が高いとされる(本章第4節参照)。炉跡として使用した礫を「コ」の字形に配石しなおした可能性もある。BL03内には多くの有茎尖頭器や尖頭器が分布し、敲石、砥石、磨石等もSH01の4m以内に分布している。焼土や炭

物などは検出されなかったが、炉跡の可能性があり、BL03の剥片類の多い分布は炉跡の周りの作業場と考えられよう。

(4) ブロック (BL) (図版15～図版22、第7表) (註)

本遺跡では草創期(Ⅲ層以下出土遺物あるいは明らかに草創期と思われる資料)に属すると思われる遺物分布の多く分布する地点を7つに暫定的に分割し、それらの遺物分布をブロックとして掲載する。また、ブロックから外れるものはBL外として掲載した。(分布図上の石器図の縮尺は2/3と1/3に縮小掲載し、土器図は1/4に縮小掲載した。)

1. BL01 (図版15)

分布範囲は径約8m内、遺跡の北側(ⅢS07)に位置し、石器総数58点、土器100点と等高線に沿って弧状に分布する。分布密度は散漫である。石器の器種は各種類分布しており、特に搔器(Sc)類が南側に多く(7点)分布する。

2. BL02 (図版16)

分布範囲は径約8m内、遺跡の中央(ⅢS12)に位置し、このブロック内にはSQ01～SQ03の遺物集中部が含まれ、非常に密に分布する。石器総数499点、土器総数289点、遺跡内で最大の分布率である。中でもフレーク・チップ類は非常に多く約400点に上る。斧形石器は、遺跡内の斧形石器18点中の11点がこのブロックから分布する。有茎尖頭器は8点、SQ01～SQ03の2点を含め10点が分布する。また、砥石(図版32-169)の一部、敲石2点、磨石6点、石錐(Dr)6点、搔器(ES)7点・削器(Sc)17点が分布する。土器片数も多く、丸底の底部片も分布する。また水平断面20～30cm以内に遺物の分布密度が濃く、同一層内の遺物の出土が明確である。なおBL02の南中央部分と、南東部分にはSK01とSK02があり、遺物分布が攪乱されている。

3. BL03 (図版17)

分布範囲は径約8m内、遺跡の北東側(ⅢS13)に位置する。北側中央にはSH01が位置する。分布密度はBL02境界からSH01の周りにやや密となり、南側に向かって粗になる。分布がBL02の分布との連結を感じさせる。石器総数は114点、土器総数110点である。石器は有茎尖頭器5点、尖頭器7点、削器5点、石核1点、他にフレーク・チップ類は89点、磨石3点、敲石3点、砥石1点などが分布する。他のブロックより有茎尖頭器と尖頭器が多い分布である。

また、南東側には縄文時代晩期のSQ04の遺構がある。SQ04との分布幅高差は約40cmである。

4. BL04 (図版18)

分布範囲は径約8mで、遺跡の南東方向(ⅢR15・ⅢR19・ⅢR20)に位置する。分布範囲の北側にはSK03(縄文時代)があり攪乱され、BL04・BL05・BL06の交わる地点にはSB01(平安時代)があり、分布が攪乱されている。そのため、分布密度はSB01の周縁部にあたる南東側で高い分布を示す。北側の分布は疎である。SB01内に分布していた遺物が、SB01構築の際、西側にすてられたものがBL04であろうか。石器総数36点、土器総数45点である。

5. BL05 (図版19)

分布範囲は約10m×7mで、遺跡中央部(ⅢS11・ⅢS16・ⅢS17)に位置する。分布密度は南東

(註) 取り上げの際、小破片は一括遺物として取り扱われている場合と、同一地点から数個の石器や土器が取り上げられている場合がある。

側にSB01があり、攪乱され、やや散漫に分布する。石器総数189点、土器総数383点である。

石器の器種はフレーク・チップ類が159点、有茎尖頭器6点、尖頭器5点、削器7点が多く分布する。また、BL02・BL03で出土している砥石（図版57-169）がBL05にも分布し、10m前後の移動があり、接合する。また、BL05の南東隅にSQ05（縄文時代晩期）がみられる。

6. BL06（図版20）

分布範囲は約9m×5mで遺跡南側中央部分（ⅢS16・ⅢS21）に位置し、北東部分SB01によって攪乱されている。分布密度は非常に散漫で、遺物量は少ない。石器総数95点、土器総数102点である。このブロックは隆起線文土器が多く出土している。

7. BL07（図版21）

分布範囲は約10m×8mで、遺跡南東部（ⅢS17・ⅢS18）に位置する。分布密度はやや散漫で、分布範囲の南北中央付近に集中する。石器総数81点、土器総数72点である。石器の各器種が散布する。BL01～BL03から斜面に沿って遺物が消落し、BL07地点に散漫に分布したものとと思われる。このブロックは隆起線文土器が多く出土している。

8. BL外（図版22）

遺構外の遺物は遺跡の北西方向と北東方向に散漫に分布する。石器総数33点、土器総数49点である。このブロック外遺物は隆起線文土器が多く出土しており、縄文時代草創期と思われる。

各ブロックの様相は、多くの遺物の平面移動があり、明確な“場”を推定するには至らなかった。また、石器の個体別分類を試みたが、分布が分散していた。また石器類の接合も試みたが多くの接合しなかった。

また、フレーク（総数493点）やチップ（383点）の出土量は多く、残核（5点）の出土量はフレークやチップ量に比べ少なく、石器の尖頭器や石斧等の再加工の場を想定できるが、石器製作場は想定できなかった。

ブロック内の土器総数1,101点で、隆起線文土器の有文部と無文部の土器片である。接合するものが少なく、同一の胎土であろうと思われる土器は79個体であった（註）。同一胎土と思われる土器片は各ブロックに分散している。

遺構の種類	遺構番号	土器																			打製石器	磨石	石斧	石	土器総数	原石	土器片数	早期土器	前期土器	後期土器	その他土器	土器総数
		TP	Py	As	Ax	Pe	Dr	Sc	ES	Bo	Co	Al	RF	IF	Fl	Ch	GS	Ra	丸	石												
BL	1	3	2	0	3	0	3	7	0	0	0	3	2	2	24	4	2	1	0	0	1	1	0	58	1	36	100	0	0	0	100	
BL	2	8	6	0	11	2	8	17	7	0	1	15	17	8	191	197	6	2	3	1	0	0	1	499	3	59	289	0	0	0	289	
BL	3	5	7	0	0	0	5	0	0	1	2	8	2	50	27	3	3	1	0	0	0	0	114	0	18	116	0	0	0	116		
BL	4	2	1	1	0	0	2	0	0	1	1	2	1	16	5	1	2	0	0	0	0	0	36	0	17	45	0	0	0	45		
BL	5	6	5	0	1	1	3	7	1	0	0	9	6	9	84	51	3	2	1	0	0	0	189	3	86	383	0	0	0	383		
BL	6	1	6	0	2	1	3	2	0	1	0	7	5	5	26	21	0	1	1	0	0	0	95	2	34	102	0	0	0	102		
BL	7	1	2	0	0	0	1	5	1	0	0	2	5	1	28	31	1	2	1	0	0	0	81	4	30	72	0	0	0	72		
BL	外	1	1	0	1	0	0	5	0	0	1	0	2	1	5	6	4	5	0	0	0	0	33	0	13	49	0	0	0	49		
SQ	1	2	1	0	0	0	0	1	1	0	0	1	3	1	24	22	0	0	0	0	0	0	56	0	8	82	0	0	0	82		
SQ	2	0	1	0	0	0	0	4	1	0	0	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	4	0	0	0	4		
SQ	3	2	2	0	0	0	2	5	3	0	0	3	1	4	28	18	3	1	0	0	0	0	70	0	5	23	0	0	0	23		
SQ	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	29	0	29	
SQ	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	19	0	0	1	20		
SH	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	19	0	0	0	0	0		
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	3	0	1	0	0	0	0	1	1	10	0	0	26	36	79	32	154	
合計		31	35	1	18	4	18	60	14	1	5	43	54	38	493	383	25	19	6	2	1	2	2	1255	13	330	1284	36	79	62	154	

第7表 星光山荘B遺跡 遺構別遺物組成表

（註）同一胎土番号は分類当初に分類した番号をそのまま残しているため、後に同一胎土に収められたものが多く最終的に欠番が多くなった。

2 遺物

(1) 土器 (図版23～図版31、第8表)

1. 縄文時代草創期 (図版23～図版30)

隆起線文 (1～177)

「隆起線文」は貼り付ける隆帯の粘土の太いものを「太い隆起線文」、やや細いものを「細隆起線文」、へら状工具でやわらかい器面を動かすことによってほみ出た粘土でできたものを「微隆起線文」と呼称する場合もあるが、本書では大半の個体が「微隆起線文」に属するものと思われるが、「隆起線文」としてまとめて呼称する。

本遺跡の隆起線文の土器片数は1,284点出土し、口縁部片数は100点、底部片数は12点であった。

隆起線文土器の文様分類

本遺跡の隆起線文の有文土器片数は519点であった。有文の土器片から文様を6種類に分類した。胎土別の分類を行い、次に接合作業を行った。しかし接合資料が少なく、胎土の類似するものが同一個体として認識するには決め手がなく、そのため全体の文様を類推することが困難であった。

第1類 口縁部から胴部にかけて数条の条線が平行に巡るもの

- a 直線のもの (1・2・18～50・52～54・56～63・65～67・69～71・81・103・104)
- b 小波状(「ハ」の字状)のもの (5・6・7・8・9・72)
- c 直線の条線と小波状文の条線が混合するもの (4・10・90・91)

第2類 「V」字状、「Y」字状など「く」字状の文様を数条の隆起線文で施文したもの (82・98・99・101・106・123・131・133・134・139・155)

第3類 1本あるいは2本の隆起線文で「V」字状等の文様を施文したもの (13・87・92・95・96・126・127・143・144・149・150)

第4類 縦横方向の条線の隆起線文が施文されたもの (12・51・55・107～119・124・125)

第5類 第1群の文様が胴上部まで続き、その下に異なる第3群のような上下2段の文様構成になるもの (3・78・88・89・93・100・140)

第6類 その他特殊な文様

- a 口唇部下に1・2条の小波状の隆起線文があるもの (11・73・74・79・86・102)
- b 胴部に1条の小波状の隆起線文があるもの (83～85)
- c 2本平行隆起線文が波状文様を施文するもの (94)
- d 細い隆帯を貼ったもの (175)
- e 瘤状の貼り付けのあるもの (177)
- f 口縁部を折り曲げたもの (14)
- g 平行に走る隆起線文の間隔が広いもの (64・68)
- h 口縁部下に縦に施文したもの (164)

3は胴上半部が第1類の文様で構成され、下半部は弧状あるいは大きな波状の文様と「V」字状の文様の幾何学的組み合わせがされている第5類である。

第6類は本遺跡中では少数であり、同一個体と思われる土器片も少なく、特殊であり、他地域からの搬入品の可能性がある。

64・68は6g類としたが、他の第1類の隆起線文よりかなり間隔が広い。また、79は第6a類としたが、口唇部内面にも隆起線文が施文されている特殊な例である。

これらの分類された文様は更に4群に分類される。

- 第1群 同じ文様が繰り返すもの(第1類・第2類)
第2群 上段と下段と異なる文様が構成されるもの(第5類・第3類)
第3群 横走する文様の中に縦走(斜め)の文様で変化をつけたもの(第4類)
第4群 その他単独な文様のもの(第6類)

隆起線文土器の施文方法

施文方法としては7種類の手法が観察された。括弧内は文様の分類と一致する。文様と施文方法にはつながりがみられる。

第1種 巾0.5cm前後の数本のヘラ状工具を平行に動かし凹面と凹面の間にできる凸部を隆起線文として施文したもの(1a類、第2類、第5類の一部)

第2種 1で数条の隆起線文を施文した後下方から1本ずつの隆起線文をヘラ状工具で押し上げて「ハ」の字状の小波状隆起線文を施文したもの。(1b・1c類、第4類、)

第3種 ヘラ状工具や指頭で器表面を寄せて凸部を作る。(第2類と第3類の「V」字等の部分)

第4種 ヘラ状工具の平らな先端を押しひいてそのヘラ状工具からはみ出た両側の粘土をつまみ、隆起線文の凸部とするもの。(第5類)

第5種 口唇部下に施文する方法で、口唇部の角にヘラ状工具の先端を横からそぐように押し付けて凸部を施文したもの。一見「ハ」の字状となる(第6a類や口唇部に「ハ」の字状の小波状隆起線文があるもの)

第6種 ヘラ状工具の先端を上下から方向を逆にしながら押し当てる(第6b類の83~85)。

第7種 細い隆帯を貼り隆起線文とする(いわゆる「細隆起線文」である)(第6d類)。

本遺跡では、第1種の土器が大半を占める。第1種・第2種を組み合わせた文様も目立つ(4)。また、表面がかなり荒れている個体が多いが、隆起線文を施文する際に器面を丁寧にナデ調整していることがある。隆起線文施文の際ヘラ状工具を器面に当てることにより、ナデ調整の効果を生み、器面にミガキ調整を行ったように滑らかになっているものがある(2・23等)。

内面にナデあとが残るものがある(168~170・174)。ナデの施文工具はヘラ状工具と思われる。

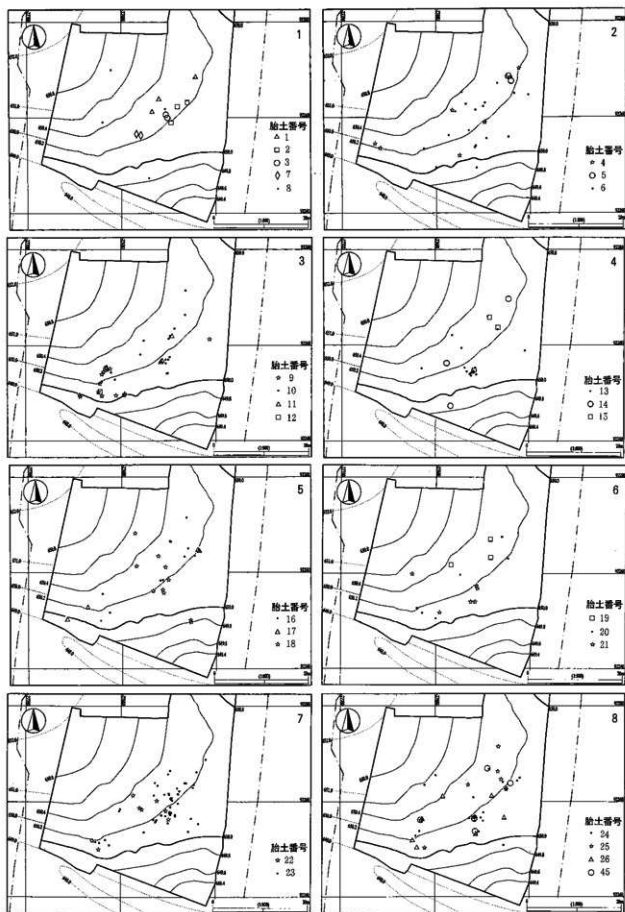
隆起線文土器の胎土

隆起線文土器の胎土は透明な石英粒が粗く含有しているもの(全体の約30%)と、不透明な石英や長石含有のもの(全体の約22%)、安山岩粒含有のもの(全体の約12%)、砂粒含有のもの(全体の約7.2%)、雲母を含有するもの(全体の13%)である。特に粗い粒子のものが大半を占め、粗い粒子土器は、透明な石英多量の土器と半透明や白色の石英や長石など含有物が多量の土器とに大別される。前者の土器は、色調が暗褐色を帯びているものが多く、後者の土器は橙色を帯びるものが多い。微細粒な胎土の土器のなかで、11・16・68・73・74・79・83・86(6類の文様のもの)は特に本遺跡においては異質な胎土であった。持ち込まれた土器片であろうか。

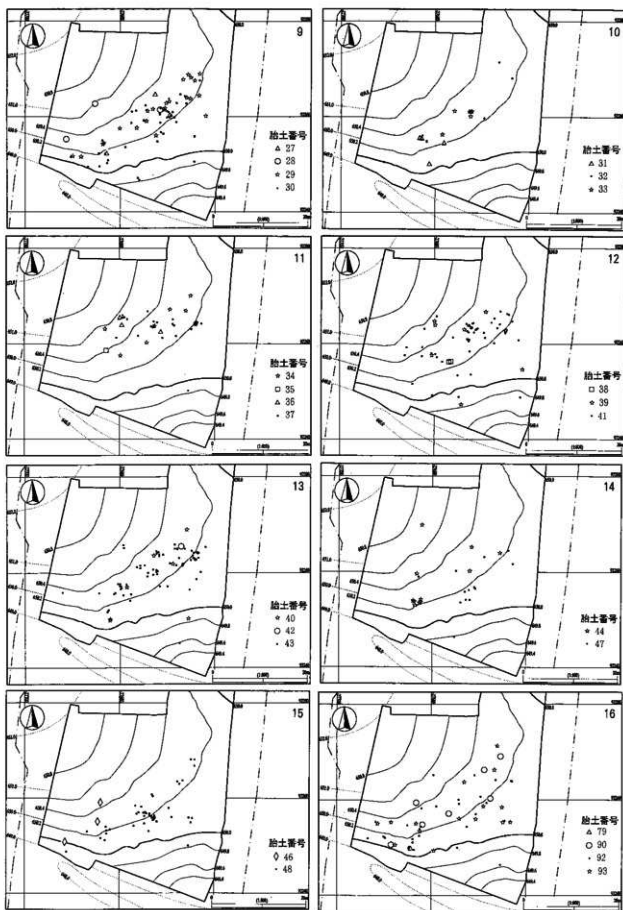
胎土別に個別作業を行ったところ、79個体が確認された。しかし、接合作業ではほとんどの個体が接合せず、文様の分類でも一致しないものなどがあり、整理作業の制限もあり、胎土差=個体差ということを確認することが困難であった。

また、土器の内面に煤の付着が多く土器片で確認された。土器もかなり2次焼成を受けているものが多く、表面が剥落しているものや、水洗の際解けてしまうものなどが多くあった。2など、口径(約12cm)等小型の土器であるが、内面に煤が付着しており、土器外面の色調も灰白色化、内面黒色化しており、煮炊きに使われたものと思われる。

内面の煤付着土器を3点年代測定したところ(本章第4節-1参照)、BC12,360年、BC12,115年、BC12,170年という結果が出た。



第8図 星光山荘B遺跡 隆起縄文土器胎土別分布図 1



第9圖 星光山莊B遺跡 隆起線文土器胎土別分布圖 2

隆起線文土器胎土別分布状況

本遺跡において上記の胎土別にした隆起線文土器の分布状況を第8・9図に示した。破片数の少ない個体はやや集中した分布を示すが、多くの個体は散漫な分布をしている。

隆起線文土器の器形

隆起線文土器の器形は底部が丸底で(15~17)、口縁部には屈曲がなく、丸底から外傾しながら口縁に至る単純な器形である。172・173・177は胴部下半部と底部の接合部の屈曲部が見られる。

その他の特徴

本遺跡の隆起線文土器には補修孔のような土器片に穿孔部のある土器片(23)と、焼成前に開けられた穿孔部のある土器片(61)がある。

23は径7mmの孔で、外面から焼成後に開けられている。内面は径3mmで、外面より小さな孔となり、孔の周縁が剥落している。

61は推定径10mm以上の孔(孔の2/3欠損)で、焼成前に開けられている。穿孔面にへら状工具で開けたと思われるへらの痕跡がある。胴上部の部分と思われ、焼成前の孔であり、補修孔ではないと思われる。

2. 縄文時代早期(図版31-178~191)

a. 縄文(178)

1点のみ縄文の小片が出土している。単節縄文と思われるが詳細は不明である。胎土は若干砂粒を含む微細な石英や雲母を含む表裏縄文土器に類似する胎土である。内面に指頭圧痕のような凹が見られる。

b. 沈線文(179~181)

179は竹管による沈線文である。181は沈線文系貝殻腹線文である。早期中葉の田戸上層式土器と思われる。出土地点は調査範囲の北東中央部から出土しており、出土層位はⅢ層中である。

c. 条痕文(182~191)

182~191は同一個体と思われる条痕文の土器である。繊維と粗い石英粒が多量に含有している。条痕は細い絡条体条痕文を用いている。胴部上部に絡条体圧痕文(184)が横位施文されている。内面にも絡条体条痕文が見られる。出土地点は、調査範囲の西中央部(ⅢR15)にやや集中して出土している。出土層位はⅢ層中である。

3. 縄文時代前期前葉(図版31-192~196)

前期前葉の縄文施文土器は2分類される。

第1類 縄文(192~195)

192~195は同一個体と思われ、「RLR」の複節縄文土器である。繊維と砂粒が多量に含有し、断面の内面が黒色である。出土層位はⅢ層上面で、出土地点は一定地点に纏まりはなかった。前期前葉の縄文土器である。

第2類 表裏に文線のある繊維を含む縄文(196)

196は土器片数63点、口縁部5点、他は胴部片である。底部片は出土していない。粗い砂粒と繊維を含む表裏の縄文土器でもろく、断面部は黒色化している。内面の輪積み部は残っている部分が多い。縄文の原体は「RLR」「RL」で、縄文は羽状に施文されている。縄文の原体は長く(4cm)、胴部中央と口縁部下には原体の結束端部紐痕が見られる。表裏縄文土器との違いは胎土の中に多量の繊維が含有すること、粗い砂粒が含有し口縁部内面に縄文が運るのではなく、内面の口縁部や胴部など一定しないところに施文されているところである。口唇部には縄文が施文されているが、口唇部形態が先細りの部分と角頭状の部

分があり、先細り上の部分は内面に施文がされている。時期は、北陸地方の縄文前期前葉の表裏縄文土器と併行する時期の土器と思われる。出土層はⅢ層上面である。出土地点は調査区南東側(ⅢR15・20)で、SK03の南西側に多くの遺物は集中する。

4. 縄文時代晩期 (図版31-197・図版12-198~201)

197の13点は口縁部から底部までの約1/3の口径が出土している。口縁部には8単位の瘤状の小突起があり口縁部文様帯に4本の太い沈線が巡る。胴部はほぼ縦方向の条痕が底部まで施文されている深鉢土器である。縄文晩期水I式相当の土器である。

198~201は同一個体の深鉢形土器である。197と違い、口縁部文様帯には文様はない。胴部は縦状の条痕文である。口縁部は波状口縁である。縄文晩期水I式相当の土器である。

縄文晩期の土器は出土層位がⅡ層で、SQ04(ⅢS13)・SQ05(ⅢS17)から出土している。

(2) 石器 (図版32~図版57、第9表・第10表)

	Ag	An	Ch	GT	Ja	Ob	Qu	Sa	Sh	SS	ST	Ts	Tu	安山岩	凝砂	片岩	不明	器種合計
AF			2						28				13					43
AH						1												1
Ax									5			8			5			18
Bo											1							1
Ch	7	233	5		9	51		2	1	14	43	18						383
Co	1	2						1			3							7
Dr		9			4			2		1	1	1						18
ES	3	2			4						2	3						14
Fl	9	202	2	1	27	31		35		12	68	100				4	1	493
GS								8				3	1	12				24
Ha								6					1	14				21
Ha+Ps														1				1
Pe		2			1	1												4
Po		14			2				3		7	5	3					34
Ps														1				1
RP		20	1		4	6		1	1	3	14	3						53
Sc	6	11			8	4		1	4	7	17	2						60
TP		19				4		1			6	1						31
UF		11			3	8				2	12	2						38
Wh									5			2						7
スタンブ														1	1			2
形石器																		
原石	1	1	4		1	1	1	4										13
打製石斧																1		1
特殊磨石															2			2
礫石器					1							1						2
材質合計	27	528	12	1	64	107	1	102	6	48	173	157	3	32	5	5	1	1272

第9表 星光山荘B遺跡 材質別器種別石器数表

1. 有茎尖頭器 (TP)

本遺跡では全31点出土した。出土層位はⅢ層中からである。器形と大きさにより3分類し、更に小形のもの器形により6分類した。

第1類 小形化したもので、石鏃形に類似するもの(1~19)

- 1 小型の菱形で、茎状突起の発達しないもの(1・2)
- 2 返し明確でなく、茎部が太いもの(3・4・7)
- 3 有茎部の作り出しが明確になるもの(5・6)
- 4 基部に返しを持ち、茎部が太く長いもの(13・14・16)

5 返しが明確で、細長い基部が付くもの(8~12)

6 その他(15・17~19)

第1~6類は未製品ではないかと思われる。基部の作り出しや両辺の剥離が未完成のまま先端部が欠損している。

第2類 有基部を持つ細身のもの(20~22)

側辺など丁寧に剥離され、形状が細身で整っている。

20は茎状突起が明確でなく、返しも明確でない。21は茎状突起が短く、基部の作り出しが明確である。22は基部と先端の欠損品である。

第3類 大形のもの(23・25)

23は表裏とも原稜面を残し、先端部欠損品である。基部の作り出しも明確ではあるが側縁の剥離も粗く、未製品の可能性がある。

25は先端部欠損品で、側縁が左右非対称で、半月形尖頭器に有基部がつく。基部の作り出しは明確で、明確な返しはない。

石材は無斑晶質安山岩製19点、黒曜石製4点、砂岩製1点、珪質凝灰岩製6点、凝灰質頁岩製1点である。

2. 槍先形尖頭器(Po)(24・26~54・56・57)

尖頭器は全34点出土している。

第1類 細身のもの(24・26~28)

柳葉状の槍先形尖頭器である。24のみが完形品で、26~28は欠損品である。24は基部に膨らみがある、下膨れの柳葉形である。新潟県小瀬が沢遺跡の石器に類似する(中村孝三郎 1960、小熊・前山 1993)。26は小瀬が沢洞窟遺跡の植刃に類似する。尖頭器切断品中間部の資料に類似し、欠損後再加工されない「A I類」(小熊・前山 1993 P75)に分類されるものと同類と思われる。本遺跡においては1点のみの出土であり、植刃とし、報告せず、槍先形尖頭器の胴部片として報告する。

第2類 ほぼ中央部に最大幅があり、第1類より身巾のあるもの(29~33)

第3類 未製品あるいは欠損品(34~54・56・57)

石材は無斑晶質安山岩14点、鉄石英2点、砂岩3点、珪質頁岩7点、凝灰質頁岩3点、珪質凝灰岩5点、凝灰質頁岩3点出土している。

3. 石鎌(AH)(58)

脚部の一方と基部が欠損している。1点のみの出土品であり、黒曜石製である。

4. 楔状石器(Pe)(59・60)

59は無斑晶質安山岩製、60は鉄石英製である。ほかに黒曜石製1点、無斑晶質安山岩1点が出土している。

5. 石錐(Dr)(61~74)

両面加工の尖頭器状の石器を利用したものと剥片石器を利用したものに分類される。

第1類 両面加工あるいは尖頭器状の石器を利用したもの(61~66)

第2類 剥片を利用したもの、他の石器の剥片を利用したもの(67~74)

67は局部磨製石斧の刃部剥片の転用である。68は尖頭器の剥片を転用して石錐としている。先端部が欠損している。74は先端部が欠損し、抉り入り削器とし、再加工されたものと思われる。

無斑晶質安山岩9点、鉄石英製4点、砂岩2点、珪質頁岩製・珪質凝灰岩製・凝灰質頁岩製各1点の合計18点が出土している。

6. 搔器 (ES) (75~83・87・101・110~112)

本遺跡では円形のものではなく、先刃搔器のものが多く見られる (75~83・110・111・112)。形状や大きさは一定しない。

75・76は搔器としての刃部とは反対の部分が石錐として加工されている。78・79・81は打面を残している。80打面部を搔器の刃部として鈍角に加工している。82は形状が三角形で、底面部分が搔器刃部である。83は片側縁に挟り入り削器の加工を施している。

総点数で14点、石材は鉄石英製4点、無斑晶質安山岩と珪質頁岩製各2点、玉髓製と珪質凝灰岩製各3点である。

7. 削器 (Sc) (84~86・88~100・102~109・113~124・128)

削器全点で60点である。刃部となった調整加工によって3分類される。

第1類 直線的な側縁に剥離のあるもの (84・85・86・97~100・102~106・108・113~120・122・123)
この中で更に刃部角度でa刃部が鈍角のもの、b刃部が鋭角なものに2分類される。

a 刃部が鈍角のもの (84・85・87・97~102・104~106・116・117・119・123)

b 刃部鋭角のもの (86・95・96・103・108・113~115・118・120・122)に分かれる。

84は搔器 (エンドスクレイパー) と削器 (サイドスクレイパー) の機能を両方兼ね合わせたものである。97~100・102の刃部は、部分的な挟りがある。

第2類 挟り入り (湾曲状) 側縁剥離のあるもの (88~94・124)

縄文時代草創期に特徴的な挟り入りの石器である。刺突具 (有茎尖頭器等) など柄の部分の削る作業や、骨の加工に使用されたと考えられる。124は折れ面を利用している。

第3類 弧をなす側縁剥離のあるもの (95・96・107・121・128)

削器は総点数60点で、石材は無斑晶質安山岩11点、玉髓製16点、珪質頁岩製7点、珪質凝灰岩製17点が多く利用されている。

8. 微細な剥離のある剥片 (UF) (131・133~135)

総点数38点で、無斑晶質安山岩製は11点、珪質凝灰岩製12点、黒曜石製8点、鉄石英製3点、凝灰質頁岩製2点、珪質頁岩製2点である。

9. 2次加工のある剥片 (RF) (125~127・129・130)

両面加工石器に2次加工のあるもの (126・127・129・130)

総点数53点で、無斑晶質安山岩製は20点、珪質凝灰岩製は14点、凝灰質頁岩製3点、珪質頁岩製3点、黒曜石製6点、鉄石英製4点、チャート製と砂岩製、頁岩製1点づつである。

10. 舟底形石核 (Bo) (55)

本遺跡では珪質凝灰岩製の1点のみである。甲板部分は96×29mm。断面二等辺三角形で、甲板面の両側辺と甲板面側からと底面後縁側から調整剥離が加えられている。槌状剥離の痕跡はまったくなく、いわゆる舟底形石器とは異なる。

11. 石核 (Co) (136・137)

総点数7点で、石材は玉髓製1点、安山岩製2点、砂岩製1点、珪質凝灰岩製3点である。

凝灰岩製の2点とも角を持つ稜面を残す分厚い扁平な剥片を利用している。本遺跡では石核は5点出土している。

12. 斧形石器 (Ax) (138~153)

総点数18点で、石材は砂岩5点、凝灰質砂岩8点、凝灰質砂岩5点である。

斧形石器には1磨面のあるもの (局部磨製)、2磨面のないものに2分類される。

第1類 磨面のあるもの (138・139・141~148)

刃部に両面局部磨製面があり、刃部は縦方向の磨き痕が残る断面カマボコ形のいわゆる「神子柴型局部磨製石斧」である。

139・140・144は長さが短く、巾も狭く、神子柴型特有のカマボコ型断面が厚みのない器形である。140は磨製部分がほとんど残っていないが、原礫面に若干磨耗の痕跡が残る。断面カマボコ形の局部磨製の斧形石器を打製の斧形石器に再加工していると思われる。139・141は140同様再加工し、刃部を磨いたものと思われる。138と145は裏面刃部が使用により剥離されている。その剥離の一部は表面刃部にも及んでいる。

146と143は頭部が欠損している。143は折断面に調整剥離が見られる。削器として再利用したものと思われる。

刃部の形態は、139・141・147が片刃平鑿形、その他が片刃丸鑿形である。

第2類 磨面のないもの (140・149~153)

すべて完形のものはない。頭部のみのものが多く、刃部が欠損しており、本来ならば刃部局部磨製の斧形石器と思われる。

13. 斧形石器調整剥片 (AF) (132)

132は砂岩製の局部磨製刃部の調整剥片である。斧形調整剥片は総点数43点で、石材は無斑晶質安山岩製2点、砂岩製28点、凝灰質頁岩製13点である。

14. スタンプ形石器 (154)

154の石材は凝灰岩製である。棒状砂岩の礫を半載して、平らな半載面を使用面として、植物などを叩き潰す作業をしたものと思われる。その半載面の縁辺に剥離痕が残り、半載面はやや磨耗している。しかし、東裏遺跡などから出土しているスタンプ形石器と異なり、重量が少ない。縄文早期から出土するとされるスタンプ形石器とは時期を異にする石器の可能性がある。

15. 敲石 (Ha) (155・156・158・159)

敲石の総点数21点、石材は砂岩6点、凝灰岩1点、安山岩14点である。

断面扁平な棒状の礫の先端に敲打痕が残るものが多い。

158・159は磨石と敲石をかねる。159は両側辺部が磨石をかね、断面方形に変形している。磨石面の変形した形態から、158のような断面扁平な棒状の磨石と異なり、時期が異なる石器と思われる。

16. 磨石 (GS) (163~168)

磨石の総点数は24点で、石材は砂岩8点、凝灰質頁岩3点、凝灰岩1点、安山岩4点である。

158は断面扁平な楕円形で、棒状の敲石をかねた磨石である。縁辺には敲打痕が残る。163~168は小判型表面を磨り面としている。

磨石類は磨り面が明確でなく、磨り面が変形するまでに至っていないものが多い。縄文時代草創期の石器や土器と共存しているものが多く、縄文時代草創期の石器と推測される。

17. 特殊磨石 (160・161)

総点数は安山岩製の2点のみである。

160、161は安山岩製で、断面三角形の稜線部分を磨面としている。161は磨り面に小剥離がある。これは押し敲きして磨った面と推定される。160は断面三角形の両部のみでなく、棒状の底面も磨り面としている。特殊磨石は縄文早期に伴う遺物として周知されている。本遺跡では沈線文系の土器と条痕文の土器が出土しており、同時期の石器と思われる。

18. 凹石 (PS) (162)

凹石は安山岩製である。小判型の頂部に敲打痕があり、敲石をかねる。中央部に浅い凹があり敲打によって凹んだように観察される。

19. 砥石 (Wh) (169)

砂岩製で、1/4欠損している。石皿のように表裏中央部分凹み面で、その凹面上に幅2～5mmの細い溝が数本ある。溝の方向はほぼ長軸方向である。溝の断面はほぼ「V」字状である。磨製斧形石器刃部の砥石のように思えるが、磨製の刃部には横方向の磨き痕跡がない。他に磨製の石器がないため骨角器等加工の研磨痕と考察する。図化した以外の砥石破片は砂岩製である。

20. その他の剥片石器

フレーク類は石器総数中約80%を占める。フレーク総点数は493点、チップは383点である。

フレークの石材は無斑晶質安山岩が202点、凝灰質安山岩が100点、珪質凝灰岩が68点、砂岩が35点、黒曜石製31点、鉄石英製が27点、珪質頁岩製が12点、玉髓製が9点、チャート製2点、ほかに安山岩・片岩・緑色凝灰岩製が各1点ずつ出土している。チップの石材は無斑晶質安山岩が233点、黒曜石製51点、珪質凝灰岩製43点、凝灰質頁岩製18点、珪質頁岩製14点、鉄石英製9点、玉髓製7点、チャート製5点、砂岩製2点である。

本遺跡において無斑晶質安山岩が使用されている器種は槍先形尖頭器と有茎尖頭器である。しかし、無斑晶質安山岩製の石核は2点しかなく、無斑晶質安山岩のフレーク類は槍先形尖頭器や有茎尖頭器などの調整剥片と思われる。砂岩や凝灰岩質系のフレーク類は槍先形尖頭器や有茎尖頭器や斧形石器の調整剥片と思われる。

引用文献

- 中村孝三郎 1960 『小瀬が沢洞窟』 長岡市立科学博物館
 小黒博史・前山精明 1993 「新潟県小瀬が沢洞窟出土遺物の再検討」『シンポジウム1環日本海における土器出現期の樞相』日本考古学協会新潟県大会実行委員会

第3章 星光山荘B遺跡

図版収 番号	整理 No	遺構・ 区分	遺物 番号	遺物の 種類	遺構 番号	スケ ール	器 種	材質	長さmm	幅mm	高さmm	重量g	小 刀 付	遺存 度	欠 損 部 位	副体 番号	備 考	
図版54	134	2441 III-S	1758 BL	2 3/4	18		ST	36	29	7	6.19	510		60	長さ	571		
図版52	135	1287 III-S	572 SQ	3 3/4	18		As	66	81	19	49.22	910		100		468		
図版52	136	375 III-R	375 BL	4 3/4	Co		ST				77.4	616				272	銅片素材	
図版52	137	1191 III-S	509 BL	2 3/4	Co		ST				117.3	813				578		
図版53	138	1868 III-S	1179 BL	2 1/2	Ax		Ta	131	45	28	222.9	611		100		126		
図版53	139	869 III-S	174 BL	1 1/2	Ax		磁砂	124	31	16	74.07	606		100		544		
図版53	140	887 III-S	172 BL	2 1/2	Ax		磁砂	110	38	20	82.24	609		100		545		
図版53	141	588 III-R	590 BL外	1 1/2	Ax		Sa	173	46	29	264.1	503		100		546		
図版54	142	866 III-S	171 BL	2 1/2	Ax		磁砂	147	44	27	199.6	609		100		545		
図版54	143	1232 III-S	537 BL	2 1/2	Ax		Ta	169	43	18	102.8	609		50	長さ	126	538と接合 測定 値は接合後	
図版54	144	502 III-R	502 BL	6 1/2	Ax		Ta	153	33	16	85.22	515		100		126		
図版54	145	865 III-S	170 BL	2 1/2	Ax		磁砂	166	48	27	224.1	609		100		546		
図版54	146	1572 III-S	877 BL	6 1/2	Ax		Ta	82	52	26	108.4	612		50	長さ・幅・厚さ	126		
図版54	147	9427 III-S	1749 BL	4 1/2	Ax		磁砂	144	43	26	190.1	616		100		126		
図版54	148	1168 III-S	475 BL	2 1/2	Ax		Sa	80	35	19	32.22	610		28	長さ・幅・厚さ	546	高部磨製石片	
図版56	149	1179 III-S	484 BL	2 1/2	Ax		Sa	71	44	22	62.39	611		50	長さ・幅	541	5372と接合	
図版56	150	1577 III-S	882 BL	2 1/2	Ax		Ta	75	41	21	66.43	612		50	長さ・幅・厚さ	126	高部磨製石片	
図版56	151	890 III-S	304 BL	1 1/2	Ax		Ta	89	41	23	77.47	606		50	長さ・幅・厚さ	126	高部	
図版56	152	868 III-S	173 BL	1 1/2	Ax		Sa	120	51	23	127.5	606		100		545		
図版56	153	1390 III-S	594 BL	2 1/2	Ax		Sa	70	42	26	70.70	609		60		548	高部磨製石片	
図版56	154	531 III-S	526 SQ	2 1/2	スタンプ形石磨		安山岩	76	56	37	236.4	709		100		546	石磨より変更	
図版56	155	974 III-S	279 BL	3 1/3	Ita		安山岩	72	55	41	235	1008		60	長さ・幅・厚さ		縦打痕あり	
図版56	156	1759 III-S	1080 BL	1 1/3	Ita		安山岩	85	63	43	340	596		50	長さ・幅			
図版56	157	698 III-S	16 BL外	1 1/3	Ita		Sa	161	68	34	530	609		100			一箇 土磨とダブ りあり	
図版56	158	1263 III-S	608 SQ	3 1/3	GS		Sa	107	50	31	253.3	610		100		543	縦打痕あり	
図版56	159	1362 III-S	607 SQ	3 1/3	Ita		Sa	126	66	38	462	910		100		543	縦打痕あり 土磨 とダブりあり	
図版56	160	972 III-S	277	1 1/3	特殊磨石		安山岩	166	68	66	1035	608						特殊磨石
図版56	161	11 III-R	11	1 1/3	特殊磨石		安山岩	166	68	72	937	608		100				一箇 特殊磨石 と土磨とダブ りあり
図版57	162	460 III-R	494 BL	5 1/3	Ita+Ps		安山岩	96	55	38	333	514		100				基石あり
図版57	163	1182 III-S	488 BL	2 1/3	GS		Sa	103	34	16	84.03	611		100		543		
図版57	164	688 III-S	8 BL外	1 1/3	GS		Sa	95	48	22	145.0	601		100				縄文晩期
図版57	165	1006 III-S	311 BL	3 1/3	GS		Sa	141	56	21	287.1	599		100		543		
図版57	166	1878 III-S	1190 BL外	1 1/3	GS		Sa	193	45	40	550	408		100		543		
図版57	167	1315 III-S	623 BL	2 1/3	GS		Sa	128	57	24	268.7	611		100		543		
図版57	168	853 III-S	157 BL外	1 1/3	GS		安山岩	102	79	48	546	703		100				Itaとして使用さ れている
図版57	169	796 III-S	134 BL	3 1/2	Ita		Sa	50	44	38	116.4	707		25	長さ・幅・厚さ	542	S830, S1368と接合	
図版57	169	2046 III-S	1599 BL	3 1/3	Ita		Sa	61	49	36	115.9	713		25	長さ・幅・厚さ	542	S24, S490と接合	
図版57	169	1325 III-S	630 BL	6 1/3	Ita		Sa	98	112	45	592	612		50	長さ・幅・厚さ	542		

第10表 星光山荘B遺跡 縄文時代石器属性表 (3)

第3節 平安時代の遺構と遺物

1 遺構

S B01 (図版58, 第11表)

S B01はⅢ層上面より方形の炭化物集中部を確認した。Ⅲ R16・R20区に位置し、形状・規模は5.50×4.75mのほぼ方形で、長軸は北西方向で、竈が北東コーナーに確認されたため住居とした。

覆土は炭化材交じりの黒土である。覆土の深さは10cm前後と浅い。住居の中央に向かって丸太状の炭化材が倒れた状態で出土している。

竈の北東コーナーとその周辺には焼土が広がっている。竈は石組み構造であったものと思われ、1.8×1.2mの範囲に人頭大の礫が破壊された状態で出土している。焚き口は西方向と思われる。竈の底面には焼土があり、その上に灰層がみられ、その上面に焼土がかぶっている様相から焼失前に破壊されている竈と思われる。竈内には遺物はほとんどなく、竈周辺の遺物としては土師器(図版59)杯(2)、椀(9)、小型甕(11)、甕(12)がある。

柱穴はP02～P06の4本である。径15cmで深さ30cm前後の小さな柱穴である。

付属施設として径110cm、深さ40cmのP01が検出された。柱穴より径が大きく断面バケツ型であり、覆土は炭化物含有の暗褐色土で、遺物の含有は認められなかった。貯蔵穴であろうか。

遺構名	遺構番号	遺構・区分	規模(m)	深さ(cm)	カマド位置	周溝有無	残存率	ピット数	土坑数	出土遺物	備考
SB01		1 SB01	5.53×4.72	12	北東	有	100	6	0	炭化材	
SB01		1 P1	1.24×1.12	38							
SB01		1 P2	0.24×0.22	36							
SB01		1 P3	0.26×0.24	36							
SB01		1 P4	0.28×0.26	36							
SB01		1 P5	0.46×0.38	28							
SB01		1 P6	0.32×0.26	40							

第11表 星光山荘B遺跡 平安時代住居址属性表

2 遺物

土師器 (図版59、第12表)

平安時代の遺物は、S B01内出土のものである。出土遺物は、土師器杯(1～4)、内黒杯(5～8)、碗(9・10)、小型甕(11)である。杯は口径11cm前後と11.8～12.4cm前後で2法量、内黒杯は口径11～11.5cm前後・12cm前後・14cm前後の3法量。7と8の内黒杯には内面暗文が放射状にみられる。小型甕(11)はロクロ整形で、胴下半部ケズリ整形されている。12はロクロ甕で、底部が砲弾形をしており、胴下半部にはタタキが施されている。いわゆる「北信甕」である。

S B01は浅い堅穴住居址であり、炭化材の状況から焼失住居であり、甕は焼失前に破壊されている様相から、破壊後焼失したものとと思われる。内黒の杯など遺物から平安時代中葉の住居と思われる。

図版番号	図No	遺構・区分	実測番号	種別	規格	スケール	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	暗文	色(素)	色(内)	胎土	接合番号(SB01遺物番号)	備考
図版59	1	SB01	5005	土師器 杯	1/4	12	4.4	3			橙	橙	2	2	
図版59	2	SB01	5002	土師器 杯	1/4	12.4	4.6	3.4			橙	にぶい橙	2	56	
図版59	3	SB01	5006	土師器 杯	1/4	11.8	4.6	3.7			橙	にぶい貴橙	2	6	
図版59	4	SB01	5007	土師器 杯	1/4	11.2	4.4	3.7			にぶい橙	にぶい橙	2	42	
図版59	5	SB01	5001	土師器 内黒杯	1/4	12.2	4.6	4			橙	黒濁	1	1	
図版59	6	SB01	5009	土師器 内黒杯	1/4	11.4					橙	黒濁	1	8	
図版59	7	SB01	5008	土師器 内黒杯	1/4	11				有り	黒濁	黒濁	2	20	
図版59	8	SB01	5010	土師器 内黒杯	1/4	14.2				有り	にぶい貴橙	黒濁	2	3	
図版59	9	SB01	5003	土師器 碗	1/4	12.6					明赤濁	赤濁	1	74	
図版59	9	SB01	5003	土師器 碗	1/4	12.6					明赤濁	赤濁	1	79	
図版59	9	SB01	5003	土師器 碗	1/4	12.6					明赤濁	赤濁	1	4	
図版59	10	SB01	5004	土師器 碗	1/4						橙	明赤濁	1	76	
図版59	11	SB01	5011	土師器 小型甕	1/4	12	9.6	12			黒灰	黒灰	10	10.16.32.35.36. 37.27.39.40.61. 83.86.89.91.92. 93.96.97.	遺物多数
図版59	12	SB01	5012	土師器 甕	1/4	20.2					橙	橙	11	9.11.14.64.65.8 5.88.94.	遺物多数

第12表 星光山荘B遺跡 平安時代遺物属性表

第4節 自然化学分析

1 隆起線文土器の放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

(1) 放射性炭素年代測定について

星光山荘B遺跡から出土した土器に付着していた有機物試料3点の放射性炭素年代測定を地球科学研究所に依頼した。

試料は、酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定し、年代値を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用し、同位体補正をして年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。試料の ^{14}C 計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の ^{14}C 計数率の比 $^{14}\text{C}_{(\text{Sample})}/^{14}\text{C}_{(\text{Modern})} \geq 1$ の時は、Modernと表示し、 $^{14}\text{C}_{(\text{Sample})}/^{14}\text{C}_{(\text{Modern})}$ の $\%$ 値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代値(yr BP)に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動および半減期の違い(^{14}C の半減期5,730 \pm 30年)を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C 年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1(Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL9: Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40: 1041-1083)を使用した。なお、交点年代値は ^{14}C 年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、1 σ 年代幅は ^{14}C 年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で1 σ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を***またはModernと表示する。また、AD1,955*はModernを意味する。

(2) 放射性炭素年代測定結果

測定 No.	試料	^{14}C 年代値	補正暦年代値
Beta-133847	有機物 MSK-B No. 1	12,340 \pm 50 yrBP (BC 10,390年)	交点年代値 BC 12,360年 1 σ 年代幅 BC 13,365 to 12,685 BC 12,425 to 12,195
Beta-133848	有機物 MSK-B No. 2	12,000 \pm 40 yrBP (BC 10,050年)	交点年代値 BC 12,115年 1 σ 年代幅 BC 12,150 to 12,075 BC 12,010 to 11,885
Beta-133849	有機物 MSK-B No. 3	12,160 \pm 40 yrBP (BC 10,210年)	交点年代値 BC 12,170年 1 σ 年代幅 BC 13,215 to 12,800 BC 12,355 to 12,140

第13表 星光山荘B遺跡 放射性炭素年代測定結果

引用文献

Radiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1, Copyright 1999 Quaternary Isotope Lab University of Washington. *To be used in conjunction with: Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993). Radiocarbon, 35, P.215-230.

2 古地磁気学的手法による炉跡推定と礫群の残留磁化測定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

近年、こうした旧石器時代の赤化土壌に対して、古地磁気学的手法を用いて、炉跡の推定を試みる例が増えてきている(真鍋, 1989; 会田, 1988など)。また、こうした古地磁気学的手法に関する基礎的な研究も行われている(森永ら, 1989)。

ここでは、炉跡推定を目的として、ローム層の礫群周辺土及び礫の残留磁化を測定した。

(2) 炉跡推定及び礫群の残留磁化測定

a. 試料およびその採取

試料を採取した遺跡は、星光山荘B遺跡2地点である。

各地点において2.2cm角のポリカーボネイト性のキューブを用いて準定方位で採取した。礫試料は、エポキシ系の接着剤(5分硬化型)を用いて平面を作り、硬化後この平面の走向と最大傾斜角を考古地磁気用クリノメーターで測定した。これらは、室内において、岩石カッターを用いて、直径3.5cmの立方体試料を作成した。

b. 残留磁化測定およびその結果

すべての試料は、リング・コア型スピナー磁力計(SMM-85:(株)夏原技研製)を用いて、自然残留磁化(NRM)を測定した。その結果は、磁化方向とともに、磁化強度を矢印の大きさとして示す(図; 矢印の大きさは相対的に示す)。

これらの試料のうち、任意の試料を選び、交流消磁装置(DEM-8601:(株)夏原技研製)を用いて段階的に消磁し、その都度残留磁化を測定した。

c. 考察

炉跡推定について、森永ら(1989)は、焚火実験における結果から、次の判定基準を設定している。すなわち、1). 自然残留磁化強度が大きい土壌(基準1)、2). 自然残留磁化強度の安定性の高い土壌:これは、交流消磁のある交流磁場強度で実行した時、強度の減衰が少ないほど安定性のより高い土壌と考える(基準2)、3). 自然残留磁化方向の安定性の高い土壌:これは、交流消磁を実行した時に、その変化が少なく、また段階的にそれを実行した場合、より高い交流磁場レベルまでである方向値を保つことを言う(基準3)、である。

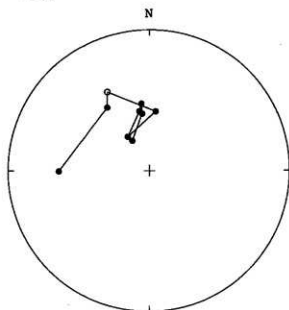
なお、森永ら(1991)は、お仲間林遺跡において、1). NRM強度が大きい、2). 磁氣的に安定である、とする2点の判定基準を同時に満たしている場所を受熱歴のある場所(炉跡)と考え、炉跡推定を行っている。2)の磁氣的に安定であるとする判断は、25mT(250 Oe)の交流消磁における残留磁化強度がNRMのその約60%以上残っているとしている。

炉跡の推定について(第10図、第11図)

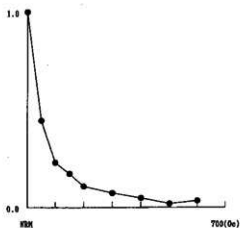
第10図および第11図は、2試料の段階交流消磁を行った結果である。このうち、[B. 残留磁化の相対強度]を見ると、磁化の安定性が低い(保持力が小さい)ことが理解され、少なくともこれらの試料は焼けていない可能性を示している。第12図および第13図は、100 Oe交流消磁後の磁化方向を図化したものである。概ね、現在の磁北の方向を向いている試料が多いようである。

炉跡推定について森永他(1989)は、焼き火実験における結果から、次の判定基準を設定している。

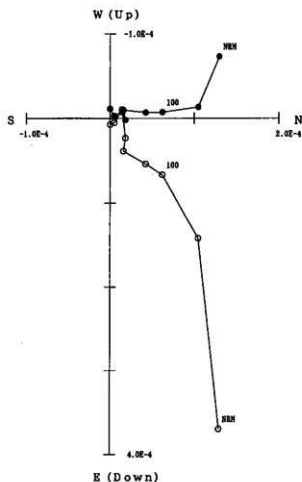
- 1). 自然残留磁化強度が多い土壌(基準1)、
 - 2). 自然残留磁化強度の安定性の高い土壌:これは、交流磁場強度で実行した時、強度の減衰が少ないほど安定性の高い土壌:これは、交流消磁レベルまである方向値を保つことを言う(基準2)、
 - 3). 自然残留磁化方向の安定性の高い土壌:これは、交流消磁を実行した時その変化が少なく、また段階的にそれを実行した場合、より高い交流磁場レベルまである方向値を保つことを言う(基準3)、である。
- 1). NRM強度が大きい:測定域の自然残留磁化(NRM)強度の最大値の約50%以上の磁化強度を持つ試料



●: 下向き ○: 上向き
 [a. シュミット・ネット投影図]

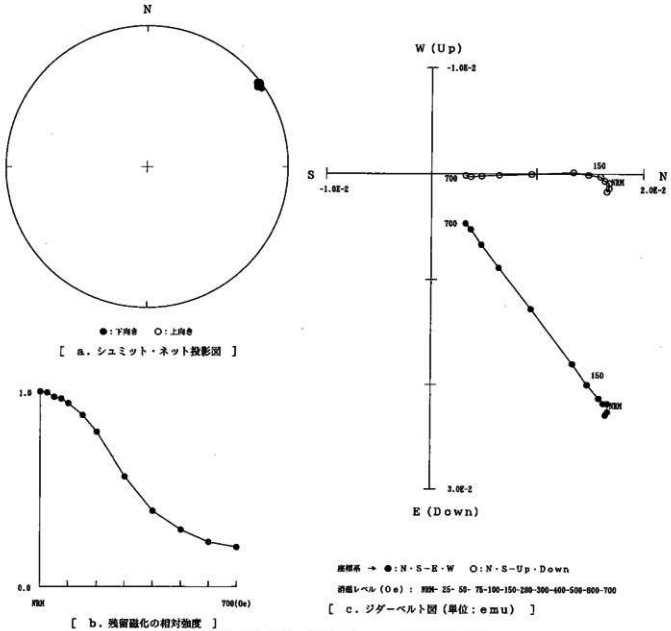


[b. 残留磁化の相対強度]



座標系 → ●: N・S・E・W ○: N・S・Up・Down
 消磁レベル(Oe): 100-150-200-300-400-500-600
 [c. ジッターベルト図(単位: emu)]

第10図 星光山荘B遺跡 隣周辺土8の段階交流消磁結果



第11図 星光山荘B遺跡 隣馬辺土R-1の段階交流消磁結果

2). 磁氣的に安定である: 250 Oeで交流消磁を行った際の強度が自然残留磁化強度の60%以上残っている試料

以上の判定基準を同時に満たしている場所を受熱歴のある場所(炉跡)と考え、炉跡推定を行っている。ここでは、森永ほか(1991)に従い、2)の基準について100 Oeの交流消磁を行った際の強度とした。測定結果、上述の炉跡推定の2基準を同時に満たす試料は、いずれの地点の試料からは見つからなかった。すなわち、受熱の痕跡は残念ながら認められない。

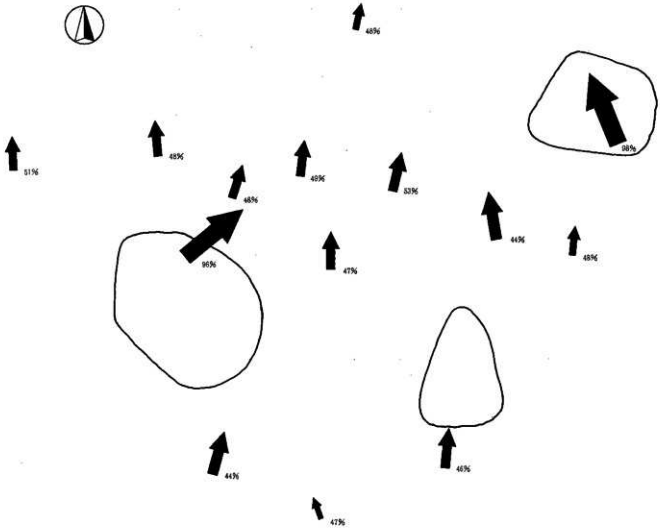
[星光山荘B遺跡の残留磁化測定について]

岩石の重量(安山岩系)、M1(No.5): 2254.9g、M2(No.6): 2129.4g、M3(No.8): 2477.0g、M4(No.9) 1122.5g

周辺の土の残留磁化測定では、概ね現北向きに揃っている。このうち交流消磁を行ったA9試料は、残留磁化の相対強度が高く、75 OeでNRMの約66.85%、100 OeでNRMの55.8%残っている。ま



第12図 星光山荘B遺跡 SH01の残留磁化測定(75 Oe交流消磁時の磁化)
(白抜き矢印は伏角上向き、黒矢印は伏角下向きを示す)



第13図 星光山荘B遺跡 SQ05の残留磁化測定 (75 Oe交流消磁時の磁化)

た、偏角および伏角の変化も2成分が認められる。森永ほか(1991)の条件を満たしているとは言えないが、この試料は受熱の可能性がある。岩石の段階交流消磁結果では、No.8以外において伏角(白丸)および偏角(黒丸)ともカーブを描いているため、2成分からなることが分かる。これは、受熱を2度受けた可能性を示すものと考えられる。ただし、いずれの方向も一致していないため受熱後動いた可能性が高い。

引用文献

- 真鍋健一(1989): 馬場壇A遺跡第20層上面の残留磁気測定。「馬場壇A遺跡I」、東北歴史資料館・石器文化談話会、P151～153
- 森永進男・井口博夫・山下秀樹・久保弘幸・藤田 淳・安川克己(1989): 古地磁気学的手法による先土器遺跡の炉跡検出法の開発とその有効性。第四紀研究、28(3)、P171-183。
- 森永進男・井口博夫・森 美果・島津絹子・野木義史・足立泰久・山下秀樹・糸田千鶴・安川克己(1991): 古地磁気学的手法による炉跡の推定。「お仲間林遺跡」、慶応大学文学部民族考古学研究室小報、P234-243。
- 野尻湖古地磁気グループ(1990): 立ヶ鼻発掘地および池尻川低地周辺に分布する野尻湖層の磁化方位-野尻湖発掘地を中心とした第四系の岩石磁気(その3)-、野尻湖の発掘5、地研研報37号、p38-48。

第5節 まとめ

本遺跡は、隆起線文土器と断面カマボコ状のいわゆる神子柴型局部磨製石斧と有茎尖頭器が共存した遺跡である。

縄文時代草創期の遺物分布

石器の特徴として、1、フレーク類以外で多い器種は抉り入りの削器類である。2、石核類が少なく、斧形石器の再加工品や尖頭器類の調整剥片の多い。3、砥石面に残る骨角器などの研磨痕などがあげられる。これらの石器の特徴から狩猟具等の調整や再加工場としての遺跡の機能が考えられる。

隆起線文土器の年代

隆起線文土器から採取した炭化物から放射性炭素による測定で、 $12,000 \pm 40$ 年から $12,340 \pm 50$ 年BPという年代が示された。隆起線文遺跡である神奈川県花見山遺跡では、熱ルミネッセンス法により年代測定が行われ、 $10,280 \pm 550$ 年から $11,360 \pm 650$ 年BPの年代が与えられている。

隆起線文土器の出土層位はⅢ層中位～下位の明褐色と黒色土が混合するモヤ層中である。Ⅲ層モヤ層は野尻湖調査団のモヤ層に対比される。モヤ層の年代は約1.4万年～1万年とされる。

したがって、本遺跡の隆起線文土器の年代は縄文草創期約12,000年前後と思われる。

隆起線文土器の文様

本遺跡の隆起線文土器は細く、いわゆる「微隆起線文土器」に相当する。長野県石小屋洞穴遺跡の胴上部まで巡る隆起線文の土器、神奈川県花見山遺跡の第1群第3類土器等に類似する。これらの遺跡の文様は、胴上半部まで横線の隆起線文が数条巡り、下半部は無文である。同様な文様と器形をしていたものは、本遺跡では第1群の土器と思われる。

また、上下の文様構成の変わる第2群に類似する文様構成を持つ遺跡は、神奈川県上野遺跡第1地点第1文化層の土器である。上野遺跡の隆起線文は、数条の横線隆起線文の下に格子目の隆起線文が施文されている。しかし、本遺跡においては「V」字状や「Y」字状の文様はあるが格子目の文様はない。

本遺跡第3群(横走する文様の中に縦走る(斜め)文様で変化をつけた隆起線文)に類似する土器は、

山形県口向洞窟や長野県荷取洞窟などで出土している。しかし、これらの遺跡の土器も文様全体が分かる資料がないため、全体の文様構成は不明である。予想としては胴部上半まで横走する中に縦走する文様が2~4ヶ所巡り、下半部は無文と思われる。本遺跡の第1群と同様な文様構成と思われる。

以上のように隆起線文土器第1群は花見山第3式段階の土器と石小屋洞穴遺跡併行期の土器と思われる。また第3群の土器も文様構成においては第1群と同様であり、同時期と思われる。第1群と第3群の土器は胴下半部が無文で、胴上半部に文様が施文され、1種類の明確な文様帯（文様の帯）として施文されている。第2群の胴部文様が上下に分かれるものは、文様帯を明確に区別して2種の異なる文様帯を器面に施文するという意識が明確になったものと思われる。しかし、第1群の土器や第3群の土器と第2群の土器の前後関係まで明確にすることはできなかった。第1群から第4群まで垂直分布の上下幅も少なく同一層から出土している。故に、ほぼ同時期の土器と思われる。

第6類の土器は同一個体数も少なく、他地域からの搬入品と思われる。

草創期の石器では隆起線文に伴って有茎尖頭器・柳葉形槍先形尖頭器・局部磨製の斧形石器が出土している。

- 1 有茎尖頭器が小型である。未製品欠損品が多い。有茎部の作り出しの明確なものが多い。
- 2 新潟県小瀬ヶ沢遺跡（小熊他 1993）柳葉形の槍先形尖頭器が少数出土している。
- 3 有茎部を持つ尖頭器や半月形尖頭器などの未製品が出土している。
- 4 舟底形石核に類似する舟底形石器が出土している。
- 5 挟り入りの削器が出土している。
- 6 典型的な縦長の搔器（エンドスクレイパー）は少ない。
- 7 斧形石器は局部磨製のものが多いが、いわゆる神子柴遺跡の石斧のように片刃の甲高のものは少ない。

以上のように縄文時代草創期の特徴を示す石器群であるが、隆起線文土器に伴出しており、隆起線文土器後半期と同時期の石器群であると思われる。

その他の縄文時代土器は早期から前期前葉までと晩期の土器が出土している。晩期の土器はS Q 0 4 や S Q 0 5 から集中して2個体出土しているが、早期条痕文土器や前期前葉の土器は数個体の破片が出土したのみである。

陥穴と思われる土坑が8基検出されている。星光山荘A遺跡で確認された土坑1b類と遺跡での出土状況など類似している。また、土坑周辺から縄文時代早期後半から前期前半の土器の出土もありほぼ同時期の土坑と思われる。

縄文時代早期後半から前期前半まで星光山荘A遺跡のように本遺跡も小規模（短期滞在型遺跡）と思われる。

平安時代の住居址が1棟のみ検出されているが、廃棄後の焼失家屋であった。平安時代中葉の山間地小規模集落の1つと思われる。

第4章 貫ノ木遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

貫ノ木遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字野尻字貫ノ木1,461他に所在する。本遺跡は野尻湖の西から南西方向に次第に標高を増していく仲町丘陵の最南端に位置する。野尻湖までの距離は約2kmほどである。

遺跡内は北流して日本海に注ぐ関川水系と一度南流して千曲川に注ぐ烏居川の分水嶺にあたり、標高700mから730mと比高差を持ち、小丘陵と低地が複雑に入り込んだ地形が存在する。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第14図)

調査範囲は1998年に報告済みのバイパス建設予定地(1998 長野県埋文センター)を除く、遺跡範囲の大大地区Ⅲ区、Ⅵ区、Ⅹ区、Ⅺ区である。大大地区Ⅰ区から表土剥ぎ段階で平安時代の住居が発見された。従来貫ノ木遺跡範囲を外れた北西側にあたり、遺跡範囲から逸脱するが、本書では貫ノ木遺跡内として報告する。

Ⅲ区においては、平成7年度、平成8年度にそれぞれ試掘を行ったが、大規模な攪乱や低湿地にあたり、遺物はほとんど検出できず、トレンチによる試掘のみ実施した。本区は遺跡の中でも低湿地にあたり、遺物が稀薄な地域と考えられる。

Ⅹ区は傾斜がきつくと遺物が稀薄であった。縄文時代の遺物の中心は東側に分布する。本地区が遺跡範囲の境界線と思われる。

Ⅵ区は調査対象区の主体となり、3ヶ年にわたり、断続的に調査が行われた。平成6年度は、高速道用地と報告済みのバイパス用地の調査を並行して行った。平成7年度は3年間のなかで最も調査面積があった。平成7年度調査部分には多くの縄文土器の包含層や遺構が検出された。

通常は重機によりⅠ層・Ⅱ層を除去しⅢ層より人力で精査を行ったが、一部Ⅱ層の堆積の厚かった部分に関しては、縄文土器包含層が検出されたため、その時点から手掘りによる調査が行われた。また、人力で掘り下げを行った部分でも遺物の包含層が検出されなくなったところで、重機を併用し、掘り下げた。再度遺物が出土しないことを確認するまで、繰り返した。

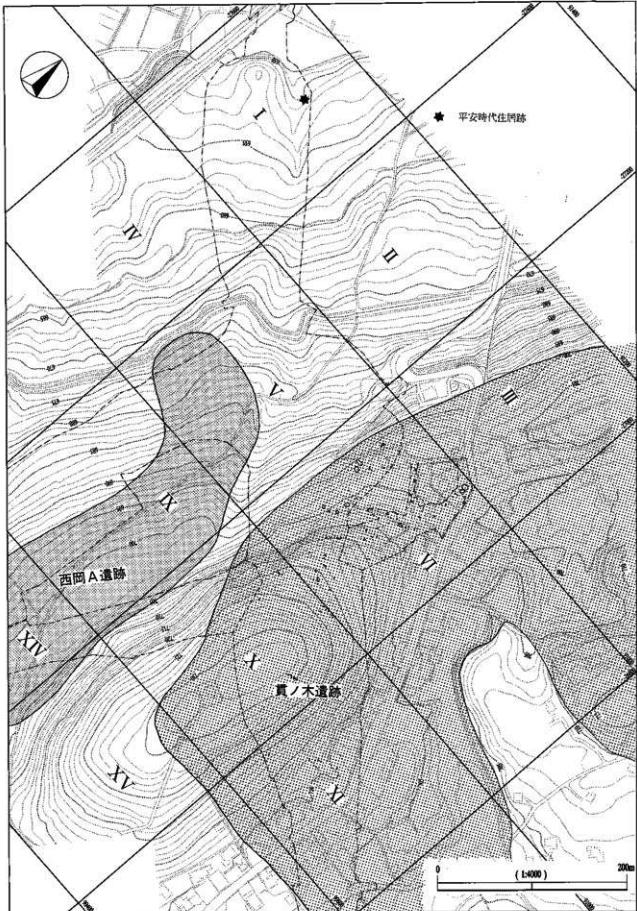
平成5年度調査 調査面積 15,000m²

平成6年度調査 調査面積 29,900m²

平成7年度調査 調査面積 11,500m²

遺物は(株)写真測図のコピーックによって取り上げた。

調査は野尻バイパス区と高速道部分に渡って並行して行われた。しかし、遺物や遺構は貫ノ木遺跡の範囲内にあり、今回の報告書においては、報告済みのバイパス区も含め貫ノ木遺跡として報告することとする。



第14図 貫ノ木遺跡 全体図

第4章 貫ノ木遺跡

(2) 調査経過

(日誌抄)

平成5年度

6月21日	2区試掘 作業開始	10月4日	長野地方事務所長視察 A区重機による表土剥ぎ
25日	2区表土剥ぎ	8日	新潟県埋蔵文化財調査事業団小池義人氏他7名見学
7月7日	IV層掘り下げ		学
29日	山頂部表土剥ぎ開始	9日	現地説明会
30日	森島念先生来訪	13日	信濃町博物館中村氏見学
8月2日	山頂部で遺構・遺物検出 裾部でS Q01検出	14日	中村氏・近藤氏土層観察
3日	文化庁岡村道雄氏来訪	19日	S Q03 完掘
5日	山頂部-B区 裾部-A区とする	21日	A-1区完掘 磨製石斧出土
19日	B区-III層面で縄文前期敷点出土 A区-III層下で表裏縄文土器出土	22日	藤岡市教育委員会軽部氏・中島氏見学
26日	S K03～K06掘り下げ	29日	神奈川県埋文センター白石氏他10名見学
9月16日	安藤明大教授指導	11月1日	御代田町教育委員会堤氏他8名見学
24日	A区でS K06検出	4日	野尻湖博物館近藤氏来訪
		19日	作業終了

平成6年度

2月1日	第2原因作成	12日	上ノ原遺跡試掘
28日	遺物確認	13日	上ノ原遺跡試掘、貫ノ木遺跡3区空掘
4月21日	貫ノ木遺跡、西岡遺跡発掘開始式	15日	東裏遺跡試掘
7月5日	丸山係長視察	16日	東裏遺跡試掘、砥石出土

平成7年度

4月5日	調査開始、文化課丸山係長、原指導主事視察	9月8日	神奈川埋文センター鈴木次郎氏見学
21日	人骨出土(2区)	14日	四県会議見学
5月8日	長野県文化課木村課長、丸山係長、井出、市村視察	19日	金氏宅跡終了
29日	安藤明大教授指導	10月3日	町道拡幅部調査開始
6月9日	日向林B遺跡より応援開始	11月8日	東京都埋文センター伊藤健氏見学
12日	望月先生、池谷氏指導	9日	降雪のため中止
22日	応援増強	27日	降雪のため中止
7月29日	上ノ原遺跡へ作業応援開始	30日	調査終了
8月12日	上ノ原遺跡へ作業応援終了		

(3) 調査結果の概要

貫ノ木遺跡は1998年に野尻バイパス分を報告済みである。本報告書は野尻バイパス分を含め1遺跡分として、遺構数や遺物数を掲載する。

縄文時代の遺構は集石16基(内1基報告済み)、土坑84基(内26基報告済み)、集石土坑1基(報告済み)、遺物集中部12基(報告済み)が発見された。また遺物は、縄文時代前期土器片約235点、早期条痕文土器片約15点、無文土器片305点、沈線文系土器片約221点、押型文系土器片約74点、燃糸文土器片約28点、表裏縄文系土器片684点、隆起線文1点が出土している。石器は局部磨製石斧1点、有茎尖頭器1点、石鏃

35点、打製石斧2点、石錐1点、三角錐形石器1点、石錘3点、剥片類3点、碎片類93点、磨石12点、特殊磨石1点、凹石31点、砥石1点等出土している。

平安時代の遺構は住居址1基、遺物は住居址の竈付近から土師器の杯甕の破片が出土した。

近世の遺構は土坑墓1基、土坑内から人骨一体が出土している。

(4) 基本土層 (第4図、第2表)

I層 黒色土 (Hue10YR1.7/1) 表土層

II層 黒色土(Hue10YR2/1) 黒色砂質土 (柏原黒色火山灰層) 締まり良 堅い

III層 暗褐色土(Hue10YR3/3) II～IV層の漸移層 (上部野尻ローム層IIモヤ層) 上部甕 下部やや粗スコリア粒

IV層 黄褐色土 (Hue10YR6/5) IV・V・VI層混在 赤スコ粒混入 (上部野尻ロームII)

Va層 褐色土 (Hue10YR4/6) やや甕 (上部野尻ロームII) A T層 (始良・丹沢火山灰層25,000年B.P.) (大々地区VI区で確認された)

Vb層 暗褐色土(Hue10YR7/6) (上部野尻ローム層I黒色帯)

Vc層 褐色土 (Hue10YR6/6) (上部野尻ローム層I黒色帯)

VI層 黄褐色土 (Hue7.5YR5/6) (上部野尻ローム層I) 黄褐色ハードローム層 赤・黒・白色スコリア含有

VII層 浅黄褐色土 (Hue10YR8/4) 赤スコリア質火山礫層(赤スコ)

貫ノ木遺跡の北東側大々地区I区II層上半部から平安時代の住居址と遺物が出土。下半部で縄文時代早期から前期(羽状縄文)にかけての遺構・遺物が出土した。III層上部では集石16基が検出された。III層からは縄文時代早期の貝殻腹縁文・押型文等や表裏縄文・隆起線文の土器が出土している。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構 (第15図～第17図)

(1) 土坑 (図版60～図版70、第14表) (註)

縄文時代以降の土坑は84基確認された。本遺跡の土坑は10分類された。(括弧内土坑分類は第16章第3節の分類番号に従った。)

第1類 (土坑分類第2類) (図版60・図版69)

平面形態は楕円もしくは円形で、断面浅い箱型状、深さ0.2～0.5mの土坑である。本遺跡ではSK12・SK16～SK18・SK20・SK22・SK23・SK48・SK68 (図版60) SK65・SK85 (図版69) の11土坑がこれに類する。

第2類 (土坑分類第3類) (図版61・図版62・図版65・図版70)

平面形態円形で、断面箱型、深さ0.5～1mの土坑である。本遺跡ではSK34 (図版61)、SK42・SK43・SK45 (図版62) SK44 (図版65)、SK81 (図版70) がこの類に相当する。SK81は平面形が不整形である。SK45は土坑の上面に集石がある。SK42～SK44は2～5mごと14m間に4基が緩斜面に並列する。

(註) 図版67～71は前報告書の再録(長野県埋文センター 1998)

第3類 (土坑分類第5類) (図版63・図版68~70)

平面形態円形で径約1.1m前後、深さ1.5m以上あり深く、断面形態で4種類に分類される。a類(5a類)は断面U字形、b類(5b類)は断面V字形、c類(5c類)は断面漏斗状、d類(5d類)は底面に逆茂木痕のある形態である。

a類(5a類)はSK38~SK40(図版63)、SK24~SK26・SK78(図版68)・SK33・SK41・SK83・SK79(図版69)、SK82・SK87(図版70)・SK90(図版67)がこれに相当する。

b類(5b類)はSK37(図版63)がこれに相当する。

c類(5c類)はSK36(図版63)、SK88(図版70)、SK92(図版68)がこれに相当する。

d類(5d類)はSK77(図版70)がこれに相当する。

第3類(土坑分類第5類)はX区の小丘陵の西側から北西側にかけて、裾付近の急斜面に位置する。北西側の少し緩い斜面の同標高地点に2~3mごとに、5基が約16m間に並列し、その列からL字状に屈曲して4~5mおきに3基が10m列をなしている(第1ブロック)。また約62m南西側の急斜面のほぼ同じ標高地点に約2~3mごとに6基が約16mの間に並列する(第2ブロック)。そこから60m南側斜面に約1~2mごとに4基が約7m間に並列する(第3ブロック)。

SK37は土坑内堆積土壌から10,260±140年BP、SK38の土坑内堆積土壌から10,150±120年BPという放射性炭素年代測定結果が示された(貫ノ木・西岡A遺跡旧石器編に詳細は記載)。

第4類 (土坑分類第7類) (図版64・図版65)

平面形態楕円形、深さが深く1.5m以上あり、底面の幅が非常に細くなっている。本遺跡のこの類の土坑は断面形態漏斗形である。SK57~SK62(図版64)・SK64(図版65)である。

本類はX区の小丘陵頂上部から北東側斜面にかけて約1~2mごとに7基が14m間に並列する(第5ブロック)。

第5類 (土坑分類第1類) (図版65・図版66・図版67)

平面形態は長方形あるいは楕円形で、断面箱型、底面に逆茂木痕があり、深さ1.0m前後の土坑である。本遺跡ではSK71(図版66)、SK13・SK70・SK73・SK95(図版65)、SK67・SK76・SK89・SK90・SK91・SK93・SK94(図版67)の12土坑がこの類に相当する。

第6類 (土坑分類第8類) (図版66)

平面形態長方形で、断面も箱型で底面が平らな、深さ約0.5mほどの浅い土坑である。本遺跡ではSK51(図版66)がそれに相当する。

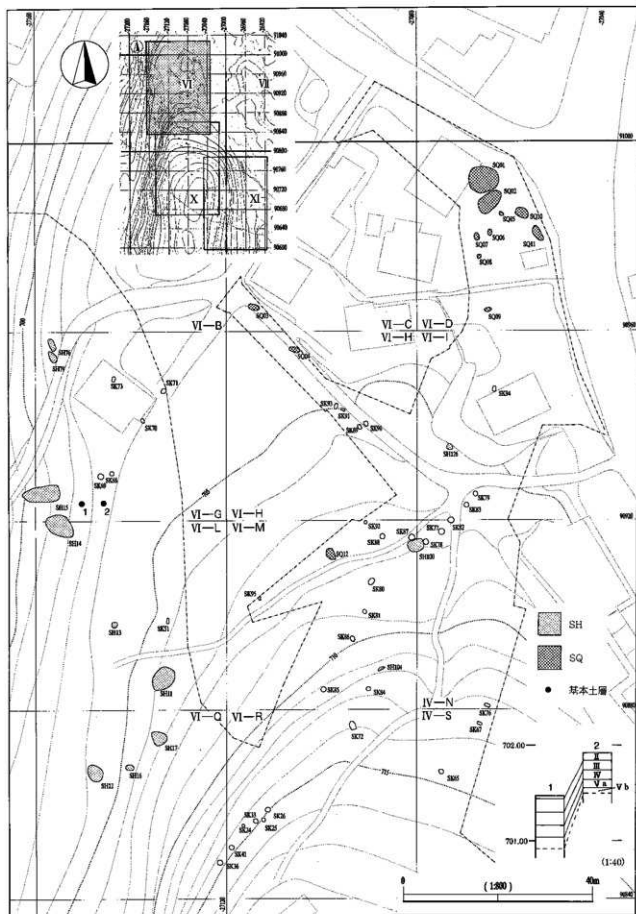
第7類 (土坑分類第9類) (図版66)

平面長軸1m以下、短軸0.5m以下の小型長方形の四隅が明確な、底面に逆茂木痕を持つ、断面箱型の上坑である。覆土の大半が単層(黒色土が主体のものが多い)である。(土坑分類第1類)に類似する。本遺跡ではSK27~SK32(図版66)がこの類に相当する。

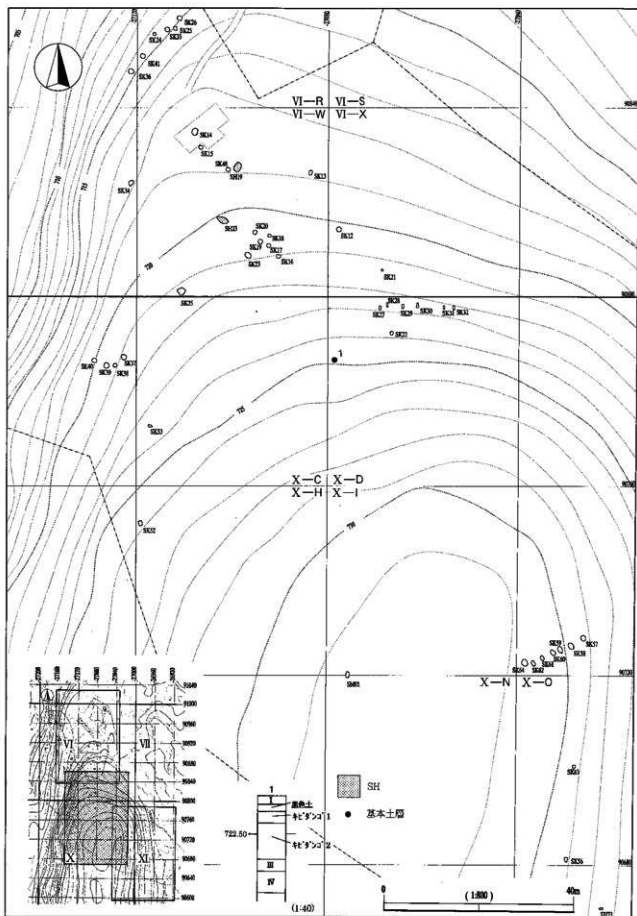
本類はX区小丘陵北側斜面に、長軸を北にし、東西方向に16m間に6基がほぼ一直線に並列する(第4ブロック)。覆土は黒色土が主体であり、縄文時代以降の可能性もある。用途は不明である。

第8類 (土坑分類第12類) (図版61・図版62)

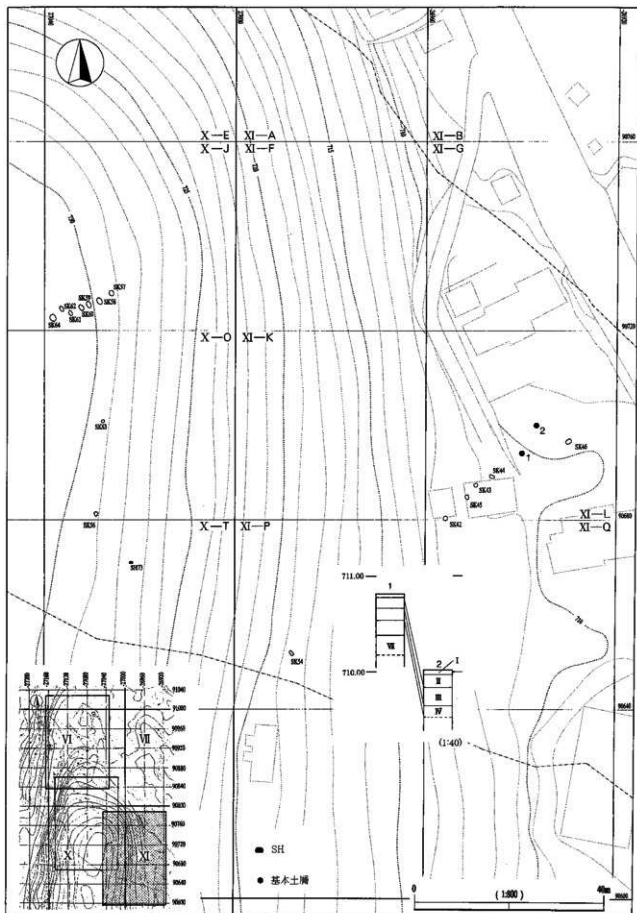
平面形態不整形、断面形態は浅い楕円形か箱型、底面に小ピットを持つ。本遺跡ではSK14(図版61)・SK69(図版62)がこれに相当する。



第15図 貫ノ木遺跡 遺構配置図 1



第16図 貫ノ木遺跡 遺構配置図 2



第17図 貫ノ木遺跡遺構配置図 3

第4章 貫 / 木遺跡

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方 向	分類	前報告書分類	前報告書掲載	備 考
SM	1	0.67×不明	29	N-10°	-E			人骨出土
SK	12	1.06×1.04	23	N-38°	-W	2a		
SK	13	1.05×0.69	98~106	N-11°	-E	1		逆茂木痕有り
SK	14	1.54×1.19	37	N-2°	-E	12		中央に小ピット有り
SK	15	0.91×0.80	24	N-83°	-E	14		
SK	16	0.99×0.70	10	N-72°	-E	2		
SK	17	0.89×0.82	8	N-70°	-W	2		
SK	18	0.78×0.62	23	N-85°	-W	2		
SK	19	0.95×0.98	12	N-34°	-E	2		
SK	20	0.95×0.86	16	N-26°	-W	2		
SK	21	0.50×0.43	11	N-65°	-W	14		
SK	22	0.80×0.72	51	N-21°	-W	2		
SK	23	1.36×1.12	28	N-51°	-W	2		
SK	24	1.10×0.90	140~160	N-25°	-W	5a		
SK	25	0.90×0.75	155~170	N-38°	-W	5a		
SK	26	1.10×1.04	150~180	N-50°	-W	5a		
SK	27	0.85×0.44	50~66	N-7°	-E	9		
SK	28	0.92×0.34	70~86	N-2°	-W	9		
SK	29	1.02×0.41	53~76	N-3°	-E	9		
SK	30	1.00×0.46	54~74	N-0°	-	9		
SK	31	0.72×0.28	17~30	N-4°	-W	9		
SK	32	0.86×0.41	15~31	N-7°	-W	9		
SK	33	1.05×0.90	145~165	N-35°	-W	5a		
SK	34	1.22×0.92	90	N-25°	-E	3		
SK	35	1.82×1.47	56	N-88°	-W	14		
SK	36	1.14×1.47	180	N-85°	-W	5c		
SK	37	1.14×1.12	182	N-49°	-W	5b		
SK	38	1.22×1.10	182	N-65°	-W	5a		
SK	39	0.82×0.84	171	N-78°	-W	5a		
SK	40	1.10×1.18	162	N-69°	-E	5a		
SK	41	1.06×0.94	150~165	N-38°	-E	5a		
SK	42	0.90×1.05	73	N-46°	-E	3		
SK	43	0.90×0.92	87	N-0°	-	3		
SK	44	1.11×0.68	34	N-63°	-W	8		
SK	45	1.00×0.75	70	N-18°	-W	3		
SK	46	1.26×0.87	不明	N-60°	-E	-		馬の埋葬址
SK	47	削除				2		
SK	48	0.96×0.85	18	N-86°	-W	-		
SK	49	削除				-		
SK	50	削除				-		
SK	51	1.18×0.54	34	N-5°	-E	8		
SK	52	1.10×0.80	38	N-27°	-W	14		
SK	53	0.94×0.52	20	N-81°	-W	14		
SK	54	1.04×0.58	36	N-37°	-W	1		逆茂木痕有り
SK	55	削除				-		
SK	56	0.96×0.79	32	N-2°	-W	14		
SK	57	1.14×1.00	154	N-43°	-W	7a		
SK	58	1.46×1.04	164	N-40°	-W	6b		
SK	59	1.46×0.96	176	N-30°	-W	7a		
SK	60	1.30×0.84	142	N-42°	-W	7a		
SK	61	1.10×0.72	172	N-28°	-W	7a		
SK	62	1.09×0.69	168	N-34°	-W	7a		
SK	63	1.44×1.26	78	N-28°	-E	14		
SK	64	1.50×1.17	166	N-20°	-W	6b		
SK	65	1.10×1.00	18	N-62°	-W	2	2	有
SK	66	削除				-		
SK	67	0.60×1.10	110~120	N-19°	-E	1	1	有 逆茂木痕有り
SK	68	0.90×0.92	28	N-8°	-W	2		
SK	69	1.26×1.14	22~30	N-69°	-W	12		中央に小ピット有り
SK	70	0.98×0.70	56	N-35°	-W	1		逆茂木痕有り
SK	71	不明	74~120	不明	-	-		
SK	72	1.87×1.28	60	N-17°	-W	14		
SK	73	1.14×0.72	86~135	N-15°	-E	1		逆茂木痕有り
SK	74	削除				-		
SK	75	削除				-		
SK	76	1.20×0.65	93~94	N-69°	-W	1	1	有 逆茂木痕有り
SK	77	1.25×1.34	148~166	N-23°	-W	5d	3	有 逆茂木痕あり
SK	78	1.15×1.22	150	N-60°	-E	6c	3	有
SK	79	1.10×0.93	172	N-22°	-W	5a	3	有
SK	80	1.50×1.10	25	N-40°	-E	14	2	有
SK	81	0.90×0.80	100	N-33°	-W	3	3	有
SK	82	1.30×1.20	171~172	N-89°	-E	5a	3	有

第14表 貫 / 木遺跡 土坑属性表 (1)

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方 向	分類	前報告書分類	前報告書掲載	備 考
SK	83	1.00×1.10	143~145	N-30°-E	5a	3	有	
SK	84	1.28×1.32	40	N-89°-W	10	2	有	
SK	85	0.88×1.12	16~24	N-9°-E	2	2	有	
SK	86	1.10×0.90	40~60	N-26°-W	14	2	有	
SK	87	1.47×1.30	151	N-14°-W	5a	3	有	
SK	88	1.12×1.08	160	N-8°-W	5c	3	有	
SK	89	0.69×0.95	60~80	N-120°-W	1	1	有	逆茂木痕有り
SK	90	0.78×1.05	42~80	N-120°-W	1	1	有	逆茂木痕有り
SK	91	0.38×0.86	38~72	N-150°-W	9	1	有	逆茂木痕有り
SK	92	0.72×0.80	116~124	N-89°-W	5c	3	有	
SK	93	0.70×1.25	77	N-90°-W	1	1	有	逆茂木痕有り
SK	94	1.16×0.72	56~96	N-7°-E	1	1	有	逆茂木痕有り
SK	95	不明×0.92	62~97	N-18°-W	1		有	逆茂木痕有り

第14表 貫ノ木遺跡 土坑属性表 (2)

第9類 (土坑分類第14類) (図版61・図版62・図版67)

平面形も断面形も不整形な浅い土坑をこの類とした。本遺跡ではSK15・SK52・SK53・K56・SK63 (図版61)、SK35・SK72 (図版62)、SK80・SK81 (図版67)・SK21・SK86が相当する。

SK63の覆土はⅤa層やⅣ層が混入した覆土であり、その上にⅢ層が堆積し、そのⅢ層中に斧形石器(石斧)が出土している。

第3類と第4類(土坑分類第5類も第7類)は1.5m以上の深さがあり、表面形態が類似する。これらは斜面に検出され、列をなして配置する(第3・第5ブロック)。リン酸分析からも墓穴ではないとの分析結果もあり、陥穴の可能性があるとと思われる。

覆土中の遺物としては、SK63の覆土上方から図版87-1の斧形石器が出土している。第4類(土坑分類第7類)は土器や石器等が出土していない。第3類(土坑分類第5類)には縄文時代の土器や旧石器時代の石器などが覆土中から発見されている。また、覆土から約10,000年前の放射性炭素測定値が示された。時期などを決定できる遺物の出土はなかったが、表裏縄文土器などに関連する土坑の可能性はある。第9類(土坑分類第14類)のSK35からも約9600年前の放射性炭素測定値が示され、不定形な土坑であるが、土坑内に表裏縄文土器が混入しており、表裏縄文土器の時期に不定形な土坑の第9類(土坑分類第14類)が存在していたと思われる。

(2) 集石 (図版71~74)

貫ノ木遺跡では縄文時代以降の集石は16基確認された。集石を構成している礫の内、赤化しているものは被熱した礫と判断した。

SH11 (図版73)

ⅣL19・24区、Ⅱ層で検出した。規模5.6m×3.7m深さ60cm。総点数169個、総重量167,102g。礫は拳大から人頭大で、北東に集中し、ほとんど赤化していた。南西側は散漫で赤化した礫が少ない。北西斜面のため、礫が南西側に分散したと思われる。集石から表裏縄文土器や無文土器、旧石器時代の石器などが出土した。

SH12 (図版72)

ⅣQ07区の急斜面に、Ⅱ層~Ⅲ層上端部で検出した。規模3.2m×3.0m深さ68cm。礫総点数46個、総重量40,951g。中央部に0.8m径の円形に赤化礫が集中、その周辺に赤化礫が散漫に分布する。表裏縄文や押型文の縄文土器が周辺から少量出土。

SH13 (図版71)

ⅦL12・L13区のなだらかな斜面上にある。Ⅱ層~Ⅲ層上端面で検出した。規模0.9m×0.8m深さ10cm。礫総点数12個、総重量11,410g、径0.8mの環状に赤化礫が集中する。伴出遺物は無し。

SH14 (図版73)

VI L01区緩やかな斜面上でⅡ層～Ⅲ層上面で検出した。規模1m×0.6m、礫総数47個、総重量9,710g。西側に赤化礫がやや密集するが、全体的に散漫な分布を示し、垂直分布も上下が激しい。伴出遺物無し。

SH15 (図版73)

VIG21区でSH14の北西隣にあたり、Ⅱ層最下部～Ⅲ層で検出した。規模は6.0m×0.3mで、広く散漫に分布する。やや東側に礫の偏りが見られ、東斜面であり、礫が移動し散漫な分布を示すとおもわれる。礫総数は126個、礫総重量は123,334g。礫は赤化したものとタールを付着したものがある。伴出遺物は剥片類であるが、斜面が急であり、斜面上段の攪乱した旧石器時代の石器類が伴出したものと思われる。

SH16 (図版71)

VIQ08区Ⅱ層～Ⅲ層直上で検出した。傾斜は東側が若干高く、緩い斜面である。SH12とSH17の間で検出された。規模は1.8m×0.6m深さ30cm。東西に長い集石である。そのほとんどが赤化している。やや西側に中心部が偏る。礫総数は22個、総重量は5,347gである。伴出遺物はなし。

SH17 (図版71)

VIQ04区自然流路の縁辺部にあたるⅡ層面から検出した。総点数29個、総重量20,961g。規模は3.2m×2.7m、深さ45cm。35cm大の赤化した大礫を中心に拳大の赤化礫などが散漫に分布。SH16やSH12の分布に類似する。

SH19 (図版72)

VIW08区Ⅲ層から検出。Ⅳ層面まで達していない。ほぼ赤化した礫である。規模2m×1.5m深さ15cm。ほぼ中央に密集して出土。礫総点数11個、総重量12,190g。縄文時代早期の貝殻腹線文や押型文・無文土器等と黒曜石製の剥片が伴出している。

SH23 (図版71)

VIW13・W18区の平坦面、Ⅲ層より検出。規模2.5m×1.2m深さ20cm。東側に集中の中心があり、他は散漫に分布する。礫総数は17個、総重量3,928g。1点表裏の凹石が中心部から出土。凹石を集石の礫に転用したと思われる。ほとんどの礫は赤化しており、8点にタールが付着していた。

SH73 (図版72)

XT08区Ⅲ層上面から検出。規模0.7m×0.25m深さ15cm。1列に礫が並び、総点数9個、総重量2,120g。Ⅲ層面まで攪乱されていたために集石の上面不明。傾斜部に位置する。土層の堆積が一様ではなく、時期が不明。礫が赤化している。炭化粒はⅢ層面から検出されなかったがⅣ層面からは検出している。

SH76 (図版72)

VIQ01区、Ⅲ層下部から検出。規模2.6m×1.2m深さ30cm。北側に散漫に分布し、南東側に6個の礫が集中。礫総点数20個、総重量7,150g。北西斜面のため、礫が北西側に移動したのと思われる。全点赤化している。周辺から20点の石器が出土しているが、下層の旧石器時代の石器と思われる。

SH79 (図版71)

IVG01区、Ⅲ層下部より検出。Ⅱ～Ⅲ層上部が攪乱されており、集石上面が欠落している可能性がある。規模0.5m×0.6m深さ20cm。中央部に礫が密集し、数点が周辺に点在する。総点数19個、総重量4,630g。礫の垂直分布はかなり上下している。礫のほとんどは赤化し、タール付着の礫も若干ある。周辺からⅢ層からⅣ層にかけて石器が26点出土しているが、下層の旧石器時代の石器と思われる。

SH100 (図版74) (註1)

VIM05・N01区、Ⅱ層上半部から検出。規模2.4m×2.8m深さ約50cm。総点数139個、総重量11,630g。礫は南中央部にほぼ1m内に密集それを中心に北側方向に礫が分散する。中央部付近の礫は深さ10cm以

内に積み重なるが、他の礫は北斜面上に移動している。礫のほとんどは赤化し、タールが付着している礫もある。周辺から石畿1点と無文土器が3点出土している。

SH104 (図版72)

VIM19・M20区、Ⅲ層から検出した。規模1.5m×0.7m深さ30cm。北西斜面で、東側にやや礫が密集するが傾斜に沿って移動している。総点数17個、総重量7,730g。礫は赤化しておりほとんどの礫にタールが付着している。周辺のⅢ層から無文土器や縄文土器、石器が出土している。

SH106 (図版74) (註2)

VIM14・M19区、平坦面のⅢ層上半部から検出した。規模3m×2mで密集部0.5m×0.5m。南側の集中部下に土坑が見られる。土坑(SK86)は1.1m×0.9m深さ約40~50cmで、土坑上面から下層面まで礫が出土。亜角礫の多いいわゆる集石土坑(SK86)である。総点数36個、総重量46,210gである。伴出遺物無し。

SH126 (図版72)

VI16区北向き緩斜面のⅢ層中から検出。規模1.1m×1.1m深さ10cm。総点数44個、総重量15,480g。特に伴出遺物無し。東西に並んで約0.5m径の密集した礫が2ヶ所みられる。垂直分布も上下の動きが少なく、密集している。それぞれ礫は赤化している。人頭大以上の礫が2~3個あり、他は拳大の礫である。当遺跡の集石は土坑を持つⅠ群(SH106)と土坑を持たないⅡ群(SH106以外)に大分類される。

さらにⅡ群を出土層別別すると5分類される。

第1類 Ⅱ層上半部から礫が出土した集石：SH100

第2類 Ⅱ層から礫が出土した集石：SH11~SH13・SH16・SH17

第3類 Ⅱ層が主でⅢ層上部からも礫が出土した集石：SH14・SH19・SH73・SH104

第4類 Ⅲ層から礫が出土した集石：SH15・SH23・SH126

第5類 Ⅲ層下部から礫が出土した集石：SH76・SH79

以上のことからほぼ本遺跡のⅠ・Ⅱ群の集石は出土層別から時期的に4つに分類される。

- 1期 Ⅱ群第5類が相当する。集石の底面がⅢ層下部のことから、Ⅳ層降灰後の縄文時代草創期の可能性がある。
- 2期 Ⅰ群とⅡ群第4類がこれに相当する。集石の礫がⅡ層になく、Ⅲ層から出土していることから、縄文時代草創期以降で柏原黒色火山灰層降灰以前までの時期の集石と思われる。
- 3期 第2類・第3類がこれに相当する。第2類・第3類の集石に伴出する遺物は無文土器・押型土器・表裏縄文土器などであり、Ⅱ層降灰前後の縄文草創期終末~縄文時代早期前半期の集石と思われる。
- 4期 第1類がこれに相当する。Ⅱ層の上半部が集石の底面であり、周辺の遺物も無文土器など縄文早期中葉の遺物が出土しており、縄文時代早期中葉以降の集石と思われる。

(3) 遺物集中部 (第15図) (註3)

貫ノ木遺跡では遺物集中部は12基確認された。分布の主体はVID区の低地部であった。台地上ではSQ 03・04・12であった。

(註1・2) バイパス部分で報告済み(長野県埋文センター 1998)

1. SQ01

調査区VIDF04～F06、VIDH04～H06、VIDI04～I06の6.5m×5.6mの範囲に400点の土器片が集中して出土した。主な出土遺物は沈線文土器（貝殻腹縁文 図版—122・129）である。

2. SQ02

調査区VID07・D08区の5.5m×2.2mの範囲内にIIc層から50点の土器片が出土した。主な遺物は沈線文（図版82-124）と押型文である。

3. SQ03

調査区VIC21、検出層はIIa層から土器片は35点出土した。土器片は、約7m×4mの範囲内に押型文（楕円文）と沈線文（貝殻腹縁文）（図版82-128）が散漫に出土した。押型文が西側に6点が密集し、東側にその他の沈線文や、押型文などが散漫に分布した。

4. SQ04

調査区VIHG02・G03のIIaとIIb層から出土。約7m×3mの範囲内に散漫に分布。炭化物も含む。垂直分布も上下が激しい。土器片45点は繊維含有の撚糸文、押型文、前期縄文土器が出土している。縄文早期以降の土器集中部と思われる。

5. SQ05

VID08区、1.5m径内。16点の土器片が出土している。最下底の遺物レベルより8cmほど下でIIa4層（キビダゴI＝約6,000年前降灰を含む）が検出された。主に羽状縄文土器（図版85-190～192、187）が出土している。

6. SQ06

VID12区、範囲2m径内、土器片130点出土している。土器はほぼ同一個体で、沈線文（貝殻腹縁文 図版82-127）が主遺物である。出土層位はII層である。最下底遺物レベルより10cm下でIII層に移行する。

7. SQ07

VID12区範囲は2m径内。約220点の土器片が出土。結束羽状縄文のほぼ同一個体の土器（図版85-193）が出土している。最下底の遺物レベルより15cmほど下でIIb層が確認されている。

8. SQ08

VID12区、範囲は1.5m径内。土器片35点出土。沈線文（貝殻腹縁文）が主に出土している。直下にIIb層が確認されている。

9. SQ09

VID22区、範囲は10m×4m径内。土器片46点で散在する。押型文と沈線文（貝殻腹縁文）（図版82-125・126）が主に出土している。

10. SQ10

VID08区、範囲は3m径内。土器片約60点、敲石1点が密集して出土。復元可能な沈線文（貝殻腹縁文 図版82-123）が出土している。

11. SQ11

VID14区、範囲は7m×6m内II'層・IIc層出土。西側に密集し、他は散在。土器片約140点。押型文、沈線文、条痕文系（刺突文）等土器と縄文前期後半（図版85-188・189）の土器1点が出土。復元可能な押型文土器（図版81-110）が主に出土した。

（註3）遺物集中部は前報告書の再録（長野県埋文センター 1998）

12. SQ12

VIM03・M08区、Ⅲ層から出土。規模2.76m×1.72m深さ5cm内で出土。表裏縄文系の土器細片98点が出土している。ほとんど風化がひどく磨耗している。断面レンズ状に堆積していた。

以上の出土状況から本遺跡で検出されたSQ（遺物集中部）は構成され他土器より三分類される。

I類：ほぼ同一個体の土器で構成される。時間的にも当然一時期である。

II類：個体数は不明である。土器形式の時期が比較的短時間に限られる。SQ01・02・05・08・09・10・11・12

III類：土器形式のばらつきがあり、分布も散漫である。SQ03・04

さらに、SQは主な出土遺物から三つの時期に分類される。

1期 SQ12のように表裏縄文を主とする縄文草創期終末から早期初頭のSQ

2期 押型文や沈線文（貝殻腹縁文）を主とする縄文早期中葉のSQ

3期 縄文前期前半の土器を主として出土するSQ

2 遺物

(1) 土器（図版72～80・1～193、第15表・第16表）

1. 隆起縄文（88）

1点のみの出土である。胎土は石英細粒などを含む。隆起線文は途切れており、器面からへらでつまみ出した細い隆起線である。1段の縄文側面圧痕？が外面口唇部側面に施文されている。

2. 表裏縄文土器（1～73）

前報告書（長野県埋文センター 1998）で第I群土器としたもので、一部報告済みのものも含んでいる。

胎土

本遺跡の表裏縄文土器と表縄文土器の胎土は黒雲母や石英などを含むキラキラする胎土の土器よりも不透明な白色粒を多く含む胎土のものが大半であった。

施文具

本遺跡では、「LR」の単節縄文が主体的に施文されている。

施文方法・施文効果

施文方法・施文効果は、第16章第2節の文様分類に従って分類し、その分類番号を記した。

第1類（図版77-1～15・17～22）

縄文が一定方向から施文されず、多方向から施文されたものをこの類とする。縄文の撚りは「RL」が19のみである。他は「LR」の単節縄文である。

遺構・区分	隆起縄文	表裏縄文	捺赤文	押型文	無文	沈線文	条痕文	縄文	竹管文	その他	合計
SQ01						21					21
SQ02				2		2					4
SQ03			2	7		9					14
SQ04				6	3			6			13
SQ05								9	2		11
SQ06						3					3
SQ07						1		1			2
SQ08						2					2
SQ09						2					2
SQ10						4					4
SQ11				2		3				10	15
SQ12		9									9
その他遺構外	1	676	26	58	302	178	16	220	3		1478
合計	1	684	28	74	305	221	16	236	16		1576

第15表 貫ノ木遺跡 縄文時代土器文様別表

第4章 賈ノ木遺跡

図版番号	図No	発掘番号	遺構区分	遺跡番号	実測番号	出土層位	文様	部位	文様構成特徴	張り	裏面調整	絵	土	顔料	色調(外)	分類	備考(参照番号)
図版77	1	10939	VI-L	141	300	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。			にぶい黄緑	第1類	
図版77	2	9709	VI-L	180	500	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。			にぶい黄緑	第1類	
図版77	3	10641	VI-L	512	300	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。			にぶい黄緑	第1類	
図版77	4	10174	VI-L	640	300	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。			にぶい黄緑	第1類	
図版77	5	9735	VI-L	200	500	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。			にぶい黄緑	第1類	
図版77	6	10101	VI-L	570	300	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。			にぶい黄緑	第1類	
図版77	7	9711	VI-L	182	300	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。			にぶい黄緑	第1類	
図版77	8	19628	VI-U	151	313	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		灰黄褐色	第1類	1337 結合	
図版77	9	19537	VI-U	160	313	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		灰黄褐色	第1類		
図版77	10	13549	VI-P	346	313	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		灰黄褐色	第1類		
図版77	11	19686	VI-U	208	313	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		灰黄褐色	第1類	1968 1969 1968結合	
図版77	12	13342	VI-P	339	313	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		灰黄褐色	第1類		
図版77	13	19697	VI-U	30	313	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		灰黄褐色	第1類		
図版77	14	13339	VI-P	336	313	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		灰黄褐色	第1類		
図版77	15	20806	VI-W	982	367	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄緑	第1類		
図版77	16	10097	VI-L	658	290	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第2類(n)	9734 と結合	
図版77	17	22290	VI-W	2441	361	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L,R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む。		褐色	第1類	2442 と結合	
図版77	18	13294	VI-P	291	310	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む。		にぶい黄緑	第1類		
図版77	19	27312	X L-L	227	388	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		褐色	第1類		
図版77	20	19640	VI-U	62	333	Ⅲ	表裏縄文	口縁～胴部	表裏縄文	L,R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む。		褐色	第1類	19639 と結合	
図版77	21	10178	VI-L	619	293	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい褐色	第1類		
図版77	22	21070	VI-W	1207	369	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	白色の粘土(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		明褐色	第1類		
図版78	23	21459	VI-W	1596	370	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む。		灰黄褐色	第2類(e)		
図版78	24	21470	VI-W	1607	368	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L,R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む。		にぶい黄緑	第2類(e)		

第16表 賈ノ木遺跡 縄文時代土器調査表 (I)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

図版番号	図名	整理番号	遺構・区分	遺物高	表面番号	出土層位	文様	部位	支那構成特徴	張り	表面調色	胎土	産地	色調(外)	分類	備考(整理番号)
図版78	25	19690	VI-W	1	393	Ⅲ	縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		にぶい黄褐色	第3類(a)	
図版78	26	14273	VI-R	677	105	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		明赤褐色	第2類(a)	14957 14958 と接合
図版78	27	18591	VI-S	1492	106	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		明赤褐色	第3類(c)	
図版78	28	19682	VI-U	209	334	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類(c)	
図版78	29	19499	VI-U	22	350	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類(c)	
図版78	30	19625	VI-U	148	310	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		明褐色	第3類(b)	
図版78	31	10059	VI-L	630	303	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類(b)	9780 9781 と接合
図版78	32	13012	VI-P	9	312	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	R.L	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類(b)	
図版78	33	10049	VI-L	811	302	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	不明	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		にぶい黄褐色	第3類(b)	
図版78	34	9770	VI-L	241	281	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類(a)	
図版78	35	19566	VI-U	79	352	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		褐色	第3類(e)	19588 と接合
図版78	36	14619	VI-R	923	107	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類(a)	
図版78	37	9792	VI-L	521	289	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類(a)	
図版78	38	23632	VI-W	3779	355	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		にぶい褐色	第3類(e)	
図版78	39	19712	VI-U	235	327	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		明褐色	第3類(e)	
図版78	40	11136	VI-L	1606	299	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第3類	
図版78	41	10080	VI-L	851	296	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	白色の砂子(長石?)を多く含む。石英や雲母は少量。		にぶい黄褐色	第4類	
図版78	42	20282	VI-W	385	354	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	不明	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		にぶい黄褐色	—	
図版78	43	20570	VI-W	1096	359	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	不明	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		明褐色	—	
図版79	44	19873	VI-U	196	278	Ⅲ	縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		灰黄褐色	第3類(a)	
図版79	45	13412	VI-P	409	277	Ⅲ	縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		灰黄褐色	第3類(e)	
図版79	46	22274	VI-W	2426	367	Ⅲ	縄文	口縁	表裏縄文	L.R	縄文	黒雲母・白色透明石英など火山灰を多く含む		にぶい黄褐色	第3類(a)	

第16表 貫ノ木遺跡 縄文時代土器属性表(2)

第4章 貫ノ木遺跡

図版番号	図No	発掘番号	遺跡区分	遺物番号	実測山土 番号	層位	文 様	部位	文様構成 特徴	織り	裏面顔色	脇	七	織織 色調(外)	分類	備考 (整理番号)
図版79	47	22716	VI-W	2872	266	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	R L		白色の粒子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	褐色	第2類 (b)		
図版79	48	5495	VI-G	4548	104	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L R	口縁	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	灰黄褐色	第2類 (e)		
図版79	49	19619	VI-U	142	337	Ⅲ	縄文	口縁	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	にぶい褐色	第3類 (e)		
図版79	50	15396	VI-P	393	308	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L R	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	褐色	第3類 (e)		
図版79	51	19566	VI-U	89	351	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L R	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	褐色	第3類 (e)		
図版79	52	49886	5012		137		表裏縄文	口縁	表裏縄文	L R	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	にぶい赤褐 色	第3類 (e)		
図版79	53	12037	VI-M	337	136	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	L R	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	にぶい赤褐 色	第3類 (b)		
図版79	54	5644	VI-L	115	276	Ⅲ	表裏縄文	口縁	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	明黄褐色	第3類 (d)		
図版79	55	49886	5012		133		表裏縄文	口縁	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	にぶい赤褐 色	第1類		
図版79	56	16219	VI-L	690	285	Ⅲ	縄文	胴部	表裏縄文	L R	指頭圧痕	白色の粒子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい褐色	—	10/77 と整合	
図版79	57	9796	VI-L	267	304	Ⅲ	縄文	胴部	表裏縄文	L R	指頭圧痕	白色の粒子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	褐色	—		
図版79	58	9802	VI-L	272	284	Ⅲ	縄文	胴部	表裏縄文	L R	指頭圧痕	白色の粒子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい黄褐色	—		
図版79	59	13006	VI-P	6	311	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L R	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	にぶい黄褐色	—		
図版79	60	10346	VI-L	817	346	IV	縄文	底部	表裏縄文	R L	指頭圧痕	白色の粒子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	明褐色	—		
図版79	61	21058	VI-W	1195	259	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L R	指頭圧痕	白色の粒子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい黄褐 色	—		
図版79	62	19533	VI-U	66	331	Ⅲ	縄文	胴部	表裏縄文	R L	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	にぶい黄褐 色	—		
図版79	63	49694	5012		129		表裏縄文	胴部	表裏縄文	不明	ナブ	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	暗赤褐色	—		
図版79	64	13386	VI-P	383	320	Ⅲ	縄文	胴部	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	明褐色	—		
図版79	65	9726	VI-L	197	326	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L R	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	褐色	—		
図版79	66	19561	VI-U	86	338	Ⅲ	縄文	胴部	表裏縄文	R L L R	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	明褐色	—		
図版79	67	22300	VI-W	2451	360	Ⅲ	表裏縄文	胴部	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母、白色透明石英 など火山灰を多く含有 する	にぶい黄褐色	—		
図版79	68	10229	VI-L	700	287	Ⅲ	縄文	胴部	表裏縄文	L R	指頭圧痕	白色の粒子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい黄褐色	—		

第16表 貫ノ木遺跡 縄文時代上器属性表 (3)

図版番号	図名	遺物番号	遺物区分	遺物番号	実測寸法 [単位]	文様	部位	文様構成 特徴	割り	裏面画像	胎土	顔料	色澤(外)	分類	備考 (整理番号)
図版79	49	2296	VI-W	248	364	III	表裏縄文	胴部	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	にぶい褐色	-	
図版79	70	13323	VI-P	325	309	II	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	褐色	-	
図版79	71	19607	VI-L	130	538	II	縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	にぶい褐色	-	
図版80	72	10049	VI-L	525	272	II	縄文	胴部	縄文	L.R	指頭圧痕	白色の砂子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい黄褐色	-	
図版80	73	9732	VI-L	205	294	II	縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	白色の砂子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい褐色	-	
図版80	74	13600	VI-Q	49	348	III	縄文	胴部	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	明黄褐色	-	
図版80	75	9730	VI-L	201	285	II	縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	白色の砂子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい黄褐色	-	
図版80	76	19490	VI-U	15	328	II	縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	にぶい褐色	-	
図版80	77	19714	VI-U	237	336	III	縄文	胴部	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	明褐色	-	
図版80	78	19543	VI-U	66	332	II	縄文	胴部	表裏縄文	R.L	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	にぶい黄褐色	-	
図版80	79	19478	VI-U	1	330	II	縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	にぶい黄褐色	-	
図版80	80	16668	VI-R	2974	347	III	縄文	胴部	表裏縄文	R.L	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	明褐色	-	
図版80	81	12695	VI-Q	4	283	III	縄文	胴部	縄文	L.R	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	にぶい黄褐色	-	
図版80	82	49090	SG12		130		表裏縄文	胴部下	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	暗赤褐色	-	
図版80	83	49683	SG12		128		表裏縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	赤褐色	-	
図版80	84	11832	VI-L	2004	297	III	表裏縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	白色の砂子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい黄褐色	-	
図版80	85	10154	VI-L	655	286	III	縄文	胴部	表裏縄文	L.R	指頭圧痕	白色の砂子(長石?) を多く含む。石英や雲 母は少量。	にぶい黄褐色	-	
図版80	86	19079	VI-U	102	325	II	表裏縄文	底部	表裏縄文	R.L	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	明褐色	-	
図版80	87	19513	VI-U	26	329	II	縄文	底部	表裏縄文	不明	指頭圧痕	黒雲母・白色透明石英 など火山灰を多く含む	明褐色	-	
図版80	88	19504	VI-U	27	390	II	縄起線文	口輪部	縄起線文 (縄目の 附けと縄 起線文)	ナダ	ナダ	黒雲母を含む。白色粗粒 を含む	褐色	-	
図版80	89	22274	VI-W	2425	367	III	縄文	口縁	黒糸文 (格子状 に施文)	ナダ?	ナダ?	雑砂粒を含む	暗赤褐色	-	
図版80	90	8272	VI-II	465	118	II	縄糸文	口縁~ 胴部	縄糸文 (L)	ナダ	ナダ	雑砂粒を含む。赤色粗粒 を含む	褐色	第9期	

第16表 賈ノ木遺跡 縄文時代土器属性表(4)

第4章 貫ノ木遺跡

図版番号	図No	発掘番号	遺構区分	遺物番号	実測番号	出土部位	文様	部位	文様構成特徴	張り	裏面調色	胎土	組成	色調(内)	分類	備考 (埋没番号)
図版80	91	1185	VI-C	32	75	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	ナデ		赤色粒、砂粒多量、石英含有、繊維少量	灰黄緑	にぶい黄緑	第9類	
図版80	92	1668	VI-R	2914	20	III	捺点文	口縁	捺点文	ナデ		砂粒長石、石英含有	灰黄緑		第9類	
図版80	93	8272	VI-H	460	118	II	捺点文	口縁～胴部	捺点文(L)	ナデ		微砂粒含有、赤色粒混入	黄赤褐		第9類	
図版80	94	8284	VI-H	452	68	II	捺点文	胴部	捺点文(網状に施文)	ナデ		砂粒、赤色粒含有、小石、石英少量含有	灰黄緑		第9類	
図版80	95	8158	VI-H	346	74	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	ナデ		砂粒、長石、赤色粒、石英含有	黄黄緑		第9類	
図版80	96	8286	VI-H	454	70	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	ナデ		砂粒、赤色粒含有、小石、石英少量含有	黄黄緑		第9類	
図版80	97	8270	VI-II	458	72	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	ナデ		砂粒、長石、赤色粒、石英小石少量含有	黄黄緑		第9類	
図版80	98	497225004		27	76		捺点文	底面付足	捺点文(L)	ナデ		砂粒、長石、赤色粒含有	黄黄緑		第9類	
図版80	99	8287	VI-H	458	71	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	ナデ		砂粒、長石、赤色粒、石英小石少量含有	黄黄緑		第9類	
図版80	100	8283	VI-H	451	67	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	不明	ナデ	砂粒、赤色粒含有、小石、石英少量含有	灰黄緑			
図版80	101	8285	VI-H	453	69	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	ナデ		砂粒、赤色粒含有、小石、石英少量含有	黄黄緑		第9類	
図版80	102	8281	VI-II	449	66	II	捺点文	胴部	捺点文(L)	ナデ		砂粒、赤色粒含有、小石、石英少量含有	黄黄緑		第9類	
図版81	103	13010	VI-P	7	211	III	押型文	胴部	押型文(山形文) 縄文I?	ナデ		胎粒含有、長石多量	灰黄緑			
図版81	104	20618	VI-W	745	209	III	押型文	口縁	押型文(山形文) 胎体が短く縄	ナデ		白色粒多量、石英少量	灰黄緑			
図版81	105	9783	VI-L	264	207	II	押型文	口縁	押型文(山形文、タテ線) 縄文II 胎	ナデ		微砂粒多量、胎粒含有? 石英多量、繊維少量	灰黄緑			
図版81	106	21064	VI-W	1201	378	II	押型文	口縁	押型文(山形文) 胎粒? 胎	ナデ		微砂粒含有、石英、長石混入	明赤褐			
図版81	107	9794	VI-L	256	208	II	押型文	胴部	押型文(山形文、タテ線文) 207	ナデ		微砂粒含有、石英多量、繊維少量	灰黄緑			
図版81	108	19587	VI-U	110	206	II	押型文	胴部	押型文(山形文) 胎久保	滑面のころ		石英細粒多量、繊維少量	にぶい黄緑		19582 19583 と接合	
図版81	109	24802	VI-X	421	392	IV上	押型文	胴部	押型文(異形密接施文)	ヘラナデ		石英細粒少量、白色粒多量	右 にぶい黄緑		24831～ 24834 接合	
図版81	110	496823011		59	127		押型文	口縁～底面	押型文	ナデ		細砂粒、石英、赤色粒含有、繊維少量	黄黄緑			
図版81	111	20179	VI-W	290	201	II	押型文	口縁	表裏押型文(滑面)	押型文		微砂粒、赤色粒少量含有	右 にぶい黄緑		20180 と接合	
図版81	112	13650	VI-Q	99	203	III	押型文	口縁	押型文(横円文)	ナデ		細砂粒、石英、赤色粒少量含有、小石まじり	黄黄緑			

第16表 貫ノ木遺跡 縄文時代土器属性表 (5)

図版番号	図No	遺構番号	遺構区分	遺物番号	出土番号	出土部位	文種	部位	支持構成物	網り	裏面調整	土	調練痕	色割(外)	分類	備考 (整理番号)
図版81	113	20181	VI-W	292	202	II	押型文	胴部	表裏押型文(槽凹文)		押型文	微砂粒、赤色粒少量含有	有	にぶい黄褐色		
図版81	114	13605	VI-Q	54	204	III	押型文	胴部	押型文(槽凹文)	ナブ		砂粒、石片、赤色粒少量含有	有	黄褐色		
図版81	116	13648	VI-Q	94	205	III	押型文	口縁	押型文(槽凹文) 帯状口縁	ナブ		白色微砂粒、細粒多量含有	有	灰黄褐色		
図版81	116	13674	VI-Q	72	210	III	押型文	胴部	押型文(山形文)	ナブ		白色微砂粒多量、石片少量含有	有	にぶい黄褐色		
図版81	117	13696	VI-Q	46	377	III	押型文	胴部	押型文(槽凹文)	ナブ		微砂粒、茶色粒、石片含有	有	黄褐色		
図版81	118	20661	VI-W	788	364	III	押型文	胴部	押型文(槽凹文)	ナブ		微砂粒含有		にぶい黄褐色		
図版81	119	9822	VI-L	293	366	II	無文	底部	無文	ナブ		新砂粒、小礫多量、石片少量含有		灰白色		
図版81	120	9637	VI-L	106	264	II	無文	口縁	無文	横方向へラナブ		微砂粒、細粒、小礫少量含有、粒子粗い		灰黄褐色	9630と接合	
図版81	120	9631	VI-L	102	264	II	無文	口縁	無文	横方向へラナブ		微砂粒、細粒、小礫少量含有、粒子粗い		灰黄褐色		
図版81	121	20266	VI-W	389	268	II	無文	胴部	無文、前周縁手のようなナブ	ナブ		微砂粒、赤色粒少量含有		にぶい黄褐色		
図版82	122	49769	S201E		128		沈積文	口縁～底部	貝殻微線文+沈積文(縞型)	ナブ		微砂粒多量、赤色粒、小石含有		灰黄褐色		
図版82	123	49704	S210	29	128		沈積文	口縁～胴部上半	貝殻微線文+沈積文	ナブ		砂粒多量、石片少量含有		にぶい黄褐色	49704と接合	
図版82	124	1291	VI-D	6	121	II	貝殻微線文	胴部	沈積文、縞線孔あり	ナブ		ち密砂粒少量、赤色粒、小石少量含有		にぶい黄褐色		
図版82	125	49707	S209	7	122		沈積文	胴部～底部	貝殻微線文+沈積文	ナブ、ミガキ		砂粒、赤色粒、小石少量含有		縞～にぶい黄褐色		
図版82	126	49706	S209	81	123		沈積文	口縁～胴部	貝殻微線文+沈積文(波状口縁)	ナブ、ミガキ		白色微砂粒、赤色粒含有、小石まじり		にぶい黄褐色	49706と接合	
図版82	127	49671	S006		120		沈積文	口縁～底部	貝殻微線文+沈積文	ナブ、ミガキ		長石、小石多量含有、石片、黒炭粉少量		縞		
図版82	128	49741	S003	29	41		沈積文	口縁	沈積文+貝殻微線文	ナブ		砂粒、長石、赤色粒含有、小石少量まじり		灰黄褐色	7839と接合	
図版82	129	49662	VI-D・G-05		63		沈積文	貝殻微線文	沈積文+貝殻微線文	ナブ		砂粒、長石、赤色粒含有		にぶい黄褐色	49706と接合	
図版82	130	1451	VI-D	166	84	II	沈積文	口縁	地鉄刺突文	ナブ		砂粒、長石、赤色粒含有、小石まじり		灰白色	1482と接合	
図版83	131	36865	X-N	1200	262	III	沈積文	口縁	沈積文+貝殻微線文	ナブ		微砂粒、石片含有、小礫まじり		にぶい黄褐色		
図版83	132	21043	VI-W	1180	247	II	沈積文	口縁	沈積文+貝殻微線文	ナブ		微砂粒、赤色粒、小礫少量含有、縞線少量		にぶい黄褐色		
図版83	133	26152	X-O	71	251	III	沈積文	胴部	沈積文+貝殻微線文	横ナブ		微砂粒、石片少量含有		黄褐色		

第16表 質ノ木遺跡 縄文時代土器調性表 (6)

第4章 貫ノ木遺跡

図版番号	図%	番号	遺構・区分	遺物番号	実測番号	出土部位	文様	部位	文様解説 種類	張り	裏面特徴	胎土	色調(内)	分類	備考 (整理番号)
図版83	134	30692	X-O	4	250	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文(浅い波状線)	ナデ	微砂粒、小礫まじり、繊維少量		灰黄褐色		
図版83	135	30645	X-N	896	250	Ⅲ	沈黙文	胴上部	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒、石英、小礫、赤色粒少量含有		灰白色		
図版83	136	37197	X-N	1532	216	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	白色微砂粒、石英少量含有		にぶい黄褐色	37198 と接合	
図版83	137	30462	X-C	2	237	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	横ナデ	微砂粒、石英少量含有、繊維少量		灰黄褐色		
図版83	138	21441	VI-W	1578	243	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	白色微砂粒含有、小礫少量混入、繊維少量		にぶい黄褐色		
図版83	139	20638	VI-W	665	241	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	白色微砂粒含有、小礫少量混入、繊維少量		にぶい黄褐色	20639 と接合	
図版83	140	21473	VI-W	1610	244	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	白色微砂粒含有、小礫少量混入、繊維少量		にぶい黄褐色		
図版83	141	20537	VI-W	664	254	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	横ナデ	微砂粒含有、石英、小礫少量、繊維少量		にぶい黄褐色		
図版83	142	20586	VI-W	716	248	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒、赤色粒、石英、小礫少量含有		灰黄褐色	20587 と接合	
図版83	143	20267	VI-W	390	253	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	横ナデ	微砂粒、赤色粒少量含有、小礫まじり、繊維少量		にぶい黄褐色	20268 と接合	
図版83	144	20263	VI-W	386	249	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	白色微砂粒含有、小礫まじり、繊維少量		にぶい黄褐色		
図版83	146	20745	VI-W	872	242	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文	ナデ	白色微砂粒含有、小礫まじり、繊維少量		にぶい黄褐色		
図版83	146	31751	X-I	21	250	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	横ナデ	微砂粒、小礫含有、石英、赤色粒、繊維少量		灰白色		
図版83	147	21060	VI-W	1197	245	Ⅲ	沈黙文	口縁	沈黙文+具散復線文 雲状口縁	横ナデ	微砂粒、石英、小礫、繊維少量含有		灰白色		
図版83	148	30367	X-O	269	231	Ⅲ	沈黙文	口縁	沈黙文+具散復線文	ナデ	砂粒、小礫含有		明黄褐色		
図版83	149	36767	X-N	1102	229	Ⅲ	沈黙文	口縁	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒、石英、小礫、赤色粒少量含有		灰白色		
図版83	150	39029	X-N	3366	235	Ⅲ	沈黙文	口縁	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒、石英含有		灰黄褐色		
図版83	151	29181	X-O	73	217	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒少量含有		にぶい黄褐色		
図版83	152	46222	X-S	129	219	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒、石英少量含有		明黄褐色		
図版83	153	37139	X-N	1466	238	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒、赤色粒少量含有		灰白色		
図版83	154	37129	X-N	1464	237	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文+具散復線文	ナデ	微砂粒、赤色粒少量含有		灰白色	37126 と接合	
図版83	155	35992	X-N	324	397	Ⅲ	沈黙文	胴部	沈黙文	ナデ	きめ細かい胎土		にぶい黄褐色		

第16表 貫ノ木遺跡 縄文時代土器属性表 (7)

図版番号	期No	層位・区分	遺物番号	出土層位	文様	部位	文様構成特徴	柄子	系図調整	胎土	繊維状	色調(外)	分類	備考 (整理番号)
図版83	166	36844 X-N	879	232 Ⅲ	沈殿文	短柄	沈殿文		ナデ	細砂粒、石英、小礫含有、深い緑相、繊維少量		にぶい黄緑		
図版83	187	31008 X-I	178	236 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+具装復線文		ナデ	細砂粒含有、赤色小礫多量含有		にぶい黄緑		
図版83	158	37962 X-N	2287	252 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+具装復線文		ナデ	細砂粒、赤色鉱少量含有、小礫まじり		にぶい黄緑		
図版84	169	26842 X-N	1177	223 Ⅲ	沈殿文	口縁	沈殿文+具装復線文		ナデ	砂粒、赤色粒、石英、小礫少量含有		灰白色		
図版84	160	37153 X-N	1488	236 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+具装復線文		ナデ	細砂粒、石英、小礫少量含有		灰黄褐色		
図版84	161	49887 Z		289	沈殿文	胴部	具装復線文		ナデ	細石英含有、赤褐色粒少量		にぶい黄緑		
図版84	162	30634 X-D	62	233 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+口縁復線文		ナデ	白色細砂粒、赤色粒含有、繊維少量		にぶい黄緑		
図版84	163	30671 X-D	81	225 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+具装復線文		ナデ	細砂粒、石英、雲母多量、小礫まじり		明褐色	30672と接合	
図版84	164	36854 X-N	1189	219 Ⅲ	沈殿文	口縁	沈殿文+具装復線文		ナデ	細砂粒、石英、小礫少量含有		にぶい黄緑		
図版84	165	26922 X-N	1287	256 Ⅲ	沈殿文	口縁	沈殿文+具装復線文		ナデ	砂粒、石英、雲母含有、繊維少量		にぶい黄	実№213と同一	
図版84	166	36846 X-N	1181	214 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+具装復線文		ナデ	細砂粒、小礫少量含有、石英多量		にぶい黄緑	実№213と同一	
図版84	167	30568 X-C	118	226 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+具装復線文		ナデ	細砂粒、石英、雲母多量含有、小礫少量		明褐色	実№225、213と同一	
図版84	168	36853 X-N	1188	212 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文+具装復線文		ナデ	砂粒、石英、雲母多量含有		にぶい黄	実№225、213と同一	
図版84	169	37417 X-N	1762	213 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文		ナデ	砂粒、石英、雲母多量含有		にぶい黄		
図版84	170	36843 X-N	1176	261 Ⅲ	彫文	胴部	彫文		指頭圧痕	石英、雲母多量含有、繊維少量		にぶい黄	36851と接合	
図版84	171	36870 X-N	1506	218 Ⅲ	沈殿文	短柄	沈殿文+口縁復線文		ナデ	細砂粒、石英、小礫少量含有、繊維少量		明褐色	1506と接合	
図版84	172	31953 X-I	253	231 Ⅲ	沈殿文	胴部	沈殿文		ナデ	細砂粒、小礫含有、石英多量		黄	実№215と同一	
図版84	173	25740 VI-W	867	246 Ⅲ	沈殿文	口縁	黄赤沈殿文+具装復線文		ナデ	白色砂粒多量、石英、小礫含有、繊維少量		にぶい黄緑		
図版84	174	37261 X-N	1586	224 Ⅲ	刺突文	口縁	沈殿文		指頭圧痕	細砂粒多量含有、小礫、繊維少量		にぶい黄緑		
図版84	175	39158 X-O	79	380 Ⅲ	沈殿文	口縁	爪形文+具装復線文		条痕文	細砂粒含有		明黄褐色		
図版84	176	9833 VI-L	304	386 Ⅲ	刺突文	口縁	沈殿文+条痕文		条痕	細砂粒含有		黄		
図版84	177	32760 X-J	223	249 Ⅲ	沈殿文	口縁	沈殿文+条痕文		ナデ	細砂粒、石英、小礫多量含有、繊維少量		にぶい黄緑		

第16表 貫ノ木遺跡 縄文時代土器属性表 (8)

第4章 貫ノ木遺跡

図版番号	図No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	実測番号	出土層位	文様	部位	文様構成特徴	総り	裏面特徴	胎土	織織風	色調(外)	分類	備考(整理番号)
図版94	178	30454	X-C	1	234	Ⅱ	沈黙文	胴部	沈黙文		ナデ	微砂粒、小礫少量含有、織織少量		にぶい黄褐色		
図版94	179	37131	X-N	1406	379	Ⅱ	沈黙文	胴部	沈黙文(横施文)		ヘラナデ	微砂粒含有		にぶい黄褐色		
図版94	180	31903	X-I	172	381	Ⅱ	貝殻条痕文	胴部	貝殻条痕文+沈黙文(横施文)	条痕	条痕	微砂粒含有、石灰、小礫混入		にぶい黄褐色		
図版94	181	30655	X-D	63	260	Ⅱ	条痕文	胴部	条痕文	ナデ	ナデ	微砂粒、赤色粒、小礫少量含有		にぶい褐色		
図版95	182	9817	VI-L	288	382	Ⅱ	沈黙文	胴部	貝殻条痕+沈黙(半輪竹管)文	条痕	条痕	微砂粒含有、石灰混入		黄褐色		
図版95	183	49653	VI-M	888	80		条痕文	胴部	条痕文(半輪竹管)	ナデ	ナデ	砂粒、長石、赤色粒、石灰含有		灰黄褐色		
図版95	184	49664	VI-M	915	82		竹管文	胴部	条痕文(半輪竹管)	ナデ	ナデ	砂粒、長石、赤色粒、石灰含有		灰黄褐色		
図版95	185	41285	X-T	483	385	Ⅱ	条痕文	胴部	条痕文	細網状	細網状	微砂粒、小礫少量含有、織織少量		黄褐色		
図版95	186	17233	VI-R	3539	78	Ⅱ	条痕文	胴部	貝殻条痕文+横条状沈黙文	貝殻条痕	条痕	長石、石灰含有、赤色含有、小礫少量含有	有	にぶい黄褐色		
図版95	187	49667	VI-D		96				縄文+透孔木ノ葉ノ文	ナデ	ナデ	赤色粒、小石含有		黒褐色		
図版95	188	45700	Sq11		91		指頭状浮線文	胴部	条痕施文+指頭状浮線文		裏面刺摩	砂粒、石灰含有		にぶい黄褐色		
図版95	189	49668	Sq11		21	86	沈黙文	胴部	透孔状浮線文	ナデ	ナデ	砂粒、長石、石灰含有、小石少量含有		灰白色		
図版95	190	49714	Sq20		112		縄文	口縁	縄文(平口縁)	ナデ	ナデ	砂粒、長石、小石少量		灰黄褐色		
図版95	191	49718	Sq25		111		縄文	胴部	縄文(帯部の赤に施文)	ナデ	ナデ	砂粒、長石、小石少量含有		赤褐色		
図版95	192	49719	Sq26		110		縄文	胴部	羽状縄文	ナデ	ナデ	砂粒、長石、小石少量含有		赤褐色		
図版95	193	49710	Sq27		124		縄文	口縁~胴部	結束縄文	ナデ	ナデ	砂粒、長石少量含有	有	灰黄褐色		

第16表 貫ノ木遺跡 縄文時代土器属性表 (9)

口縁形態は外反するものが多く、15・17・18は「く」の字形に外反する。口唇部は8のようにやや先細りのものと19のように角頭状のものがある。裏面の施文は、口縁部下までのもの(10・15・16・17~21)と、胴上部のもの(1~8)との2種類がある。

8の裏面は縄文の下に横に数本の沈線が見られ、また器面に指頭圧痕が非常によく残る。器面は5~6mmで全体的に他の第1類のものよりも薄く、焼成も堅い。8~14は同一個体である。

第2類(図版77-16、図版78-23~26、図版79-47)

外面に縄文を施文した後、口唇部下に外面と口唇部施文の間を埋めるように施文されたものがこれに類する。

内面は口縁屈曲部まで約2cm施文され、その下は指頭圧痕が残る。口唇部は角頭状のものが多い。23・24の口唇部は肥厚した角頭状の口唇部である。25・26の口縁部は「く」の字に屈曲する。

47は口縁下の内面に無文部があり、口縁下約1.5cmの胴上部に施文がある。

第3類 (図版78-30~33)

外面縄文施文が縦方向に条が走る「縦走施文」をこの類とする。縄文の「RL」のものは32である。他は「LR」である。口縁部では30・31は緩く外反し、31は「く」の字に強く屈曲し、32は直立している。内面施文は32が胴上部まで施文があり、他は口縁下約2cm施文がある。

第4類 (図版79-27~29)

外面縄文施文が横方向に条が走る「横走施文」をこの類とする。

29は器壁が5mm以下で薄く、口縁部はほぼ直立する。27と28は口縁部の外反は緩い。

第6類 (図版78-34~39)

外面第5類同様斜走する、縄を横方向から施文した「横位施文」のものをこの類とする。

口唇部がやや先細りのもの39と玉縁状のもの34、やや角頭状のもの35~38がある。特に34の形態はこの1点のみである。内面縄文は、38のみが約1cm施文され、他は2cm以上施文がある。

第7類 (図版78-40・41)

外面特殊な施文をこの類で一括した。

40・41は外面施文が横走している。第4類と施文方法は同じであるが、口唇部形態に特徴があり、第4類から外し、特殊なものとして分類した。口唇部は先細りし、口縁部は「く」の字に屈曲する。器壁は薄く約5mm以下であり、推定される口径は小さいと思われる。

この他に表裏に縄文が施文されているものは、42・43の胴部片である。

3. 表縄文土器(図版79-44~71、図版80-72~87)

縄文施文の土器の中から表縄文土器と明確に区別できず、「縄文」と分類したものの中にも表縄文が混入している可能性が多い。そのため表縄文とされたものは少ない。分類は第16章第3節の表裏縄文土器分類に準ずる。

第3類 (54)

条が縦走するものをこの類とした。縄文原体は明確でない。

第5類 (53)

表裏縄文第5類と同様外面施文が斜め方向に条が斜走するが、原体を縦方向から施文した「縦位施文」のものをこの類とする。口縁部は直立する。

第6類 (44~46、48~52・55)

表裏縄文第6類と同様、横位施文の土器である。条が斜走している。LRの原体で施文されているものが大半である口縁部は緩く外反しているものが多い。45は口唇部下で外反し、胴部は直立である。48は口縁部が「く」の字に外反する。

56~71は表縄文の胴部破片である。内面は指頭圧痕が目立つ。縄文の施文されているものはない。86・87は底部である。86は丸底であり、87は尖底である。

4. 繫糸文土器 (90~102)

前報告書(長野県埋文センター 1998)で第II群土器として報告済みのものである。

5. 押型文土器 (103~118)

前報告書で第III群土器として報告済みである。

6. 無文土器 (119~121)

前報告書第VII群土器として報告済みである。

7. 沈線文土器(貝殻腹線文土器)(122~173)

前報告書で第VI群土器として報告済みである

8. 条痕文土器 (176~186)

176~180は櫛歯状工具による条痕文土器であり、前報告書第VI群土器として報告済みである。

181~186は条痕文土器であり、前報告書第IX群土器として報告済みである。

9. 羽状縄文土器 (190~193)

前報告書で第X群土器としたものである。

10. 竹管文土器 (187~189)

前報告書で第XI群として報告済みである。

(2) 石器 (図版87~図版89、第17表・第18表)

1. 斧形石器 (局部磨製) (1)

凝灰岩質の刃部両面が磨かれている斧形石器である。両側縁に敲打部分がある。形態は撥形と分銅形の中間形態である。正面には礫面を大きく残し、裏面に測線の一部に礫面を残す。甲高の楕円形の礫をそのまま利用して調整している。

2. 有茎尖頭器 (29)

前報告書 (長野県埋文センター 1998) で報告済みである。

3. 石鏃 (2~16・30~33)

2~16は凹基無茎石鏃である。中央部分が磨かれている石鏃は2と4である。2~10と11~16と大きさと2分類される。30・31は9・10と大きさが類似し、小型に分類される。5はハート形、6は鏃形鏃に類似する。13は細長い二等辺三角形の石器である。15・16は他のものよりも、凹部が深い。30~33は前報告書で報告済みである。

4. 石匙 (17~19)

17・18は横長の石匙である。19は縦長の石匙である。

5. 石錘 (20・21・36)

扁平な礫の両端を剥離した礫石錘である。36は前報告書で報告済みである。

6. 搔器 (34)・削器 (35)・三角錘状石器 (37)・特殊磨石 (38)

34~38は前報告書で報告済みである。

7. 凹石 (22~25)

22と25は円礫を用い、23・24は垂角礫が使用されている。22は表裏にあさい凹が長軸中央に2~3ヶ所並ぶ。25は円礫の中央部に茎3.2cmの大きな凹部分があり、内面は擂鉢状である。23は表裏に凹があり、長軸に2ヶ所ありその交点部分に新たな凹面がある。24は断面三角形の垂角礫で、凹がその3面にある。ひとつの面には長軸3ヶ所、他の面には2ヶ所と1ヶ所に凹がある。凹の形は中央が若干ロート状のものが多い。垂角礫の凹石は本報告書の口向林A遺跡で大量に出土している。

遺跡-区分-Ax	TP	AI	Sp	NS	Sc	PI	三角錘形 石器	石鏃	特殊磨石	GS	Ps	Rh	合計
S019												1	1
S023												1	1
S032												1	1
S063								1					1
S074												1	1
S0107												1	1
S063	1												1
遺跡外		1	36	1	3	2	1	1	2	1	12	26	66
合計	1	1	36	1	3	2	1	1	3	1	12	31	62

第17表 貫ノ木遺跡 縄文時代石器組成表

8. 磨石 (26・27)

26・27は円礫である。1面のみが磨り面である。

9. 敲石 (28)

28は棒状の磨石を兼ねる敲石である。先端部を敲石とし、1面を磨り面としている。

図版番号	No	発掘番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	小メソリト名	器種	材質	スケール	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	産出地	欠損部位	備考
図版97	1	49654	SB03-XO	1	Ⅰ	層土	XO	Ax	Tu	3/4	196	96	47	1061	100	刃部磨製、真文時代。
図版97	2	20200	VI-W	311	Ⅱ	VIW009	AH	Ob	3/4	13	12	2	0.17	100		
図版97	3	13256	VI-P	253	Ⅲ	VIP012	AH	Ob	3/4	16	12	2	0.43	100		
図版97	4	13434	VI-P	421	Ⅲ	VIP120	AH	Ob	3/4	13	14	3	0.46	100		局部磨製石器
図版97	5	21973	VI-W	1210	Ⅱ	VIWN16	AH	ST	3/4	17	17	4	0.73	100		
図版97	6	20665	VI-W	792	Ⅲ	VIWG01	AH	Ch	3/4	16	16	5	0.71	100		押型文柄
図版97	7	30456	X-C	6	Ⅱ	X C302	AH	Ob	3/4	19	17	5	0.91	75		
図版97	8	19729	VI-V	12	Ⅲ	VI V706	AH	Ob	3/4	17	15	4	0.71	75	長さ	
図版97	9	36617	X-N	502	Ⅲ	XNK09	AH	Ch	3/4	20	17	3	0.94	100		
図版97	10	36610	X-N	945	Ⅲ	XNK10	AH	Ob	3/4	19	15	4	0.66	100		
図版98	11	37239	X-N	1094	Ⅲ	XNK10	AH	Ch	3/4	26	16	4	1.26	100		
図版98	12	26660	X-N	3195	Ⅲ	XN P04	AH	Ob	3/4	22	13	3	0.57	100		
図版98	13	37138	X-N	1473	Ⅲ	XN G06	AH	An	3/4	34	14	4	1.58	75		
図版98	14	24572	VI-X	76	Ⅱ	VI X04	AH	Ch	3/4	29	20	4	2.1	100		
図版98	15	31162	X-M	363	Ⅲ	XMH02	AH	An	3/4	30	16	3	0.88	75		
図版98	16	92666	VI-R	90	Ⅱ	VI R15	AH	An	3/4	30	21	3	1.22	100		
図版98	17	36611	X-N	946	Ⅲ	XNK10	NS	SS	1/2	48	59	5	17.32	100		
図版98	18	10005	VI-L	476	Ⅲ	VI L A08	NS	An	1/2	34	60	7	10.23	100		
図版98	19	38065	X-N	2390	Ⅲ	XNK10	NS	Ch	1/2	61	23	9	10.57	100		
図版98	20	40029	X-O	1011	Ⅲ	XOF10	石鏡	SS	1/2	40	37	15	23.74	100		
図版98	21	45302	SB03-XN	12	Ⅲ	XN20	石鏡	安山岩	1/2	44	32	13	22.96	100		SH03-20
図版98	22	1444	VI-D	159	Ⅱ	VI D119	Pa	安山岩	1/3	87	87	48	66.5	100		
図版98	23	17064	VI-R	3370	Ⅲ	VI R04	Pa	安山岩	1/3	104	80	62	515	100		残っている、磨 跡から転用？
図版98	24	14131	VI-R	435	Ⅲ	VI R018	Pa	安山岩	1/3	102	70	56	280	100		残っている
図版98	25	1432	VI-D	137	Ⅱ a	VI D H08	GS	安山岩	1/3	59	58	34	166.3	25		
図版98	26	11990	VI-M	290	Ⅲ	VIMN13	GS	安山岩	1/3	118	106	33	600	100		
図版98	27	16723	VI-R	3029	Ⅲ	VI R G17	GS	安山岩	1/3	71	66	34	212.8	100		
図版98	28	1154	VI-C	J	Ⅱ b	VI C B17	GS	安山岩	1/3	83	53	34	218.9	100		
図版98	29	18153	VI-S	664	Ⅳ上	VI S G16	TP	An	2/3	85	18	6	3.59	100		
図版98	30	14184	VI-R	488	Ⅲ	VI R 009	AH	Ob	2/3	21	16	3	0.42	100		
図版98	31	15839	VI-R	2143	Ⅲ	VI R G10	AH	Ob	2/3	20	16	2	0.34	100		
図版98	32	1317	VI-D	32	Ⅱ a	VI D H10	AH	Ob	2/3	27	24	3	0.80	100		9011
図版98	33	49813	VI D H02			VI D H02	AH	SS	2/3	28	20	6	2.17	100		
図版98	34	49814	VI D H102			VI D H02	Sc	SS	1/2	85	47	20	73.59	100		
図版98	35	49816	VI D H09			VI D H09	Sc	SS	1/2	67	35	16	21.78	100		
図版98	37	49817	VI D F07			VI D F07	三角磨形石	An	1/3	72	60	18	90.07	100		
図版98	38	49818	VI D G05			VI D G05	磨石	安山岩	1/3	131	83	59	430	100		

第18表 貫ノ木遺跡 縄文時代石器属性表

第3節 平安時代の遺構と遺物

1 遺構

SB01 (図版90、第19表)

高速道路肩にあたる表土剥ぎ中、調査区の北西側IH区で竈を検出し、この低地部分にさしかかる斜面を調査した。貫ノ木遺跡範囲から約350m北西側にあたり、西岡A遺跡範囲から約300m北側にあたる。しかし、住居址は攪乱されており、竈の袖石と竈内の底面焼土が検出されのみであった。変色している部分を図上点線で示した。覆土はないものの恐らく住居址の外周と思われる。住居址の形態は約3mの方形で、竈は西壁中央部と思われる。遺物は竈内に土師器の杯と内黒碗が出土した。

遺跡名	遺構名	遺構番号	遺構・区分	規模(m)	深さ(cm)	カマド位置	周溝有無	残存率	半凹数	土灰数	出土遺物	備考
MKN	SB01		1不明	不明	不明	東	不明	カマドのみ	不明	不明	土師器 壺・杯	ほとんど破壊 されている

第19表 貫ノ木遺跡 平安時代住居址属性表

2 遺物

土師器 (図版90-1~10、第20表)

1. 杯 (1~4)

杯の口径11cm前後と口径約12cm前後の2法量である。高さは約3cmから3.5cmである。腰部が少し屈曲する口径と底径差のある大きく外傾する器形である。

2. 内黒椀 (5~10)

内黒椀の口径13cm高さ6.5cm前後と口径は約15cm、高さ6.5cm前後の2法量と思われる。内面にミガキはあるが、暗文はない。高台は2形態ある。ひとつは6のように底断面が薄くなる高台と、もうひとつは断面が厚く、高さの低い高台の2種である。

土師器の特徴からSB01の時期は平安時代中葉と思われる。

図版番号	遺物・区分	実測番号	遺物の種類	器種	部位	スケール	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼文	備考
図版90-1	SB01	5002	土師器	杯		1/4	11.4	4.2	3.0	椀	椀	やや砂粒多 きめ若干粗い		
図版90-2	SB01	5005	土師器	杯		1/4	10.6	4.2	3.5	にぶい椀	にぶい椀	砂粒少量 きめ細か 密		
図版90-3	SB01	5008	土師器	杯		1/4	12.2	4.8	3.2	にぶい椀	にぶい椀	砂粒少量 きめ細か 密		
図版90-4	SB01	5007	土師器	杯		1/4	12.4	4.8	3.6	椀	椀	やや砂粒多 きめ若干粗い		
図版90-5	SB01	5009	土師器	内黒椀	底部	1/4			5.8	黒地	椀	砂粒少量 きめ細か 密		
図版90-6	SB01	5003	土師器	内黒椀		1/4	12.8	6.9	6.3	黒地	椀	砂粒少量 きめ細か 密		
図版90-7	SB01	5004	土師器	内黒椀		1/4	15.0	7.4	6.6	黒地	椀	砂粒少量 きめ細か 密		
図版90-8	SB01	5006	土師器	内黒椀		1/4		4.6		黒地	椀	やや砂粒多 きめ若干粗い		
図版90-9	SB01	5010	土師器	内黒椀		1/4	14.8	5.4	5.8	黒地	椀	やや砂粒多 きめ若干粗い		
図版90-10	SB01	5001	土師器	内黒椀		1/4	15.2	6	6.2	にぶい椀	にぶい椀	やや砂粒多 きめ若干粗い		

第20表 貫ノ木遺跡 平安時代遺物属性表

第4節 近世の遺構

土坑墓

1. SM01 (図版90、第14表)

XI・XN区小丘陵頂上部西側で長軸12.5m短軸0.65m深さ0.25mの隅丸長方形土坑を検出。断面は箱型である。土坑内に北側に頭部のある屈葬の人骨を検出。頭部は東向きである。遺骨がコンパクトに屈葬されているため、木棺が存在したものと想像される。

人骨は、親知らずが生えかかっている。骨盤から妊娠経験のない女性である。以上から15~17歳と推定。やや前歯が出ているのであるが骨は華奢である。推定身長は142.5cm。人骨は江戸時代のもので、江戸時代の女性の平均身長は144cmである。(茂原信生先生の鑑定による)

2. SK46 (第17図内)

調査区の南西側 (XI L13区) 小丘陵の裾の部分で検出。長軸2.5m短軸0.85m内の不整形な長方形の浅い土坑内に馬の骨が出土した。馬骨は老馬でかなり歯が磨り減っていた。高齢であったと思われる。(茂原信生先生の鑑定による)

第5節 土坑の化学分析

貫ノ木遺跡のSK25・36のリン酸分析

パレオ・ラボ

1. 概要

リンは、生物の必須元素であることから、生物体内には周囲の土壌より高濃度のリンが集積している。したがって、生活面には動物の遺骸、排抽物、食物残渣、燃料などの生業活動に由来するリンが蓄積し、周囲の影響を受けない土壌より多く存在する。さらに、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと結合し、水に難溶性のリン酸化合物となるため拡散がすくなく保存性が高い（還元性土壌や水成堆積物を除く）ことから、その供給された層で残る。こうしたことから、リン分析は墓坑、生活面の検出、累積土壌の埋没腐植層の判定などに利用でき（竹迫、1993）、用途の不明な土坑などでしばしば分析が行われてきた（竹迫（1981）；坂上（1983、1984）など）。しかし、基本的にはバックグラウンドとの比較、リン酸の由来、土壌の性質などを総合的に判定する必要がある、こうしたことから推定の部分も少なくない。一方、骨の主成分であるカルシウムは溶解性が高いため土壌中で移動ないし拡散することから、カルシウムを用いた解析は難しいとされている（坂上、1984）。しかし、カルシウムがリンとともに相対的に高い濃度を示す場合は骨の存在を積極的に示すと考えられる。こうしたことから、ここでは他の遺跡と同様に全リン酸と平行して全カルシウムも測定した。

2. 分析方法

試料は、縄文時代以降と推定されるSK25（第18図）、SK36（第19図）各土坑から採取された。SK25土坑は3つの土坑から構成され（第18図）、ここでは2番目の土坑の分析を行った。土坑の深さは約110cm、低部約60cmで概ね垂直に掘られている。土坑内の堆積層は不定形ないしブロック状に堆積する。堆積物は、主に褐色土ないし黄褐色土からなり、上部は黒褐色土により埋積される。SK36土坑は、深さ約170cm、低部は約60cmで、下部は概ね垂直に掘られている。土坑内は14層に区別され、10層以下は層状にそれより上位はブロック状に堆積する。堆積物は、主に暗褐色土ないし黄褐色土により埋積され、上部の3・5層は黒褐色土からなる。なお、分析層準は暗褐色ないし黄褐色土からなる。

分析方法は、試料2.0gを採取し硝酸で加熱分解後、過塩素酸を加え再度加熱分解する。この分解液の一定量を採取し、バナドモリブデン酸発色液を加え比色分析により全リン酸を定量する。また、リン酸分析と同様の操作をした分解液を一定量採取し、原子吸光度計で全カルシウムを測定する。

3. 測定結果と若干の考察

(1) SK25

全リン酸、全カルシウムの測定結果は、いずれもバックグラウンドと有意な差がないことからリン酸が供給された可能性は低いと考えられる。すなわち、全リン酸の含量は187～294mg/100gを示し、土坑上部の黒褐色土で含量が高くなる。バックグラウンドは158～302mg/100gと幅があることから普遍的な値を特定しにくい、土坑内土壌と際だった差がみられない。さらに、全カルシウム含量も土坑内で6.2～10.7mg/100g、バックグラウンドが6.4～7.8mg/100gと概ね同様な値を示す。こうしたことから、土坑が設営後に使用されないまま埋め戻されたか、あるいは陥穴であれば捕獲された実績がない可能性が示唆される。

(2) SK36

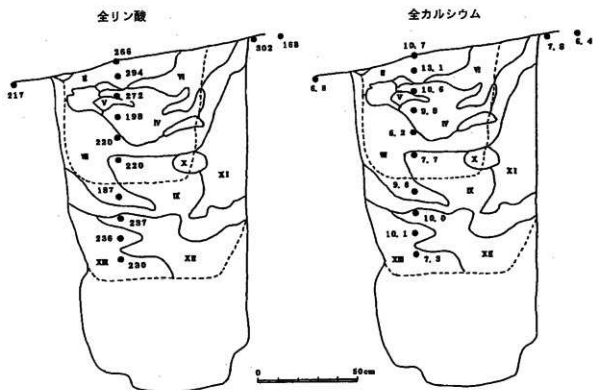
全リン酸の測定結果は、下部では含量が多くリン酸の供給があったことを示唆する。すなわち、10層を除く4層下部より下位では218～289mg/100gを示し、バックグラウンドより明らかに高い含量を示す。しかし、含量に規則的な変化はみられず13、11、4層最下部に高い含量がみられる。4層下部より上位では102～200mg/100gと概ねバックグラウンドと同様な含量を示す。また、全リン酸の含量が高い層準で

は概ね層状に堆積している。一方、全カルシウムは5.7~10.3mg/100gを示し著しい含量の変化は認められない。さらに、バックグラウンドとも概ね同様である。

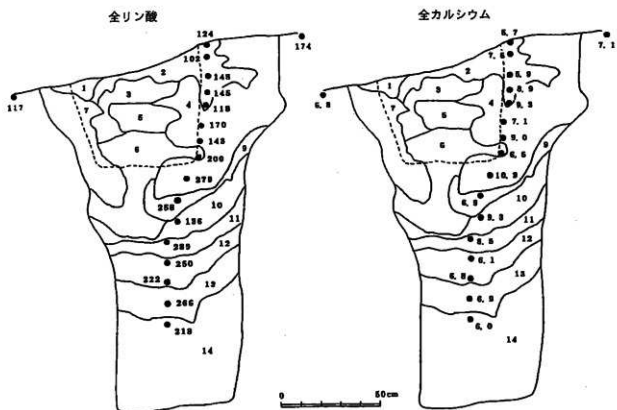
土坑の用途としては、陥穴、貯蔵穴、墓穴などがある。このうち墓穴については、含量の高い層が層状に堆積し、一度に埋積された状況を示さないことや全カルシウム含量がまったく変化しないことから可能性は低いとみなせる。また、植物性食料の貯蔵穴や陥穴については測定結果からは肯定も否定もできない。なお、坂上(1983)は小山田遺跡の同様な形状の土坑については有機炭素含量が低い結果から貯蔵穴説を否定している。

引用文献

- 坂上 寛一(1983) 小山田N^o.23遺跡・土坑に関する若干の土壌学的考察, 小山田遺跡調査 会編「小山田遺跡群Ⅱ」: 22
1-228
- 坂上 寛一(1984) 小山田N^o.15遺跡・縄文土坑と現代学穴における全リン酸分布の比較, 小山田遺跡調査会編「小山田遺跡群Ⅳ」: 1-8
- 竹道 紘(1981) 11号住居址内埋裏中の土壌リン酸分析, 横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘 調査団編「横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書1980年度」: 156-158
- 竹道 紘(1993) リン分析法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2 研究対象別分析法」: 38-45



第18図 貫ノ木遺跡 SK25の全リン酸・全カルシウム含有量 (mg/100g)



第19図 貫ノ木遺跡 SK36の全リン酸・全カルシウム含有量 (mg/100g)

遺構	整理番号	取り上げNo	層位	堆積物	全リン酸	全カルシウム
SK25	1014	1	IX層	褐色土	220	7.7
	1015	2	VII層	褐色土	220	6.2
	1016	3	VI層	黒褐色土	198	9.8
	1017	4	VI層	黒褐色土	272	10.6
	1018	5	II層	黒褐色土	294	13.1
	1019	6	II層	黒褐色土	266	10.7
	1020	7	周辺	黄褐色土	217	6.8
	1021	8	周辺	黄褐色土	302	7.8
	1022	9	VII層	褐色土	187	9.6
	1023	10	X II層	黄褐色土	237	10.0
	1024	11	X III層	褐色土	236	10.1
	1025	12	X III層	褐色土	230	7.3
	1026	13	周辺	黄褐色土	158	6.4
SK36	1040	1	14層	黄褐色土	218	6.0
	1041	2	13層	褐色土	266	6.9
	1042	3	12層	黄褐色土	222	6.8
	1043	4	12層	黄褐色土	250	6.1
	1044	5	11層	暗褐色土	289	8.5
	1045	6	10層	黄褐色土	136	9.3
	1046	7	9層	暗褐色土	258	6.9
	1047	8	4層	暗褐色土	279	10.3
	1048	9	6層	暗褐色土	200	6.5
	1049	10	4層	暗褐色土	143	9.0
	1050	11	4層	暗褐色土	170	7.1
	1051	12	2層	暗褐色土	118	9.3
	1052	13	2層	暗褐色土	145	8.9
	1053	14	2層	暗褐色土	148	5.9
	1054	15	2層	暗褐色土	102	7.6
	1055	16	2層	暗褐色土	124	5.7
	1056	17	周辺	褐色土	117	6.8
	1057	18	周辺	黄褐色土	174	7.1

注記)測定単位はmg/100g乾土

第21表 貫ノ木遺跡 全リン、全カルシウムの分析結果

第6節 まとめ

1 縄文時代

遺構

1 土坑は纏まって4基から7基づつブロックになるものが多い。第7類のブロックは斜面に平行に並列しており、第4類や第3類のブロックは斜面に沿って並列している。第1類は斜面の裾部、緩斜面に16m間に4基並列している。

しかし第5類(平面形態は長方形あるいは楕円形で、断面箱型、底面に逆茂木痕あり、深さ1.0m前後の土坑)は2基並ぶものと1基単独のもの、というように星光山荘A遺跡・B遺跡の列をなす第1類土坑と異なる様相を示す。

また、第3類のSK37・SK38の堆積土壌から10,260±140年BP、10,140±120年BPという放射性炭素年代の測定値が出ている。また、第9類のSK35の炭化材から9,600年BPの年代が与えられた。

2 集石は土坑を持つI群(SH106)と土坑を持たないII群(SH106以外)に2大別され、さらにII

群は4つの時期に分けられた。

3 遺物集中部(SQ)は3時期に分類された。

土器

本遺跡では縄文草創期隆起線文から縄文時代前期中葉の土器まで、少量ではあるが、時間幅のある土器群が出土している。縄文時代の土器の分布は、遺跡範囲の西側VI区とX区の小丘陵頂上部から北西斜面に遺物が流れるように分布している。

- 1 隆起線文が1点出土している。
- 2 本遺跡の表裏縄文土器は、次のような特徴がある。
 - a 表裏縄文土器は、第1類のものが多く、胎土も白色粒のものが多く含まれるものが多い。
 - b 薄手で、内外面に明確な指頭圧痕が残る図版77-8～14などが特徴的である。
 - c 内面の胴部上部まで縄文が施文されている例もある。
 - d 口縁部が屈曲するものと緩やかに外反するものがある。
 - e 口縁部の器厚は3.5mm～8mmの範囲内で、平均5.5mmが大半を占める
 - f 口縁形態は肥厚でない角頭状あるいは丸頭状のものが多く、薄での口縁部が「く」の字状に屈曲するものは、先細り状口縁である。
 - g 底部は尖底のものと丸底のものがある。

本報告書中の表裏縄文土器の中で若干古い様相を持つと思われる。

- 3 撚糸文土器は条が不揃いであり、繊維を若干混入させている。内面は平滑に調整されているが、軽しような胎土であり、縄文時代早期撚糸文土器の中でも後半期の土器である(長野県埋文センター 1998)。
- 4 押型文では、山形文がいわゆる「樋沢式」併行期の押型文土器前半期の土器であり、異種多段構成の押型文土器は繊維も含有しており、縄文時代早期押型文土器後半期の土器群と思われる。
- 5 無文土器は縄文時代中葉の無文土器平板式併行期の土器と思われる。
- 7 沈線文系の土器は、貝殻腹線文を主体に南部東北地方や北陸地方の影響や、関東地方の縄文時代前期中葉田戸上層式の影響を受けた土器群である。
- 8 本遺跡中少数であるが、条痕文系の土器群が出土している。縄文時代早期後葉の土器群である。
- 9 縄文時代前期羽状縄文土器が出土している。SQ07の土器は繊維を含み黒浜式併行の土器と思われる。
- 10 本遺跡中少数であるが、竹管文(半截)の土器群が出土している。縄文後半期前葉の土器群と思われる。

以上のように本遺跡の縄文時代の土器は4つの時期に区分される。

- 1期 縄文時代草創期隆起線文期
- 2期 縄文時代草創期終末～早期初頭表裏縄文期
- 3期 縄文時代早期前葉～中葉期
- 4期 縄文時代早期後葉～前期

石器

1 単品であるが局部磨製の斧形石器と有茎尖頭器が出土している。本報告書中の星光山荘B遺跡から局部磨製の斧形石器や有茎尖頭器、隆起線文土器が出土しており、ほぼ同時期の遺物と思われる。しかし構跡の斧形石器は、側縁に敲打痕がある縄文時代の石斧と類似し、礫面を利用して局部的に調整していること等隆起線文期の星光山荘B遺跡の斧形石器と異なり疑問も残る。今後の類例を待ちたい。これらの石器は本遺跡第1期の石器と思われる。

2 石鏃の小型のものは表裏縄文土器から縄文時代早期の石器と思われ、本遺跡第2期～3期の石器と思われる。大型のものは縄文時代前期のものと思われる。ほかに石匙が縄文時代前期の石器と思われる。本遺跡第4期の石器と思われる。

3 北関東を中心とする撚糸文期に分布する「三角錐形石器」が出土している。表裏縄文土器の時期から前期前半期にあたり本遺跡第2期の石器と思われる。

以上のように本遺跡では、1期縄文時代草創期、2期縄文時代表裏縄文期、3期縄文時代早期中葉期、4期縄文時代早期終末～前期前葉の4期にわたって生活が営まれていたと思われる。

第1期は集石Ⅰ群第5類の時期にあたり、遺物量や遺構数も少なく、小規模なキャンプ地であったと思われる。

第2期は表裏縄文土器が出土する時期で、X区小丘陵の北側（SQ12付近）から北西側の部分に土器が分布する。集石はⅡ群第2類としたものがこの土器群と一致すると思われる。SQ12がこの期の遺構と思われる。また、土坑の第3類（土坑分類第5類）がこの時期と思われる。

第3期は早期中葉期で、押型文土器や無文土器・沈線文（貝殻腹線文）期にあたり、遺物の分布はX区の小丘陵頂上部から北側斜面にかけて、50m幅の帯状に分布している。これらの分布の西側には土坑第3類の第2ブロックが分布する。遺物集中部は2期のSQがこの時期に相当する。集石の4期も第3期に属するものと思われる。この時期の土器が多く出土しており、住居址などは検出されなかったが、押型文土器の時期から沈線文後半期まで、キャンプ地として多くの行き来があったと思われる。

第4期は早期後葉～前期にかけての遺物の分布は第3期と同様であり、北西急斜面下に集中している。遺物集中の3期も第4期に属する。

2 平安時代

本遺跡では平安時代の住居址を遺跡の北西低地部分にさしかかる斜面で検出した。貫ノ木遺跡、西岡A遺跡など遺跡範囲から外れるが、周知の遺跡範囲ではなかったため、貫ノ木遺跡として報告した。遺構は覆乱されていたが、その北西側には低地部が広がり、平安時代の後半期の極小規模な集落の1棟であったと思われる。

3 近世

調査区X区の小丘陵の頂上部に1基の土葬墓が検出された。近世では、墓は集落単位で埋葬される例が多く、今回のように1基単独で検出される例は少なく、今後民俗例などの事例を待ちたい。

引用文献

長野県埋蔵文化財センター他 1998 「一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡」

第5章 西岡A遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

西岡A遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字野尻字傳九郎1521-1他に所在する。本遺跡は、野尻湖から南西方向に次第に標高を増していく仲町丘陵の最南端に位置し、貫ノ木遺跡南西部に接するように位置する。貫ノ木遺跡西側より一段低い南西向きの緩斜面にある。西側は池尻川の流れる谷状の地形に臨み、東側は貫ノ木丘陵を背負うような地形である。

調査範囲の北側にあたる大々グリッドV区は、貫ノ木丘陵のまっすぐ西側に開け、やや急な斜面を下り滑らかな斜面に変わり、また谷に向かって傾斜をきつくるその中間点に開けたテラスに近い斜面である。斜面は、調査区の北側を小河川が解析した小さな谷が走るため、西から北に面し北西の季節風や妙高山、黒姫山からの風を直接受けやすいところである。つまりこのテラス状の土地は、南北に向かって小さな谷が限るために尾根上のうねりを持った地形の上に立地していることになる。

野尻湖までの距離は約2kmほどである。標高は685m前後である。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第14図・第20・21図)

本遺跡は過去に調査歴がなく、事前に県教育委員会・町教育委員会によって試掘調査を行い、遺跡範囲を確定して調査を行った。調査区の設定については隣接する貫ノ木遺跡と同時に、大々地区の呼称も両遺跡で通しにして行った。(第14図参照)。

また、バイパス建設予定地の大々地区にあたるIX・X・XIV・XV区の一部に関しては、1998年度の「貫ノ木遺跡・西岡A遺跡」(長野県埋文センター 1998)の報告書で報告済みである。

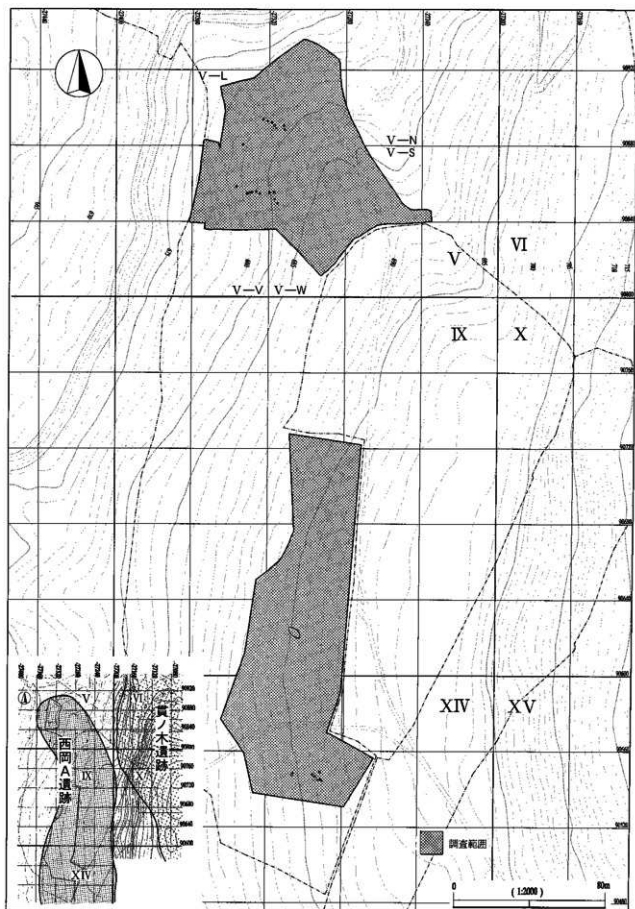
上信越自動車道関連の西岡A遺跡はV区とIX区・XIV区で調査が行われた。

V区調査はI・II層を重機で除去後、III層面から行った。遺物の分布範囲を確認するため、小グリッドを2m間隔で坪掘し、その遺物の分布範囲を広げていった。Vb層まで精査を行った後、遺物が検出されなくなってから下層の文化層を確認するために重機を用い試掘坑を設けた。V区においては縄文時代の土坑が17基中、1m以上の深い土坑があり、調査に危険が伴うため、手掘り可能なところまで調査し、図面記載後土坑を垂直に半割して断面から深さと地層を確認し、底面形状と大きさは残された底面から推測した。

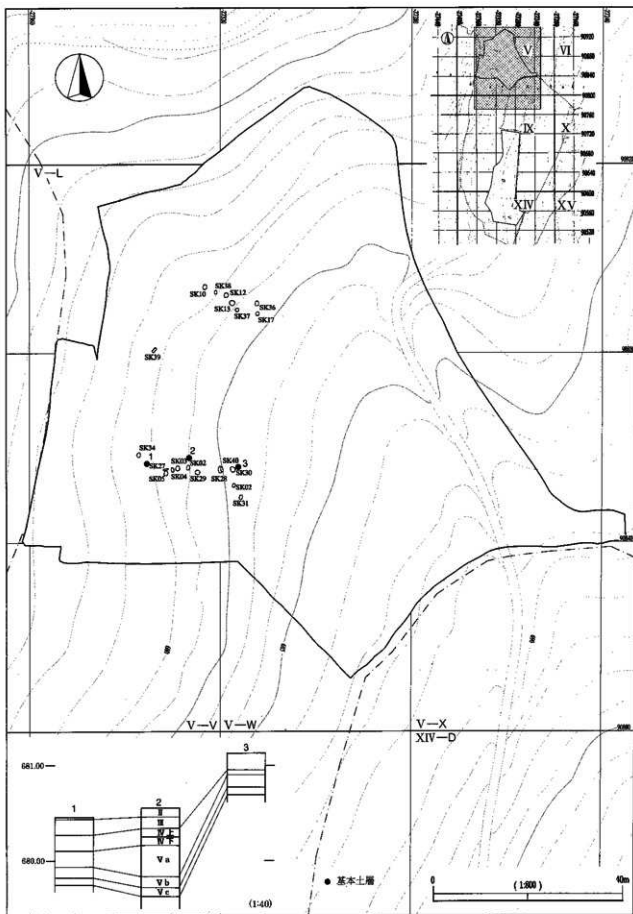
旧石器時代のIII層下部からV層にかけてブロックが確認され、多くの石器が出土した。縄文時代以降は、縄文時代の土坑が17基確認され、若干の縄文時代早期無文土器と石鎌が出土している。

IX・XIV区は試掘調査で遺物が発見されているため、XIV区の最南端部の一部でトレンチ調査を行ったのみで基本的には調査対象範囲を面的に広げて調査を行った。重機でI・II層を除去後、III層上面より鍬鎌を用いた精査を行った。原則的にVb層まで精査を行い、遺物が検出されなくなってから下層の文化層を確認するため、部分的に重機を用い試掘坑を設けていった。

(2) 調査経過



第20図 西岡A遺跡 全体図



第21図 西岡A遺跡 遺構配置図

第5章 西岡A遺跡

平成6年度は4月21日から12月9日まで上越自動車道分の面積6,900㎡の調査が行われた。その間妙高・野尻バイパス分11,000㎡も8月9日より同時に調査が行われた。

平成7年度は4月5日から10月20日まで調査面積14,000㎡の調査が行われた。

(日誌抄)

平成7年度	5月9日	①区V-Q IV層まで掘り下げSH21検出
4月5日 重機による表土剥ぎ 作業開始	V-L 縄文～旧石器上部の検出面を広げる	
6日 新日本航業基準点測量 III層上面検出	11日 SH21・22掘り下げ 周辺調査	
10日 炭焼跡検出	17日 V-L縄文面での検出終	
11日 ②区重機でトレンチを入れる	23日 I-b区落し穴の半割	
14日 ①区III層調査終了	25日 I-b区落し穴2ヶ完掘	
24日 ①区炭焼跡完掘 ②区表土剥ぎ	26日 I-b区落し穴3ヶ完掘 SK03・04・05	
27日 ①区ブロックの掘り下げ	29日 重機によるIII層剥ぎ IV層よりピット跡多数	
5月31日 I-a区ピットの半割による調査	19日 第3ブロックの検出	
I-b区 ピットの調査	8月18日 表土剥ぎ	
6月8日 I-a区、V-L・V-M区のIV層の調査終了	31日 第2ブロック拡大	
13日 空撮 空測	9月4日 グリッド設定終了	
14日 陥穴遺構	7日 グリッド発掘調査	
16日 野尻湖博物館中村由克さんより指導 ①落し穴の時期 ②遺物について	14日 星光山荘からの引越し始まる	
19日 陥穴の調査(SK30・31・2・3・4・5)	22日 国学院小林達雄教授来訪	
21日 SK10・12・13・17完掘	25日 第3ブロック完掘	
22日 SK27・28完掘	27日 SH36・37検出	
23日 SK37・38・39を新たに検出	10月6日 第4・5・6ブロック完掘	
27日 I区の調査終了	12日 SH38検出	
7月17日 トレンチを設定して発掘調査に入る 第1ブロックの調査	13日 空撮	
	20日 作業終了	

(3) 調査結果の概要

西岡A遺跡の出土遺物は大半が旧石器時代の遺物であり、縄文時代の遺物は早期無文土器が33点、縄文土器1点、石鏃7点、特殊磨石1点、磨石1点、SK10から特殊磨石を礫器に転用した石器1点が出土している。

縄文時代以降の遺構としては、土坑が17基検出された。1.5m以上の深さのあるもの13基、その他1mを超えるもの2基等陥し穴と思われる土坑がV区に北側と南側の低地に並んで検出された。南側3基は断層により深さ1m前後のところで底部が西側に40cmずれることが確認された。

(4) 基本層序(第4図、第2表)

西岡A遺跡の層序は、貫ノ木遺跡の台地部と同様である。

I 層 Hue10YR2/3 黒褐色土 表土層	が珪に混入
II 層 Hue10YR1.7/1 黒色土 柏原黒色火山灰層	IV 層 Hue10YR7/6 黄褐色土 粘り有り
III 層 Hue10YR2/2 黒褐色土 Hue10YR5/6黄褐色土	Va層 Hue10YR6/6 暗褐色土 Hue10YR4/4褐色粒含

	有で堆積	VI層 Hue7.5YR5/6	黄褐色土 下部に行くに従い5mm
Vb層 Hue10YR4/4	黒褐色土 1mm径の粒多量		径の赤スコリアを含有
Vc層 Hue10YR4/6	明褐色土 堅く蜜に堆積	VII層 Hue7.5YR4/8	明褐色土 赤スコリアの若

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

土坑 (図版91~94、第21図・第22表)

(括弧内土坑分類は第16章第3節の分類番号)

土坑は全体的に遺構確認が難しかった。VII層以上下面から確認できたものもある。

土坑は調査区北側V区から17基の土坑が検出されている。土坑の位置は南北に2群に分かれるものと、単独のものがある。第1ブロックは、V区北側(V-L~V-M区)にSK10・38・12・13・37・36・17が東西に並び、第2ブロックは、V区南側(V-Q~V-R区)にSK05・27・03・04・02・29・28・40・30・02・31が東西に並び、また、SK39とSK34が若干列から外れ検出された。

本遺跡には断層があり、土坑がその断層によって断ち切られているものや、土坑の形状が歪んでいるものが多くあった。断ち切られているものとしては、SK04・SK05である。また大きく断面が歪んでいるものはSK02・SK03で、南西方向に集中している。また若干歪んでいると推察される土坑は、北東方向のSK13・SK37・SK17である。

本遺跡の土坑は形態などから6種類に分類される。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	確認面	覆土の特徴	分類	備考
SY	1	5.80×2.20	20	N-				SK01から変更
SK	2	1.10×0.68	171	N-8°-E	Ⅲ層下面		7	
SK	3	1.11×0.88	201	N-21°-W	Ⅲ層下面		7	
SK	4	0.96×0.55	148	N-21°-W	Ⅲ層下面		6	
SK	5	1.04×0.80	187	N-0°	Ⅲ層下面	Ⅱ層(柏原黒色火山灰層)堆積が確認できる	7	底部付近断層より分断される。
SK	10	1.10×0.80	158~166	N-14°-W	Ⅲ層下面		5	
SK	12	1.05×0.90	170	N-33°-E	Ⅲ層下面		7	
SK	13	1.10×1.10	175	N-28°-W	Ⅲ層下面		5	
SK	17	0.88×0.75	155	N-37°-E	Ⅲ層下面		7	
SK	27	1.20×1.00	210	N-14°-W	Ⅲ層下面		7	
SK	28	1.16×不明	170	N-4°-E	Ⅲ層下面		7	SK40と切り合い
SK	29	0.96×0.90	1.86~2.15	N-50°-W	Ⅲ層下面		7	
SK	30	0.82×0.60	145	N-23°-E	Ⅲ層下面		6	
SK	31	1.00×0.62	165	N-20°-E	Ⅲ層下面		7	
SK	34	1.05×0.75	65~81	N-1°-W	Ⅲ層下面		4	
SK	36	1.01×0.80	180	N-22°-W	Ⅲ層下面		3	
SK	37	0.76×0.72	101	N-0°	Ⅲ層下面		3	
SK	38	0.80×0.65	115~135	N-5°-W	Va層		1	土坑上面不明
SK	39	1.18×0.53	残存部25~44	N-41°-E	VII層		1	土坑上面不明
SK	40	1.45×不明	92	N-5°-W	Ⅲ層下面		1	SK28と切り合い SK28より新

第22表 西岡A遺跡 土坑属性表

第1類（土坑分類第1類）（図版92）

形状は長方形あるいは隅丸長方形で、深さは1.0m前後の土坑である。底面に逆茂木痕のビットがある。底面が長方形のもの(a)と底面が楕円形のもの(b)とに分かれる。a類はSK38とSK39（図版92）でb類はSK40（図版92）である。

SK40はSK28（図版92）を切って土坑が掘られており、SK28よりも新しい土坑である。したがって、b類は（土坑分類7類）より時期の新しい土坑と思われる。

SK38は断層の影響か形態が若干変形しているが、北方向コーナーは方形であり、形状は長方形であったと思われる。

SK39は上面で遺構を明確することができず、VII層（赤スコリア層）になってから褐色覆土の遺構を確認したため、上面が欠落している。したがって、SK38の土坑同様で、深さ1m以上の土坑であったと思われる。

第2類（土坑分類第3類）（図版94）

平面円形あるいは隅丸方形で断面筒型、深さ0.5～1.0mの浅めのSK37とSK36（図版94）がこれに類する。SK37は断層の影響で、土坑底部が変形し、表面と底面は隅丸方形である。SK36は2つの土坑が断面から観察される。北西側に偏っている表面楕円形で、深さ0.6mほどの不定形な1つの土坑が、深さのあるもうひとつの第3類のSK36を攪乱している。

第3類（土坑分類第4類）（図版94）

形状は楕円形、底面楕円形である。深さは1m以下の断面箱型であるが少々袋状になる部分のある土坑である。この類はSK34（図版94）で底面に若干の段がある。

第4類（土坑分類第5類）（図版93・図版94）

形状が円形で深さ1.5～2mの深さがあり、底面もほぼ円形の土坑である。貫ノ木遺跡土坑第4類（土坑分類第7類）との違いは楕円形と円形の表面形状と底面の形状の差異である。断面筒状のものa類と底面に小ビットを持つものb類がある。前者は（土坑分類第5a類）はSK13（図版94）であり、後者は（土坑分類第5d類）はSK10（図版94）である。

SK10は底面に小ビットを2つ持つが逆茂木痕にしてはビットが浅いため、陥し穴土坑の逆茂木痕とは機能が違うと思われる。土坑内に特殊磨石を礫器へ転用した石器（図版95-12）が覆土内から出土した。

第5類（土坑分類第6類）（図版91）

形状が表面と底面隅丸長方形で、断面筒型の土坑である。深さは1.5m前後と深い。第6類（土坑分類第7類）との差は底面が狭長でないことである。この類の土坑はSK30とSK04である。SK04は断面底部が先細りし、SK30は断面底面が平らである。

第6類（土坑分類第7類）（図版91～図版93）

形状は隅丸長方形で深さが約1.5～2mの深く底面が狭長のものがこの類にあたる。この類の土坑は断面がY字形（漏斗型）となり、底面が平らなものや底面が先細りするものがある。前者a類（土坑分類第7c類）はSK02・SK03・SK31（図版91）・SK28（図版92）・SK12・SK17・SK27（図版93）で後者b類（土坑分類第7b類）はSK29とSK05（図版92）である。SK05は上部から135cmの部分で断層による横ずれが生じており分断されている。SK03は調査の最上部より半割しながら底面まで掘り下げたため、土層確認が不十分となった。図上では3層のみが記録できたが、類似の遺構を見るときかなりの層の堆積があったと推察される。

土坑全体の分布は北側第1ブロックと南側第2ブロックに約20m間隔をあげ、等高線と直交するように

並列する。第6a類(土坑分類第7c類)は多数が第2ブロックに分布する。並列する西側SK05から東側SK31の間隔は約14mある。SK05とSK03、SK02とSK29、SK28とSK29が約4m間隔で2基づつ並列する。第1ブロックはSK12とSK17が約8m間隔で分布する。

第2類(土坑分類第3類)は第1ブロックに約4m間隔で並ぶ。第5類(土坑分類第6類)は第2ブロックに分布して、第6a類(土坑分類第7c類)の分布に挟まって分布する。

第5類(土坑分類第6類)は約12m間隔であるが、第6a類(土坑分類第7c類)は約1~4m以内の間隔で分布する。

第1類(土坑分類第1類)は1基外れて西側に分布し、その他第1と第2ブロックに、1基づつ列間に挟まって分布する。

第3類(土坑分類第4類)は第2ブロック西端に外れて分布する。

第1b類(土坑分類第1b類)のSK40覆土はⅡ層(柏原黒色火山灰層)が主に堆積しており、Ⅱ層堆積以降に土坑が埋まったと思われる。したがって、この土坑はⅡ層の本格的堆積以降の土坑と推定される。

その他の土坑はⅡ層面では遺構確認が明確にできず、Ⅲ層上面あるいはそれより下面より遺構確認され、時期を特定できない。しかし、覆土中にⅡ層と思われるブロックが見られ、Ⅱ層降灰時には土坑は掘られており、Ⅱ層初期降灰(約1万年前)以降の土坑である。またSK40のようにⅡ層の本格的な堆積よりも新しい遺構と思われる。したがって縄文時代早期から前期までの遺構と考えられる。

2 遺物

縄文時代無文土器は33点、表縄文土器1点、石鏃7点が調査区内で出土している。

(1) 土器(図版95-1~5、第23表)

1~8は無文土器である。外面の整形はヘラで丁寧になでられており、口縁部は丸みのある口縁である。胎土は細かな雲母が多量に含まれるものと不透明な1mm粒の石英が多量に含まれるものがある。全体的に粗い胎土である。これら無文土器は東裏遺跡や貫ノ木遺跡の無文土器と同様縄文時代早期の関東地方平坂式併行期の土器と思われる。9は丸底に近い尖底土器で、表面かなり剥落し文様が不鮮明であるが、縄文の土器片と思われる。胎土や器形から表裏縄文系の土器と思われる。9のみがXIVC区から離れて出土し、1~8等の無文土器は調査区北東端側に若干集中して出土している。

図版番号	図取No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	実測番号	出土層位	小片名	文種	部位	胎土	色調(外)	組織	備考
図版95	1	425	V-N	51	2	Ⅱ	VN20	無文	口縁	石英を多量含む、粗い細砂粒多量	明褐色	無し	
図版95	2	2370	V-S	286	3	Ⅲ	VS018	無文	口縁	石英を多量含む、粗い細砂粒多量	暗褐色	無し	
図版95	3	2403	V-S	319	10	Ⅲ	VSP19	無文	胴部	石英を多量含む、粗い細砂粒多量	黄褐色	無し	
図版95	4	382	V-N	7	7	Ⅲ	VN20	無文	胴部	石英を多量含む、粗い細砂粒多量	明褐色	無し	
図版95	5	3547	XIV-C	74	4	Ⅳ	XIVC119	表縄文	底面	粗い石英を多量含む、細砂粒多量	にぶい黄褐色	無し	

第23表 西岡A遺跡 縄文時代土器属性表

(2) 石器(図版95-6~13、第24表)

1. 石鏃(6~11)

石鏃はほとんどが黒曜石製である。9のみ珪質頁岩製である。凹基有茎鏃が1点(11)、凹基無茎石鏃が3点(10・7・8)、平基無茎鏃が2点(6・9)で全点6点である。6点とも形態に共通性はない。

平基無茎鏃の6は無文土器がまとまった地点で出土した。7と8は『鎌型鏃』と思われる縄文時代早期(押型文期)に多く見られる石鏃である。11の石鏃は縄文時代晩期に多く見られる形態と思われる。他の

石鏃は草創期終末から早期にかけて出土する石鏃に類似する。

2. 特殊磨石 (12)

12は特殊磨石を礫器に転用した砂岩製の石器である。SK10内の覆土下方から出土している。礫器は長軸の一端を両面から剥離して両刃の刃部を作り出している。縄文時代早期の石器で、土坑を掘る際、転用して使用したのではないかと推測される。

3. 磨石 (13)

13は安山岩製で、形態は棒状の礫の中央を半分にしたスタンプ形石器の分類に含めることもできる一類である。断面は円形で、礫面はツルツルに面を残さず磨られている。長軸の先端と折れ面は長時間の敲打により潰れており、折れ面の縁辺には多くの垂直の敲打による剥離が見られる。これは岐阜県白川村のトチタキ石と類似する(1980 渡辺)。また、礫面横方向に紐のようなもので擦れてできたような溝が、部分的に1本あるいは数本巡っていることが観察される。出土地点は調査区の南東側XIV D20区Ⅲ層より単独で出土している。

本遺跡に縄文時代早期無文土器破片と石鏃が出土すること、早期から前期にかけての土坑の検出などからも、遺跡が狩猟の場であり時期が縄文時代早期から前期の時期であることが考察される。

調査番号	図記	発掘番号	時代・文化層	遺構・区分	遺物番号	小計1) 名	出土層位	器	種	材	質	長さmm	厚さmm	重量g	埋存度	穴開部位	備	考
図記05	6	386	縄文時代	V-N	11	VN200	Ⅲ	AI		Ob		20	17	4	1.06	100		
図記05	7	1874	縄文時代	V-R	288	V RN14	Ⅲ	AI		Ob		18	19	3	0.87	100		
図記05	6	3083	縄文時代	V-R	497	V RD01	Ⅲ	AI		Ob		25	16	3	0.68	75		
図記05	9	1716	縄文時代	V-Q	783	V Q001	Ⅲ	AI		SS		24	16	4	1.65	100		
図記05	10	1875	縄文時代	V-R	299	V RN13	Ⅲ	AI		Ob		27	16	3	1.21	100		
図記05	11	1056	縄文時代	V-Q	830	V RL11	Ⅲ	AI		Ob		28	17	6	1.47	100		
図記05	12	4114	縄文時代	V-I	1	V RL14	Ⅲ	AI	特殊磨石	安山岩		161	76	71	879.6	75	長さ	GSから特殊磨石へ、特殊磨石から礫器に転用
図記05	13	3549	縄文時代	XIV-D	2	XIV DS13	Ⅲ	GS		Sa		148	63	63	1019	100		GSからスタンプへ変更

第24表 西岡A遺跡 縄文時代石器属性表

第3節 まとめ

本遺跡では縄文時代早期無文土器と石鏃が少量出土し、土坑が緩い北西側の斜面に40mの間隔を開けて南北に1列づつ土坑が18基検出され、若干離れた地点で1基検出されている。縄文時代の遺構も遺物もほとんどが調査区の北側からの出土である。

土坑の形態は6分類される。土坑の時期差が明確なのは切り合いのあるSK28とSK40のみである。土坑内から出土した縄文時代の遺物はほとんどなく、覆土よりⅡ層(柏原黒色火山灰層)が堆積始めたころから、Ⅱ層が盛んに堆積するまでの時期である。

本遺跡の土坑は、尾光山荘A遺跡第1類・尾光山荘B遺跡第1類や貫ノ木遺跡第4類のように斜面上に直交する列を持つこと、縄文時代の住居跡ないことなど、土坑の形態が逆茂木痕を持つものや、深さの深いものなど陥し穴の要素をもつと思われる。

したがって西岡A遺跡北側は縄文時代早期から前期に狩猟の場となっていたものと思われる。

引用・参考文献

1980 渡辺誠 飛騨白川村のトチタキ石 『藤井祐介君追悼記念考古学論集』

第6章 上ノ原遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

所在地は長野県上水内郡信濃町大字柏原字上ノ原204他。上ノ原遺跡は国道18号線の東側に沿って延びる旧北部高校信濃町分校跡地小丘陵全体が遺跡範囲とされる。野尻湖の南西側にあたる伊勢見山から延びてきた尾根上の小丘陵の末端部にあたる。遺跡北東側に大久保池が位置し、大久保南遺跡の北東側にあたる。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法（第22図）

調査範囲は上ノ原遺跡範囲の中央部にあたる。調査区の設定は上ノ原遺跡とそのすぐ南東方向にある大久保南遺跡を含め大々地区の設定を行った。上ノ原遺跡の北西側をⅠ区、その東側をⅡ区、Ⅰ区の南側をⅢ区、Ⅱ区の南側をⅣ区とした。

工事用道路の都合上平成6年度と平成7年度にわけ調査は行われた。平成6年度は北西側を約3,500㎡調査し、平成7年度は南東側を約7,500㎡調査している。

調査方法は重機による表土剥ぎ後、トレンチを入れ、手掘りによる調査を行った。遺物が出土する部分から広げ、層位を確認しながら遺物取上げは行われた。遺物は縮写真測図のコーピックによって測量を行ない、遺物を取り上げた。

(2) 調査経過

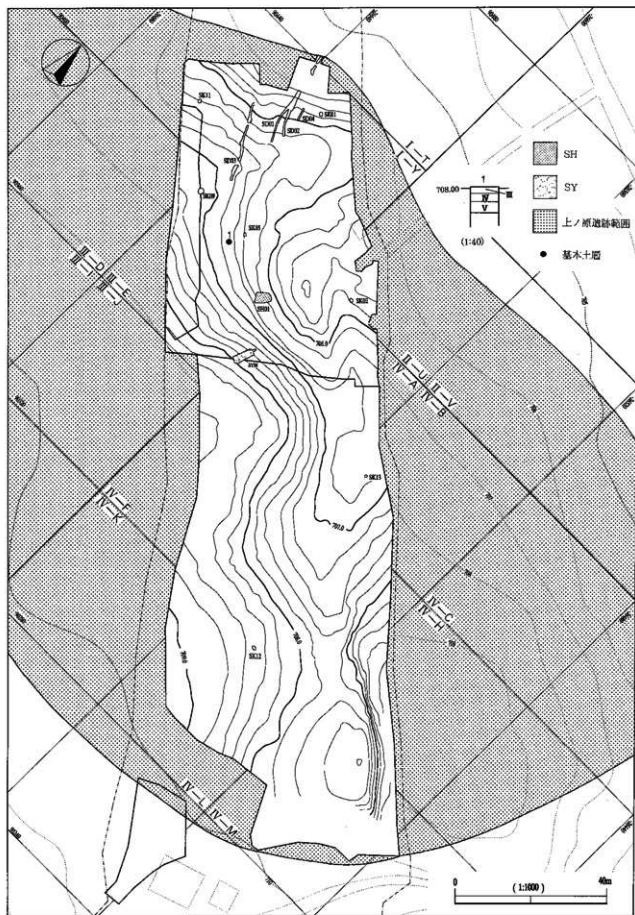
平成6年度は平成6年10月24日～12月9日調査が行われた。平成7年度は平成7年8月17日～11月28日調査が行われた。

平成6年度

10月24日	表土剥ぎ 作業開始	17日	S K01完掘 炭窯と思われる遺構が検出された
25日	トレンチ内よりポイント出土	18日	S Q01完掘
26日	S Q01を確認	22日	S D01～03の延長部分の表土剥ぎ
27日	手掘りによるテストピット S Q01合石が出土	25日	S Q03掘り下げ 脂肪酸分析用サンプル取り上げ
28日	S Q01がⅣ層中に生活面をもつ一群であると確認	29日	S Q04掘り下げ
		30日	S Q05・06掘り下げ
11月2日	ポイント出土地点に十字にトレンチを設定し掘り下げる	12月7日	S Q01疎取り上げ S Q04・05完掘写真 S Q06トレンチ掘り下げ
11日	本日より裏の山遺跡と平行して調査	9日	工事用道路下部分検出 道路下部分は来年度調査作業終了
16日	S D01～03写真撮影		

平成7年度

8月17日	Ⅳ-L区等のジョレンがけ 作業開始	30日	J V 出入口(Ⅳ-F)ブロックのまわりに掘り広げる
23日	落とし穴(S K12)の実測・写真		
28日	S K12完掘	9月7日	縮写真測図によるⅢ層下部のコンタ取り



第22図 上ノ原遺跡 全体図・遺構配置図・基本土層図

9月25日	V層から遺物多い 石斧有り	11月17日	小河原石の群が出る SH07とする
10月17日	SK13完掘	21日	SH07炭化物有り
20日	SQ07・08完掘	28日	SH07 燻化 作業終了

(3) 調査結果の概要

本遺跡は縄文時代早期・前期土器片が出土し、平安時代の土師器と須恵器片が少量出土している。遺構としては縄文時代の土坑7基、中世以降の溝(SD01～SD04)、近世以降炭焼き窯(SY01)1基が検出された。

平成6年度は低湿地に臨む南向きの緩斜面を調査し、縄文時代前期土器片が南西側にまとまって出土した。土坑は3基確認された。近世以降の炭焼き窯がⅡ層から検出された。その他に旧石器時代のブロックが確認され、Ⅲ層からVa層間に3時期の石器が出土している。

平成7年度は断層による凹地のある北向き緩斜面の調査が行われ、縄文時代の土坑1基と旧石器時代の礫群・炭化物集中部Ⅲ層とV層のブロック群が発見された。

(4) 基本土層 (第4図、第2表)

I層 黒色土層(表土)	II層 柏原黒色火山灰層	III層 暗褐色土層(モヤ層)
IV層 黄褐色ローム層	Va層 黒色帯漸移層	Vb層 暗褐色土層(黒色帯)
VI層 黄褐色ローム層	VII層 赤褐色スコリア層	

II層からIII層にかけて縄文時代土器と平安時代の土師器片・須恵器片が出土している。

溝(SD01～SD04)と炭焼き窯はII層から検出、土坑はIII層上面からIV層にかけて検出された。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

土坑(図版96、第25表)

上ノ原遺跡では土坑は4類に分類される。いずれの土坑も遺物は伴っていない。

第1類 形状円形で浅い楕円状の土坑である。この遺跡ではSK02・SK09・SK13にあたる。SK09とSK13は形状が若干不定形である。これら土坑は調査範囲の北西側に位置するが、規則性は見出せない。大きさも一定せず性格不明の土坑である。

第2類 形状楕円形、底面隅丸長方形、断面Y字状の深さ118cmの土坑がこれに類する。この遺跡ではSK12にあたる。断面上部は広がるが、その下からは箱型である。長軸に比べ短軸が土坑内で狭く、いわゆる「Tピット」に類する。小動物等の陥穴と思われる。遺跡の南東側(IV-G)の緩斜面上に単独で検出された。

第3類 形状隅丸長方形で、断面箱形の深さ1m以下のやや深い土坑である。SK05がこれに類し、遺跡北西中央部(III-E)に位置する。

第4類(土坑分類第1類) 形状隅丸長方形で、底面中央に逆茂木痕の小ピットを有する土坑である。上ノ原遺跡ではSK01とSK11がこれにあたる。遺跡の北西端の緩斜面に位置し、SK01とSK11は約33mの間隔が開くが長軸は北西側に向き、ほぼ同じ標高に位置する。西岡A遺跡土坑第1類に相当し、陥穴土坑であろう。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	分類	備考
SK	1	1.27×0.85	96~150	N-33°-W	1	
SK	2	1.12×0.80	23	N-59°-W	2	
SK	5	0.90×0.68	84	N-37°-W	4	
SK	9	1.52×1.48	43	N-44°-W	2	
SK	11	1.08×0.81	90~147	N-24°-W	1	
SK	12	1.12×0.80	118	N-84°-W	4	
SK	13	0.76×0.70	24	N-70°-E	2	
SP	1	1.57×1.27		N-11°-W		
SY	1	5.56×2.14		N-16°-E		SK10変更 埋没約1.04m 炭焼き窯

第25表 上ノ原遺跡 土坑属性表

2 遺物

土器(図版97-1~14、第26表)

- 1は表裏縄文系土器群の表縄文胴部破片と思われる。内面に指頭圧痕が残るL R単節縄文の土器である。
- 2は楕円押型文である。楕円文は細かく、胎土に繊維など含まれないが焼成温度がやや低く、押型文系土器群の中では時期の新しい細久保式の土器と思われる。
- 3・4は条痕文系土器群の土器である。繊維が多量に含有し、4は胎土に粗い透明な石英粒が多量に含有している。3は単節縄文、4は無節縄文を押圧したものと思われる。
- 5~7・14は前期前半の土器である。5は堅固で器壁は薄い。6と7は数量の繊維を含有している。7は平行沈線文が菱形を呈すると思われる。これらは有尾式・黒浜式併行期の土器群と思われる。
- 14は繊維が多量に含有した複節(RLR)縄文全面施文の土器である。
- 8~13は縄文前期後半前葉の土器群である。8~10は同一個体で胴部キャリパー状を呈する。11・12も同一個体で隆帯の上に沈線を施している。13は浮線文に半截竹管の沈線が施されている。

図版番号	図名	整理番号	遺構・区画番号	遺物番号	実測寸法	小計寸法	出土層位	文様	部位	文様構成	特徴	胎土	色調(外)	繊維含有	接合番号(整理番号)	備考
図版97	3	1950 IV-R	6	1	IV RA07	組	高縄文	胴部	表縄文(片)	...	粗い白色破片有	1998	表裏縄文系
図版97	2	1997 IV-M	16	4	IV MA01	目	押型文	口縁	押型文(楕円文)	...	石灰粒多量	有		右側から変更
図版97	3	1964 IV-H	182	3	IV HA02	目	縄文	胴部	縄文	...	粗い砂粒多量	有		右側から変更
図版97	4	23 I-X	22	5	I XM12	組	条痕文	胴部	条痕文	...	石灰粒多量	有		
図版97	5	6 I-X	5	7	I XM14	組	竹管文	胴部	コンパス文	...	砂粒多量	6		
図版97	6	276 III-D	1	6	III D02	組	竹管文	口縁部	コンパス文	...	砂粒含有			
図版97	7	276 III-D	4	5	III D01	組	竹管文	胴部	半截竹管文	...	砂粒多量			
図版97	8	279 III-D	5	5	III D01	組	縄文	胴部	半截竹管文兼羽状縄文	...	砂粒含有			
図版97	9	279 III-D	5	5	III D01	組	竹管文	胴部	半截竹管文兼羽状縄文	...	砂粒含有	276		
図版97	10	279 III-D	5	5	III D01	組	竹管文	胴部	半截竹管文兼縄文	...	砂粒含有			
図版97	11	24 I-X	24	14	I X13	組	縄文	胴部	半截竹管文兼縄文	...	粗い砂粒多量			
図版97	12	36 I-X	36	10	I X19	組	竹管文	胴部	半截竹管文兼縄文	...	粗い砂粒多量			
図版97	13	16 I-X	16	10	I X13	組	竹管文	胴部	半截竹管文兼縄文	...	粗い砂粒多量			
図版97	14	7 I-X	7	2	I X014	組	縄文	胴部	縄文(点)	...	小石まじりの粗い砂粒多量	有	7・8・10・12・14・15・17~22・36	

第26表 上ノ原遺跡 縄文時代土器属性表

第3節 近世以降の遺構

遺構

(1) 炭焼き窯(SY01)(第22図内)

調査区のほぼ中央(IV-A)に位置し、急斜面を利用して窯が設けられている。形状は長方形で長さ5.56m、幅2.14m、底面は平らである。底面には炭化物層が10cm以上も堆積していた。近世以降の炭焼き窯の形態をしている。

(2) 溝(SD01～SD04) (第22図内)

調査範囲の北西端に4本の溝が検出された。北西側から南東方向にほぼ平行に走りSD01と02は途中で2股に分かれる。深さは約30cmと浅く1片の陶磁器片のみが溝内で出土した。近世以降の溝と思われるが、性格や時期は明確ではない。

第4節 まとめ

上ノ原遺跡の縄文時代は、僅かに点在する陥穴土坑の配置や、伊勢見山から延びた尾根上の小丘陵の末端部で最も標高の低い地点であることなど、陥穴による狩猟にはあまり適した地点ではなかったと思われる。また、縄文時代の土器も図版97-14のように1個体がまとまって出土しているが、遺物量も少なく、石器も出土しておらず、小キャンプ地の移動の通過地点ではないかと思われる。

第7章 大久保南遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

大久保南遺跡の所在地は長野県上水内郡信濃町大字柏原字上ノ原204他である。野尻湖南西側にあたる伊勢見山から北西に延びる尾根上の小丘陵に立地する。上ノ原遺跡の100m南東側にあたり、上ノ原遺跡の南東部と同一小丘陵上に位置する。旧石器時代は環状ブロックや礫群など調査区の南西側と北西側の支脈上から出土している。しかし、縄文時代以降の遺物は縄文時代前期羽状縄文土器片が出土し、遺構は縄文前期と思われる土坑が3基検出されたのみである。

2 調査と概要

(1) 調査範囲と調査方法（第23図）

調査区は上ノ原遺跡の南東部分にあたり、調査区の設定にあたっては上ノ原遺跡の延長として大々地区を設定した。調査区はIV A・B・F・G・L・M地区にあたる遺跡範囲の西端に設定された。調査面積は、約4500㎡であった。

調査は、表土剥ぎ後、重機によるトレンチ調査を行った。旧石器時代の遺物の出土はあるものの、縄文時代以降の遺物についてはS Q01以外では出土せず、土坑も時期不明のものが3基検出したのみであり、縄文時代以降の調査は終了した。

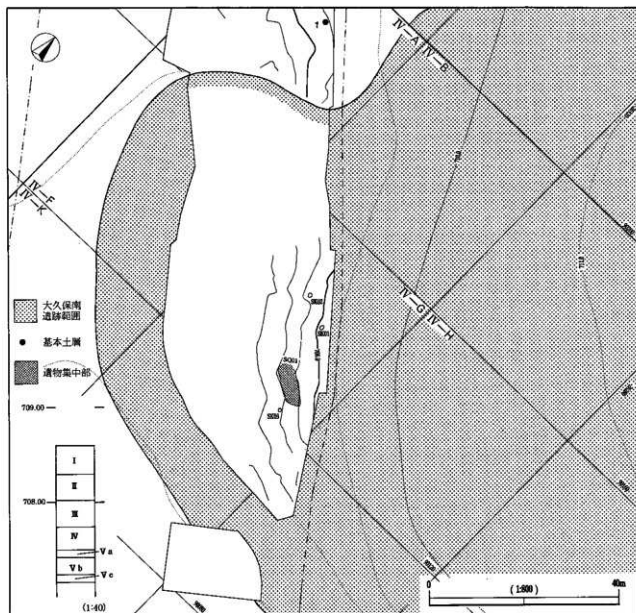
(2) 調査経過

(日誌抄)

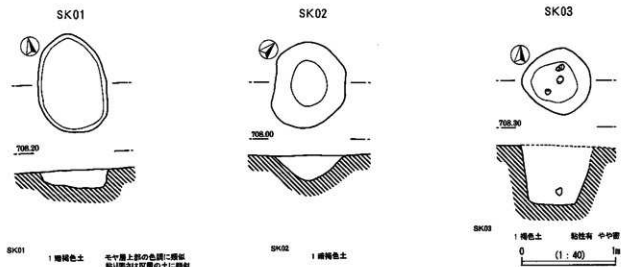
H7年度

4月5日	調査区東半分Ⅲ層の削り	26日	S K01・02完掘
11日	VI-LMへ重機によるトレンチを入れる	31日	SH03（黒曜石集中）発見
17日	調査区東半分Ⅲ層下～IV上位に礫群を伴うまとまりがある	6月7日	文化庁岡村調査官・小林調査部長・原文化課指導主事・信濃町中村さん視察・指導
5月2日	IV-Mゴックス北半Vの直上から台形様石器（頁岩）出土	11日	信濃町中村さん・野尻湖人類考古グループ来跡
8日	石斧出土	12日	S K03完掘 沼津市望月さん視察
18日	写真測図によるコンタとり	20日	信濃町100号石斧を出す
19日	一時上ノ原のマスぼりをする 上ノ原遺跡同時に調査	27日	パレオサーベ辻本さん視察・指導
23日	ナイフ出土 杉久保型ナイフ（IVL-1）が出る	7月13日	一時上ノ原を掘る 上ノ原遺跡同時調査
24日	黒曜石片散漫に出土 石斧・石斧片・黒曜石・ナイフ等出土	25日	SH04を検出
		8月8日	SH06・SH07を検出
		12日	IY～IVAの半円状のブロック全面清掃
		13日	全景写真撮影

(3) 調査結果の概要



第23図 大久保南遺跡 全体図・遺構配置図



第24図 大久保南遺跡 土坑

縄文時代以降の遺構は土坑3基確認され、縄文時代前期前半土器1個体が出土している。

(4) 基本土層 (第4図、第2表)

I層	Hue7.5YR2/2 黒褐色土	表土層				黒ヌカ下部に3%混在
II層	Hue7.5YR2/1 黒色土	柏原黒色火山灰層	粘性なし	Vb層	Hue7.5YR3/4褐色土	粘性有り しまり極良 黒ヌカ上部に7~10%混在
III層	Hue10YR3/2 黒褐色土	モヤ層	粘性なし 締まり やや不良	VI層	Hue10YR6/8 黄褐色土	粘性有り しまり非常に良 黒ヌカ上部に7~11%混在
IV層	Hue10YR5/8 黄褐色土	粘性やや有り 締まりやや 良	IV層上部にIII層混在	VII層		赤色スコリア層
Va層	Hue7.5YR4/6褐色土	粘性なし 締まりやや良	白ヌカ上部に5%混在			

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

本遺跡では、縄文時代以降の遺構は3基の土坑のみが検出された。その他に遺物集中部(SQ01)が検出された。

(1) 土坑 (第24図・第27表)

SK01は調査範囲中央東端(IVGN10区)に位置し、規模1.05×0.74m平面形態楕円形で、検出面はIV層であったがIII層から検出されていた可能性がある。したがって、深さ20cmであるが実際は40~50cmほどの深さがあったものと推定される。覆土は暗褐色土で、黄褐色土ブロックを含まない。土坑内外に出土遺物はない。

SK02はSK01より北西8mに(IVGJ08)位置し、規模0.92×0.84mの平面形態ほぼ楕円形で断面形態は擋鉢状である。深さ27cmでIV層検出であるが、SK01同様III層から検出された可能性があり、深さ40~50cmあった可能性がある。したがって覆土は暗褐色土である。土器は土坑および土坑周辺から出土していない。しかし、旧石器時代の遺物と思われる黒曜石片2片が混入している。

SK03は調査区の南東側(IVGG19)に位置し、規模0.72×0.70mのほぼ円形で断面形箱型を呈する。深さは62cmで、III層下面より確認した。土層が明確でないため半割して底面を確認。底面はVII層を掘り抜いていた。覆土内に礫が3点混在し1点は焼け石であった。

土坑内には旧石器時代の遺物が覆土中から出土しているのみである。いずれもIII層から検出されており、縄文時代の土坑と思われるが、明確な時期は不明である。SK01とSK03の間にSQ01が位置し、関連すると思われる。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	分類	備考
SK	1	1.05×0.74	20	N-0°	2	
SK	2	0.92×0.84	27	N-2° -W	2	
SK	3	0.72×0.70	62	N-90° -W	3	

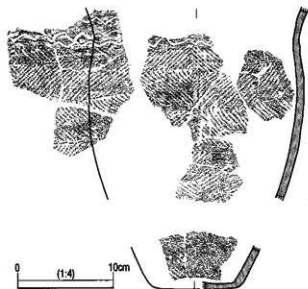
第27表 大久保南土坑属性表

(2) 遺物集中部

遺物集中部（SQ01）は、縄文時代前期中葉の1個体の土器片（47片）がやや集中して出土した。SQ01はSK03の北西4m(IVG18・19)付近ゆるい斜面に位置する。破片数が少ないがやや大きめの破片が多い。出土層位はⅡ層からⅢ層にかけてである。

2 遺物

土器（第25図）



第25図 大久保南遺跡 SQ01出土土器

縄文時代以降の遺物は、ほとんどが縄文時代土器片であり、平安時代土師器杯の土器片が数点混入していたのみである。

第25図はSQ01出土の1個体の土器である。口縁文様帯上部が欠損しており破片数が少なく、器体の1/3は欠損している。口縁部文様帯が太い沈線の波状文で、胴部は菱形羽状縄文が施文されている。縄文原体長は約4cmあり長い。推定器形は口縁部文様帯部分が緩く外形する器形と思われ、胴上半部は上部でやや膨らみを持ち平底に至る。胎土は繊維を含有する。時期は縄文時代前期中葉有尾式と思われる。

第3節 まとめ

本遺跡の縄文時代以降は、3基の土坑と第25図の1個体がまとまって出土していた（SQ01）のみである。遺物量や少ない遺構数から、小キャンプ地の移動の通過地点ではないかと思われる。

縄文時代土器は、SQ01の1個体のみであった。時期は前期中葉の有尾式土器と思われる。SK01とSK03はSQ01の約5m離れたところであり、土坑と土器は時期的に関連があると思われる。

第8章 東裏遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

所在地は長野県上水内郡信濃町大字柏原東裏405ほか。信濃町野尻湖南西側の伊勢見山山麓斜面部に位置する。伊勢見山北東方向に沢が見られ、南東方向に流れる。本遺跡は野尻湖の南東約1kmに位置し、国道18号線と伊勢見山に挟まれた広い平坦地帯に広がっている。調査は平成5年度から平成7年度まで行われ、調査区を便宜的に1区から3区に分割して調査は行われた。遺跡南側は、伊勢見山中腹の柏原スキー場と伊勢見山南東部の湧水地帯である。中央部は伊勢見山北西麓の平坦部である。また、調査区の北側は凹地面であった。

2 調査の概要

(1) 遺跡範囲と調査方法（第26図～第30図）

高速道路の長さ約900mにわたり遺跡範囲であった。調査区内北西側よりセンターの規定の大々地区をI区～VII区に区切り、調査を行った。調査の都合上、南東側の平成5年度調査の伊勢見山中腹柏原スキー場リフト橋脚部分（VI-D・E・I・J区）を1-A区とし、伊勢見山南東谷部湧水地帯（VII-P・Q・R・U・V・W区）を1-B区とした。また、伊勢見山西麓の平坦部を2区、北端の凹地を3区として調査は行われた。

調査は平成5年度1-A区と1-B区と2区の大々区V区・VI区の部分の調査が行われた。また、平成6年度は2区の北西端部から3区にかけて調査は行われた。平成7年度は1区の伊勢見山から南西に延びる尾根上の斜面（旧柏原スキー場）と伊勢見山西麓の湧水流路を挟んだ平成5年度調査区に続く部分で行われた。

遺物取り上げは手取りと網こうそくによる取り上げが行われた。手取りの取り上げは、中グリッドを4分割にして取り上げたものと、中グリッドで一括して取り上げたもの、遺構別に取り上げたものなど、それぞれ調査年度別、遺構別等によって異なる。そのため、縄文時代以降の遺物に関する統計などは中グリッド別に記載することとした。

(2) 調査経過

(口誌抄)

H5年度	5月6日	信濃町教育委員会中村さん視察・指導
4月6日 重機による除雪	7日	2区表土剥ぎ
13日 表土剥ぎ センター杭にそってトレンチを入れる	11日	2区重機による表土剥ぎ
19日 発掘開始式 作業開始	13日	3区掘り下げ終了
20日 3区柏原黒色火山灰層の掘り下げ 黒耀石数点・土師器数点出土	18日	2区重機による表土剥ぎ 焼土跡周辺を検出 平安の遺物が集中
23日 南側をモヤ上面で検出作業 モヤ上面直上で縄文土器片を採取		モヤ層で有舌尖頭器出土（草創期） 南側で20m巾をもって平安期～中世の遺物の集中あり
2区南側幅パイにそってトレンチを入れる		

5月19日	2区焼土跡調査 灰釉焼出土(三角高台)	12日	2区の空掘・空掘終了
20日	2区SB01 検出状況写真撮影 SB02 検出トレ ンチを入れる 集石の列を検出	16日	明治大学矢島教授視察
24日	2区東南端部礫群周辺調査	9月10日	野尻湖調査団人類考古グループ矢島氏・中村氏視 察
26日	2区礫群西で「剥片尖頭器」新たに出土 計4点	16日	明治大学安藤教授他5名視察・指導
6月10日	SB02・SK01から調査 旧石器遺物集中地点 調査	22日	国学院小林達雄教授現地指導
11日	日向林B・セツ栗現地説明会	27日	東裏から針ノ木開試掘終
14日	SB02終了	10月8日	新潟県埋蔵文化財調査事業団視察
18日	戸沢充則明大教授視察・指導	15日	柏原小学校6年生見学・発掘体験学習
26日	野尻湖調査団地質グループ(信大赤羽教授・近藤 野尻湖博物館学芸員)の現地見学	22日	藤岡市教育委員会豊部氏・中島氏視察 信濃町有 線放送
7月14日	公園平野課長視察	25日	中野市中央公民館歴史講座見学
15日	1区重機による表土剥ぎ	29日	神奈川埋文視察
21日	佐久市埋蔵文化財センター須藤氏・御代田町教育 委員会堤氏見学 SB01掘り下げ	11月4日	信濃中学2年生見学
22日	SB02検出	12日	1区スキー場・2区谷部空掘
27日	SB03検出	29日	岡山大学橋川一徳氏見学 プレハブ北でSKをい くつか確認
29日	同志社大学松藤和久氏視察・指導	30日	プレハブ北で炭化物・鉄製品・羽口等出土
30日	野尻湖博物館中村氏による地質についての指導	12月1日	プレハブ北の遺物出土地をSB03とする
8月2日	野尻湖博物館中村氏による地質についての指導 SB02・03掘り下げ	2日	1区・2区空掘
3日	文化庁岡村道雄主任調査官視察・指導	10日	閉所式 作業終了
平成6年度		13日～28日	冬期整理
1月5日～3月18日	冬期整理	18日	SB05完掘
11月4日	表土剥ぎ 作業開始	21日	SB04検出
14日	作業員が入る	12月1日	谷側黒色土中より縄文早期土器集中区を検出
15日	SB03検出写真	2日	SB04・06完掘
16日	SB03・05掘り下げ開始 SB06検出	7日	航空測量
17日	SB03完掘	13日	作業終了

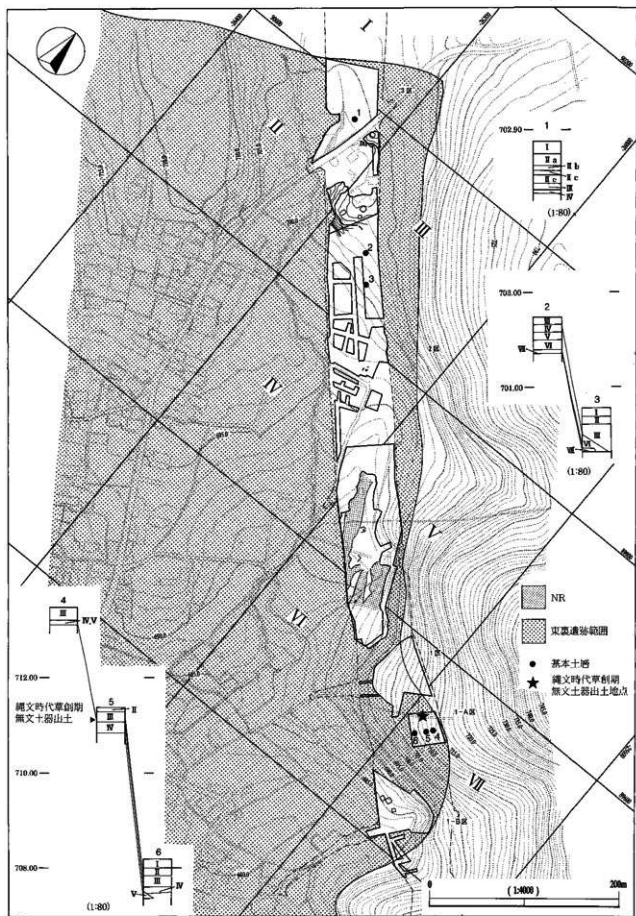
(3) 調査結果の概要

縄文時代では1-A区から縄文時代草創期の無文土器と搔器と槍先形尖頭器などの石器が同一層内から出土した。1区や2区からは縄文時代表裏縄文土器・押型文土器・無文土器・条痕文土器など遺構を伴わない遺物が多量に出土している。また、条痕文と羽状縄文土器が出土した遺物集中部(SQ)2ヶ所と集石(SH)1ヶ所が確認された。

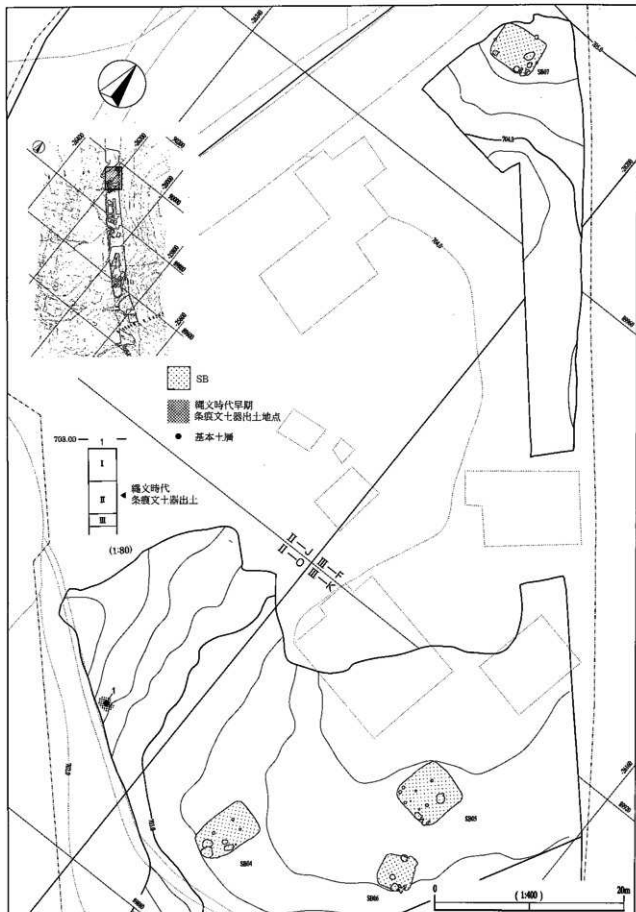
また、古墳時代では、2区から土器が2個体潰れた状態で出土した。

平安時代では、1区から住居址が3棟と2区から住居址6棟と建物址1棟が検出された。建物址の南側には平安時代の土坑が6基検出されている。

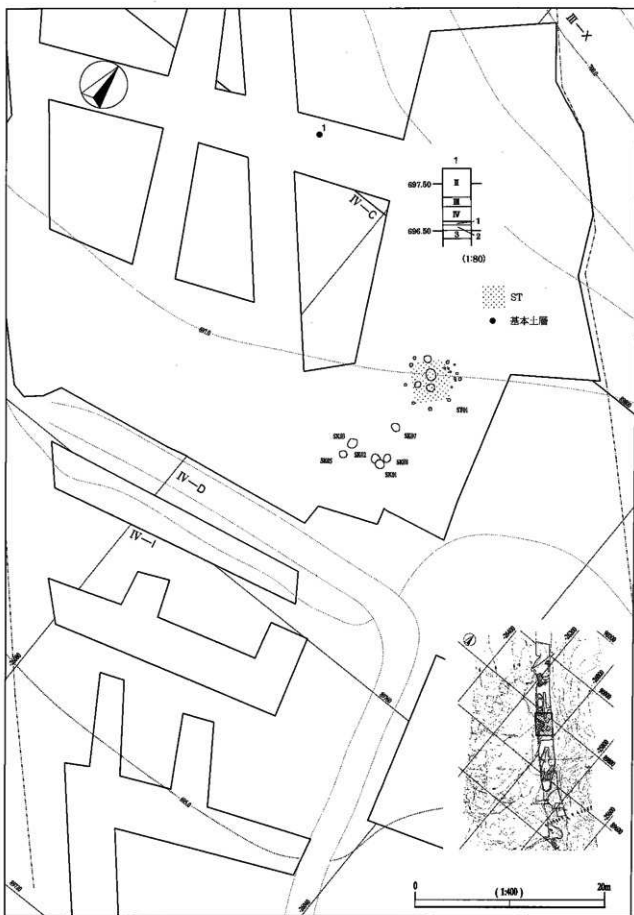
また2区では自然流路が4列検出された。



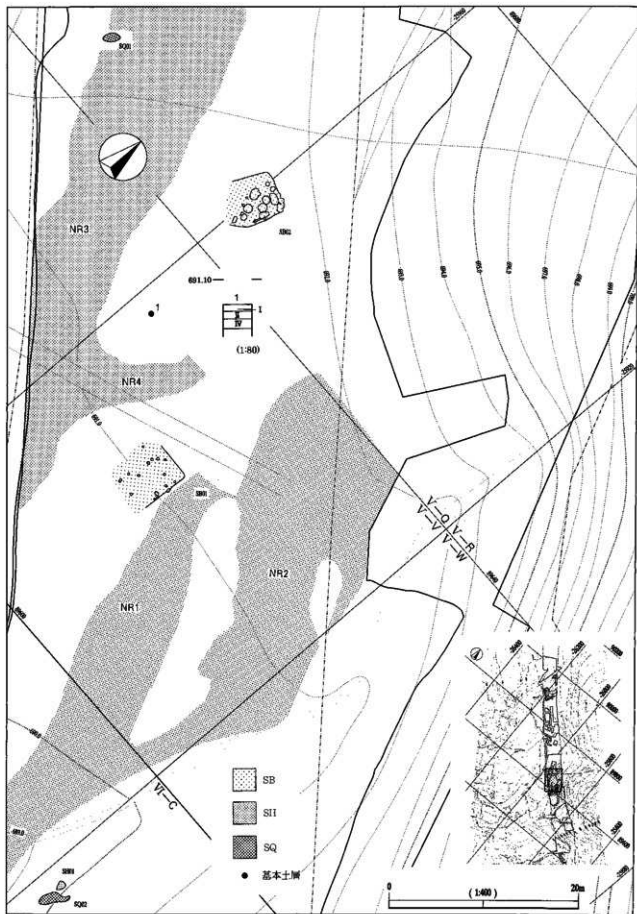
第26図 東裏遺跡 全体図・基本土層図



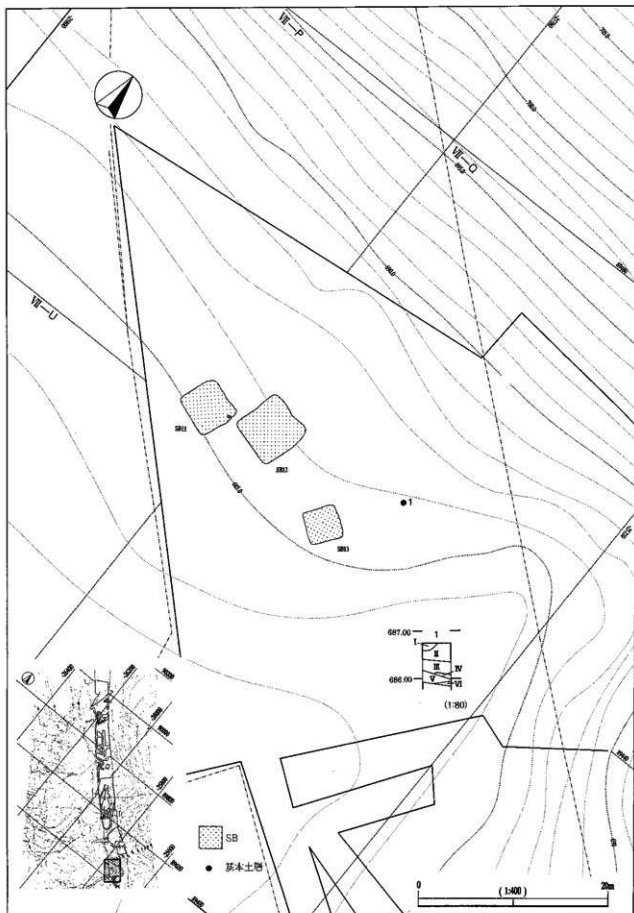
第27図 東裏遺跡 遺構配置図 1



第28図 東裏遺跡 遺構配置図 2



第29図 東裏遺跡 遺構配置図 3



第30図 東裏遺跡 遺構配置図 4

(4) 基本土層 (第4図、第2表)

I層	黒褐色土 (Hue5YR3/1)	表土層粘性なし軟質	
II層	黒色土 黒色砂質土 (柏原黒色火山灰層)		
1-B区			
II1層	黒色土 (Hue2.5YR2/1)	粘性なし 締まりやや不良 平安時代遺物出土層	土層
II2層	赤黒土 (Hue10R2/1)	粘性ややあり 締まりやや良	II5層 暗赤褐色土 (Hue5YR3/2) 粘性やや有り 締まりやや良 縄文時代土器出土層
II3層	黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)	粘性有り 締まりやや良	II6層 暗赤灰色 (Hue2.5YR3/1) 粘性有り 締まり良
II4層	黒褐色土 (Hue5YR2/2)	粘性やや有り 締まりやや不良 縄文時代土器出土層	モヤ層縄文時代土器出土層
3区			
IIa層	黒色土 (Hue7.5YR2/1)	サクサクで締まり良 軽石1mm粒2%混入 古墳時代土器出土層	まり良 粘性有り 縄文時代草創期無文土器・石器出土層
IIb層	黒褐色土 (Hue7%5YR2/2)	茶褐色化 軽石粒2%混入	IV層 黄褐色土 (Hue10YR5/6) ソフトローム層 水成堆積を示し軽石礫ブロック状に混入 粘性締まり有
IIc層	暗褐色土 (Hue7%5YR3/4)	灰色化 粘性有り 軽石粒2%混入 締まり良	V層 褐色土 (Hue10YR4/6) 赤色スコリアが主体青ヒゲ含有で堅緻 風成堆積層(黒色帯)
IId層	黒色土 (Hue7%5YR2/1)	赤褐色化した火山灰 締まり良 粘性有り	VI層 明褐色土 (Hue7%5YR5/6) 黄褐色ローム層 ローム塊多量に含む 粘性有り 締まり良
IIe層	黒色土 (Hue7%5YR2/1)	青灰色化 バミスほとんどなく3~10mm径の軽石礫2%混入 締まり良 性有り	VII層 赤褐色土 (Hue7%5YR5/6) 赤スコリア質火山礫層 (赤スコ) 固結度高い
II層	黒褐色土 (Hue7%5YR4/2)	II~IV層の漸移層 モヤ層1%の軽石礫含有 締	2区では断層が見られる

1-B区では1993年度調査時に、伊勢見山南東の斜面下に弧を描くようにII5層からII6層にかけて33基の焼土跡があると報告した(1994 長野県埋蔵文化財センター)。その後、信濃町の各遺跡でも確認され、検討した結果、火山灰焼土やスコリアが窪地にたまった跡であると確認された。焼土跡は遺構でなかったことを訂正する。

1区ではII層が1~6層まで分層される。II5層やII6層では表裏縄文・押型文・無文の縄文土器が多数出土しており、その他II層からは貝殻腹縁文・条痕文の縄文土器や平安時代の土師器が出土している。また平安時代の3棟の住居址が発見されている。

2区では表土下は削平され、II層下が褐色中部野尻湖ローム層となっている。II層からは平安時代の竪穴住居が検出された。2区から3区に延びる河川による凹地の縁辺ではII層が確認された。II層からは古墳時代前期の土器片が散在しており、また下方から縄文時代早期の絡条体圧痕文の巡る条痕文の1個体と縄文前期初頭の縄文土器1個体、集石1基が発見された。その他、平安時代の住居址が6棟と建物址が1棟検出された。また、2区では自然流路が4本確認されている。

3区では北東端表土直下で中部野尻ローム層がみられ、遺物は出土しなかった。I層からIIa層では中

世陶器片と古代土師器片がみられ、Ⅱa層から古墳時代前期片がみられ、Ⅱe層からⅢ層にかけて縄文時代早期条痕文土器片が微量に出土した。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

(1) 集石 (SH) (図版147)

S H 0 1 は伊勢見山北西山麓のⅥ-C11区 (2区) で検出された。径0.3×0.3mに拳大の垂角礫がたまり若干その南側に集石の礫が分散する。出土層位はⅡ層、その南側にS Q 0 2 が検出されている。礫は赤化しており、集石が被熱を受けていると思われる。S Q 0 2 と関連がある集石と思われる。

(2) 遺物集中部 (SQ) (第29図)

1. S Q 0 1 (図版147)

伊勢見山北西山麓にあたるV-P23区 (2区) で検出された。確認面はⅡ層で、長さ35cm、幅30cm、厚み10cmの石皿 (図版145-157) を検出し、その南西側15cm離れたところで、絡条体圧痕のある条痕文一帯体が (図版124-345) が投げ捨てられた状態で出土。土器は底部を石皿側にし、口縁部は南西部分長さ0.7m幅0.4mに扇形に出土。周辺には他の遺物は検出されなかった。縄文時代早期後半の遺物集中部と思われる。

2. S Q 0 2 (図版147)

伊勢見山北西山麓のⅥ-C11区 (2区) で検出。遺物は図版124-346の羽状縄文土器1個体が潰れて斜面からずり落ちるように出土した。確認面はⅡ層で、規模は3m×1mである。土器は縄文時代早期終末から前期初頭にかけての上器であり、集石S H 0 1 がその北側に検出されている。集石で調理に使用された土器と思われる。その周辺からは他に遺物や遺構は検出されなかった。

2 遺物

(1) 土器 (図版99-3~14・図版102~125、第28~30表)

1. 草創期無文土器 (図版99-3~14) (第28表)

12片出土している。3~14は、1区伊勢見山南西斜面 (Ⅶ-F区) に黒曜石製の石器と槍先形尖頭器と共伴して出土した。出土層位はⅢ層下部である。器厚は3mm~8mmで、厚みには差がある。にぶい黄褐色の3と4は焼きがよく不純物も少ない同一個体と思われる。3は直立の口縁部で、口唇部内側に刻みにも見える痕跡があるが、胎土の表面に細かいひび割れがあり、その痕跡の可能性もあり明確でない。4は底部であろうか、丸みを持ち内湾する。底部とすると接合面が見当たらず、器形の明確でない破片である。5~14は浅黄褐色の胎土が類似する個体である。胎土は不透明白色の微細粒が少量含有する。繊維の混入はないと思われる。厚さが安定せず、12は厚く、どの部分にあたるか不明である。9は内面指頭圧痕のような痕跡があり、底部の可能性もある。土器片は細片であり、器形も不明である。

図版番号	図No	遺物番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	小アット名	状態	部位	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	欠損部位	遺存度	備考	
図版99	1	10049	Ⅶ-F	3550	Ⅲ	Ⅶ/FK15		Sc	Ob	土器	37.2	26	12.7	8.31	長さ	75		
図版99	2	10049	Ⅶ-F	3557	Ⅲ	Ⅶ/FK16		Ps	Tu	土器	73.8	23	8	13.86	長さ	75		
図版99	3	10057	Ⅶ-F	3570	Ⅲ	Ⅶ/F15			無文	土器								
図版99	4	10058	Ⅶ-F	3577	Ⅲ	Ⅶ/F15			無文	土器								アツアリ

第28表 東裏遺跡 草創期無文土器・石器属性表 (1)

図版番号	図No.	遺物番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	小ナリノ名	経緯	部位	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	穴径深取	遺存状況	備考
図版99	5	10866	Ⅷ-F	3576	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	6	10870	Ⅷ-F	3586	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	7	10871	Ⅷ-F	3586	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	8	10874	Ⅷ-F	3584	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	9	10875	Ⅷ-F	3584	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	10	10873	Ⅷ-F	3581	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	11	10873	Ⅷ-F	3583	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	12	10870	Ⅷ-F	3578	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	13	10872	Ⅷ-F	3580	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							
図版99	14	10871	Ⅷ-F	3579	Ⅷ	ⅧF115	無文	胴部		土器							

第28表 東裏遺跡 草創期無文土器・石器属性表 (2)

2. 草創期終末～早期前半 (図版102～123)

表裏縄文系の土器は全体の約半数近い土器片が出土している (第31表)。押型文土器は全体の約11%出土している。

a 表裏縄文 (1～175) (第16章第2節の分類参照)

胎土は貫ノ木遺跡の表裏縄文土器と違い、黒雲母白色透明石英を主体的に含むものが約80%を占める。胎土は黒褐色・暗褐色のものが多い。

器厚は厚いものが多い。口縁部の器厚の厚さは3.5mm～9.5mmの範囲のものがあり、6.5mmのものが約35.近くを占める。

施文具は、単節縄文「LR」より大半を占める。しかし文様によっては「L」や「R」の無節縄文も若干施文原体として用いられる。また、「RL」と「LR」や「R」と「L」のように撚りの方向の異なる原体を用いた個体もある。原体の長さは約2.0cm～2.5cm位である。中には2cm以下のものもあるようである。

施文方法・施文効果

表裏縄文は、口縁部破片を分類した。

第1類 (1～37、150～160)

縄文が一定方向から施文されず、羽状のもの、多(異)方向から施文されたものをこの類とする。この類は本遺跡では非常に多い。

口縁部形態は先細りする17・151を除いて、角頭状もしくは丸頭状のものが大半を占める。22・25・26は頭部が若干肥厚となる。器形は口縁部が直立するものや緩く外反するものが多く、やや「く」の字状になるもの150・152や外反の強いものは、17・34・151・157・160である。

文様は全体の文様構成が明確なものが少なく、157・160や34・37のように羽状になるものは少ないと思われる。

第2類 (38～55、161～163)

内外面に縄文を施文後、口唇部下に外面と口唇部下の間を埋めるように施文されたものをこの類とする。口縁部形態は角頭状あるいは丸頭状のものが多く、先細りするものはない。頭部が肥厚するものもない。施文の縦走するものは(「RL」)38・47・49・53・161～163、横走するもの(「LR」)は48・50、縦位に施文されたもの(「LR」)は51・52・54・55である。

第3類 (56～69・164・166・167)

外面の縄文が縦方向に上が走る「縦走縄文」をこの類とする。

口縁部形態は角頭状あるいは丸頭状である。頭部が若干肥厚するものは57・63、口縁部が「く」の字状に屈曲するのが56、他は直立か緩く外反するものが多い。

175は底部が欠損する個体で、口縁部は口唇部で若干外反するものの胴部はあまり張らず底部にいたる。底部は丸底と思われる。外面口唇部下にわずかと胴部内面に指頭圧痕が残るが、指頭圧痕によって大きくくぼむ事なく、軽くなでて平滑になっている。内面口縁部は「RL」の原体で、横位施文に2段、やや

横走ぎみに1段、長さ4cmほど施文されている。推定口径は約29cm、推定器高は約30cmである。輪積みの粘土紐幅は約5cmで口縁部は幅3cmの粘土が2段接合され、全体で約7段の輪積みで作成されていると思われる。輪積み痕が残り、接合面には澱口縁風の痕跡が残る。1片ずつの胴部土器片は約5cm方形であり、口縁部と底部付近の土器片は約3cmあるいは6cm方形の破片がおおく、特徴的である。

第4類 (71・72・74～94、168・169)

外面縄文が横方向に条が走る「横走縄文」をこの類とする。

角頭状の口縁部が多く、丸頭状も若干ある。頭部が肥厚するものはない。口唇部に縄文を施文して明確な角頭状の口縁部をしているものもある(71・82～84・88・89・92・174)。口縁部は緩く外反するものが主体的である。縄文原体は「LR」が主体的で、88は無節「L」、90は内面が「LR」で外面が「RL」の縄文と思われる。

第5類 (95～103・105・106・170～172)

外面斜縄文を縦方向に施文した「縦位施文」をこの類とする。

角頭状の口縁部が多く、丸頭状も若干ある。頭部が肥厚するものはない。口唇部に縄文を施文して明確な角頭状の口縁部をしているものもある(99・106・171)。口縁部は緩く外反するものが主体的である。95は口縁部が「く」の字状に屈曲する。縄文原体は「LR」が主体的で、96・172は「RL」、102は無節「L」、105は無節「R」である。95と97は器厚が薄く、97は内面に明確な指頭圧痕がある。

第6類 (107～116)

外面斜縄文を横方向に施文した「横位縄文」をこの類とする。

角頭状の口縁部が多く、丸頭状(116)も若干ある。頭部が肥厚するものは107・113・116である。口唇部に縄文を施文して明確な角頭状の口縁部をしているものもある(108～113)。先細り口縁としては111と115である。口縁部は緩く外反するものが主体的である。107は口縁部が「く」の字状に屈曲する。116は口縁部から胴部にかけて「S」字状にカーブしている。116は口唇部したの文様が明確でなく、第7類の口縁部無文の類に属する可能性もある。縄文原体は「LR」が主体的で112は無節「R」である。

第7類 (73・104・117～127、173・174)

外面特殊な文様をこの類一括とした。本遺跡ではこの類は、外面口縁(口唇)部下が無文である。特に117～119、123～127・173は1cm以上の無文帯を作り出している。縄文原体は「LR」が主体である。118・121は無節の「R」?であろうか。無文帯の下が横走縄文のものは117、縦走するものは118、他は縦位施文である。

口縁部形態は「く」の字状に激しく屈曲するもの(121・122・125・127・174)が多く、口唇部も先細りのものが多い(121・123・125・173)。

その他胴部表裏縄文 (128～149)

ほとんどが胴上部の破片である。134・139・144が胴部中央部分まで施文された破片である。口縁部のみ内面に施文された口縁部破片が多い中、口縁部から胴部中央付近まで施文された文様は本遺跡にはなく、この3点のみである。

b 押圧縄文(176～180)

176・177・178は同一個体と思われる。口唇部下に縄文を1本側面押圧しており、口唇部にも若干施文の痕跡がある丸頭状の表縄文である。原体は「LR」であろうか? 179と180は絡条体の単節縄文を押圧していると思われる丸頭状の縄文土器である。2点しかなく小破片のため詳細は不明である。

c 表裏澁糸文 (181)

粗い澁糸が表裏に施文された土器である。角頭状で口唇部にも施文されている。小破片のため詳細は不

明である。

d 惣糸文 (182)

交差する惣糸文と思われるが小破片なことと文様が不鮮明のため詳細は不明である。胎土は表裏縄文土器に類似する。

e 裏縄文土器 (183~185)

表面は縄文がなく、裏面に若干文様の痕跡があるが詳細は不明である。表裏縄文土器第7類の一部であろうか。口縁は先細りである。

f 表縄文 (186~257、224・225を除く)

胎土や縄文原体など表裏縄文と大きな差は見出せなかった。表裏縄文土器と分類方法は同じである。

第1類 (198~200・215・217)

表裏縄文第1類同様表面の縄文が羽状ないし多方向に施文されているものをこの類とする。

198は口唇部下が段(段帯状)を持つように屈曲しその部分に施文がある。200・217がこの類と思われる。199・200は「L R」の原体口縁下は横位施文して、その下は横走させている。また、200は口縁部が先細りし緩く外反する。215は原体が無節「L」で口縁部がやや先細りする。217は「L R」の原体で羽状に施文されている。口唇部は丸頭状に近く、施文はない。口縁部は緩やかに「く」の字状に外反する。

第2類 (201・202)

外面に縄文を施文後、口唇部下に外面と口唇部下の間を埋めるように施文されたものをこの類とする。

201は若干肥厚となる丸頭状の口縁部であり、202は角頭状の口縁部である。201の原体は「R L」、202は「L R」である。

第3類 (203~207・216・227~229・234)

外面の縄文が縦方向に上が走る「縦走縄文」をこの類とする。

口縁部は角頭状や丸頭状のものがあり、204・229は肥厚する。また口縁部は直立あるいは緩く外反するものが多い。文様原体は「L R」が多く、「L」が203・216・227、「R L」が204・207・228・229である。227は底部の丸底で胴部にふくらみはなく、胴部から自然に外傾する直立口縁部で、細長い器形である。推定口縁約6.5cm、高さ推定10.5cmの小型土器である。

第4類 (208・209)

外面縄文の条が横走する「横走縄文」のものをこの類とする。

208は口縁部が丸頭状で、緩く外反する形態であり、209は角頭状で、直立する形態である。原体はどちらとも「L R」である。

第5類 (208~215・230~233)

外面縄文が縦方向に施文した「縦位施文」をこの類とする。

口縁形態は角頭状と丸頭状であり、原体は「L R」がおおく、213は「R L」、213・215は無節の「L」、214は「R」である。233は口縁が肥厚で、口縁部は外反し、胴部は下半部でやや膨らみ砲弾状となり、底部は尖る。233の色調が他の土器と異なり若干黄褐色上に近い橙色であった。推定口径は18cm、高さは推定約23cmである。230の補修孔は焼成後の孔である。

その他 胴下半部表裏縄文・惣糸文 (218~226、232・234~236)、底部 (237~247)

g 表裏押型文 (258)

表裏に施文されている押型文はこの1個体のみである。

胎土は石英と黒雲母の細粒を多量に含有するザラザラした胎土である。表裏縄文の胎土に類似する。胴部下半部は2次的焼成をかなり受けており、文様が不鮮明である。口縁部付近は暗褐色であるが胴下半部

は明褐色になっている。口唇部に施文のある若干角頭状の口縁で、口縁部が緩い「く」の字状に外反し、胴部中央で僅かに膨らみを持つ器形である。内面は口唇部下に約1cm幅に帯状に横位施文されている。外面は縦位に密接施文されている。原体幅約2cm前後、約8～9本の線を交差させ細かい格子目を作成している。器厚は約7～9mm、輪積み幅約3.5～4cm前後。推定口径約22cmである。

h 押型文 (259～301)

259は別名キャタピラ文とも呼ばれている平行線状文である。原体幅約3cm。原体外周長軸に4本のやや太い溝を入れ、その上に間を均等において外周に横2本の溝入れ、押型文の原体としている。内面は輪積みの接合部に整形のための指頭圧痕の凹凸が激しく残っている。輪積み痕は下部の粘土帯に上部の粘土帯をはさむようにして接合している（PL43）。胎土は長石が多量に含有しており、色調はにぶい橙色である。器形は口縁部がやや丸みのある先細りで、直立し、胴部はわずかに膨らみを持ち、丸底に近い尖底と思われる。推定口径13cm。

260～272は格子目文である。

260の口縁部は丸頭状で緩く外反する。胴部は胴上部でふくらみを持つ。丸底に近い尖底と思われる。格子目は菱形の細かい文様である。原体が約2cm以下で縦位密接施文されている。胎土や色調は258に類似する。推定口径15.5cmである。261と262は粗い格子目文である。器形は外反し、胴部が張らない尖底である。特に262の外反度は強い。両者とも内面の指頭圧痕が残る。261は縦位密接施文であり、263は口縁部が横位施文でその下が縦位施文と思われる。264は平行線状文と格子目文の中間のような文様で、溝を縦横に交差させて原体を作成している。266・267・271は格子目にする溝を太く彫り、ボジ面を少なくして角の不明確な格子目を作成している。268・269はネガティブ楕円のような格子目である。

273と274は楕円文である。本遺跡中楕円文はこの2片のみである。

275～301は山形文である。

278・279・281は灰褐色で黒炭が含有していると思われる。胎土は細かく、不透明な白色粒が含有しているものが多い。内面と外面は非常に丁寧な光沢をもつようなナデ整形を行っている。山形文の器形には3種類あり、外反の強いもの（276）、緩く外反するもの（275）、底部から口縁部にかけて外傾するもの（277）に分かれる。276と278はやや受け口状に口唇部が内側に飛び出ている。文様は、275・276・278のように口縁部が1ないし2帯の横位施文でその下が無文帯を挟む縦位帯状施文のものと、口縁部から無文帯を挟む横位帯状施文のものがある（277）。山形文自体は1.5～2cmで、3～5本の溝を掘ったものがあり、278は2本の溝であり、289は2本の溝を掘ったものを2列横位に施文したために、文様がずれて菱形部分が出来てしまっている。

i 無文 (302～344)

無文土器の口縁形態には3種類が確認された。底部は341～344のように尖底である。

第1類 (302～310、314～331) 口唇部が内外両面から面取りをするように先細りさせ、口縁部が直立あるいは若干内湾したものの。

第2類 (311・312・332～339) 口唇部を面取りして角頭状にし、口縁部が直立したものの。

第3類 (313) 口縁部がゆるく外反するもの。

第1類 (302～310、314～331)

302のように明確に内外面に擦痕がある。ヘラ状工具で生えきの段階で器面整形を行った時、ミガキ整形のような擦痕がついたと思われる。内面口縁部は横方向、胴部は縦方向の擦痕であり、外面は縦方向の擦痕である。器面には光沢痕あり、丁寧な整形が行われていたと思われる。第1類にはこのような整形痕の残るものが多い。器形は302のように口縁部が直立するもの。内面の面取りがあるために内湾気味に見

えるもの(308~310・328)がある。304は4単位の波状口縁と思われる。第1類の色調は灰褐色や暗褐色のものが多く、明褐色のものもあり、2次的な酸化焙焼成と思われる。

第2類 (311・312・332~339)

口縁部が直立し、口唇部が角頭状に面取りされ無文土器である。338のように口唇部が肥厚なものもある。第1類に口縁形態と色調を除き類似する。第2類は第1類に比べ、色調の明るいものが多い。

第3類 (313)

口縁部が緩く外反して、胴部は上部で若干膨らむ。内面に指頭圧痕を残し、外面胴部に磨り消された縄文が拓影に見られる。器厚は5~7mmと薄い。推定口径は13.5cmである。第3類は、第1類と第2類と類似点がない。

第1類と第2類は縄文早期中葉の関東平坂式併行期の土器群と思われる。第3類は内面の指頭圧痕や外面の磨り消された縄文の痕跡や器形などから、縄文時代早期前葉の土器群と思われる。

3. 早期後半~前期 (図版124~125)

a 条痕文

条痕文系の土器は絡条体条痕文と櫛歯状工具による条痕文の土器が出土している。

第1類 絡条体条痕文 (345・347・353・354)

これらの土器は口縁部文様帯に絡条体圧痕文を施文している。345は撚りの細い絡条体である。横方向に2条の絡条体を押圧して、その下に縦方向の絡条体を押圧し、無文部を挟みながら巡らせている。また胴部上半に横方向の羽状に押圧し、胴上部に巡らせている。条痕は表裏とも横方向の絡条体条痕である。器形は口縁部文様帯部分を直立させ、胴部と口縁部文様帯の境目に有段部を設け、胴部を砲弾状に成形させている。口縁部上から見ると楕円形であり、成形中に故意に楕円形に成形したか不明である。胎土には多量の繊維が含まれ、口縁部が約0.8cm、胴部が約1cmの分厚い器厚を持つ。口径約26cm、高さ推定約42cmである。347も345と同様の口縁部文様帯を持ち胴上部に横方向と縦方向から絡条体を押圧して隆起帯にしている。表裏の条痕は斜・縦方向に絡条体条痕文を施文している。これら絡条体圧痕文を有する絡条体条痕文は早期後葉の土器群と思われる。

第2類 櫛歯状工具による条痕文 (344・350・352)

352は櫛歯状工具で縦方向に条痕を施している。胎土は石英粒を多量に含有させ、ザラザラした器面である。明らかに絡条体条痕文と胎土が異なる。早期中葉の土器であろうか。

b 羽状縄文 (346・348・355~358)

346はほぼ正形に近い個体である。器厚は口縁部が約5~6mm、胴部7~8mmで非常に薄い。色調は2次焼成のため暗褐色部分が多いが、全体的にぶい灰黄褐色で、胎土も砂粒が混じり繊維も極少量混入しており、信濃町周辺の土器の胎土色調と異なる。口縁部は波状口縁で口唇部に縄文を転がしてある部分もある。器形は、口縁部がやや内湾する部分もある直立ぎみの口縁で、胴部上半部にわずかな膨らみのある砲弾形である。口縁部下約2cm部分に、約5mm幅の縄文で斜めに刻みのつけた細い隆帯が波状口縁に沿って巡る。文様は「L R」と「R L」の結束縄文を用いて菱形の羽状縄文を施文している。口縁部から底部まで8段の結束部が見られる。内面はナデ調整されている。砲弾形の尖底土器であり、早期終末期東海系の薄手土器の影響を受けており、早期終末から羽状縄文前期初頭の土器群の接点となる土器と思われる。

355から358は繊維を含有しない羽状縄文土器であり、前期初頭の土器と思われる。

c 縄文 (359~359)

これらの土器は時期不明の縄文土器である。

縄文土器の分布は表裏縄文や表縄文は図版100の分布図のように調査区1区南側の伊勢見山南西山麓に広がる。押型文土器は表裏縄文土器よりも若干分布範囲が東側に偏るようである。縄文早期中葉の土器はやはり伊勢見山南西山麓に帯状に分布する。縄文早期後葉の土器と前期土器は調査区2区伊勢見山西山麓に分布する。時期により土器の分布範囲が異なるようである。

遺構・区分	表裏縄文	表裏縄糸文	表縄文	裏縄文	縄糸文	押型文	無文	沈線文	条痕文	縄文	羽状縄文	合計
II-0								1	3	3		7
III-K										1		1
IV-B	1					1						2
IV-D						7						7
V-Q			1									1
V-U	1											1
V-V	1		4							1		6
V-W			1				1					2
VI-C	3	0	3	0	0	4	3	0	168	46	9	236
VI-F							18					18
VI-P	307	9	79	2	0	16	112	0	2	8	0	535
VI-Q	208	9	109	12	1	148	670	1	2	7	0	1167
VI-U							5					5
VI-V	3		2			4	6					14
SQ01	1		1							1	1	4
その他	19		13				2	8		1	1	45
合計	544	18	213	14	1	182	822	2	176	67	10	2049

第29表 東裏遺跡 縄文時代土器文様別組成表

図版番号	整理番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	小プラトウ文様	文様	部位	スケール	文様構成特徴	胎土	線形	色調	分類	接合(整理番号)	備考	
図版102	1	19854 WB-Q-16-2	773		WQ16	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	暗赤褐色	第1類				
図版102	2	19856 WB-Q-16-2	773		WQ16	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	暗赤褐色	第1類				
図版102	3	14200 WB-Q	3257	773 II	WQ16	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	暗赤褐色	第1類				
図版102	4	14837 WB-Q-19		750	WQ19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	緑	第1類				
図版102	5	15846 WB-P-18-2		760	WP18	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	緑	第1類				
図版102	6	15052 WB-Q	4354	786 II-6	WQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	暗赤褐色	第1類				
図版102	7	15914 SP-23		872		表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	緑	第1類				
図版102	8	15949 WB-P-18-2		933	WP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	緑	第1類				
図版102	9	12538 WB-Q	828	905 II	WQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に深い赤褐色	第1類				
図版102	10	11497 WB-P	482	611 II	WP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に深い赤褐色	第1類				
図版102	11	11740 WB-P	1610	612 II	WP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に深い赤褐色	第1類				
図版102	12	2957 V-Q-19		8	1107 III	VQ15	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	暗赤褐色	第1類			
図版102	13	15100 WB-Q	6450	842 不明	WQ120	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	緑	第1類				
図版102	14	18737 WB-P-20-1		584	WP20	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に深い赤褐色	第1類	11781・15737と接合。11899・120772同一個体?		整理番号76443A1比定後	
図版102	15	12090 WB-P	2960	591 II	WPS14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	明赤褐色	第1類				
図版102	16	11404 WB-P	378	554 II	WPS14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	緑	第1類				
図版102	17	15996 WB-Q-19-2		844	WQ19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に深い赤褐色	第1類				
図版102	18	13246 WB-Q	2112	514 II	WQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に深い赤褐色	第1類				
図版102	19	12166 WB-P	2968	848 II	WPS13	表裏縄文	底状口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	暗赤褐色	第1類				

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (1)

図版番号	図No	整理番号	遺跡区分	遺物番号	実測番号	計測順位	小ナツラド文	名称	形状	スケール	文様構成	特長	出土	調査年度	分類	接合(整理番号)	備考
図版102	20	14059	Ⅱ-Q	3046	682	II	ⅡQ13	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	21	13961	Ⅱ-P-14-3		942		ⅡP14	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	褐色	第1類				
図版103	22	12116	Ⅱ-Q	5987	802	II	ⅡP814	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	灰褐色	第1類				
図版103	23	16103	Ⅱ-Q	4453	581	不明	ⅡQ17	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	黒褐色	第1類				
図版103	24	12138	Ⅱ-P	2781	702	II	ⅡP814	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	25	12134	Ⅱ-P	2705	931	II	ⅡP115	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	26	11950	Ⅱ-P	1966	676	II	ⅡP814	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	27	11970	Ⅱ-P	1983	873	II	ⅡP814	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	28	10062	Ⅱ-Q	4365	707	II-8	ⅡQ13	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	灰褐色	第1類				
図版103	29	16403	Ⅱ-P-20-2		894		ⅡP20	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい黄褐色	第1類				
図版103	30	15054	Ⅱ-Q	4356	769	II-8	ⅡQ13	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	31	14518	Ⅱ-Q	3808	947	II-8	ⅡQ14	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	32	14381	Ⅱ-Q	3868	793	II-8	ⅡQ12	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	にぶい赤褐色	第1類				
図版103	33	15716	Ⅱ-Q-14-4		861		ⅡQ14	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	明赤褐色	第1類				
図版103	34	14281	Ⅱ-Q	3347	672	II-8	ⅡQ13	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	灰褐色	第1類				
図版103	35	12539	Ⅱ-Q	832	690	II	ⅡQ14	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	褐色	第1類				
図版103	36	15941	Ⅱ-P-19-2		306		ⅡP19	表裏縄文	底状口縁	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい黄褐色	第1類				
図版103	37	15790	Ⅱ-P-21		687			表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第1類	14954と15790同一個体			
図版104	38	11867	Ⅱ-P	1741	674	II	ⅡP115	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	褐色	第2類(黒土)				
図版104	39	15827	Ⅱ-P-14-3		738		ⅡP14	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	明赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	40	11635	Ⅱ-P	1506	681	II	ⅡP115	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	褐色	第2類(黒土)				
図版104	41	11744	Ⅱ-P	1614	738	II	ⅡP813	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	明赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	42	11564	Ⅱ-P	1433	902	II	ⅡP112	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	43	11370	Ⅱ-P	344	711	II	ⅡP113	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	褐色	第2類(黒土)				
図版104	44	11218	Ⅱ-P	175	677	II	ⅡP110	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第2類(黒土)	15600と接合			
図版104	45	12160	Ⅱ-P	3993	679	II-6	ⅡP112	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	明赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	46	13132	Ⅱ-Q	1774	930	II	ⅡQ15	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	にぶい黄褐色	第2類(黒土)				
図版104	47	15790	Ⅱ-P-19-1		680		ⅡP19	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	明赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	48	12154	Ⅱ-P	2884	672	II	ⅡP113	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	49	11750	Ⅱ-P	1632	631	II	ⅡP114	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	にぶい赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	50	7546	V-V-11		36	1108	不明	VV10	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	灰褐色	第2類(黒土)				
図版104	51	18953	Ⅱ-P-19-1		934		ⅡP19	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	52	3740	V-U-05		14	1109	不明	VU05	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	にぶい赤褐色	第2類(黒土)				
図版104	54	13119	Ⅱ-P	2680	928	II	ⅡP114	表裏縄文	口縁1/2	表裏縄文	黒炭粉、白色透明石英多量に含有、デフラグ	明赤褐色	第2類(黒土)				

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (2)

第8章 東裏遺跡

図版番号	図 No	整理番号	遺構区分	遺物番号	実測番号	出土部位	小グループ名	文様	部位	スケール	文様構成種別	胎土	顔色	色調(殊)	分類	統合(整理番号)	備考
図版104	55	12048	Ⅴ-P	3081	940 II	ⅤP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	にぶい	緑	第3類(横地)			
図版105	56	11375	Ⅴ-P	349	714 II	ⅤPQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	明赤焼	第3類(横地)				
図版105	67	16112	Ⅴ-Q	4462	716 不明	ⅤPQH7	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	灰焼	第3類(横地)				
図版105	58	14864	Ⅴ-Q	4165	701 II-6	ⅤPQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	緑	第3類(横地)				
図版105	59	15807	Ⅴ-Q-19-2		701	ⅤPQ19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	緑	第3類(横地)				
図版105	60	15808	Ⅴ-Q-19-2		701	ⅤPQ19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	緑	第3類(横地)				
図版105	61	16233	Ⅴ-P	98	708 II	ⅤPPI4	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	明赤	第3類(横地)				
図版105	62	16784	Ⅴ-Q-18-4		639	ⅤPQ18	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	浅黄焼	第3類(横地)				
図版105	63	11123	Ⅴ-P	72	718 II-1	ⅤP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	明赤焼	第3類(横地)				
図版105	64	11207	Ⅴ-P	265	684 II	ⅤPPI2	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	暗赤焼	第3類(横地)				
図版105	65	15816	Ⅴ-Q-14-3		713	ⅤPQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	灰焼	第3類(横地)				
図版106	60	12894	Ⅴ-Q	1235	713 II	ⅤPQM5	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	灰焼	第3類(横地)				
図版105	67	15790	Ⅴ-P-19-1		678	ⅤP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	緑	第3類(横地)				
図版105	68	15815	Ⅴ-P-19-1		712	ⅤP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	赤焼	第3類(横地)				
図版106	69	15817	Ⅴ-P-19-1		715	ⅤP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	にぶい黄焼	第3類(横地)				
図版105	70	16232	Ⅴ-P	48	700 II	ⅤPQ11	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	緑	第3類(横地)				
図版105	71	13251	Ⅴ-Q	217	630 II	ⅤPQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	明赤焼	第3類(横地)				
図版105	72	11222	Ⅴ-P	289	618 II	ⅤPPI2	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	にぶい赤焼	第3類(横地)				
図版106	73	13648	Ⅴ-Q	2485	512 II	ⅤPQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	灰焼	第3類(横地)				
図版106	74	11276	Ⅴ-P	234	562 II	ⅤPQ12	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	明赤焼	第3類(横地)				
図版106	75	11800	Ⅴ-P	1670	746 II	ⅤP514	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	灰焼	第3類(横地)				
図版106	76	15702	Ⅴ-Q-13-4		527	ⅤPQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	にぶい赤焼	第3類(横地)				
図版106	77	15736	Ⅴ-P-19-2		563	ⅤP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	浅黄焼	第3類(横地)				
図版106	78	12126	Ⅴ-P	2697	624 II	ⅤP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	にぶい赤焼	第3類(横地)				
図版106	79	11825	Ⅴ-P	510	534 II	ⅤPPI4	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	場灰	第3類(横地)				
図版106	80	15705	Ⅴ-P-19-2		532	ⅤP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	灰焼	第3類(横地)				
図版106	81	11171	Ⅴ-P	1587	705 II	ⅤPPI4	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	緑	第3類(横地)	11717-11804と統合			
図版106	82	12125	Ⅴ-P	2696	705 II	ⅤPPI4	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	暗赤焼	第3類(横地)				
図版106	83	12103	Ⅴ-P	2673	628 II	ⅤP514	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	にぶい黄焼	第3類(横地)				
図版106	84	15746	Ⅴ-P-14-3		596	ⅤP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	場	第3類(横地)				
図版106	85	11192	Ⅴ-P	148	613 II	ⅤPPI4	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	にぶい黄焼	第3類(横地)				
図版106	86	14072	Ⅴ-Q	3128	585 II-5	ⅤPQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石)多量に含有	緑	第3類(横地)				
図版106	87	16145		3461	633		表裏縄文	突起のあり口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	灰焼	第3類(横地)				
図版106	88	14458	Ⅴ-Q	3517	626 II	ⅤPQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、テラテラ	緑	第3類(横地)				

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (3)

図録番号	図No	契機番号	遺構区分	遺物番号	実測番号	出土部位	小ナマリ名	文種	部材	スケール	文様構成特徴	胎土	線・色調(外)	分類	統合(整理番号)	備考	
図録106	89	16143		1437	827			表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	縦	第3類(赤)			
図録106	90	11110	Ⅱ-P	64	740	Ⅱ-1	ⅡP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色灰(長石?)多量に含有	にぶい横	第3類(赤)		平安窯	
図録107	91	16701	Ⅱ-Q		326		ⅡQ18	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)			
図録107	92	11686	Ⅱ-P	1556	792	Ⅱ	ⅡPQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	明赤横	第3類(赤)			
図録107	93	15963	Ⅱ-P		907		ⅡP17	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録107	94	16722	Ⅱ-Q		367		ⅡQ18	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色灰(長石?)多量に含有	にぶい赤横	第3類(赤)			
図録107	96	14206	Ⅱ-Q	2268	877	Ⅱ	ⅡQ16	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色灰(長石?)多量に含有	にぶい赤横	第3類(赤)			
図録107	98	13050	Ⅱ-Q	1321	800	Ⅱ	ⅡQ12	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	黒横	第3類(赤)		12094と同一類	
図録107	97	15897	Ⅱ-P		831			表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色灰(長石?)多量に含有	にぶい赤横	第3類(赤)			
図録107	98	18311	Ⅱ-Q	3379	901	Ⅱ-5	ⅡQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)			
図録107	99	11512	Ⅱ-P		497	800	Ⅱ	ⅡP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)		
図録107	100	15933	Ⅱ-P		596		ⅡP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録107	101	15940	Ⅱ-Q		506		ⅡQ19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)			
図録107	102	15006	Ⅱ-Q	4307	794	Ⅱ-5	ⅡQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録107	103	14540	Ⅱ-Q	3300	528	Ⅱ-5	ⅡQ11	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色灰(長石?)多量に含有	にぶい横	第3類(赤)			
図録107	104	14240	Ⅱ-Q	3209	911	Ⅱ-5	ⅡQ12	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)			
図録107	105	15006	Ⅱ-Q	4309	876	Ⅱ-5	ⅡQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色灰(長石?)多量に含有	にぶい横	第3類(赤)			
図録107	108	11770	Ⅱ-P	1640	805	Ⅱ	ⅡP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録107	109	15691	Ⅱ-Q		515		ⅡQ19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	明赤横	第3類(赤)			
図録108	108	18742	Ⅱ-P		592		ⅡP20	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)		11391と18742接合	
図録108	109	13331	Ⅱ-Q	2211	904	Ⅱ	ⅡQ15	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横黄横	第3類(赤)			
図録108	110	9364	Ⅱ-C	266	692	Ⅱ	ⅡC01	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色灰(長石?)多量に含有	にぶい横	第3類(赤)		羽状縄文(胎母付)	
図録108	111	15929	Ⅱ-Q		591		ⅡQ19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録108	112	13330	Ⅱ-Q	2210	807	Ⅱ	ⅡQ15	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録108	113	15876	Ⅱ-Q		812		ⅡQ16	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横黄横	第3類(赤)			
図録108	114	12073	Ⅱ-P	2642	733	Ⅱ	ⅡP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録108	115	15693	Ⅱ-P		517		ⅡP19	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい赤横	第3類(赤)			
図録108	116	18144	Ⅱ-V		62	901	ⅡV10	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)			
図録108	117	15875	Ⅱ-P		803		ⅡP13	表裏縄文、特殊(白粉加刷無文帯?)	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)			
図録108	118	18211	Ⅱ-P		676			表裏縄文、特殊(白粉加刷無文帯?)	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第3類(赤)			
図録108	119	14363	Ⅱ-Q	3432	646	Ⅱ-5	ⅡQ11	表裏縄文、特殊(白粉加刷無文帯?)	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい横	第3類(赤)			
図録108	120	12848	Ⅱ-Q	1149	853	Ⅱ	ⅡQ14	無文	口縁	1/2	表裏縄文、特殊(白粉加刷無文帯?)	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	にぶい赤横	第3類(赤)			
図録108	121	13692	Ⅱ-Q	2831	864	Ⅱ	ⅡQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	横	第4類			
図録108	122	13758	Ⅱ-Q	2270	917	Ⅱ	ⅡQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	黒炭母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	明赤横	第3類(赤)			

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (4)

第8章 東裏遺跡

国史館 番号	国 No.	整理 番号	遺物 区分	遺物 番号	実測 番号	出土 部位	小ナリナ 名	文様	部位	スケ ール	文様構成 特徴	胎土	織 肌	色調 (内)	分期	接合(整理番号)	備考
国史108	123	15772	Ⅱ-Q	13-4	659	Ⅱ-Q13	表裏織文	口縁	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	第6期				
国史108	124	15769	Ⅱ-Q	19-2	647	Ⅱ-Q19	表裏織文	口縁	1/2	表裏織文	白色粒(長石?)多量に含有	横	第6期				
国史108	125	14661	Ⅱ-Q	39-4	650	Ⅱ-Q12	表裏織文	口縁	1/2	表裏織文	白色粒(長石?)多量に含有	横	第6期				
国史108	126	18771	Ⅱ-P	20-2	650	Ⅱ-P20	表裏織文	口縁	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	第6期				
国史108	127	14754	Ⅱ-Q	40-5	626	Ⅱ-Q13	表裏織文	口縁	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	第6期				
国史109	128	18975	新器P		989		表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い横	—				
国史109	129	14761	Ⅱ-Q	40-52	1146	Ⅱ-Q13	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い横	—				
国史109	130	14718	Ⅱ-Q	40-19	1011	Ⅱ-Q13	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	—				
国史109	131	11823	Ⅱ-P	10-94	1015	Ⅱ-P14	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	白色粒(長石?)多量に含有	胴縁	—				
国史109	132	9367	Ⅱ-C	30-9	1002	Ⅱ-C01	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	明赤横	—		羽伏織文(隣接付)		
国史109	133	13761	Ⅱ-Q	29-63	969	Ⅱ-Q15	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	赤横	—				
国史109	134	12108	Ⅱ-P	20-78	1017	Ⅱ-P14	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	白色粒(長石?)多量に含有	に高い横	—	12108-12255・15988-16214組合			
国史109	135	11078	Ⅱ-P	15-49	1007	Ⅱ-P13	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	暗赤横	—				
国史109	136	15963	Ⅱ-Q	19-1	1004	Ⅱ-Q19	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い横	—				
国史109	137	14148	Ⅱ-Q	32-05	1144	Ⅱ-Q14	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	—				
国史109	138	11118	Ⅱ-P	8-9	990	Ⅱ-P10	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い赤横	—				
国史109	139	7822	V-V	16	1106	不明	VVD15	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	明赤横	—			
国史109	140	16214	Ⅱ-P	20-4	1017		表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	白色粒(長石?)多量に含有	に高い横	—				
国史109	141	14797	Ⅱ-Q	40-98	1045	Ⅱ-Q13	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	—				
国史109	142	16257	Ⅱ-Q	17-1	1005	Ⅱ-Q14	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い赤横	—				
国史109	143	11996	Ⅱ-P	14-69	1001	Ⅱ-P13	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	赤横	—				
国史109	144	16041	V-V	11	1105	VV11	織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	—				
国史109	145	14484	Ⅱ-Q	37-1	1111	Ⅱ-Q14	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い赤横	—				
国史109	146	15992	Ⅱ-Q	17-2	1019	Ⅱ-Q17	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い赤横	—				
国史109	147	16154			4700	999	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	—				
国史109	148	15984	Ⅱ-Q	16-2	1019	Ⅱ-Q16	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い赤横	—				
国史109	149	7539	V-V	11	29	1106	不明	VVD16	表裏織文	胴部	1/2	表裏織文	白色粒(長石?)多量に含有	明赤横	—		
国史110	150	14772	Ⅱ-Q	40-73	867	Ⅱ-Q14	表裏織文	口縁	1/3	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	に高い横	第1期				
国史110	151	14748	Ⅱ-Q	40-47	965	Ⅱ-Q13	表裏織文	口縁	1/3	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	明赤横	第1期	14747, 14750と同一個体			
国史110	152	14757	Ⅱ-Q	40-88	922	Ⅱ-Q13	表裏織文	口縁	1/3	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	横	第1期				
国史110	153	11552	Ⅱ-P	14-21	633	Ⅱ-P12	表裏織文	口縁	1/3	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	明赤	第1期				
国史110	154	14817	Ⅱ-Q	39-4	828	Ⅱ-Q15	表裏織文	口縁	1/3	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	明赤横	第1期				
国史110	155	15861	Ⅱ-Q	16-2	695	Ⅱ-Q18	表裏織文	口縁	1/3	表裏織文	黒雲母、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	胴縁	第1期				

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (5)

図版番号	図No.	整理番号	遺構区分	遺物番号	実測番号	出土層位	小ナツトナ名	文様	部位	スケール	文様構成特徴	胎土	施装部	色調(内)	分析	検出(整理番号)	備考
図版110	156	11756	Ⅷ-P	1626	804	II	ⅧPR13	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	施装部	黒褐色	第1層	11756-11805と検出13331と同一類体	
図版110	157	14483	Ⅷ-Q	3770	796	II-Q	ⅧQ14	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	明赤褐色	第1層			
図版110	158	11468	Ⅷ-P	463	938	II	ⅧPR13	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に近い赤褐色	第1層	11608-11749と検出		
図版110	159	15799	Ⅷ-Q-14-4		690		ⅧQ14	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に近い赤褐色	第3層			
図版110	160	14594	Ⅷ-Q	3881	667	II-S	ⅧQN12	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	赤褐色	第3層	14954と15799同一類体		
図版110	161	15828	Ⅷ-P-15-1		738		ⅧP19	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	明赤褐色	第3層			
図版110	162	13097	Ⅷ-Q	1499	681	II	ⅧQH17	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	褐色	第3層			
図版110	163	11374	Ⅷ-P	1444	950	II	ⅧPL13	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文、底文が装飾的	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	灰褐色	第3層			
図版111	164	15168	Ⅷ-V	1987	722	II	ⅧV93	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い赤褐色	第3層			
図版111	165	15007	Ⅷ-Q	4308	769	II-S	ⅧQO13	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い赤褐色	第3層	15007-15029と検出、15054と同一類体		
図版111	166	14496	Ⅷ-P	481	715	II	ⅧPI14	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い黄褐色	第3層	11696-11751と検出		
図版111	167	15460	Ⅷ-P-19-1		712	不明		表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	赤褐色	第3層		整理番号19810と重複	
図版111	168	11726	Ⅷ-P	1699	786	II	ⅧPQ15	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	褐色	第3層			
図版111	169	11262	Ⅷ-P	326	853	II	ⅧPQ13	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に近い褐色	第3層			
図版111	170	11605	Ⅷ-P	490	824	II	ⅧPS14	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	褐色	第3層	11733-11805と検出		
図版111	171	15869	Ⅷ-P-19-1		791		ⅧP19	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い赤褐色	第3層			
図版111	172	13894	Ⅷ-Q	2934	835	II-Q	ⅧQN11	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	黒褐色	第3層			
図版111	173	14789	Ⅷ-Q	4960	918	II-S	ⅧQN12	表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い黄褐色	第3層			
図版111	174	15776	Ⅷ-P-34		658			表裏縄文	口縁	1/3	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に近い褐色	不明			
図版112	176	15682	未定記		501			表裏縄文	口縁一部	1/3	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	褐色	第3層			
図版113	176	13057	Ⅷ-Q	1269	655	D	ⅧQO13	表裏文+押江縄文、縄文の磨状水跡が認められる。	口縁	1/2	表裏文+押江縄文、縄文の磨状水跡が認められる。	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い赤褐色	第3層			
図版113	177	16236			656			表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い赤褐色	第3層			
図版113	178	15759	Ⅷ-Q-14-2		634		ⅧQ14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	褐色	第3層	赤褐色		
図版113	179	15763	Ⅷ-P-14-3		638		ⅧP14	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	灰褐色	押江縄文?			
図版113	180	16702	心		637			表裏縄文	口縁	1/2	筋条押江直	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	明赤褐色	不明		筋条押江直文?	
図版113	181	16766	Ⅷ-Q-16-1		642		ⅧQ16	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い褐色	第3層			
図版113	182	16041	Ⅷ-Q-19-2		1182		ⅧQ19	筋条文	明部	1/2	筋条文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	明赤褐色	第3層			
図版113	183	16227	Ⅷ-Q-15		663			表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	明褐色	第3層			
図版113	184	16228	Ⅷ-Q-15		664			表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に近い赤褐色	不明			
図版113	185	13788	Ⅷ-Q-18-1		671		ⅧQ18	縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	に近い褐色	不明			
図版113	186	14161			2458	1085		表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文?	灰雲母、白色透明石英多量に含有、ザラザラ	に近い赤褐色	第3層			
図版113	187	16024	Ⅷ-Q-13-4		1065		ⅧQ13	表裏縄文	口縁	1/2	表裏縄文	白色粒(長石?)多量に含有	褐色	不明			

第30表 東奥遺跡 縄文時代土器属性表 (6)

第8章 東夷遺跡

図版番号	調査No	遺跡番号	遺跡区分	発掘番号	出土層位	小ゾラ付名	文種	部位	スケール	文種構成 特徴	土質	編年	色調(例)	分類	統合(整理番号)	備考
図版113	168	14727	Ⅱ-Q	1028	1036	Ⅱ	ⅡQ014	表縄文	口縁	1/2	断面は、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	編	第3層(縄文)			
図版113	189	14784	Ⅱ-Q	4095	1065	Ⅱ-5	ⅡQ014	表縄文	口縁	1/2	断面は、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	編	不明			
図版113	190	13986	Ⅱ-Q	3042	1084	Ⅱ-6	ⅡQ013	表縄文	口縁	1/2	断面は、白色透明石英多量に含有、ツラツラ	編	第3層(縄文)			
図版112	191	12875	Ⅱ-Q	1176	1088	Ⅱ	ⅡQ014	表縄文	口縁	1/2	口唇側面が物文帯、表縄文	表縄文	第3層(縄文)			
図版112	192	16014	Ⅱ-Q-19-2		1048		ⅡQ019	表縄文	口縁	1/2	口唇側面が物文帯、表縄文	表縄文	第3層(縄文)			
図版113	193	16032	なし		1097			表縄文	口縁	1/2	口唇側面が物文帯、表縄文	表縄文	第3層(縄文)			
図版113	194	13236	Ⅱ-Q	3102	1094	Ⅱ	ⅡQ014	表縄文	口縁	1/2	断面平坦、黒質、表縄文	編	第3層(縄文)			
図版113	195	11654	Ⅱ-P	1524	1089	Ⅱ	ⅡP013	表縄文	口縁	1/2	表縄文?口縁部下腹が剥き出し	編	第3層(縄文)			
図版113	196	11245	Ⅱ-Q	2111	1055	Ⅱ	ⅡQ014	表縄文	口縁	1/2	断面平坦、黒質、表縄文	編	第3層(縄文)			
図版113	197	16008	Ⅱ-Q-16-1		1041		ⅡQ016	表縄文	口縁	1/2	LRL?表縄文	表縄文	第3層(縄文)			
図版113	198	8537	V-W-16	43	1002	Ⅲ	VWA14	表縄文	口縁	1/2	断面状口唇部形成、表縄文	灰白	第1層			
図版113	199	16003	Ⅱ-P-19-1		1033		ⅡP019	表縄文	口縁	1/2	表縄文?	編	第2層(縄文)			
図版113	200	13046	Ⅱ-Q	1348	1021	Ⅱ	ⅡQ014	表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第1層			
図版113	201	19001	Ⅱ-P-20-4		1032		ⅡP020	表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第2層(縄文)			
図版113	202	16018	Ⅱ-P-19-1		1054		ⅡP019	表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	不明			
図版114	203	11459	Ⅱ-P	433	1007	Ⅱ	ⅡP016	表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第3層(縄文)			
図版114	204	16037	Ⅱ-P-19-5		1039		ⅡP019	表縄文	口縁	1/2	口唇側面が物文帯、表縄文	編	第2層(縄文)			
図版114	205	13730	Ⅱ-Q	2744	1074	Ⅱ	ⅡQ017	表縄文	口縁	1/2	表縄文?	明赤褐色	第3層(縄文)			
図版114	206	13169	Ⅱ-P	1439	1086	Ⅱ	ⅡP043	表縄文	口縁	1/2	表縄文	明赤褐色	第3層(縄文)			
図版114	207	14116	Ⅱ-Q	3173	1075	Ⅱ	ⅡQ013	表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第3層(縄文)			
図版114	208	14984	Ⅱ-Q	4285	1077	Ⅱ-6	ⅡQ014	表縄文	胴部	1/2	表縄文	明赤褐色	第1層			
図版114	209	14152	Ⅱ-Q	3209	1060	Ⅱ	ⅡQ012	表縄文	口縁	1/2	表縄文	明赤褐色	第3層(縄文)	14153と統合		
図版114	210	16015	Ⅱ-P-19-1		1048		ⅡP019	表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第3層(縄文)			
図版114	211	15843	なし		757			表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第3層(縄文)			
図版114	212	16225			776			表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第3層(縄文)			
図版114	213	14997	Ⅱ-Q	4296	1064	Ⅱ-5	ⅡQ013	表縄文	口縁	1/2	表縄文?	暗褐色	第3層(縄文)			
図版114	214	15840	Ⅱ-P-18-2		754		ⅡP018	表縄文	口縁	1/2	表縄文	表縄文	第3層(縄文)			
図版114	215	16025	Ⅱ-Q-16-1		1066		ⅡQ016	表縄文	腹状口縁	1/2	表縄文	編	第3層(縄文)			
図版114	216	7057	V-V-13	8	1110	不明	VVK10	表縄文	口縁	1/2	表縄文	浅黄褐色	第3層(縄文)			
図版114	217	15998	Ⅱ-Q-19-1		1030		ⅡQ019	表縄文	口縁	1/2	表縄文	編	第3層(縄文)			
図版114	218	11584	Ⅱ-P	42	1078	Ⅱ	ⅡP011	表縄文	胴部	1/2	表縄文	編	-	11584+11104+11105と統合		
図版114	219	16486	Ⅱ-Q	4366	1100	Ⅱ-5	ⅡQ013	表縄文	胴部	1/2	表縄文	暗赤褐色	-	整理番号15054と表縄文		
図版114	220	14980	Ⅱ-Q	4290	1149	Ⅱ-5	ⅡQ013	表縄文	胴部	1/2	表縄文	編	-			
図版114	221	14653	Ⅱ-Q	3941	1082	Ⅱ-5	ⅡQ012	表縄文	胴部	1/2	表縄文	編	-			

第30表 東夷遺跡 縄文時代土器属性表 (7)

図版番号	図No	館番号	遺構区分	遺物 発掘 番号	出土 番号	小ナリ名	文様	部位	スケール	文様構成 要素	胎土	顕著 産地	色調 (内)	分類	接合(整理番号)	備考
図版114	252	14412	Ⅱ-Q	3481	1147	Ⅱ-5	ⅡQN14	表縄文	胴部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 赤褐色	—		
図版114	253	11081	Ⅱ-P	39	1142	Ⅱ	ⅡPQ11	表縄文	胴部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版114	254	13763	Ⅱ-Q	2775	1149	Ⅱ	ⅡQG14	表縄文	胴部	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版114	255	13505	Ⅱ-Q	794	1150	Ⅱ	ⅡWQ12	表縄文	胴部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版114	256	14465	Ⅱ-Q	3752	1145	Ⅱ-6	ⅡWQ13	表縄文	胴部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版115	227	13045	Ⅱ-Q	1347	1071	Ⅱ	ⅡWQ14	表縄文	口縁 ～胴部	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 赤褐色	第3節 (横走)	1494&2接合	
図版115	228	14911	Ⅱ-Q	4312	1100	Ⅱ-5	ⅡWQ13	表縄文	口縁部	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	暗赤褐色	第3節 (横走)	12207・14911・ 12212・12207・ 16039と接合	
図版115	231	16019	SP-34 一過		1056			表縄文	口縁	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 赤褐色	第3節 (横走)		
図版115	232	14450	Ⅱ-Q	3519	1080	Ⅱ	ⅡWQ13	表縄文	胴部	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版115	233	14031	Ⅱ-Q	3087	1104	Ⅱ-5	ⅡWQ15	表縄文	口縁 ～胴部	1/3	表縄文?	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	第3節 (横走)		
図版115	234	14730	Ⅱ-Q	6031	1082	Ⅱ-6	ⅡWQ13	表縄文	胴部	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—	14730・14926接 合	
図版115	235	13829	Ⅱ-Q	2860	1076	Ⅱ-5	ⅡWQ12	表縄文	胴部	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	—	13829・ 13832・13833・ 13834・14295・ 14302・14292接 合同一個体	
図版116	237	12523	Ⅱ-Q	816	1113	Ⅱ	ⅡWQ13	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	—	12523・13797と 接合	
図版116	238	11227	Ⅱ-P	182	1120	Ⅱ	ⅡWQ10	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	灰褐色	—		
図版116	239	13921	Ⅱ-Q	2967	1116	Ⅱ	ⅡWQ17	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版116	240	12213	Ⅱ-P	4413	1129	不明	ⅡWPN12	表縄文	底部	1/2	表縄文	白色粒(長石?)多量に 含有	にぶい 橙	—		
図版116	241	14910	Ⅱ-Q	4211	1112	Ⅱ-5	ⅡWQ13	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	明赤褐色	—		
図版116	242	12778	Ⅱ-Q	1076	1118	Ⅱ	ⅡWQ15	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 赤褐色	—		
図版116	243	16045	Ⅱ-P- 19-1		1128		ⅡWQ19	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	—		
図版116	244	11069	Ⅱ-P	27	1130	Ⅱ	ⅡWQ10	表縄文	底部	1/2	表縄文	白色粒(長石?)多量に 含有	にぶい 橙	—		
図版116	245	13017	Ⅱ-Q	1318	1119	Ⅱ	ⅡWQ12	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	—		
図版116	246	16042	Ⅱ-P- 20-2		1114		ⅡWQ20	表縄文	底部	1/2	表縄文	白色粒(長石?)多量に 含有	灰褐色	—		
図版116	247	16046	Ⅱ-Q- 19-2		1134		ⅡWQ19	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	明赤褐色	—		
図版116	248	16043	Ⅱ-P- 18-3		1122		ⅡWQ18	表縄文	底部	1/3	表縄文	白色粒(長石?)多量に 含有	暗褐色	—		
図版116	249	14709	Ⅱ-Q	4010	1125	Ⅱ-5	ⅡWQ13	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版116	250	13182	Ⅱ-Q	1833	1121	Ⅱ	ⅡWQ14	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 赤褐色	—	13206・13182と 接合	
図版116	251	13134	Ⅱ-Q	1786	1126	Ⅱ	ⅡWQ14	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	—		
図版116	252	13645	Ⅱ-Q	2384	1117	Ⅱ	ⅡWQ14	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	—	14090・13645と 接合	
図版116	253	14583	Ⅱ-Q	3870	1122	Ⅱ-6	ⅡWQ12	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—		
図版116	254	12218	Ⅱ-P	4418	1131	不明	ⅡWPM12	表縄文	底部	1/3	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	にぶい 橙	—		
図版116	255	16044	Ⅱ-P- 19-2		1123		ⅡWQ19	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	明赤褐色	—		
図版116	256	12321	Ⅱ-Q	596	1152	Ⅱ	ⅡWQ13	表縄文	底部	1/2	表縄文	灰雲母、白色透明石英 多量に含有、ザラザラ	橙	—	13248・12321と 接合	

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (8)

第8章 東裏遺跡

図版番号	図No	整理番号	遺物区分	発掘番号	実測番号	出土層位	小ナラト名	文様	部位	スケール	文様構成・特徴	粘土	繊維痕	色調(内)	分類	検出(整理番号)	備考
図版116	257	1681	Ⅷ-P	3056	1551	1127	ⅧPQ13	表縄文	底面	1/2	表縄文	白色粒(長石?)多量に含有	縹				
図版117	258	14000	Ⅷ-Q	3056			Ⅷ-Q16	押型文	11縁部	1/3	押型文(格子目)	石灰質粘土多量、金雲母細粒含有、小石0.3Cm	明赤褐色				表裏層目目
図版118	259	14622	Ⅷ-Q	3010	61	Ⅱ-6	ⅧPQ12	押型文	口縁部	1/3	押型文(平行状縦線)	花崗岩粒多量(長石多量)炭母0.1Cm以上	にぶい縹				平行線状文
図版118	260	16485	Ⅷ-D-12				ⅧD109	押型文	口縁部	1/3	押型文(格子目)	石灰、長石細粒、砂粒多量	にぶい縹				整理番号1653と重複
図版118	261	11928	Ⅷ-Q	4229			ⅧPQ13	押型文	口縁部	1/3	押型文(格子目)	石灰細粒、金雲母多量	縹				格子目
図版118	262	15530	Ⅷ-Q-11-2				ⅧQ17	押型文	口縁部	1/3	押型文(肉類片裏めだつ)	石灰細粒多量、金雲母細粒多量	にぶい縹				格子目
図版118	263	13568	Ⅷ-Q	2826			ⅧMQ16	押型文	口縁部	1/3	押型文(格子目)	石灰細粒多量	縹				格子目
図版119	264	14648	Ⅷ-Q	3036			Ⅷ-Q12	押型文	胴部	1/2	押型文	石灰細粒多量	明赤褐色				平行線状文
図版119	265	13979	Ⅷ-Q	3028			Ⅷ-Q15	押型文	口縁部	1/2	押型文(格子目)	黒石灰粒多量	にぶい縹				格子目
図版119	266	15331	Ⅷ-Q-19-1				ⅧQ19	押型文	口縁部	1/2	押型文(格子目)木ガタイプ横目	黒石灰粒少量	縹				木ガタイプ横目
図版119	267	14523	Ⅷ-Q	3492			ⅧQ17	押型文	口縁部	1/2	押型文(格子目)	石灰細粒多量	にぶい赤褐色				格子目
図版119	268	14651	Ⅷ-Q	3539			ⅧQ11	押型文	胴部	1/2	押型文 木ガタイプ横目?	細砂粒多量	縹				木ガタイプ横目文
図版119	269	15144	Ⅷ-V	1855			ⅧV105	押型文	胴部	1/2	押型文(幾何)	白色細粒少量	縹				幾何文
図版119	270	15074	Ⅷ-Q	4376			ⅧQ16	押型文	胴部	1/2	押型文(幾何)	砂粒多量	灰褐色				幾何文
図版119	271	14652	Ⅷ-Q	3940			ⅧQ11	押型文	胴部	1/2	押型文(格子目)	細石粒多量	にぶい黄褐色				格子目
図版119	272	13786	Ⅷ-Q	2812			ⅧQ14	押型文	口縁部	1/2	押型文(格子目)	石灰細粒多量	黄褐色				格子目
図版119	273	1533	Ⅷ-D-11				ⅧD109	押型文	口縁部	1/2	押型文(横目)	石灰、長石細粒含有、繊維含有	縹				格子目
図版119	274	15119	Ⅷ-U	310			ⅧU502	押型文	胴部	1/2	押型文(横目)	長石、石灰多量、繊維細粒	にぶい黄褐色				横目文
図版119	275	13833	Ⅷ-Q	1143			ⅧQ15	押型文	口縁部	1/3	押型文(山形文)	白色細粒、石灰細粒多量	にぶい黄褐色				山形文
図版119	276	13878	Ⅷ-Q	2515			ⅧQ15	押型文	胴部	1/3	押型文(山形文)	黒鉛含有、白色、石灰細粒多量	にぶい縹				山形文
図版119	277	14515	Ⅷ-Q	2802			ⅧQ16	押型文	口縁部	1/3	押型文(山形文)	白色、石灰細粒多量、小石まじり	縹				山形文
図版120	278	12815	Ⅷ-Q	1114			ⅧQ15	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	黒鉛含有	黄褐色				山形文
図版120	279	15557	Ⅷ-Q-19-2				ⅧQ19	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	黒鉛砂粒含有、小石まじり	黄褐色				山形文
図版120	280	13081	Ⅷ-Q	1352			ⅧQ18	押型文	11縁部	1/2	押型文(山形文)	白色細粒多量	にぶい縹				山形文
図版120	281	15676	前向P					押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	石灰細粒多量、黒鉛、ボロザラツ、黒閃石、小石含有	灰褐色				山形文
図版120	282	9367	Ⅷ-C	369			ⅧC101	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	石灰少量、白色細粒多量	明赤褐色				山形文
図版120	283	16223	Ⅷ-V-1					押型文	口縁部	1/2	押型文(山形文)	白色細粒少量	にぶい縹				山形文
図版120	284	15121	Ⅷ-U				ⅧU501	押型文	口縁部	1/2	押型文(山形文)	白色細粒多量、石灰細粒含有	にぶい縹				山形文
図版120	285	11182	Ⅷ-P	137			ⅧPQ15	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色細粒多量	縹				山形文
図版120	286	14681	Ⅷ-Q	2969			ⅧQ18	押型文	11縁部	1/2	押型文(山形文)	白色細粒多量、石灰細粒含有	にぶい縹				山形文
図版120	287	9008	Ⅷ-C	10			ⅧC11	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	石灰、黒色粒含有やや粗い、黒鉛含有	にぶい縹				山形文
図版120	288	13075	Ⅷ-Q	1377			ⅧQ19	押型文	底面付造	1/2	押型文(山形文)	石灰、黒色粒含有やや粗い	にぶい縹				山形文

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (9)

国庫番号	図No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	小ナツクシ名	文様	部位	スケール	文様構成	種	胎土	組織	色調(外)	分類	検出(整理番号)	備考	
国庫120	289	11180	Ⅷ-F	130	46 II	VEPN14	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色細粒多量	白色細粒多量	粗				山形文	
国庫120	290	11656	Ⅷ-F	1476	51 II	VEPO14	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量、石英細粒含有、黒炭母含有	白色粘多量、石英細粒含有	粗				山形文	
国庫120	291	16215	Ⅷ-V-S	2	1168 II-V	VEVG01	押型文	口縁部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量	白色粘多量	明赤褐色				平安山 山形文	
国庫120	292	12915	Ⅷ-Q	1216	52 II	VEQK15	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量、石英細粒含有	白色粘多量、石英細粒含有	粗				山形文	
国庫120	293	8663	Ⅷ-S-04	21	56 不明	VEHP02	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	石英、黒色粘含有や中粒	石英、黒色粘含有や中粒	にぶい				山形文	
国庫120	294	11788	Ⅷ-F	1688	50 II	VEPS13	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量、石英細粒含有	白色粘多量、石英細粒含有	粗				山形文	
国庫120	295	12917	Ⅷ-Q	1218	53 II	VEQK16	押型文	口縁部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量、石英細粒含有	白色粘多量、石英細粒含有	粗				山形文	
国庫120	296	16382	Ⅷ-Q	1465	64 II	VEQJ16	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量、石英細粒含有	白色粘多量、石英細粒含有	粗				山形文	
国庫120	297	16487	Ⅷ-Q	1218	52 II	VEQK16	押型文	口縁部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量、石英細粒含有	白色粘多量、石英細粒含有	粗				整理番号12917と重複山形文	
国庫120	298	15559	Ⅷ-F-15		59	VEP15	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色粘、砂粘多量	白色粘、砂粘多量	にぶい、黄褐色				山形文	
国庫120	299	12675	Ⅷ-Q	970	55 II	VEQH13	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	長石細粒多量	長石細粒多量	粗				山形文	
国庫120	300	11187	Ⅷ-F	143	51 II	VEPO14	押型文	胴部	1/2	押型文(山形文)	白色粘多量、石英細粒含有、黒炭母含有	白色粘多量、石英細粒含有	粗				山形文	
国庫120	301	14507	Ⅷ-Q	3794	1166 II-V	VEQJ16	押型文	口縁部	1/2	無文	白色粘含有、黒炭含有	白色粘含有、黒炭含有	灰褐色				山形文	
国庫121	302	12906	Ⅷ-Q	1207	70 II	VEQK15	無文	口縁部	1/3	無文	彫刻?長石?白色~ナツクシ~赤色粘多量	彫刻?長石?白色~ナツクシ~赤色粘多量	にぶい、黄褐色					
国庫121	303	11933	Ⅷ-F	1945	120 II	VEPS16	無文	口縁部	1/3	無文	角閃石含有、石英細粒多量に含有	角閃石含有、石英細粒多量に含有	灰褐色					
国庫121	304	14608	Ⅷ-Q	3896	165 II-S	VEQP12	無文	口縁部	1/3	無文 蓋状口縁、検合痕	細砂粘多量	細砂粘多量	にぶい、褐色					
国庫121	305	12403	Ⅷ-Q	679	69 II	VEQJ13	無文	口縁部	1/3	無文	黒炭母粘多量、石英細粒多量に含有、ツラツラ	黒炭母粘多量、石英細粒多量に含有、ツラツラ	灰褐色					
国庫121	306	14310	Ⅷ-Q	2394	124 II-S	VEQNI3	無文	口縁部	1/3	無文	黒炭母、透明石英細粒多量に含有	黒炭母、透明石英細粒多量に含有	にぶい、褐色					
国庫121	307	11266	Ⅷ-F	225	74 II	VEPQ11	無文	口縁部	1/3	無文	黒炭母、透明石英細粒多量に含有	黒炭母、透明石英細粒多量に含有	にぶい、褐色					
国庫121	308	13696	Ⅷ-Q	3652	67 II-S	VEQL16	無文	口縁部	1/3	無文	ミダマのようナツクシ	石英、長石粘多量	灰褐色					
国庫122	309	16147		2465	66		無文	口縁部	1/3	無文	長石、石英多量	長石、石英多量	灰褐色					
国庫122	310	11495	Ⅷ-F	480	66 II	VEPR14	無文	口縁部	1/3	無文	黒炭母粘多量、石英細粒多量に含有、ツラツラ	黒炭母粘多量、石英細粒多量に含有、ツラツラ	灰褐色					
国庫122	311	12799	Ⅷ-Q	1098	159 II	VEQG16	無文	口縁部	1/3	無文	陶器	透明石英細粒多量に含有、赤褐色粘含有	透明石英細粒多量に含有、赤褐色粘含有	灰褐色				
国庫122	312	14005	Ⅷ-Q	4206	182 II-S	VEQP13	無文	口縁部	1/3	無文	石英細粒粘多量に含有、ツラツラ	石英細粒粘多量に含有、ツラツラ	にぶい、褐色					
国庫122	313	12615	Ⅷ-Q	897	164 II	VEQJ14	無文	口縁部	1/3	無文	3	石英粘多量	石英粘多量	にぶい、褐色				
国庫122	314	13744	Ⅷ-Q	2756	79 II	VEQR15	無文	口縁部	1/2	無文	透明石英細粒粘多量に含有、赤褐色粘含有	透明石英細粒粘多量に含有、赤褐色粘含有	灰褐色					
国庫122	315	13788	Ⅷ-Q	2814	88 II	VEQH14	無文	口縁部	1/2	無文	角閃石含有、石英細粒多量に含有	角閃石含有、石英細粒多量に含有	明赤褐色					
国庫122	316	13746	Ⅷ-Q	2769	80 II	VEQR15	無文	口縁部	1/2	無文	透明石英細粒粘多量に含有、赤褐色粘含有	透明石英細粒粘多量に含有、赤褐色粘含有	にぶい、赤褐色					
国庫122	317	14206	Ⅷ-Q	2263	130 II	VEQJ16	無文	口縁部	1/2	無文	角閃石含有、石英細粒多量に含有	角閃石含有、石英細粒多量に含有	褐色					
国庫122	318	13316	Ⅷ-Q	2194	72 II	VEQE14	無文	口縁部	1/2	無文	黒炭母粘多量、石英細粒多量に含有、ツラツラ	黒炭母粘多量、石英細粒多量に含有、ツラツラ	灰褐色					

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 03

第8章 東裏遺跡

国史館 番号	発 掘 年 No	整理 番号	遺構・ 区分	遺物 番号	実測 番号	出土 層位	小テラナ 名	文様	部位	スケ ール	文様構成 数	特 徴	胎土	織 物 色 相 (外)	分類	採合(整理番号)	備考
国史122	519	12777	Ⅱ-Q	1074	76	Ⅱ	VIQF16	無文	口縁	1/2	無文		黄閃石含有、石英細粒 多量に含有	にぶい 緑			
国史122	520	14613	Ⅱ-Q	3901	78	Ⅱ-6	VIQF12	無文	口縁	1/2	無文		緑砂粒多量	にぶい 緑			
国史122	521	14026	Ⅱ-Q	3060	77	Ⅱ-6	VIQL16	無文	口縁	1/2	無文		長石細粒多量	緑			
国史122	522	14531	Ⅱ-Q	3818	187	Ⅱ-5	VIQJ14			1/2	無文		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	緑			
国史122	523	12907	Ⅱ-Q	1208	71	Ⅱ	VIQK16	無文	口縁	1/2	無文		長石多量	灰黄緑			
国史122	524	12879	Ⅱ-Q	1180	72	Ⅱ	VIQL14	無文	口縁	1/2	無文		灰石、石英含有	にぶい 黄緑			
国史124	321	16290	Ⅱ-Q	2731	131	Ⅱ	VIQD17	無文	口縁	1/2	無文		黄閃石含有、石英細粒 多量に含有	にぶい 緑			
国史124	326	13941	Ⅱ-Q	2997	129	Ⅱ	VIQJ16	無文	口縁	1/2	無文		黄閃石含有、石英細粒 多量に含有	灰黄緑			
国史124	327	11276	Ⅱ-F	233	76	Ⅱ	VIQF12	無文	口縁	1/2	無文		黒炭屑、透明石英細粒 多量に含有	にぶい 緑			
国史124	328	13129	Ⅱ-Q	1771	197	Ⅱ	VIQA14	無文	口縁	1/2	無文 5		石英細粒、白色メノウ 含有、きめ細か	黄黄緑			
国史124	329	13871	Ⅱ-Q	2911	122	Ⅱ-5	VIQM11	無文	口縁	1/2	無文		黒炭屑、透明石英細粒 多量に含有	灰黄緑			
国史124	330	14841	Ⅱ-Q	4142	128	Ⅱ-5	VIQO13	無文	口縁	1/2	無文		黄閃石含有、石英細粒 多量に含有	にぶい 緑			
国史124	331	12903	Ⅱ-Q	1204	186	Ⅱ	VIQK14	無文	口縁	1/2	無文		大粒の小石含有、粗い 砂粒多量に含有	緑			
国史124	332	15616	Ⅱ-P- 19-2		165		VIPI19	無文	口縁	1/2	無文 黄口縁 のよな窪取り		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	にぶい 黄			
国史124	333	13719	Ⅱ-Q	2731	172	Ⅱ	VIQD17	無文	口縁	1/2	無文 面取り		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	にぶい 赤黄緑			
国史124	334	16149		2414	141			無文	口縁	1/2	無文		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	緑			
国史124	335	14139	Ⅱ-Q	3196	162	Ⅱ	VIQJ13	無文	口縁	1/2	無文		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	にぶい 赤緑			
国史124	336	14514	Ⅱ-Q	3001	164	Ⅱ-6	VIQK16	無文	口縁	1/2	無文 面取り		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	にぶい 赤緑			
国史124	337	13818	Ⅱ-Q	2840	123	Ⅱ-6	VIQM11	無文	口縁	1/2	無文		透明石英細粒細多量 に含有、赤褐色細粒含 有	灰黄緑			
国史124	338	11239	Ⅱ-P	195	160	Ⅱ	VIPO10	無文	口縁	1/2	無文		透明石英細粒細多量 に含有、赤褐色細粒含 有	にぶい 黄			
国史124	339	12538	Ⅱ-Q	831	161	Ⅱ	VIQO14	無文	口縁	1/2	無文 面取り		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	にぶい 赤緑			
国史124	340	11281	Ⅱ-P	239	240	Ⅱ	VIQF12	無文	底縁	1/2	無文		石英細粒細多量に 含有、ゾラゾラ	緑			
国史124	341	14839	Ⅱ-Q	4131	242	Ⅱ-5	VIQO13	無文	底縁	1/2	無文		黒炭屑、透明石英細粒 多量に含有	緑			
国史124	342	15663	Ⅱ-P- 19-2	341			VIPI19	無文	底縁	1/2	無文		透明石英細粒細多量 に含有、赤褐色細粒含 有	にぶい 黄			
国史124	343	13319	Ⅱ-Q	2197	243	Ⅱ	VIQJ14	無文	底縁	1/2	無文		透明石英細粒細多量 に含有、赤褐色細粒含 有	緑			
国史124	344	14920	Ⅱ-Q	3908	244	Ⅱ-5	VIQF12	無文	底縁	1/2	無文		黒炭屑細多量、石英細 粒多量に含有、ゾラゾ ラ	にぶい 黄緑			
国史123	340	16220	SQ01		264			朱文文	口縁	1/4	無文		黒炭屑多量含有	有 緑			
国史123	346	16683	Ⅱ-C- 11	32	32			朱文文	胴部	1/4	羽状縄文 波 状口縁		白色粒、赤褐色粒含有	黄黒灰			器体修正痕
国史125	347	15671	Ⅱ-C- N-10	282			II ON10	朱文文	胴部 上平	1/4	朱文文		白色粒多量、砂粒多 量、黒炭屑多量	有 緑			器体修正痕
国史125	348	9358	Ⅱ-C	265	263	1	VICG01	波状縄 文	口縁 一部	1/4	斜状縄文		砂粒含有、小石まじり、 黒炭屑少量	暗黄			縄文字跡不明
国史125	349	9194	Ⅱ-C	196	266	1	VICJ07	朱文文	口縁	1/3	波状斜状文 補修孔あり		石英細粒細多量、きめ 細か	にぶい 黄			くの字斜状文、朱文朱文

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (D)

図版番号	図No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	小ナツトモ	文様	器種	スケール	文様構成・特徴	胎土	編織	色調(内)	分類	接合(整理番号)	備考
図版125	352	9292	VI-C	294	266 I	VICP01	条状文	口縁	1/3	条状文	柳葉状含有	有	緑			筋条体条状文
図版125	351	9834	VI-C	496	281 I	VICR11	条状文	口縁	1/3	縄文・沈線	縞面多量	有	緑			
図版125	353	9073	VI-C	75	265 I	VICC11	条状文	胴部	1/3	柳葉状工具による条状	大粒石多量、ザラツク多い	有	灰褐			柳葉状工具による条状
図版125	353	9039	VI-C	641	276 I	VICJ05	条状文	口縁	1/3	筋条体江底文	縞面	有	にぶい緑			筋条体江底文
図版125	354	10674	WR-24		275		条状文	胴部	1/3	筋条体江底文	石灰質細粒少量	有	緑			筋条体江底文
図版125	353	9332	VI-C	304	264 2	VICG03	縄文	口縁	1/3	縄文 LR	石灰質細粒少量	有	緑			G段多量異相縄文
図版125	356	9486	VI-C	488	285 I	VICG06	縄文	胴部	1/3	菱状條神 網	石灰粒多量	有	明黄緑			菱神・網小
図版125	357	10179	WR-V	2146	304 II	WRVP07	縄文	口縁	1/3	羽状縄文 閉じた太端部... LR	石灰質細粒少量	有	にぶい緑			
図版125	358	10677	表様		304		縄文	胴部	1/3	羽状縄文 閉じた太端部... LR	石灰質細粒少量	有	にぶい緑			
図版125	359	10131	WR-V	1379	305 II	WRVJ01	縄文	胴部	1/3	羽状縄文	縞面少量、柳葉状含有	有	緑			
図版125	360	13453	WR-Q	2340	309 II	WRQJ13	縄文	胴部	1/3	縄文 LR(閉じた太端部)	大粒半透明石灰、粗い長石粒含有	有	にぶい緑			
図版125	361	11425	WR-P	399	307 II	WRPJ13	表縄文	胴部	1/3	縄文 LR	黒雲母、透明石灰細粒多量に含有	有	緑			
図版125	362	9919	VI-C	921	288 I	VICH17	縄文	胴部	1/3	縄文 LR	角閃石含有、石灰質細粒多量に含有	有	明黄緑			羽状縄文
図版125	363	10218	なし		302		条状文	胴部	1/3	条状文	砂粒多量	有	赤褐			
図版125	364	13417	WR-Q	2301	260 II	WRQJ17	無文	底面付近	1/3	無文	黒雲母、透明石灰細粒多量に含有	有	緑			
図版125	365	10212	VIC11		306		無文	胴部	1/3	無文	角閃石含有、石灰質細粒多量に含有	有	にぶい緑			
図版125	366	10213	II-O-M11		301		沈線文	胴部	1/3	川紋縞線文	白色粒多量	有	にぶい赤褐			
図版125	367	9706	VI-C	707	277 I	VICF08	縄文	胴部	1/3	縄文多糸 LR	縞面多量	有	にぶい緑			G段多量縄文
図版125	368	9701	VI-C	703	277 I	VICD08	縄文	胴部	1/3	縄文多糸	縞面多量	有	にぶい緑			G段多量縄文
図版125	369	12190	WR-P	3997	308 II-S	WRPJ12	表縄文	胴部	1/3	縄文 RL	黒雲母、透明石灰細粒多量に含有	有	明赤褐			

第30表 東裏遺跡 縄文時代土器属性表 (12)

(2) 石器 (図版99-1・2、図版127~146、第30表・第31表・第32表)

1 槍先形尖頭器(図版99-2)(第30表)

1 区草創期無文土器と共に伴して出土した石器である。凝灰岩質製の槍先形尖頭器である。先端部を欠損している。柳葉状の細身であるが基部に最大幅と最大厚を持つ。表面の風化が激しい。正面は発掘時の欠損である。

2 削器(図版93-1)(第30表)

1 区草創期無文土器と共に伴して出土した石器である。黒曜石製の削器である。打点部に小剥離痕があり、打点の対面側に先端を尖らせるような剥離が見られる。

3 石鏃(図版127・128-1~42)

1~30は長さ10~15mm小型の凹基石鏃である。特に1~5は長さ10~11mmの超小型の石鏃である。器形は凹部の挟りの多いもの(6・7・13)と少ないもの(1・2・30)、三角形のもの(11・23・29)等があり形態はさまざまである。5は五角形である。4・9は局部磨製となっている。25は鋸歯状となっている。27はロケット形である。28は脚部の広い二等辺三角形のブーメラン形である。

31~40は約16~30mm前後の凹基石鏃である。38は長さが約30mmであるが、幅が14.5mmで、二等辺

三角形である。40は特に大きく長さ30.5mm、幅が22mmである。

41は無基石鏃である。基部が下膨れ状になっており、脚部がない。

42は有基石鏃である。

石材は大半が黒曜石製である。23・26が珪質頁岩製、30・31がチャート製、38が凝灰岩製、39・40が凝灰質頁岩製、34・42が安山岩製である。

石鏃の分布(図版126)は1区伊勢見山南西山麓の縄文時代早期前半期までの土器群の分布する地点で大半が出土している。したがって、この地点に分布する石鏃は早期前半期の石鏃と思われる。また、1～5の超小型の石鏃や小型の石鏃は表裏縄文土器と関係する石鏃と思われる。30～32、34・36～40などは2区伊勢見山西山麓から出土しており、早期後半から前期にかけての石鏃と思われる。

4 楔形石器(43・44)

Ⅲ層面から出土しており、旧石器時代の遺物であるか縄文時代草創期の石器であるか判断しがたい石器である。2点とも黒曜石製で、43は槌状剥離状になっている。

5 搔器(46・47)

2点とも黒曜石製である。46は原稜面を残す縦長の剥片の打面部を小型搔器に加工した石器である。47は厚手の不定形な剥片を利用して厚手に刃部を持つ搔器に加工している。典型的な搔器とは異なる。出土地点から縄文早期前半期のまでの石器と思われる。

6 削器(45・52～61・66～70・73)

52は黒曜石製、45頁岩製、他は無斑晶質安山岩製の石材が使われている。35は不定形な横広の剥片の側面を加工している。52は縦長の剥片の両側面を加工している。安山岩製の削器は鋭利な縁面に刃部剥離を施している。定型的な剥片は用いていない。出土地点が1区から出土しており、縄文早期前半期までの石器と思われる。

7 石錐(51)

凝灰岩製の石錐である。不定形な縦長の三角形剥片の先端を加工して石錐にしている。縄文前期以降の石錐は基部加工や錐部加工が施されるのに対し、錐部の加工が少なく、縄文時代の初期の石器と思われる。

8 磨製石斧(63～65)

小型の磨製石斧である。石材は3点とも蛇紋岩製である。63と65は直刃の刃部で側面の加工痕が磨り残されている。63は頭部に小剥離痕が残る、楔に使用されたものと思われる。出土地点から縄文時早期前半までの石器と思われる。

9 打製石斧(62・71)

62は2区出土の粘板岩製の小型石斧である。表面が風化しており剥離痕が明確でない。扁平な楕円形の自然石の周縁を打ち欠いて石斧としたものと思われるが時期など不明である。

71は1区出土の無斑晶質安山岩製の石器である。原稜凸面を残し、縦長に剥離した大形剥片の側縁を剥離して石斧としている。器形は撚型的であるが、刃部が丸い器形で、側縁部には敲打痕(潰し加工痕)はない。刃部には刃こぼれ痕がある。出土地点から縄文早期前半までの石器と思われる。

10 礫器(72・74～76)

3点とも無斑晶質安山岩製である。72・74と76は2区出土である。75は1区出土である。75は縄文早期前半期特有の礫器である。蛤形の礫器に類似する。厚みのある楕円形の礫の側縁を一方から打ち割って礫器にしている。76は大形の礫器である。重さが3,220gもあり、長さ193mm幅187mmもある。大形方形礫の側面を打ち割って礫器に加工されている。

11 三角錐形石器(77～82)

1区から出土している。無珣品質安山岩製の石器である。前報告の貫ノ木遺跡(長野県埋文センター1999)の三角錐形石器と同一の石器である。分厚い残核的な剥片を利用している。78は三角柱状である。77は頭部の先端部を加工して石錐として利用したと思われる。鈍角な刃部であるが、礫器的利用をしたと思われる。

12 スタンプ形石器 (83~100)

83~95・99は1区出土、96~98・100は2区出土である。91~96・97・98は磨製面が側面にある特殊磨石を利用している。87~90・96~98・100は頭部に敲打痕があり、敲石としても用いられている。83・85・92・93・98が安山岩製、他は砂岩製である。

13 凹石 (101~118)

1区から101・104~106・107・110~112・114・115・118が出土、他は2区から出土している。凹石には円礫を利用したもの(101~113)と垂角礫を利用したもの(114~118)がある。垂角礫を利用したものは、多面を凹面として利用したもの(115・117)がある。凹は表面円形のもの1つあるいは両面1つずつの凹であるが、表面の長いものは2個あるいは長軸に沿って中央部に多数凹がある。また、磨石(106・107・110・111)あるいは敲石(113)として再利用されている。113はV層から出土しており、旧石器時代の可能性がある。106は石蝕形に変形した磨石を利用している。104・110は砂岩製である。

14 敲石 (119~125・135~137)

2区出土の敲石は119・125・136・137である。他は1区出土である。

棒状の敲石(119~122・125・136・137)と礫側面を敲石(123・124)としたものがある。棒状のものは長軸の先端を使用している。121・122・125・135・136は敲打の際先端が剥離している。123は石蝕形の磨石を再利用している。124は楕円形表面の中央部を敲打面になっている。121は砂岩製、125は凝灰岩製、他は安山岩製。

15 磨石 (126~134・138~141)

130のみ2区から出土しており、他は1区から出土している。やや扁平な楕円形の礫を用い平らな表面を磨り面としている。133は側面も使用し石蝕形に変形している。134は球形の磨石で、全面磨り面としている。135は砂岩製、他は安山岩製である。

16 特殊の磨石 (142~153)

144・145・147は1区出土である。他は2区出土である。横断面三角形の側縁を磨り面としている。磨り面側面に小剥離痕が見られるものがある。押し付けながらの磨るような作業が想定されようか。148・149・152・153は敲石としても用いられている。142~145・152・153は安山岩製。他は砂岩製である。

17 砥石 (154)

1区から出土している。154は小型の磨製石斧の砥石と思われる。安山岩製。

18 有孔砥石 (155)

155は1区から出土している。中央に溝状の砥石面がある。骨角器などの加工の際用いられたものと思われる。安山岩製。

19 石皿 (156~161)

2区出土のものは157・160、他は1区出土である。156・157・161は中央部のくぼむ石皿であり他は板状の石皿である。157は大形の石皿で、図版124-345の絡条体辻痕文の土器と共伴して出土している。同時期の石皿と思われる。板状の石皿は特殊磨石とセットの可能性があるとと思われる。

以上石器を考察すると1区から出土した石器は縄文時代早期の土器群と共伴石器と思われる。また2区から出土したものは、早期後半から前期にかけた土器群と共伴する可能性がある。また、草創期無文土器

第8章 東裏遺跡

と共に伴した石器と土器の関係が注目される。

遺構・区分	Po	AH	Pe	ES	Sc	RF	UF	Fl	Ch	Co	三角錐形石器	スタンプ形石器	特殊磨石	打製石斧	磨製石斧	PT	GS	Ps	Ha	Wh	SD	原石	その他	合計
III-K	1	2			1		3	25	63	1														96
III-L		1			1		1	5	16															24
III-O						2										1						2		6
III-P									1					1	1									3
III-Q		2																	1	1			1	5
II-P					1																			1
IV-D					1			2									5					4	1	14
IV-T															1									1
V-P		1												2	1		2	5	6			1	1	19
V-Q		2										1	2				4	3	6					18
V-U												4	2				2	2	5	18				34
V-V		1	4						1			4	5			1	2	2	2	2	1			24
V-W												3	2								2			11
VI-B		1										1	3								1	1		9
VI-C		11										7	20					3	4	1		1	6	53
VI-F	1		1	1	7	9	2	75	4	17	1													122
VI-G								4	1													4		5
VI-K	1				1	1	1	56		9	2													51
VI-P		8	1	2	4	9		9	6	1		4	5			2	1	4	4	2	2	18		82
VI-Q		55	4	1	43	29		97	40	4	8	24	13	6	4	2	8	11	7	5	7	40	1	408
VI-U																								3
VI-V					1	3			3			2	1											16
その他					1	2			1			2	1						1	4	1			13
合計	4	87	6	6	65	50	8	259	134	32	8	55	56	8	8	8	31	42	53	10	18	69	1	1018

第31表 東裏遺跡 縄文時代石器組成表

図原番号	図原No	発掘番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	小フツツノスケール	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	保存度	欠損部位	備考
図原127	1	12431	IK	VI-Q	2317	II	VIQ115	3/4 AH	Ob	10	11	1.3	0.26	100	長さ
図原127	2	12659	IK	VI-Q	2598	II	VIQ114	3/4 AH	Ob	10	10	2	0.15	100	
図原127	3	12171	IK	VI-Q	1821	II	VIQ114	3/4 AH	Ob		9	2	0.16	100	
図原127	4	12305	IK	VI-Q	580	II	VIQ113	3/4 AH	Ob	12.5	9	25	0.22	100	幅
図原127	5	14488	IK	VI-Q	3775	II-6	VIQ114	3/4 AH	Ob	11	7.5	2	0.13	100	
図原127	6	14134	IK	VI-Q	3191	II	VIQ113	3/4 AH	Ob	14.5	9.5	2.5	0.24	100	
図原127	7	13947	IK	VI-Q	3003	II	VIQ116	3/4 AH	Ob	11	10	2	0.12	100	長さ
図原127	8	13991	IK	VI-Q	3041	II-6	VIQ115	3/4 AH	Ob	12	10.5	3	0.1	100	幅
図原127	9	14080	IK	VI-Q	3130	II-5	VIQ116	3/4 AH	Ob	13.5	11.5	2.5	0.24	100	
図原127	10	12631	IK	VI-Q	2570	II	VIQ115	3/4 AH	Ob	13	12	3	0.21	100	幅
図原127	11	13061	IK	VI-Q	4364	II-5	VIQ113	3/4 AH	Ob	12	12	2	0.16	100	幅
図原127	12	13281	IK	VI-Q	2190	II	VIQ115	3/4 AH	Ob	14	13	3	0.31	100	
図原127	13	13125	IK	VI-Q	1767	II	VIQ114	3/4 AH	Ch	12	11	2	0.11	100	
図原127	14	13137	IK	VI-Q	1779	II	VIQ113	3/4 AH	Ob	13.5	10.5	3	0.21	100	
図原127	15	14215	IK	VI-Q	3275	II	VIQ119	3/4 AH	Ob	12	11	3	0.25	100	長さ・幅
図原127	16	13930	IK	VI-Q	2986	II	VIQ115	3/4 AH	Ob	13.5	12	2	0.2	100	
図原127	17	14048	IK	VI-Q	3104	II-5	VIQ114	3/4 AH	Ob	13	11.5	2.5	0.21	75	幅
図原127	18	14658	IK	VI-Q	3946	II-5	VIQ112	3/4 AH	Ob	16	11	2.3	0.26	75	長さ・幅
図原127	19	13502	IK	VI-Q	2180	II	VIQ113	3/4 AH	Ob	14.5	11	3	0.36	100	

第32表 東裏遺跡 縄文時代石器属性表 (1)

調査番号	図 No	整理番号	区分	遺構区分	遺物 番号	出土 層位	小ナメが名	スケール	器種	材質	長さ mm	幅 mm	厚2mm	重量g	遺存 数	欠損部位	備考
図版127	20	14320	1区	Ⅷ-Q	3388	Ⅱ-6	ⅧQ12	3/4	AH	Ob	14.5	13	3	0.31	100	長さ	
図版127	21	12644	1区	Ⅷ-Q	3583	Ⅱ	ⅧQM14	3/4	AH	Ob	17	13	2	0.24	100		
図版127	22	14354	1区	Ⅷ-Q	3423	Ⅱ-6	ⅧQP12	3/4	AH	Ob	15	14	2	0.22	100		
図版127	23	14165	1区	Ⅷ-Q	3222	Ⅱ	ⅧQP13	3/4	AH	Sh	14	14	3.5	0.4	100		
図版127	24	12715	1区	Ⅷ-Q	1011	Ⅱ	ⅧQP13	3/4	AH	SS	20	15	4	0.7	100	幅	
図版127	25	14079	1区	Ⅷ-Q	3135	Ⅱ-6	ⅧQN15	3/4	AH	Ob	18.5	12.5	2.5	0.37	100		
図版128	26	11614	1区	Ⅷ-P	1484	Ⅱ	ⅧPN18	3/4	AH	Sh	15	11	3.3	0.29	100	幅	
図版128	27	12766	1区	Ⅷ-Q	1063	Ⅱ	ⅧQP14	3/4	AH	Ob	16.5	11	3	0.35	100		
図版128	28	14535	1区	Ⅷ-Q	2819	Ⅱ-6	ⅧQJ14	3/4	AH	Ob	9	17.5	2.5	0.2	75	長さ・幅	
図版128	29	13740	1区	Ⅷ-Q	2752	Ⅱ	ⅧQE16	3/4	AH	Ob	14.5	15.5	6	0.96	100		
図版128	30	9527	2区	Ⅷ-C	829	Ⅰ	ⅧCF07	3/4	AH	Ch	15	12.5	3.8	0.54	100		
図版128	31	8928	2区	Ⅷ-B-10	101	Ⅱ	ⅧBR85	3/4	AH	Ch	17.5	14	3.5	0.65	100		
図版128	32	1379	2区	Ⅷ-B-18	1	Ⅱ	ⅧBR10	3/4	AH	Ob	18	16	2.5	0.41	75	長さ・幅	
図版128	33	11543	1区	Ⅷ-P	628	Ⅱ	ⅧPT13	3/4	AH	Ob	19	16	6.5	1.43	100	長さ	
図版128	34	2008	2区	V-P-18	5	不明	VFK16	3/4	AH	An	21.8	15.5	3	0.94	100	長さ・幅	
図版128	35	14149	1区	Ⅷ-Q	3200	Ⅱ	ⅧQH13	3/4	AH	Ch	25	16.5	4.5	1.31	100		
図版128	36	9953	2区	Ⅷ-C	865	Ⅰ	ⅧCF16	3/4	AH	Ch	21	13	3.5	0.8	75	長さ・幅	
図版128	37	6883	2区	V-V-02	2	不明	VVB02	3/4	AH	Ob	23.5	14	4.5	1.04	100	長さ	
図版128	38	7631	2区	V-V-11	122	不明	VVD09	3/4	AH	Tu	30	14.5	3	1.26	100	長さ	
図版128	39	9899	2区	Ⅷ-C	871	Ⅰ	ⅧCG15	3/4	AH	ST	23	14	3	0.71	100		
図版128	40	9496	2区	Ⅷ-C	500	Ⅰ	ⅧCO6	3/4	AH	ST	30.5	22	6.5	3.17	100		
図版128	41	13557	1区	Ⅷ-Q	2237	Ⅱ	ⅧQE17	3/4	AH	Ob	23	17	6	1.82	100	長さ	
図版128	42	15443	2区	Z	4	不明		3/4	AH	An	22	16	4	0.97	100		3010区一括遺物 有蓋
図版129	43	13769	1区	Ⅷ-Q	1791	Ⅱ	ⅧQG13	1/2	Sc	Sh	21.5	25	7	4.79	100		
図版129	44	12205	1区	Ⅷ-P	4495	Ⅱ	ⅧPR17	1/2	BS	Ob	30.5	22	8	4.03	100		
図版129	47	15172	1区	Ⅷ-V	1884	Ⅱ	ⅧVW02	1/2	BS	Ob	43	23.5	15	11.58	100		
図版129	48	13065	1区	Ⅷ-Q	2183	Ⅱ	ⅧQR13	1/2	RP	Tu	37.5	23	9	5.68	100		
図版129	49	11911	1区	Ⅷ-P	1923	Ⅱ	ⅧPR14	1/2	RP	Ob	29.5	20.5	8.3	4.32	100		
図版129	50	14629	1区	Ⅷ-Q	3917	Ⅱ-5	ⅧQP11	1/2	RP	Sc	54.5	27	13.5	19.83	100		
図版129	51	12418	1区	Ⅷ-Q	695	Ⅱ	ⅧQP13	1/2	RP	Tu	54.5	27	13.5	12.92	100		
図版129	52	11458	1区	Ⅷ-P	412	Ⅱ	ⅧPS16	1/2	Sc	Ob	52.5	34.5	6	9.073	100		
図版129	53	14545	1区	Ⅷ-Q	3933	Ⅱ-5	ⅧQL12	1/2	Sc	An	60	59	18.5	63.63	100		
図版129	54	12995	1区	Ⅷ-Q	1296	Ⅱ	ⅧQP15	1/2	Sc	An	50.5	47	14.5	30.95	100		
図版129	55	15158	1区	Ⅷ-V	1870	Ⅱ	ⅧVCO4	1/2	Sc	An	70	56	14.5	46.83	75	厚さ	
図版129	56	12704	1区	Ⅷ-Q	2716	Ⅱ	ⅧQD14	1/2	Sc	An	51.5	46	15	28.16	50	長さ・幅・厚さ	
図版130	57	14976	1区	Ⅷ-Q	4277	Ⅱ-5	ⅧQP14	1/2	Sc	An	52	45	18	43.5	100		
図版130	58	14649	1区	Ⅷ-Q	3937	Ⅱ-5	ⅧQL11	1/2	RP	Tu	51	59.5	12.5	44.35	100		
図版130	59	13274	1区	Ⅷ-Q	2140	Ⅱ	ⅧQD14	1/2	Sc	An	70	49	16	47.51	100		
図版130	60	15114	1区	Ⅷ-Q	4464	不明	ⅧQJ19	1/2	Sc	An	85.5	37.5	20.5	59.75	100		

第32表 東裏遺跡 縄文時代石器属性表 (2)

第8章 東裏遺跡

図版番号	図 No	整理番号	区分	遺構・区分	遺物 番号	出土 層位	小刀ノド名	スケール	器種	材質	長さ mm	幅 mm	厚さmm	重量g	遺存 度	大塚館位	備考
図版130	61	14433	1区	溝-Q	3501	II-6	溝QH17	1/2	Se	An	54	92.5	9.5	43.49	100		
図版130	62	1674	2区	V-P-02		2I-不明	VFG02	1/2	打製石斧	Si	50	38.5	16.5	47.19	100		縄文時代
図版130	63	13080	1区	溝-Q	2617	II	溝QM13	1/2	磨製石斧	Se	67.5	24.5	10.5	23.3	100		
図版130	64	14982	1区	溝-Q	4283	II-6	溝QP14	1/2	磨製石斧	Se	42.5	20.0	8.5	13.13	55		長さ・幅・厚さ
図版130	65	14285	1区	溝-Q	3351	II-6	溝QL13	1/2	磨製石斧	Se	60	29.0	11.5	27.75	100		
図版131	66	14274	1区	溝-Q	3340	II-6	溝QL12	1/3	Se	An	80	67	21	104.8	75		長さ・幅
図版131	67	11647	1区	溝-P	605	II	溝PR12	1/3	Se	An	95	66	29.5	161.6	75		長さ・幅
図版131	68	14677	1区	溝-Q	3985	II-6	溝QZ0	1/3	Se	An	85	118	32	261.4	100		
図版131	69	15184	1区	溝-V	3520	II	溝VZ07	1/3	Se	An	97.5	81	37	283.6	100		
図版131	70	13626	1区	溝-Q	2855	II-5	溝QN11	1/3	Se	An	104	88	21	259.1	100		
図版132	71	13669	1区	溝-Q	3025	II-5	溝QJ15	1/3	打製石斧	An	25	12	5	1315	100		
図版132	72	9927	2区	溝-C	920	II	溝CH17	1/3	PT	Tu	86	96	33	248.5	75		長さ
図版132	73	9612	2区	溝-C	644	II	溝CK06	1/3	Se	An	142	99	37	287.3	100		
図版132	74	16205	2区	V-V-04		不明	VV04	1/3	PT	An	120	111	42	602	100		
図版133	75	11918	1区	溝-P	1900	II	溝PR14	1/3	PT	Sa	128	61	44	495	100		
図版133	76	7876	2区	V-V-19		3I-不明	VVN14	1/3	PT	安山岩	190	187	69	3220	100		
図版133	77	14350	1区	溝-Q	3424	II-6	溝QP12	1/3	三角磨製石斧	An	99	66	32	230	100		三角磨
図版133	78	13994	1区	溝-Q	3050	II-5	溝QL16	1/3	三角磨製石斧	An	87	59	53	315	100		
図版134	79	13889	1区	溝-Q	2929	II-5	溝QM11	1/3	三角磨製石斧	An	124	66	55	460	100		
図版134	80	13981	1区	溝-Q	1282	II	溝QM16	1/3	三角磨製石斧	An	107	63	45	290	100		
図版134	81	12819	1区	溝-Q	1130	II	溝QH15	1/3	三角磨製石斧	An	95.5	83	82	485	100		
図版134	82	14617	1区	溝-Q	3905	II-6	溝QP11	1/3	三角磨製石斧	An	114	72	46	425	100		
図版135	83	14881	1区	溝-Q	4182	II-6	溝QO15	1/3	スタンプ形石器	安山岩	76	65	36	220	100		
図版135	84	14616	1区	溝-Q	3904	II-6	溝QP11	1/3	スタンプ形石器	Sa	110	71	38	418	100		
図版135	85	15204	1区	溝-V	4439	不明	溝VJ01	1/3	磨製石斧	An	129	68	46	499	100		
図版135	86	12827	1区	溝-Q	1138	II	溝QJ16	1/3	スタンプ形石器	Sa	116	54	36	410	100		
図版135	87	12923	1区	溝-Q	1224	II	溝QK15	1/3	スタンプ形石器	Sa	123	69	47	580	100		
図版135	88	12059	1区	溝-P	2153	II	溝PT14	1/3	スタンプ形石器	Sa	109	76	46	560	100		
図版135	89	14099	1区	溝-Q	3196	II-5	溝QO14	1/3	スタンプ形石器	Sa	111	63	42	360	100		
図版135	90	13450	1区	溝-Q	2337	II	溝QH13	1/3	スタンプ形石器	Sa	130	60	49	565	100		
図版136	91	8661	2区	溝-VI-B-04		17-不明	溝VI01	1/3	スタンプ形石器	Sa	114	78	70	893	100		
図版136	92	14999	1区	溝-Q	4200	II-6	溝QO15	1/3	スタンプ形石器	安山岩	98	66	50	500	100		
図版136	93	15116	1区	溝-Q	4466	不明	溝QZ20	1/3	スタンプ形石器	安山岩	98	72	57	615	100		
図版136	94	14094	1区	溝-Q	3140	II-5	溝QN15	1/3	特殊磨石	Sa	124	68	49	630	100		
図版136	95	15209	1区	溝-V	4444	不明	溝VJ02	1/3	スタンプ形石器	Sa	110	58	41	325	100		
図版137	96	8332	2区	V-W	172	遺物	溝VJ20	1/3	スタンプ形石器	Sa	98	58	43	332	100		
図版137	97	3093	2区	V-U-04		22B-不明	溝UJ02	1/3	スタンプ形石器	Sa	73	80	69	1147	100		
図版137	98	9817	2区	溝-C	8192		溝CD11	1/3	スタンプ形石器	安山岩	108	81	78	1040	100		遺物NO1644と同等号
図版137	99	15186	1区	溝-V	3534	II	溝VK10	1/3	スタンプ形石器	Sa	108	65	51	580	100		

第32表 東裏遺跡 縄文時代石器属性表 (3)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

図録番号	国 No	発掘番号	区分	遺構・区 分	遺物 番号	出土 層位	小ナツクシ 名	スケール	器種	材質	長さ mm	幅 mm	高さ mm	直径 mm	遺存 状況	欠損部位	備考
図録137	100	5522	2区	V-U-10	221	不明	VUQ08	1/3	スタンプ形 器	Sa	142	61	62	1090	100		
図録138	101	13427	1区	Ⅱ-Q	2312	Ⅱ	ⅡQJ16	1/3	Ps	安山岩	83	77	36	350	100		
図録138	102	4348	2区	V-U-05	630	不明	VUQ02	1/3	Ps	安山岩	78	30	38	190	100		
図録138	103	9909	2区	Ⅱ-C	911	Ⅰ	ⅡCJ16	1/3	Ps	安山岩	114	93	46	635	100		
図録138	104	13199	1区	Ⅱ-Q	1889	Ⅱ	ⅡQJ20	1/3	Ps	Sa	97	67	39	332	66	厚さ	
図録138	105	11918	1区	Ⅱ-P	1931	Ⅱ	ⅡPJ14	1/3	Ps	安山岩	83	64	44	240	100		
図録138	106	12816	1区	Ⅱ-Q	1117	Ⅱ	ⅡQJH6	1/3	Ps	安山岩	118	78	40	570	100		
図録138	107	13297	1区	Ⅱ-Q	2175	Ⅱ	ⅡQE13	1/3	Ps	安山岩	95	78	48	395	76	幅	
図録138	108	9115	2区	Ⅱ-C	117	2	ⅡCG10	1/3	Ps	安山岩	145	78	42	460	100		
図録138	109	2782	2区	V-Q-23	6	Ⅱ	VQJ18	1/3	Ps	安山岩	135	44	44	502	6		縄文の遺物。磨り面あり。
図録138	110	14897	1区	Ⅱ-Q	4198	Ⅱ-5	ⅡQO13	1/3	Ps	Sa	102	60	35	350	100		
図録138	111	11877	1区	Ⅱ-P	1802	Ⅱ	ⅡPJ11	1/3	Ps	安山岩	77	72	27	196	100		
図録139	112	14161	1区	Ⅱ-Q	3218	Ⅱ	ⅡQJ13	1/3	Ps	閃緑岩	90	88	59	385	100		
図録139	113	10564	1区	Ⅱ-J	28	V	ⅡJH05	1/3	Ps	安山岩	117	105	70	1220			旧石器時代か
図録139	114	16186	1区	SPJ3				1/3	Ps	安山岩	47	52	34	120	50	長さ・幅・ 厚さ	
図録139	115	14873	1区	Ⅱ-Q	4174	Ⅱ-6	ⅡQO14	1/3	Ps	安山岩	114	58	25	205	73	長さ	
図録139	116	7970	2区	V-V-20	96	不明	VVJ14	1/3	Ps	安山岩	111	81	39	560	100		
図録139	117	1902	2区	V-P-08	46	不明	VPL06	1/3	Ps	安山岩	125	71	46	438	6	100	
図録139	118	13892	1区	Ⅱ-Q	2935	Ⅱ-5	ⅡQM11	1/3	Ps	安山岩	140	117	60	1165	100		
図録140	119	7902	2区	V-V-20	26	不明	VVS16	1/3	Hs		80	44	25	135	4	100	
図録140	120	13282	1区	Ⅱ-Q	2180	Ⅱ	ⅡQC14	1/3	Hs	安山岩	117	39	40	460	100		
図録140	121	14246	1区	Ⅱ-Q	3312	Ⅱ-5	ⅡQM12	1/3	Hs	Sa	126	57	35	335	78	長さ	
図録140	122	5800	2区	V-U-10	561	不明	VUS06	1/3	Hs	花崗岩	145	74	72	975	100		
図録140	123	14667	1区	Ⅱ-Q	3905	Ⅱ-6	ⅡQJ12	1/3	Hs	安山岩	79	70	35	53	100		遺物番号14996と整合
図録140	124	14301	1区	Ⅱ-Q	3288	Ⅱ	ⅡQJH6	1/3	Hs	安山岩	141	90	60	809	100		
図録140	125	5688	2区	V-U-10	387	不明	VUR07	1/3	Hs	Tv	182	56	84	1410	100		
図録141	126	15068	1区	Ⅱ-Q	4371	Ⅱ-6	ⅡQJ14	1/3	GS	安山岩	70	70	47	320	50	長さ	
図録141	127	14689	1区	Ⅱ-Q	3908	Ⅱ-6	ⅡQJH8	1/3	GS	閃緑岩	112	72	36	385	100		
図録141	128	16172	1区	QJ602	199			1/3	GS	安山岩	163	84	50	580	100		
図録141	129	12174	1区	Ⅱ-P	2900	Ⅱ	ⅡPJH6	1/3	GS	安山岩	98	89	25	460	100		
図録141	130	9428	2区	Ⅱ-C	430	Ⅰ	ⅡCG04	1/3	GS	Ⅱ	104	98	63	930	100		
図録141	131	13995	1区	Ⅱ-Q	2051	Ⅱ-6	ⅡQJ16	1/3	GS	安山岩	115	90	62	930	100		
図録141	132	13159	1区	Ⅱ-V	1871	Ⅱ	ⅡVJ04	1/3	GS	花崗岩	108	65	37	325	25	幅・厚さ	
図録141	133	14891	1区	Ⅱ-Q	4195	Ⅱ-6	ⅡQO15	1/3	GS	安山岩	124	90	35	616	100		
図録141	134	9796	2区	Ⅱ-C	796	Ⅰ	ⅡCD13	1/3	GS	安山岩	86	76	60	445	100		
図録142	135	15140	1区	Ⅱ-V	1851	Ⅱ	ⅡVJ05	1/3	Hs	Sa	221	74	44	1675	100		
図録142	136	5687	2区	V-U-10	386	不明	VUR08	1/3	Hs	安山岩	165	91	55	1000	100		
図録142	137	2636	2区	V-Q-17	16	Ⅱ	VQJ15	1/3	Hs	安山岩	148	58	39	476	5	100	
図録142	138	16022	2区	V-V-12	44		VVJ12	1/3	GS	安山岩	87	68	42	300	100		

第32表 東裏遺跡 縄文時代石器属性表 (4)

図版番号	図No	整理番号	区分	遺跡区分	遺物出土番号	小片の存在	スケール	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	容積cc	欠損部位	備考
図版142	139	2645	2区	V-Q-17	25	■	VQH16	1/3	GS	安山岩	140	82	38	616.6	100	磨り面をもつ可能性あり
図版142	140	1604	2区	IV-D-12	77	■	IVDH12	1/3	GS	安山岩	104	89	30	399.7	100	
図版142	141	3054	2区	V-Q-19	6	■	VQH14	1/3	GS	安山岩	101	70	37	387.7	100	わずかに磨り面をもつ
図版143	142	8026	2区	V-W-24	25	不明	VVO19	1/3	特殊磨石	安山岩	132	75	51	642.6	100	
図版143	143	9628	2区	VI-C	630	1	VIC109	1/3	特殊磨石	安山岩	141	55	79	878	100	
図版143	144	14165	1区	VI-Q	3217	■	VWQ14	1/3	特殊磨石	安山岩	127	61	77	770	100	
図版143	145	14096	1区	VI-Q	3153	■-5	VWQ15	1/3	特殊磨石	安山岩	139	64	69	790	100	
図版143	146	8025	2区	V-W-24	24	不明	VVO20	1/3	特殊磨石	Sn	152	78	68	969.7	100	
図版143	147	12781	1区	VI-Q	2807	■	VWQ13	1/3	特殊磨石	Sn	143	45	54	535	100	
図版143	148	8062	2区	VI-D-04	18	不明	VWQ1	1/3	特殊磨石	Sn	173	95	64	1284	75	長さ
図版144	149	9244	2区	VI-C	340	2	VIC02	1/3	特殊磨石	Sn	144	53	69	650	100	
図版144	150	9786	2区	VI-C	788	1	VIC11	1/3	特殊磨石	Sn	158	48	65	684	100	
図版144	151	9648	2区	VI-C	50	1	VIC13	1/3	特殊磨石	Sn	146	70	69	996	100	
図版144	152	9655	2区	VI-C	657	1	VIC15	1/3	特殊磨石	安山岩	165	78	79	1420	100	
図版144	153	18197	2区	IV-F-5			IVF05	1/3	特殊磨石	安山岩	129	66	68	680	75	長さ
図版145	154	13121	1区	VI-Q	1763	■	VWQ14	1/3	Wh	安山岩	63	66	33	265	100	長さ
図版145	155	13992	1区	VI-Q	2935	■-5	VWQ11	1/3	Wh	安山岩	152	110	47	1215	100	
図版145	156	14420	1区	VI-Q	3488	■-6	VWQ18	1/3	SD	閃緑岩	178	102	42	985	67	幅
図版145	157	2275	2区	V-F-23	6	■	VF17	1/4	SD	花崗岩	355	305	140	18620	100	矢張り文画の土器といっしょに出土した石皿
図版146	158	16199	2区	IV-D-II-11	73	不明	IVDH11	1/4	SD	安山岩	203	140	86	6000	35	長さ・幅・厚さ
図版146	159	15646	1区	VI-Q	4348	■-5	VWQ13	1/4	SD	安山岩	254	199	74	5250	50	幅
図版146	160	8576	2区	V-W-16	83	■		1/4	Wh	安山岩	190	143	127	6000	75	長さ・幅・厚さ
図版146	161	15043	1区	VI-Q	4345	■-5	VWQ13	1/4	SD	安山岩	233	194	85	2370	70	長さ・幅・厚さ

第32表 東裏遺跡 縄文時代石器属性表 (5)

第3節 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は土器2点単独で発見されたのみである。

土器 (第31図1・2) (第33表)

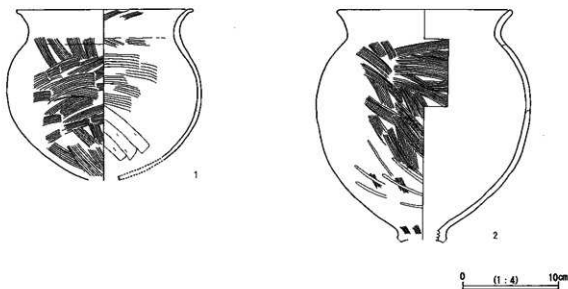
1は伊勢見山北西山麓2区V-Wの低地で1個体単独出土している。口径約18cmの土器器臺である。胎土は砂粒が多量に含有し、色調が灰白色である。胎土は信濃町周辺のものとは異なる。頸部が「コ」の字状に延び、口縁部が開く。口頸部はナテ調整が行われている。胴部は球形に丸みを持つ。口縁部は面取りされている。胴部外面は縦位に、その上から中央部分で横位にハケ整形を行っている。内面は胴上半部で横位にハケ整形が行われ、胴下半部でケズリ整形が行われている。頸部と胴部に接合部内面に接合痕が明確に残る。底部が欠損しているが、台付き甕の可能性はある。

検出番号	押込 No	整理 番号	実測 番号	遺構・ 区分	遺物 番号	出土 層位	小ブリード	スケール	器種	胎土	色調(外)	胴腹(外)	胴底(内)	口径 cm	特徴	接合(整理 番号)	備考
第31図	1	6390	4061	V-W	220.1	VW808	1/4	匳		1mm以下の 砂粒多量	灰白色	口縁～胴部ナ ズ、胴部細いハケ	口縁～胴部ナ ズ、粗いハケ	18	口唇部突起の、 口縁部縁外反 胴部縁用、胴部 と口縁部の接合 部明確に見える	6390・ 6391・6389	底部欠損
第31図	2	9168	4062	VI-C	170.2	VIc184	1/4	台付き甕		白色細粒を 含む砂粒 多量	暗赤褐色	口縁～胴部ナ ズ、胴上部ハケ 胴下半ミガキ?	ナズ	18	胴部球形	9168・ 9179・ 9181・9407	台付き部欠損

第33表 東裏遺跡 古墳時代土器属性表

2は伊勢見山西山麓2区VI-Cの低地で1同様単独出土している。口径約18cmの土師器台付き甕である。胎土は白色細粒を含む砂粒が多量である。色調は暗赤褐色である。口縁部が外反し胴上部に最大径がある球形の台付き甕である。外面胴部はハケ整形が行われ、胴部下半部に若干のミガキが見られる。台の部分は欠損している。

1と2は古墳時代3C後半から4世紀初頭のものと思われる。1と2は胎土が異なり、1は日本海側の個体と思われる。



第31図 東裏遺跡 古墳時代土器

第4節 平安時代の遺構と遺物

本遺跡では平安時代の遺構は住居址が8棟、建物址が1棟、土坑が8基発見された。(註)

註 1区から検出された住居址は調査時ではSB01～SB03とし、注記にもこのように記載されていたが、整理作業においてSB11～SB13に訂正し、2区から検出された②SB01～②SB07は注記に記載されているが、本報告書ではSB01・SB02・SB04～SB07と訂正して記述する。②SB03は整理作業においてST01と訂正した。SB08～SB10は欠番である。

1 遺構

(1) 住居址・建物址 (図版148～160、第34表)

本遺跡では住居址9棟と建物址1棟が検出された。

1. S B 01 (図版148)

調査区は2区V-V区中央部に位置する。検出面はⅡ層中より土師器片が散布し、Ⅱ層下のⅣ層面を掘り込んで壁面検出した。規模は北壁約3m、東壁約4mで、北東コーナーのみ壁を確認した。西壁が破壊されており、形状は方形であろうとおもわれ、規模は不明。床面は硬いⅣ層を掘り込んでいるため明確な面は無い。床面に焼土面を5ヶ所確認した。柱穴は径20から30cmの17ヶ所の柱穴確認した。P09のみ70cmの深さが認められたが、他の柱穴はいずれも30～40cmの深さである。P15はP17に切られており二度以上の建替えが想定される。周溝は無い。竈も検出されなかった。覆土はⅡ層類似黒色土単層で、一部Ⅳ層のブロック混在している。

遺物はP16から図版148-1・2の土師器杯が2個口を合わせた形で出土している。

2. S B 02 (図版149)

調査区V-P・Q区にまたがる南側で、S B 01の25m北西側に位置する。Ⅱ層底面からⅢ層にかけ検出された。形状と規模は一辺約4m方形であろうか。南西壁から南東壁、中央部分にかけて破壊され形状規模不明である。床面は覆土がほとんど残っていないため硬い床面が検出されなかった。柱穴は径50cm以下のピットが10ヶ所検出された。P01はピット内周囲に拳より小さい礫が巡っており、柱痕を囲っていたものと思われる。深さは約40cmのもの20～30cmの浅いピットが検出された。住居の付属施設は、長径が1m以上の楕円形の土坑が8基確認された。S K 06・S K 03は焼土混合の覆土であり、S K 07は黒色の覆土である。周溝は西壁脇にわずかに周溝のようなものが確認されたが、P13により切られていた。カマドは調査中には検出されなかった。他の住居と同様南東方向に存在したのであろうか。住居の一部が破壊されているため不明である。覆土は壁面5cmほどの深さしか検出されなかった。黒色土に焼土炭化物が混入している。

3. S T 01 (図版150)

調査区2区IV-D区中央部に位置する。Ⅱ層(柏原黒色火山灰層)中から検出された。土師器の密な範囲に炭化物も多く分布していた。炭化物や焼土の出土範囲は直径6mの円形であった。Ⅲ層面まで掘り下げたが竈穴のプランは確認されなかった。そのため、住居址と思われたが、建物址として、本報告書では記載する。床面の硬い面は検出されなかった。柱穴は18ヶ所確認された。円形のプランを取り囲むように配置されている。南東側の柱穴は深さのあるものが多い。P18の周縁には焼土が見られ、柱穴は焼け石で囲まれていた。P18からS K 03に方向に炭化物周中部が広がり、炉と思われる。

土坑は4基建物内に確認された。直径80cmから100cmと大きく、深さは20cmを計る。S K 02～S K 04からは鉄滓が集中していた。竈や周溝や壁面は検出されなかった。

覆土は黒色土(Ⅱ層)中に炭化材と土師器などの遺物が集中し堆積していた。

4. S B 04 (図版151)

調査区2区Ⅲ-K区南西側に位置する。Ⅱ層中より検出した。炭化物と焼土が混入した面とⅡ層との差でプランを検出した。規模は長軸6.7m短軸4.1mの隅丸方形である。南壁面はややプランが歪み南東部に竈跡が検出された。床面は明確なものない。主柱穴はP3・P4・P5・P1の4本である。周溝は北側壁面とその両コーナーと南西コーナーに検出されている。竈は南東コーナー壁部分に検出した。竈の北西部に20cm大の破碎した焼け礫がかたまっており、火床面には土師器破片が見られる。覆土は北壁側に多くの炭化物と焼土が含有している。

5. SB05 (図版152)

調査区2区Ⅲ-K区北東側に位置する。検出面はⅡ層である。形状・規模は5.65×5.4mのほぼ方形で、深さは25cmである。壁面は全面残存しており、南壁を除き周溝が巡っている。床面は暗褐色土で、粘性があるが、堅固な部分はなかった。竈は南東コーナーに位置する。石組み竈と思われるが袖石の一部のみ検出。柱穴は8本確認され、主柱穴は6本と思われる。北東側に径1mの円形で深さ28cmの浅いSK01が検出され、竈西側南壁にSK01に類似するSK02が確認された。

6. SB06 (図版156)

調査区2区Ⅲ-K区北東側で、SB05の4m南に位置する。検出面はⅡ層。形状と規模は3.85×3.70mのほぼ方形の住居址で、北壁北西コーナーに張り出しが見られる。東と西壁に周溝が検出されている。竈は南東コーナーに位置し、石組みは崩されており、南側の袖石のみ検出された。柱穴は確認されなかった。竈で確認されたピットは石組み竈の石を抜いた痕跡と思われる。土坑は3基確認され、径約0.7mの円形で深さも約20～30cm前後である。

7. SB07 (図版157)

調査区2区Ⅱ-E区中央部、SB05の70m北西に位置する。検出面はⅡ層である。住居内に炭化材が散乱していた。火を受けた住居址と思われる。形状と規模は5.0m×4.3m、深さ25cmの方形を呈する。南側を除く壁面に周溝が見られる。床面には炭化材があり、床面もかなりの焼土が含有していた。竈は南東コーナーに位置する。石組み竈と思われるが、袖石は破壊されていた。主柱穴はそれぞれの壁に4本と東寄りの中央部に1本確認された。土坑は竈脇に2基と西側壁近くに1基確認された。竈も破壊され、出土遺物も少ないことなどから、住居址を廃棄したあと住居に火を放ったものと思われる。

8. SB11(図版158)

調査区1区Ⅶ-P区南東側に位置する。検出面はⅡ層で、北西壁を除いて壁面は攪乱され検出されなかった。形状と規模は1辺4.7mの方形の住居址であったと思われる。竈は北東側、東壁に位置するが石組みが明確に検出されなかった。柱穴・土坑は確認できなかった。住居中央部分と思われるところに炭化物和焼土の塊が検出された。

9. SB12(図版159)

調査区1区Ⅶ-Q区南西側でSB11の1m北東に位置する。検出面はⅡ層であるが攪乱されており住居址北東壁しか検出されなかった。形状と規模は北東壁のみで1辺5.5mの方形の住居址と思われる。竈は北東コーナー付近に位置していたと思われる。攪乱されており竈底面のみ検出した。柱穴・土坑等攪乱されており検出できなかった。

10. SB13 (図版160)

調査区1区Ⅶ-Q区南側、SB12から南西側7mに位置する。検出面はⅡ層で、攪乱されており、北東壁部分のみ検出された。形状と規模は1辺3.65mの方形の住居址と思われる。竈・柱穴・土坑は検出されなかった。

遺構名	遺構番号	遺構・区分	規模(m)	深さ(cm)	カマド位置	周溝有無	残存部位	残存率%	ピット数	土坑数	備考
SB01	SB01	VV12・VV13	不明	17.0		有	北東コーナー		17		
SB01	P1		0.20×0.20	18.0							
SB01	P2		0.25×0.20	30.0							
SB01	P3		0.45×0.30	16.0							

第34表 東裏遺跡 平安時代住居址属性表 (1)

第8章 東裏遺跡

遺構番号	遺構・区分	規模(m)	深さ(cm)	カマド位置	周溝の有無	残存部位	残存率%	ピット数	土坑数	備考
SB01 P4		0.20×0.20	30.0							
SB01 P5		0.40×0.20	27.0							
SB01 P6		0.25×0.20	30.0							
SB01 P7		0.27×0.25	28.0							
SB01 P8		0.30×0.25	19.0							
SB01 P9		0.25×0.21	70.0							
SB01 P10		0.20×0.20	20.0							
SB01 P11		0.30×0.27	26.0							
SB01 P12		0.25×0.24	31.0							
SB01 P13		0.30×0.28	49.0							
SB01 P14		0.25×0.24	29.0							
SB01 P15		0.26×	35.0							
SB01 P16		0.25×0.20	18.0							
SB01 P17		0.24×	42.0							
SB02 SB02	VQ21	4.95×	25.0		北側に一部有り			10	8	
SB02 P1		0.25×0.25	32.0							
SB02 P2		0.24×0.24	24.0							
SB02 P3		0.23×0.20	26.0							
SB02 P4		0.26×0.21	42.0							
SB02 P5		0.32×	42.0							
SB02 P6		0.35×0.26	12.0							
SB02 P7		0.74×0.35	36.0							
SB02 P8		0.48×0.40	18.0							
SB02 P9		0.50×	14.0							
SB02 P10		0.54×	25.0							
SB02 SK01		0.94×0.90	22.0							
SB02 SK02		1.25×	35.0							
SB02 SK03		0.95×0.90	28.0							
SB02 SK04		0.70×0.62	20.0							
SB02 SK05		1.07×0.65	38.0							
SB02 SK06		0.85×0.75	21.0							
SB02 SK07		1.24×0.75	24.0							
SB02 SK08		1.06×0.78	34.0							
ST01 ST01	IVD02・IVD07・IVD08							18	4	
ST01 P1		0.30×0.28	34.0							
ST01 P2		0.32×0.30	30.0							
ST01 P3		0.35×0.35	41.0							
ST01 P4		0.20×0.20	20.0							
ST01 P5		0.17×0.15	10.0							
ST01 P6		0.40×0.27	15.0							
ST01 P7		0.17×0.16	12.0							
ST01 P8		0.20×0.20	25.0							
ST01 P9		0.36×0.36	70.0							
ST01 P10		0.25×0.25	25.0							
ST01 P11		0.38×0.28	46.0							
ST01 P12		0.25×0.22	12.0							
ST01 P13		0.16×0.13	10.0							
ST01 P14		0.20×0.20	13.0							
ST01 P15		0.35×0.32	65.0							
ST01 P16		0.35×0.35	38.0							
ST01 P17		0.30×0.30	30.0							
ST01 P18		0.35×0.30	26.0							
ST01 SK01		0.70×0.60	28.0							
ST01 SK02		0.85×0.82	35.0							
ST01 SK03		1.25×1.02	24.0							
ST01 SK04		0.82×0.74	28.0							
SB04 SB04	ⅢK17	6.73×4.15	10.0	南東	有		100	3	6	
SB04 P1		0.60×0.45	14.0							

第34表 東裏遺跡 平安時代住居属性表 (2)

遺構名	遺構番号	遺構・区分	規模(m)	深さ(cm)	カマド位置	周溝有無	残存部位	残存率%	ピット数	土坑数	備考
SB04	P2		0.15×0.13	4.5							
SB04	P3		0.34×0.30	37.1							
SB04	P4		0.26×0.26	33.6							
SB04	P6		0.26×0.24	32.9							
SB04	P6		0.23×0.23	31.4							
SB04	SK01		1.26×1.20	45.0							
SB04	SK02		1.00×0.94	10.9							
SB04	SK03		1.04×0.56	7.2							
SB05		ⅢK09 ⅢK10	5.65×0.40	25.0	南東	有		100	8	2	
SB05	P1		0.30×0.30	37.0							
SB05	P2		0.28×0.28	50.7							
SB05	P3		0.24×0.20	39.1							
SB05	P4		0.26×0.24	48.9							
SB05	P6		0.24×0.22	51.1							
SB05	P6		0.22×0.20	61.0							
SB05	P7		0.36×0.32	14.0							
SB05	P8		0.32×0.32	8.4							
SB05	SK01		1.00×0.90	28.6							
SB05	SK02		0.60×	22.9							
SB06		ⅢK14	3.85×3.70	30.0	南東	有		100	3	9	
SB06	P1		0.32×0.22	17.5							
SB06	P2		0.38×0.20	10.0							
SB06	P3		0.18×0.16	10.5							
SB06	SK01		0.72×	21.8							
SB06	SK02		0.74×	26.0							
SB06	SK03		0.60×0.52	22.0							
SB07		ⅡE18	5.0×4.3	25.0	南東	有		100	11	2	
SB07	P1		0.24×0.24	41.2							
SB07	P2		0.24×0.24	55.8							
SB07	P3		0.48×0.40	73.4							
SB07	P4		0.22×0.22	62.0							
SB07	P5		0.22×0.22								
SB07	P6		0.57×0.45								
SB07	P7		0.48×								
SB07	P8		0.27×0.25								
SB07	P9		0.20×								
SB07	P10		0.20×								
SB07	P11		0.24×0.20								
SB07	SK01		0.60×0.52								
SB07	SK02		1.12×0.76								
SB11	SB11	ⅤP25	4.7×	15.0	北東	有	北側のみ				
SB12	SB12	ⅤQ21	5.5×	5.0	北東	有	北側のみ				
SB13	SB13	ⅤQ22ⅤV02	3.65×	7.0	不明	有	北側～北				

第34表 東畠遺跡 平安時代住居址属性表 (3)

(2) 土坑(図版147、第35表)

1. SK01

調査区2区IV-D区の中央部に位置する。検出面はⅡ層上面。規模は0.96m×0.90mの円形、深さ38cmのタイラ状の土坑である。覆土は焼土のような赤黒色土が主体である。SK02を切って出土している。

2. SK02

調査区2区IV-D区の中央部でSK01によって切られている。検出面はⅡ層上面。規模0.94mのほぼ円形の土坑である。深さ38cmでSK01により東側が切られており、形状も覆土も類似する。

3. SK03

調査区2区IV-D区でSK02の約2m西側に位置する。検出面はⅡ層上面である。規模は1.10m×0.92mで、形状は円形、深さ33cmで覆土や形状がSK01やSK02に類似する。

4. SK04

調査区2区IV-D区で、SK05の西側に隣接して出土。形状はビットで、0.2m径で深さ約20cmである。検出面はⅡ層。覆土はSK01などと同様である。

5. SK05

調査区2区IV-D区で、SK05の約50cm南側に位置する。検出面はⅡ層上面。規模(径0.74m、深さ25cm)・形状・覆土はSK01などと類似する。

6. SK06

調査区2区IV-D区で、SK07に隣接する。検出面はⅡ層上面。規模は径0.2m、深さ20cmのビット状遺構である。覆土も他の土坑と同様である。

7. SK07

調査区2区IV-D区でSK01の3m北側に位置する。検出面はⅡ層上面。規模は0.98×0.80の円形で他の土坑と形状・覆土など類似する。

8. SK08

調査区2区IV-D区で、SK01の北側に隣接する。検出面はⅡ層上面。規模0.90×0.72mで形状・覆土等他の土坑と類似する。

SK01～SK08は平安時代の遺構と思われる。これらの土坑群の2m北側にST01が隣接している。ST01の様相や、土坑群の様相から、住居址ないし建物址がこの土坑群にあったと思われるが、土坑検出面まで攪乱され、検出できなかったものと思われる。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	分類	備考
SK	1	0.96×0.80	38	N-80°-W	18	平安時代
SK	2	不明×0.94	38	N-80°-W	18	平安時代
SK	3	1.10×0.92	32	N-5°-W	18	平安時代
SK	4	0.22×0.16	22	-	18	平安時代
SK	5	0.74×0.74	33	N-62°-E	18	平安時代
SK	6	0.22×0.22	26	-	18	平安時代
SK	7	0.98×0.80	25	N-77°-E	18	平安時代
SK	8	0.90×0.72	32	N-12°-W	18	平安時代

第35表 東裏遺跡 土坑属性表

2 遺物

1. SB01 (図版148-1～9) (第36表)

住居址は西壁が破壊され遺物も多く出土しなかった。

1・2はほぼ法量の同じ土師器杯である。底部回転糸切りでロクロ整形である。4は内黒の杯、5～8は内黒碗である。碗の高台部分は2形態見られ、底径も2種あり、碗の法量は2種類あると思われる。9は積み上げ痕の残る製塩土器片である。覆土下より出土している。内面は剥落しており、使用した製塩土器の破片と思われる。この土器片は小さな破片のみである。日本海の製塩職人との交流の際、移入されたものであろうか。1・2のように柱穴内に杯を合わせて埋めた状況から、神事が行われた可能性も考察される。

遺物の状況から10世紀ごろの住居址と思われる。また、製塩土器片の存在から、日本海と内陸の交流があったことが伺える。

2. SB02 (図版153-10～25)

10は土師器杯で、底部が欠損している。11~14は土師器碗、16~17は内黒杯、18・20・22は内黒碗である。杯や碗の法量は大小2種ある。11・13・14・17・18・22に暗文が見られる。暗文は放射状のものと、17のように木の葉状の8単位の暗文と22のような枝状の暗文がある。また灰釉陶器片も出土している。

23はロクロ整形の鉢、24・25はロクロ甕である。25には胴下半部にタタキがあり、北信濃の様相を示している。

時期は出土遺物から10世紀前後の住居址と思われる。

3. ST01 (図版153—26~42、図版154—43~49、図版161—127~140)

26~46は土師器、47は灰釉陶器、48は須恵器、49は土製品、127~140は金属器である。

26から32は杯である。法量は26から28の口径10cm前後、高さ3cm前後のもの。29から31は13cm前後、高さ4cm前後のもの。口径14cm前後、高さ推定6cm前後のもの、3法量の杯がある。

33から35は内黒杯で約2法量ある。36~40は内黒碗で3法量ある。36は口径約11cm器高4.5cm。37・39は口径12.5cm器高5.2cm。38・40は約15cm器高6.0cm前後である。41・43は鉢である。42は盤の高台部分である。44から46はロクロ甕で3法量である。47は東美濃系短頸壺の胴部下半である。43は大甕である。白色の小粒子を多く含み、タタキは外面格子目で、内面当て具痕が放射状などの特徴がある。佐渡小泊産であろうか? (飯山市教育委員会 1991 トトノ池南遺跡)。49は羽口である。

また、30は杯の表面に墨書が描かれているが、破片のため文字は不明である。33~35の杯内面に暗文が描かれている。34・35は放射状の暗文。36は放射状に葉文のような暗文が8単位描かれている。

127~138・140は鉄製品。139は銅製品である。127は鉄鎌と思われる。139は帯金具であろうか。140は刀の鞘と思われる。他の金属器は用途不明である。128~131は釘状の細い金属器。132~134は刀子状の金属器。138は軸状の金製器である。

以上、出土遺物の様相から10世紀の建物址と思われる。ST01は、羽口や金属器、土坑内から鉄滓が出土し、P18のように焼土が炉跡のように礫に囲まれて検出される様相から平安期の鍛冶跡の遺構と思われる。

4. SB04 (図版154—50~64、図版155—65~69)

土師器杯・碗、内黒杯・碗、ロクロ鉢、ロクロ甕が主な出土品で、ほとんどの遺物が竈内やその周辺に集中して出土している。P5内からは56の内黒杯と57の土師器碗、62・63のロクロ甕が出土している。

50~62は杯、54~56は内黒の杯、53・57は碗、58・59は内黒の碗、60は鉢、61~69はロクロ甕である。杯類と碗類はそれぞれ2法量づつある。ロクロ甕の口縁部は、64の甕が僅かに内湾するが、他は頸部からゆるくの字に外反する。甕胴部下半部には平行タタキが見られ、胴部形状は上半部で張り底部に向かい砲弾形となり、全体的に丸みがある。

また、54の内黒杯内面には半月同心円状に4単位の暗文が見られる。

遺物の様相から他の住居址同様10世紀の住居址と思われる。

5. SB05 (図版155—70~81)

70~72は土師器杯、74は土師器の碗、75~77は黒色処理された内黒碗である。81はタタキ甕口縁部と思われる。73と77には暗文が見られ、73は放射状の暗文であり、77は7つの放射状に区画された草木文様の暗文である。この暗文は牛出遺跡でも出土している(長野県埋蔵文化財センター 1998)。78と79の口縁部には表裏に漆痕が部分的見られる。

出土遺物の様相から他の住居址同様10世紀の住居址と思われる。

6. SB06 (図版156—82~91)

82~85は土師器杯、86は土師器碗、87から90は黒色処理された内黒碗である。91はロクロ甕である。

他の住居址同様出土遺物から10世紀の住居址と思われる。

7. SB07 (図版157-92~101)

92は土師器杯、93は内黒杯、94~98は内黒碗である。99は十字に2条ずつ幅の広い線で描かれた暗文である。口縁部に横帯状の暗文が十字の上から加えられている。101は灰釉陶器の壺の底部と思われる。

8. SB11 (図版158-102~110)

102は土師器杯である。103~106は黒色処理をされた杯である。107から110はロクロ甕である。105や106は口径が大きく高さがなく、杯身が湾曲しながら立ち上がる器形である。また、SB01~SB07のロクロ甕より108の甕は胴部が球形である。このような理由から、2区から出土している住居址の遺物より若干古いと思われる。

9. SB12 (図版159-111~118)

111は黒色処理をした碗である。112~118はロクロ甕である。113は胴下部に横方向のケズリがある。117は胴部にタタキメがある。116や117の甕は胴部が球形に近いと思われ、SB11と同時期の住居址と思われる。

10. SB13 (図版160-119~124)

119は黒色処理のされた内黒杯底部、120は内黒碗の底部、121と122は灰釉陶器であり、121は皿、122は碗である。123~124は小型ロクロ甕、125はロクロ甕、126は鉢形土器で、ロクロ整形されており、内面にハケ整形痕がある。SB11やSB12と同様の時期の住居址と思われる。

以上のように平安時代の住居址は1区では2区より古い様相の土器群がある。竈の位置も2区では、南東あるいは南壁コーナーに設けられている。しかし、1区の住居址は竈の位置が北東側にあり、住居の設置場所の違いもあると思われるが、時期差と考えられよう。

図版番号	区	遺構・区分	遺物番号	実測番号	遺物の種類	器種	部位	スタイル	口径cm	底径cm	器高cm	色調(外)	色調(内)	胎土	暗文	備考
図版148	1	SB01	207	5126	土師器	杯		1/4	11.3	4.8	3.2	黒	黒	きめ細かい砂粒少、滑		
図版148	2	SB04	207	5127	土師器	杯		1/4	11.8	5.5	3.4	黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版148	3	SB01	160	5012	土師器	杯		1/4		3.8		にぶい赤	にぶい赤	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版148	4	SB01	207	5013	土師器	内黒杯		1/4	12.4	7.2	3.8	黒	黒	きめ細かく砂粒少、滑		
図版148	5	SB01	65	5016	土師器	内黒杯		1/4	12			にぶい黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版148	6	SB01	52	5014	土師器	内黒碗		1/4		5.8		黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版148	7	SB01	130	5016	土師器	内黒碗		1/4		7.8		赤褐色	赤褐色	きめ細かく砂粒少、滑		
図版148	8	SB01	102	6015	土師器	内黒碗		1/4		5.9		赤褐色	赤褐色	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版148	9	SB01	163, 65	5017	土師器	割腹土師	胴部	1/4				にぶい黄	にぶい黄	厚い砂粒多量で、表面がザラザ		
図版153	10	SB02		5027	土師器	杯		1/4	22			黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版153	11	SB02		5036	土師器	杯		1/4	15			にぶい黒	にぶい黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	有り
図版153	12	SB02		5030	土師器	杯		1/4	14			黒	黒	きめ細かく砂粒少、滑		
図版153	13	SB02		5037	土師器	杯		1/4	14			明黄褐色	明黄褐色	きめ若干粗い	今や砂粒多。	有り
図版153	14	SB02		5036	土師器	杯		1/4	13			明黄褐色	明黄褐色	きめ若干粗い	今や砂粒多。	有り
図版153	15	SB02		5028	土師器	内黒杯		1/4	13.4	4.2	5.7	にぶい黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版153	16	SB02		5029	土師器	内黒杯		1/4	13	4.0	3.7	黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版153	17	SB02		5032	土師器	内黒杯		1/4				にぶい黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	有り
図版153	18	SB02		5033	土師器	内黒碗		1/4		6.4		黒	黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	有り
図版153	19	SB02		5126	土師器	碗		1/4		6.4		にぶい黒	にぶい黒	きめ若干粗い	今や砂粒多。	
図版153	20	SB02		5031	土師器	内黒碗		1/4	14	6.2	5.8	にぶい黒	灰褐色	きめ細かく砂粒少、滑		

第36表 東裏遺跡 平安時代遺物属性表 (1)

図版番号	図No	遺構・区分	遺物番号	実測番号	遺物の種類	器種	部位	スケール	口径 cm	底径 cm	器高 cm	色調(外)	色調(内)	胎土	註文	備考
図版153	21	S302		5026	土師器 内黒釉			1/4	15	6.4	5.9	黒釉	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版153	22	S302		5034	土師器 内黒釉			1/4		7				きめ若干粗い 今中砂较多。	有り	
図版153	23	S302		5038	土師器 鉢			1/4	18			明赤釉	明赤釉	きめ細かい 砂粒多 方解石含有		
図版153	24	S302		5039	土師器 甕		口縁	1/4	24			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	25	S302		5040	土師器 甕		口縁	1/4	24			黄緑	黄緑	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	26	S T01		5104	土師器 杯			1/4	11	5.4	3.4	明赤釉	明赤釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	27	S T01		5111	土師器 杯			1/4	11.1	3		橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	28	S T01		5108	土師器 杯			1/4	11.4	3	3.2	明赤釉	明赤釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	29	S T01		5112	土師器 杯			1/4	13.2	4.3		にぶい橙	にぶい橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	30	S T01		5114	土師器 杯			1/4	12.8	4.4	3.8	橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁	文字資料	
図版153	31	S T01		5102	土師器 杯			1/4	13.6	5.4	3.4	明赤釉	黄赤釉	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版153	32	S T01		5103	土師器 杯			1/4				橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	33	S T01		5113	土師器 内黒杯			1/4	18.6			橙	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。	有り	
図版153	34	S T01		5120	土師器 内黒杯			1/4	18.2			明赤	黒釉	きめ細かく砂粒少。澁	有り	
図版153	35	S T01		5108	土師器 内黒杯			1/4	13.4	4.8		橙	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。	有り	
図版153	36	S T01		5109	土師器 内黒杯			1/4	11.1	5.8		黄緑	黒釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	37	S T01		5117	土師器 内黒杯			1/4	12.4	6.8	6.1	にぶい赤	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版153	38	S T01		5107	土師器 内黒杯			1/4	14.6	6.5		にぶい黄	黒釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	39	S T01		5110	土師器 内黒杯			1/4	12	6.5		にぶい橙	黒釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版153	40	S T01		5098	土師器 内黒杯			1/4	14.7	6.8	5.8	にぶい赤	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版153	41	S T01		5116	土師器 鉢			1/4	14.4			にぶい橙	にぶい橙	きめ細かい 砂粒多 方解石含有		
図版153	42	S T01		5115	土師器 鉢		脚	1/4		9.8		黄赤釉	黄赤釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	43	S T01		5118	土師器 小甕			1/4	8.4	5.4	6	にぶい赤	灰濁	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	44	S T01		5104	土師器 小甕		口縁	1/4	10.2			黄赤釉	黄赤釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	45	S T01		5119	土師器 甕		口縁	1/4	18.8			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	46	S T01		5101	土師器 甕		口縁	1/4	23.8			にぶい赤	にぶい赤	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	47	S T01		5106	灰釉陶 甕		胴部	1/4		9.6		灰白	灰白	きめ細かい 色調が灰色 黒色粘着有		
図版154	48	S T01		5099	灰釉陶 甕		胴部	1/4				灰白	灰白	きめ細かく砂粒含有 白色結核多量 硬質		
図版154	49	S T01		5131	土師器 鉢			1/4				灰白	灰白	きめ細かく砂粒少ない		
図版154	50	S B04		5050	土師器 杯			1/4	12	5	3.8	橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	51	S B04		5048	土師器 杯			1/4	14.8			にぶい橙	にぶい橙	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版154	52	S B04		5049	土師器 杯		底部	1/4		4.9		明赤釉	明赤釉	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版154	53	S B04		5047	土師器 杯		口縁	1/4	16.4			橙	橙	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版154	54	S B04		5041	土師器 内黒杯			1/4	14.8	5.4	5.9	にぶい橙	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。	有り	
図版154	55	S B04		5044	土師器 内黒杯			1/4	13.2	5.8	4.5	橙	黒釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	56	S B04		5045	土師器 内黒杯		口縁	1/4	13.8			橙	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。		
図版154	57	S B04		5048	土師器 甕		口縁	1/4	14.8					きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	58	S B04		5042	土師器 内黒釉			1/4	11.6	6	5.4	橙	黒釉	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	59	S B04		5054	土師器 内黒釉			1/4	14.8			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	60	S B04		5051	土師器 鉢			1/4	22			橙	橙	きめ細かい 砂粒多 方解石含有		
図版154	61	S B04		5063	土師器 甕		口縁	1/4	20.6			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	62	S B04		5066	土師器 甕		口縁	1/4	23.6			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	63	S B04		5064	土師器 甕		口縁	1/4	19.4			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	64	S B04		5062	土師器 甕		口縁	1/4	20			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	65	S B04		5065	土師器 甕		口縁	1/4	21			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	66	S B04		5069	土師器 甕		口縁	1/4	20.8			橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	67	S B04		5057	土師器 甕			1/4	22		22.2	にぶい橙	にぶい橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	68	S B04		5058	土師器 甕		口縁	1/4				にぶい橙	にぶい橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	69	S B04		5099	土師器 甕		底部	1/4						きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	70	S B06		5067	土師器 甕			1/4	12	6.4	4.3	にぶい橙	にぶい橙	きめ細かく砂粒少。澁	有り	
図版154	71	S B06		5066	土師器 杯			1/4	11	4	3.4	橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	72	S B06		5068	土師器 杯			1/4	13.8	5.2	4.9	橙	橙	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	73	S B06		5071	土師器 内黒杯		底部	1/4		4		黄赤釉	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。	有り	
図版154	74	S B06		5065	土師器 甕			1/4	11.2	5.4	4.7	にぶい黄	にぶい黄	きめ細かく砂粒少。澁		
図版154	75	S B06		5064	土師器 内黒釉		底部	1/4		5.4		黒釉	黒釉	きめ若干粗い 今中砂较多。		

第36表 東裏遺跡 平安時代遺物属性表 (2)

第8章 東裏遺跡

調査番号	遺跡・区分	遺物番号	実測番号	遺物の種類	器種	部位	スケール 1/4	口径 cm	底径 cm	高さ cm	色調(外)	色調(内)	胎土	焼文	備考
調査155	76 S B 05		8070	土師器	内黒陶	底部	1/4	1.7	3.8		黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査155	77 S B 05		5085	土師器	内黒陶		1/4	14.4	6.4	6.2	にぶい黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多	有り	
調査156	78 S B 05		5082	土師器	内黒陶		1/4	12.4	6.8	5.2	にぶい黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		口唇部スチ付着
調査155	79 S B 05		6041	土師器	内黒陶		1/4	10.8	5.4	4.4	黄緑	黒胎	きめ細かく砂粒少、きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		口唇部スチ付着
調査155	80 S B 05		5089	土師器	内黒陶		1/4	14.2	6.4	5.2	明赤褐	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	81 S B 05		6072	土師器	甕	口縁	1/4	17			黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	82 S B 05		6078	土師器	杯		1/4	9.8	3.4	3.1	にぶい赤褐	黄	きめ細かく砂粒少、きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	83 S B 05		6077	土師器	杯		1/4	11			黄	黄	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	84 S B 05		5076	土師器	杯		1/4	12.4	3.9	3.9	黄	黄	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	86 S B 05		5074	土師器	杯		1/4	12.6	5	6	明赤褐	明赤褐	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	88 S B 05		5075	土師器	甕		1/4	14.4	5.6	5.4	黄緑	黄緑	きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		破片の一部が2次焼成を受けて赤色している
調査156	87 S B 05		5080	土師器	内黒陶		1/4	12.2			黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	88 S B 05		5081	土師器	内黒陶		1/4	11.2	5.8	5.1	にぶい黄緑	黒胎	きめ細かく砂粒少、きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		黒青
調査156	89 S B 05		6082	土師器	内黒陶		1/4	11	6	4.7	にぶい黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	90 S B 05		6079	土師器	内黒陶		1/4	11.8	6.8	4.1	にぶい黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査156	91 S B 05		5083	土師器	甕		1/4	14.4			にぶい赤褐	にぶい赤褐	きめ細かく砂粒少、密0		
調査157	92 S B 07		5091	土師器	杯		1/4	10	3.2	3.2	黄	黄	きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		
調査157	93 S B 07		5084	土師器	内黒杯		1/4	10.6	3.6	3.6	灰黄褐	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査157	94 S B 07		5085	土師器	内黒杯		1/4	12.4	4.4	4.4	黄	黒胎	きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多	有り	
調査157	95 S B 07		6087	土師器	内黒杯		1/4	14			にぶい黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査157	96 S B 07		6086	土師器	内黒杯		1/4	18			にぶい黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査157	97 S B 07		6088	土師器	甕		1/4	5.8			黄	黄	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査157	98 S B 07		5089	土師器	内黒陶		1/4	12	5.8	4.8	黄	黒胎	きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		
調査157	99 S B 07		5090	土師器	内黒陶		1/4	14.8	6.8	6.2	にぶい黄緑	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多	有り	
調査157	100 S B 07		5092	土師器	甕	口縁	1/4	21			にぶい黄緑	にぶい黄緑	きめ細かく砂粒少、密0		
調査157	101 S B 07		5093	灰土陶器	甕	底部	1/4	16			灰白	灰白	きめ細かい 色調が灰色 黒色粒含有		
調査158	102 S B 11	60-77・カマドツダ一段	5082	土師器	杯		1/4	12.4	6.8	3.6	明赤褐	明赤褐	きめ細かく砂粒少、密0		
調査158	103 S B 11		5085	土師器	内黒杯	底部	1/4	5.8			赤褐	黒胎	きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		
調査158	104 S B 11	71	5084	土師器	内黒杯	口縁	1/4	12.6			明赤褐	黒胎	きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		
調査158	105 S B 11	89-60・カマドツダ一段	6002	土師器	内黒杯		1/4	13.7	4.9	3.5	明赤褐	黒胎	きめ細かく砂粒少、密0		
調査158	106 S B 11	18	5081	土師器	内黒杯		1/4	13.4	6.8	3.2	黄	黒胎	きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		
調査158	107 S B 11	54	5088	土師器	甕	胴縁	1/4	21.8			にぶい赤褐	にぶい赤褐	きめ細かく砂粒少、密0		
調査158	108 S B 11	27-74-55-56-57-58-73-81・カマドツダ一段	5010	土師器	甕		1/4	21.8			明赤褐	赤褐	きめ細かく砂粒少、密0		
調査158	109 S B 11	45-60-62	6007	土師器	甕		1/4	19			にぶい赤褐	にぶい赤褐	きめ細かく砂粒少、密0		
調査158	110 S B 11	53-57・カマド一段	6006	土師器	甕		1/4	16			明赤褐	明赤褐	きめ細かく砂粒少、密0		
調査159	111 S B 12	112-123-157-158-159-161-159	6019	土師器	内黒陶		1/4	11.8	5.8	5.1	にぶい赤褐	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		
調査159	112 S B 12		5075	土師器	甕	底部	1/4				明赤褐	明赤褐	きめ細かく砂粒少、密0		
調査159	113 S B 12	131-115	6023	土師器	甕	底部	1/4		6.2		黄	黄	きめ細かく砂粒少、きめ細かく砂粒少、きめ若干粗い やや砂粒多		
調査159	114 S B 12	147-150-179	5021	土師器	甕	口縁	1/4	15.6			黄	黄	きめ細かく砂粒少、密0		
調査159	115 S B 12	187	5020	土師器	甕	口縁	1/4	17			にぶい黄緑	にぶい黄緑	きめ細かく砂粒少、密0		
調査159	116 S B 12	87-164-185-192	5022	土師器	甕	口縁	1/4	14			黄	黄	きめ細かく砂粒少、密0		
調査159	117 S B 12		6025	土師器	甕	口縁	1/4	32			黄	黄	きめ細かく砂粒少、密0		
調査159	118 S B 12	34-45-46-48-83-90-110-161	5024	土師器	甕	口縁	1/4	20			黄	黄	きめ細かく砂粒少、密0		
調査160	119 S B 13		6098	土師器	内黒杯	底部	1/4	7			にぶい赤褐	黒胎	きめ若干粗い やや砂粒多		

第36表 東裏遺跡 平安時代遺物属性表 (3)

図録番号	遺物 No.	遺物・区分	遺物番号	発掘者の種類	器種	部位	スケール	口径 cm	底径 cm	器高 cm	色調(外)	色調(内)	胎土	印文	備考
図録160	120	S B 13		6087 上海跡	内底筒	底際	1/4				灰	黒輪	きめ粗くない 今や砂粒多。		
図録160	127	S B 13		6086 灰輪陶器	瓶	口縁	1/4	13.8			灰白	灰白	きめ細かい 色調が灰色 黒色粒含有		
図録160	132	S B 13		6084 灰輪陶器	瓶	底部	1/4		8.6		灰白	灰白	きめ細かい 色調が灰色 黒色粒含有		
図録160	123	S B 13		6121 土師器	小壺		1/4	11.5			にぶい	橙	きめ粗かく砂粒少、表面		
図録160	124	S B 13		5122 土師器	小壺		1/4	13.8			にぶい	橙	きめ粗かく砂粒少、表面		
図録160	125	S B 13		6123 土師器	瓶		1/4	22.4			橙	橙	きめ粗かく砂粒少、表面		
図録160	126	S B 13		6124 土師器	鉢	口縁	1/4	34			橙	橙	きめ細かい 砂粒多 方解石含有		
図録161	127	ST01		6003 鉄	鉄鏃		1/2								
図録161	128	ST01		6010 鉄	不明		1/2								
図録161	129	ST01		6006 鉄	釘		1/2								
図録161	130	ST01		6002 鉄	不明		1/2								
図録161	131	ST01		6014 鉄	釘		1/2								
図録161	132	ST01		6015 鉄	不明		1/2								
図録161	133	ST01		6016 鉄	不明		1/2								
図録161	134	ST01		6004 鉄	不明		1/2								
図録161	135	ST01		6017 鉄	不明		1/2								
図録161	136	ST01		6008 鉄	不明		1/2								
図録161	137	ST01		6018 鉄	不明		1/2								
図録161	138	ST01		6007 鉄	不明		1/2								
図録161	139	ST01		6001 銅	きや止め金		1/2								
図録161	140	ST01		6009 鉄	きや止め金		1/2								
図録161	141	ST01		6005 鉄	不明		1/2								

第36表 東裏遺跡 平安時代遺物属性表 (4)

第5節 まとめ

- 1 縄文時代草創期初期と思われる槍先形尖頭器に伴う無文土器が、伊勢見山中腹で出土している。
- 2 伊勢見山南西山麓の1区で、表裏縄文土器から縄文時代早期中葉までの土器群とそれに伴う石器が検出された。
表裏縄文土器の分布のまとめりと押型文土器の分布のまとめりには若干のずれがあり、今後の細かな分析により明確な分布差が期待される。
- 3 伊勢見山北東山麓の2区で、縄文時代早期後葉から前期前半の土器群が出土した。
- 4 古墳時代前期の土器2個体がそれぞれ単独で出土した。1個体の土器は、北陸系の土器である。信濃町で古墳時代前期の土器が少なく、本遺跡での発見は当時の交通路などを考える上で重要な遺物と思われる。
- 5 平安時代の住居址が9棟と建物址が1棟検出された。1区の住居址は2区の住居址と若干時期を異にするとと思われる。2～3棟の住居址が山麓に小規模集落として存在した。今後の平安時代の山間地集落研究に重要な意味があると思われる。

引用文献

- 飯山市教育委員会 1991 『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告 1』
長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 14』

第9章 裏ノ山遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

本遺跡は長野県上水内郡信濃町大字柏原字裏ノ山525-1番地はかに所在する。遺跡は野尻湖南西岸から約6km、伊勢見山南東尾根の頂上部、標高713mに立地する。1993年度の試掘調査で新たに発見された遺跡である。伊勢見山の北西山麓から裾野には東裏遺跡が広がり、その南西側に隣接する。

伊勢見山は現在山林であるが、太平洋戦争直後開墾され、畑地としてなり、本遺跡も高速道路工事前までは畑作が行われていた。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第32図)

調査範囲は伊勢見山南東の尾根裏ノ山頂上部約8,500㎡である。

平成5年度に当初、縄文時代以降の遺物・遺構の検出が予測されていたために、ローム層上面までの深度で、重機によるトレンチ調査を先行しておこなったが、遺物・遺構は検出されなかった。引き続き旧石器時代遺物の有無確認のために重機によるトレンチをいれたところ、ローム層中より遺物が検出されたため、本格的な調査をおこなうこととなった。

重機によりローム層(Ⅳ層)上面までを慎重に掘り下げた。次に8mグリッド内にある16の2mグリッドのうち、一番北側で西から2番目のグリッドを原則としてテストピットを設定し、人力によりⅣ層まで遺物の検出を行った。

調査方法は平成5年度に試掘調査を行い、旧石器時代の遺跡として平成6年度から調査を開始した。当初旧石器時代の小規模な遺跡として調査は開始した。

遺物が検出されたテストピットについては、遺物検出時点で掘り下げを中断し、周囲を含めて人力によるⅣ層上面までの面的調査を行った。その後はほぼ全面からの遺物検出が予想されたため、面的に調査を行った。

遺物の取り上げは鞠こうそくに委託して単点測量を用いた。

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い、七ツ栗遺跡、普光田遺跡、日向林A遺跡と合わせて設定した(第1図)。

4mグリッドで、手掘りによるⅢ層より掘り下げを開始した。杭打ち測量、遺物取り上げは鞠こうそくによって単点測量が行われた。

(2) 調査経過

(日誌抄)

平成6年

4月5日 除雪開始

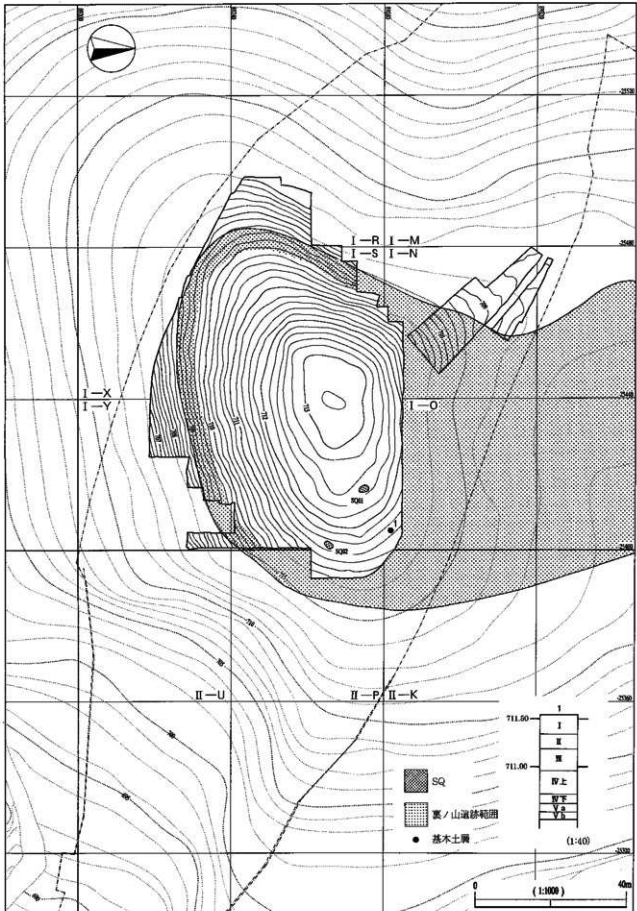
5月11日 尾根先端部(Ⅰ-R・W・X)掘り下げ開始

4月18日 作業開始 表土剥ぎ 杭打ち 試掘開始

5月13日 尾根奥(Ⅰ-O・R、Ⅱ-K)掘り下げ開始

4月22日 Ⅲ層より手掘りによる掘り下げ開始

6月9日 尾根頂上部Ⅲ層まで掘り下げ



第32図 裏ノ山道跡 全体図・遺構配置図・基本土層図

6月22日	尾根部分IV層上面まで掘り下げ	10月3日	針ノ木遺跡の調査が開始となり寺島調査研究員並 行調査
6月23日	東端部まで拡張	10月6日	杭上の柱状図作成開始
6月30日	ラジコンヘリによる空撮 高所作業車から全体写 真撮影	10月28日	高所作業車による全体写真撮影 東側尾根IV、V 層掘り下げ
7月4日	北側幅杭沿いを迂回道路設置のため掘り下げ開始	11月2日	V層面出土状況の航空写真撮影
7月8日	調査範囲東端部よりIV層掘り下げ開始	11月4日	南側道路下表土剥ぎ後掘り下げ
7月19日	北側幅杭沿い土層図作成	11月8日	杭部分掘り下げ
7月20日	東に延びるやせ尾根礫石出土のため表土剥ぎ	11月10日	コンク図作成
9月2日	IV層面出土状況空測 ブロックの輪郭を紐は利し て空測	11月11日	作業終了
9月8日	V層掘り下げ開始		

(3) 調査結果の概要

今回の調査では後期旧石器時代の大規模なブロック群（約30）が検出されたが、縄文時代以降の遺構は縄文時代前期の遺物集中部（S Q01）と早期の遺物集中部（S Q02）のみである。

旧石器時代の遺物は、IV層からV層まで出土し、縄文時代以降は縄文時代前期1個体（35片）と早期1個体（15片）、石鏃4点、特殊磨石1点、打製石斧1点、敲石1点のみである。

(4) 基本土層（第4図、第2表）

I 層	表土層	Va層	暗褐色土 暗色帯 しまりやや良 粘性有り
II 層	黒色土 柏原黒色火山灰層	Vb層	褐色土 暗色帯 しまり良 粘性やや有り
III 層	黒褐色土 モヤ層	VI 層	黄褐色土 全体に赤スコ(小豆大)1.混在
IV 層	黄褐色土 ソフトローム層	VII 層	明褐色土 赤スコ

裏ノ山遺跡は開墾が行われているため、頂上部では耕作土下で即IV層があらわれ、IV層までは非常に薄い。IV・V・VI層が混在し、層位的に遺物を取り上げるのは困難な地点もあった。V層からは一変して出土状況が散漫となった。III層面からS Q01・S Q02は検出している。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

遺物集中部（図版162）

1. S Q01

裏ノ山遺跡頂上部より約25m北東方向に下った緩い斜面に、約3×2mの範囲に土器片と礫がやや散漫に集中して分布していた。土器は、全点同一個体で、35片しか出土しなかった。東方向にずり落ちるように出土している。

2. S Q02

裏ノ山遺跡頂上部より40m東側に下った斜面に土器片が集中して出土している。約2×2.5mの範囲で散漫に小さな土器片が1個体（15片）出土した。S Q02より標高では約60cm下っている。

2 遺物

(1) 土器（図版162-1～4、第37表）

縄文以降の土器は遺物集中部で出土したものが主であった。縄文時代表裏縄文土器と前期の土器である。その他平安時代の土器が散布している。

2～6は同一個体の表裏縄文土器である。SQ02より出土しており、全点同一個体と思われる。2は口縁部であり、口唇部に施文があり、口縁は緩く外反する。縄文の撚りはRLで斜め方向の施文で条が縦である。口唇下内面22mmは横方向からの施文である。外面は斜め方向からの施文で、縦方向の施文である。4の内面胴部に指頭圧痕が見られ、条が整っていることや胎土に白色粒が多く見られること等から日向林A遺跡にみられる縦の条のそろうた施文に類似する。

1は縄文時代前期前半の土器である。縄文の撚りはRL環付縄文（ループ文）である。

胎土には多くの繊維とやや粒の粗い礫が含有している。器形は尖底と想像され、口縁部は波状文である。

図版番号	図No	整理番号	実測番号	遺跡・区分	遺物番号	スケール	文	部	位	特	徴	撚り	色	質	胎	土	分類	備	考
図版162	1	8246	1	SQ01	1	1/4	縄文	口縁部～胴部	多段ループ文	ループ文	ループ文	にぶい黄緑	織跡多				岡山式	整理番号8246～8274統合	
図版162	2	8279	2	SQ02	3	1/2	表裏縄文	口縁部	縦糸施文	縦糸	にぶい黄緑	白色粒(長石?)多量	第3期	整理番号8275～8288同一個体					
図版162	3	8280	2	SQ02	4	1/2	表裏縄文	胴部	縦糸施文	縦糸	にぶい黄緑	白色粒(長石?)多量	第3期	整理番号8275～8288同一個体					
図版162	4	8281	2	SQ02	5	1/2	表裏縄文	胴部	縦糸施文	縦糸	にぶい黄緑	白色粒(長石?)多量	第3期	整理番号8275～8288同一個体					
図版162	5	8282	2	SQ02	6	1/2	表裏縄文	胴部	縦糸施文	縦糸	にぶい黄緑	白色粒(長石?)多量	第3期	整理番号8275～8288同一個体					
図版162	6	8277	2	SQ02	1	1/2	表裏縄文	胴部	縦糸施文	縦糸	にぶい黄緑	白色粒(長石?)多量	第3期	整理番号8275～8288同一個体					

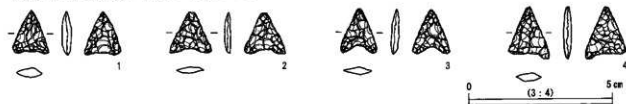
第37表 裏ノ山遺跡 縄文時代土器属性表

(2) 石器 (第33図1～4、第38表)

縄文時代の石器は土器集中部にはなく、散発的に4点が分布する。他に特殊磨石などが出土している。

石鏃(1～4)

1～4は黒曜石製である。出土地点は1がI-R02、2がI-M17、3がI-F09、4がI-T10で出土層位は不明である。石鏃は凹基の三角鏃に近い形態である。土器の出土地点とはなれ、土器との関係は不明である。裏ノ山の西斜面に多く出土しており、狩猟の際の石鏃と思われる。石鏃の形態から縄文前期初頭の土器と同時期の石鏃と考察される。



第33図 裏ノ山遺跡 縄文時代石器

図版番号	図No	整理番号	遺物番号	小刀/打石名	出土層位	部	種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	遺存状況	備	考
第33図	1	6640	6640	I-R-02	III	AH	Ob		14	12.5	3	0.4	100		
第33図	2	1191	1191	I-M-17	III	AH	Ob		14	14	1.5	0.21	100		
第33図	3	8368	5368	I-F-09	IV	AI	Ob		15	13	2	0.29	100		
第33図	4	2590	2590	I-T-10	I	AI	Ob		17	14	2	0.32	100		

第38表 裏ノ山遺跡 縄文時代石器属性表

第3節 まとめ

縄文時代以降の遺物は表裏縄文土器と縄文前期初頭の土器と4点の石鏃のみであった。縄文前期初頭土器と石鏃の関係が同時期と考察された。

第10章 針ノ木遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

本遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字富濃字針ノ木4,065番地ほかに位置する。野尻湖の南約1kmに位置し、周辺を丘陵によって囲まれた楕円状の小規模な盆地の南側、北向き斜面に位置する。中央は湿地帯で、以前は腰近くまで泥に浸かりながら水田を作ったといわれている。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第32図)

1993年度より試掘調査を実施し、遺跡の調査範囲を確定した。1994年10月3日から調査を開始し、その結果、湿地帯際の北向き緩斜面から平安時代の住居址・土坑墓を検出した。

平安の住居址は平面でプランを確認後、トレンチを入れ、調査を開始した。遺物と遺構は手取りによる測量によって図面化した。また、航空写真と地形図作成は(株)協同測量者に委託して行った。

(2) 調査経過

(日誌抄)

平成6年	10月24日	S B01 調査終了
10月3日 作業開始 表土剥ぎ	10月26日	S K03・S K04 の調査開始
10月4日 S B01・S B02 にトレンチを入れる	10月28日	航空写真撮影 協同測量者に委託 撮影兵庫フォトサービス
10月6日 S B01 に排水溝を検出		
10月17日 S B03・S B04・S K01 調査開始	11月10日	遺構の図化など作業終了

(3) 調査結果の概要

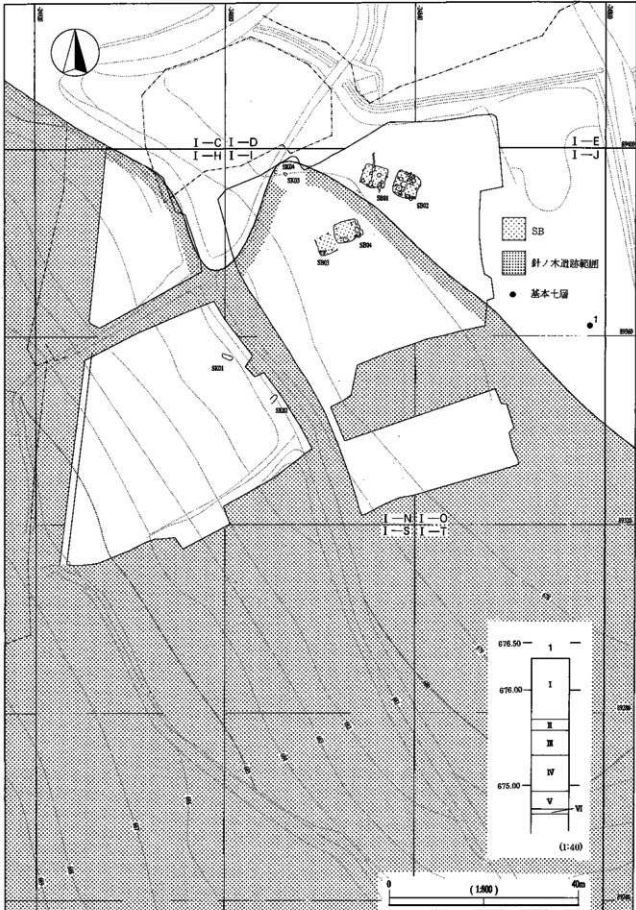
検出した住居址は4軒、土坑は4基である。1994年度長野県埋蔵文化財センター年報11に火床2とあるのは、火山灰が窪みに堆積した跡であり、訂正する。

住居址は平安時代10世紀に営まれたもの2軒と、11世紀に営まれたもの2軒である。また住居址の背後の斜面から、平安時代の住居址に関係すると思われる土坑墓1基が検出された。

また、表土剥ぎ時に縄文時代の石器が遺構を伴わずにⅠ・Ⅱ層面から出土した。

(4) 基本土層 (第4図、第2表)

I層 黒色土	表土耕作土	V層 オリーブ灰色粘土	IV層より砂粒含有
II層 黄灰色粘土層	III層漸移層		粗粘土
III層 灰白色粘土	褐鉄分多量に含有 粗粘土	VI層 オリーブ灰色粘土	V層下部の白色粒含有
IV層 緑灰色粘土	III層より多くの砂粒含有	VII層 灰オリーブ色粘土	植物炭含有黒色
褐鉄分無 粗粘土			



第34図 針ノ木遺跡 全体図・遺構配置図

第2節 縄文時代の遺物

石器 (図版163) (第39表)

縄文時代の遺物は、石器だけが散発的に表土層剥ぎ取りの際出土している。縄文土器の出土はない。

石器は石鏃(1・2)2点、使用痕跡のあるフレーク(3)1点、搔器(4)1点、磨製石斧(5)1点、凹石(6)1点、磨石(7)1点、敲石(8)1点、石錘(9)1点のほかには図化していない安山岩製の欠損している敲石1点・凹石4点・石皿1点が出土している。

1の石鏃は黒曜石製、2等辺三角形の凹基無茎石鏃で、大きさは27×18×5mmを計る。先端が若干欠損している。凹基部分は抉りが大きくない。2は白い玉髓製で、形の整った凸基有茎石鏃である。大きさは32×15×4mmを計る。2は凸基をもち、晩期に特徴的な石鏃である。1も晩期のものであろうか(鈴木1991)。

5は蛇紋岩製の磨製石斧である。長さ74mm幅57mm厚さ20mmで基部が欠損している。その欠損した部分を両面から加工し、再利用している。正面の再加工した面は稜が磨耗している。4はチャート製の搔器である。長さは35mm幅76mm厚さ9mmで、横広のフレークを用い、主要剥離面側長側縁に剥離を加えている。打面には礫面を残す。3は黒曜石製の側縁に使用によると思われる小剥離痕をもつ縦長フレークである。長さ66mm幅52mm厚さ6mmを計る。両側縁に規則性のない小剥離痕が有り、正面左側縁は湾曲しており、削り具的な使用が考えられる。6は安山岩製楕円礫を用いた片面中央に凹が2個連結する凹石である。長さ93mm幅64mm厚さ39mmを計る。凹は浅い。7は安山岩製円礫の磨石である。長さは47mm幅42mm厚さ39mmを計る。

8・9は安山岩製の石錘である。8は楕円礫を利用しており、長さは92mm幅76mm厚さ32mmを計り、長軸部が欠損している。9は円礫の両端を加工した石錘で長さ67mm幅65mm厚さ49mmを計る。

図版番号	図No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	スケール	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	欠損部位	遺存度	備考
図版163	1		1Z		2/3/4	AH	Ob	27	18	5	1.5			
図版163	2		2M-10		3/4	AH	Ag	32	15	4	1.15			
図版163	3		3M-19		3/4	UF	Ob	66	52	6	14.7			
図版163	4		4I-4		3/4	Sc	Ch	35	76	9	22.7			
図版163	5		5N-02		1/2	磨製石斧	Se	74	57	20	103.5	長さ	50	再加工
図版163	6		6I-3		1/3	安山岩	Ps	93	64	39	300			
図版163	7		7I-8		1/3	GS	Sa	47	42	39	120			
図版163	8		8I-4		1/3	石錘	安山岩	92	76	32	310	長さ	75	
図版163	9		9I-15		1/3	石錘	安山岩	67	65	49	230			

第39表 針ノ木遺跡 縄文時代石器属性表

第3節 平安時代の遺構と遺物

1 遺構

平安時代の遺構は住居跡が4軒、土坑が4基出土している。

(1) 住居址 (図版164~図版167、第40表)

1. SB01 (図版164)

調査区北東方向 I-I-10区に位置する(第34図)。検出面は表土直下で、形状はほぼ方形の破壊されていないプランを確認した。規模は4.95×4.80m深さ約35cmである。床面はほぼ平らであるが、貼り床は確

認められなかった。

柱穴は20ヶ所確認され、その中で主柱穴は8本（P01～P08）である。主柱穴は東西に2列並行に立てられている。

周溝は検出されなかったが、住居址中央部南北方向に排水溝が設けられている。調査中にも住居内より水が柱穴内から湧き出すなど、かなり水位が高く、当時も排水溝を設けなければならない状況にあったと思われる。排水溝はP10に終結するように構築されている。このように、軟弱地層の状況から、平安時代の住居としては柱穴が多く立てられていたものと考えられる。

竈は南東端に設けられている。東側袖面にだけに石組みされているが、当時は右袖にも同様の石組みがなされていたものと思われるが、発掘時には竈は半分破壊されていた。竈内には小型甕が中央部に底部の糸切り痕を上にし、伏せた状態で検出された。

遺物は土師器杯・椀、内黒杯・椀、灰釉陶器皿、土師器鉢・小型甕・北信甕が出土しており、遺物の様相から10世紀の以降と思われる。

2. SB02（図版165）

SB02はSB01の東側に位置し（第34図）、SB01と並んだ状況のI-I-15区で検出された。検出面は表土直下で、形状はほぼ方形のプランを確認した。規模5.25×5.20m深さ0.25mである。貼り床は確認されなかった。北東部分若干破壊されている。

柱穴は28ヶ所確認され、主柱穴は8ヶ所（P01・P15・P06・P08・P09・P11～P13）確認された。柱穴が多いのは泥弱地層のためと思われる。また、床下に多くの土坑状のピット（図版165点線部分）がみられる。ピットの堆積状況から、住居内覆土が堆積前に土坑状のピットは埋まっていたと思われる。

周溝は確認されなかった。竈は南東端に検出されたが、火焼部分と石組み竈を抜いたと思われる凹みの痕跡のみが残る。やはり竈は破壊されている。

遺物は土師器杯・椀、内黒杯・椀、灰釉陶器椀、土師器小型甕・北信甕が出土している。これら遺物の様相はSB01と共通しており、10世紀の住居址と思われる。

3. SB03（図版167）

SB03は調査区の中央I-I-19区に位置する（第34図）。II層面よりSB04によって東壁面は破壊されているSB03を確認した。北側プランは耕作によってプランが明確にできなかった。プランが確認できたのは全体の1/4南西コーナーのみであり、方形の住居址であったと思われる。北西側と西壁側に炭化材が確認された。またP04とP02の柱痕が炭化している様相からまだ柱が立っている間に火災にあった住居と思われる。

遺物は土師器皿・杯・椀・羽釜、灰釉陶器皿の高台部分である。遺物から11世紀の時期の住居址と思われる。

4. SB04（図版166）

SB04はII層面で確認され、SB03の東側に位置する。SB03を切る形で、SB03より約50cm低い面に構築されている。規模は1.20×1.08m深さ40cmである。形状はほぼ方形である。住居の北東コーナーは破壊している。

床面は若干黒色土の載っている部分があり、部分的な貼り床の痕跡が見られる。柱穴は8ヶ所有り、主柱穴はP01～P06の6ヶ所である。P01・P03・P04・P06の4ヶ所がほぼ等間隔に四隅にあり、それに補強する形でP05とP02が見られる。

竈は南東側に確認された。石組み竈と思われるが、石は抜かれ破壊されている。SK01は竈北側口元に有り、灰出し用の土坑と思われる。

第10章 針ノ木遺跡

遺構名	補助施設	遺構・区分	規模(m)	深さ(cm)	カマド位置	両側有無	残存部位	残存率	ピット数	土灰数	備考
SK01		I 10	4.95×4.80	35.0	南東	有		100	20		排水溝有り
SK01	P1		0.25×0.25	52.8							
SK01	P2		0.30×0.25	55.4							
SK01	P3		0.48×0.45	47.0							
SK01	P4		0.15×0.10	37.0							
SK01	P5		0.23×0.22	44.0							
SK01	P6		0.20×0.20	46.0							
SK01	P7		0.25×0.20	54.0							
SK01	P8		0.45×0.30	59.8							
SK01	P9		0.45×0.35	10.0							
SK01	P10		0.93×0.80	6.0							
SK01	P11		1.20×0.80	6.0							
SK01	P12		0.65×0.63	22.0							
SK01	P13		0.76×0.56	27.4							
SK01	P14		0.60×0.55	13.2							
SK01	P15		0.55×0.53	20.7							
SK01	P16		0.50×0.45	16.2							
SK01	P17		0.30×0.18	8.1							
SK01	P18		0.33×0.24	8.9							
SK01	P19		0.33×0.25	10.8							
SK01	P20		0.38×0.30	4.2							
SK02			5.25×5.20	25.0	南東	有		100	28		
SK02	P1		0.47×0.30	51.6							
SK02	P2		0.20×0.20	6.0							
SK02	P3		0.44×0.26	51.0							
SK02	P4		0.38×0.20	32.4							
SK02	P5		0.34×0.20	46.0							
SK02	P6		0.35×0.25	60.2							
SK02	P7		0.31×0.25	26.3							
SK02	P8		0.35×0.30	43.0							
SK02	P9		0.50×0.38	48.0							
SK02	P10		0.30×0.25	19.6							
SK02	P11		0.45×0.32	29.9							
SK02	P12		0.43×0.25	53.6							
SK02	P13		0.28×0.22	44.7							
SK02	P14		0.25×0.25	55.4							
SK02	P15		0.25×0.20	36.8							
SK02	P16		0.65×0.63	34.8							
SK02	P17		1.25×1.20	25.0							
SK02	P18		0.90×0.75	27.2							
SK02	P19		1.35×1.20	30.0							
SK02	P20		0.27×0.25	32.0							
SK02	P21		0.27×0.45	19.2							
SK02	P22		0.72×0.65	33.2							
SK02	P23		0.63	26.3							
SK02	P24		0.37	6.8							
SK02	P25		0.90×0.85	27.4							
SK02	P26		0.64	11.8							
SK02	P27		0.52	23.4							
SK02	P28		0.50×0.40	26.3							
SK03		I 19	1.20×1.00	40.0		有	南東コーナー		4		礎土・火床あり
SK03	P1		0.16×0.25	26.0							
SK03	P2		0.32×0.25	45.4							
SK03	P3		0.30×0.20	54.0							
SK03	P4		0.35×0.27	44.4							
SK04		I 14	5.65×4.50	50.0	南東	有		100	9		
SK04	P1		0.25×0.23	26.3							
SK04	P2		0.20×0.20	32.0							
SK04	P3		0.30×0.28	26.8							
SK04	P4		0.30×0.28	60.4							
SK04	P5		0.15×0.14	21.4							
SK04	P6		0.20×0.20	59.0							おへんがしている
SK04	P7		0.30×0.20	6.2							
SK04	P8		0.27×0.20	7.8							
SK04	P9		0.25×0.18	3.2							
SK04	SK01		1.25×0.95	23.6							
SK04	SK02		1.10×1.00	38.0							

第40表 針ノ木遺跡 平安時代住居址属性表

住居の北壁側に貯蔵穴であろうかSK02の土坑が検出された。

遺物は土師器皿・碗、内黒桶、甕、羽釜、灰釉陶器片口皿が出土している。遺物から11世紀の住居址と思われる。

(2) 土坑 (図版167、第41表)

1. SK01 (図版167)

平安の住居址より2m標高が高いSB01より50m南西方向のI-N-01区に位置する。形状は若干歪な隅丸長方形、底面長方形を呈する。規模は2.42×0.9深さ55cmの浅い断面箱型の土坑である。確認面は表土下である。

覆土は上から下まで黒褐色土が堆積していた。SK01内には土師器の杯・黒色の碗が出土している。図版171-103の杯と104の碗は南東コーナー底面並んでやや傾いて出土している。また105の碗底部破片は東壁中央底面から出土し、106の碗は北西覆土中から出土している。

遺物の様相や出土状況からSB01やSB02のいずれかに属する土坑墓と思われる。

2. SK02 (図版167)

SK01の12m南東方向I-N-12区に位置する。耕作により東側が攪乱され、上面も削平されていると思われる。規模は幅が0.92m、深さ30mで隅丸長方形と推測される。覆土はロームブロックを含む黒色土である。推測形態からSK01と類似し、土坑墓であると思われるが、遺物の出土品はない。

3. SK03 (図版167)

調査区の北側で、SB01から8m西方向のI-I-02区に位置する。規模は0.74×0.58×0.27mの不定形な円形に近い土坑で、浅い。出土遺物もなく時期不明、性格不明であるが、覆土は上部にロームブロックと焼土ブロックを含有しており、下部には黒色土がみられ、平安時代以降の土坑と思われる。

4. SK04 (図版167)

調査区北側SK03の西側に並列する。規模は0.75×0.68×0.33mの円形の浅い土坑である。覆土は黒色土である。出土土器がなく、時期不明、性格不明であるが、SK03と同様平安時代以降の土坑と思われる。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	分類	備考
SK	1	2.42×0.9	55	N-70°-W	15	平安時代?
SK	2	不明×0.92	30	N-38°-E	15	1/2破壊されている 平安時代?
SK	3	0.74×0.58	27	N-61°-W	18	ビツか 平安時代
SK	4	0.75×0.68	33	N-0°	18	ビツか 平安時代

第41表 針ノ木遺跡 土坑属性表

2 遺物

針ノ木遺跡から出土した土師器はすべてロクロ土師器である。

1. SB01 (図版168・169-1~45)

SB01の出土土器は土師器杯(1~11・18)・碗(20・22・23)、内黒杯(12)・碗(13~17)、片口鉢(24)、小型甕(25)、甕(26~45)、灰釉陶器碗(19)が出土している。

竈内からは、土師器杯類(4・12・18)、碗類(13・14・17・22・23)、片口鉢24、甕(32~34・36・39~41・43・44)等が出土している。P10からは杯(7)甕(38)が出土している。その他の遺物はほとんどが床面上から出土している。灰釉陶器(19)溝内から出土している。

杯の量目は口径11.2cm~11.9cm前後、口径13.4cmのほぼ2量目に分けられる。内黒の杯は口径11.2cm、土師器の碗は口径15cm前後、内黒碗は口径11cm前後と14cm前後の2量目に分かれる。杯底部は回転糸切りである。

片口鉢は口径18.8cm、器高8.6cmである。小型甕は口径12.8cm、器高11.8cmである。片口鉢も小型甕も回転糸切り痕が残る。

甕はすべてロクロ甕であり、底部が砲弾形を呈し、平底はなく、北信甕の様相を色濃くしている。また、

北信濃に特徴的な胴下半部に見られるタタキには格子目と平行（図版169—40～45）のものがある。胴下部のケズリはない。口縁部は大きく外反せず、若干直立気味である。頸部でややくびれ、胴部は上半部に最大径があり、寸詰まりの器形である。

S B 01 の出土遺物から、甕が胴部寸詰まりの口縁部が直立する様相や、内黒の杯・碗や土師器の杯・碗など平安時代の特徴（10世紀）が見られる。

2. S B 02（図版170・171—46～81）

S B 02 の土器は土師器杯（46～48）・碗（63・64）・内黒杯（49・50・53～55）・内黒碗（59・62）、灰釉陶器碗（65）、甕（66～81）、金属器（82）である。床下ビットから出土したものは杯類（47・49・51）と碗類（58・60・61）である。灰釉陶器（65）はP05から出土し、ほとんどが床面上や竈内から出土している。

杯類は口径が12～13cm前後（46～48）と14～15cm前後（52）の2法量に分類される。内黒杯は14cm前後で1法量である。内黒碗は14～15cm前後と16cm前後の2法量があると思われる。床下ビットから出土したものは杯身や碗身に僅かな丸みが見られる。覆土中や床面出土の杯・碗類の杯身と碗身は外傾が丸みをなくし逆台形となる。

甕類は平底と砲弾形の丸底の2種類認められた。72～76のように糸切り痕を残す平底部が出土しているが、小型甕底部と思われる。77・78・79は胴部が北信系の砲弾型をした甕で、口縁部は直立気味となり、口径より胴部径の方が同上半部で上回る。胴下半部には格子目のタタキ施されており、81のように「横V」字形のタタキの破片も出土している。これは北陸（佐渡）系のタタキと類似する（坂井 1993）。80は小型甕と思われる。胴部が球形で、口縁部が直立する。胴下半部はケズリが見られる。

82は鉄製品である。長さ約4.8cm幅0.8cmで、小型の刀子の先端部であろうか。基部は断面が長方形であり、鞘の中子であろう。

3. S B 03（図版171—83～88）

S B 03 の土器は、土師器皿（83・84）、杯（85）、碗（86）、羽釜（88）、灰釉陶器（87）である。床面とP01内から出土している。83は口径8.2cm、84は口径9.6cm底部4.1cm高さ1.8cmである。83は84より器厚が薄く、口唇部内外縁に煤が付着しており、灯明皿である。84の皿身は、83より外傾せず、83と器形を異にする。

土師器杯が出土しないことと、皿の存在と、羽釜を持つことから11世紀に相当する住居址と思われる。

4. S B 04（図版171—89～102）

S B 04 は土師器皿（89～94）、碗（95～97）、灰釉陶器（98）、土師器小型甕（99）、羽釜（100～102）などほとんどの遺物が覆土内から出土している。S B 04 はほとんどの遺物が覆土中である。97の碗はP01内出土であり、94の土師器皿はP02内出土である。93の皿には口縁部内外に煤が付着しており灯明皿と思われる。S B 04 の皿の口径は8.5cmと8.2cmとS B 03 ほど法量に変化がない。碗は95のように碗身がかなりの傾斜を持ち、口縁部の開いた盃型を呈し、高台も外側に開く。

内黒の碗97は他の住居址の碗に比べ口径が小さく8.8cm、碗身の湾曲が少なく外傾している。96は高足高台部分と思われる。

99は小型甕で口縁部が短く外反している。100は羽釜の口縁部と思われる。

S B 04 は土師器の杯類が皿類に変わること、皿類や碗類に小型なものが出現すること、碗の器形が盃型に開くこと、羽釜が出土していること、98のように輪花皿が見られることなど11世紀の土器様相を呈していると思われる。

5. S K 01（図版171—103～106）

SK01から土師器杯(103)内黒碗(104~106)が出土している。103の杯はSB01やSB02の土師器杯に器形に類似する。104の碗はSB01の内黒碗に類似する。106の碗は内面に放射状の暗文を施し、若干の湾曲のある碗身である。SK01の時期はSB01やSB02と同様10世紀のものと思われる。

図版番号	図30	編年・区分	実測番号	種別	器種	部位	スケール	口径(cm)	高さ(cm)	胎高(cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	暗文	備考
図版168	1	SB01	5001	土師器	杯		1/4	11.2	5	3.8	橙	橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	2	SB01	5007	土師器	杯		1/4	11.8	4.8	3.1	橙	橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	3	SB01	5010	土師器	杯		1/4	11.9	5.2	3.8	橙	洗黄橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	4	SB01	5042	土師器	杯	口縁	1/4	12			にぶい赤黄	橙	砂粒多量 小石含有		
図版168	5	SB01	5006	土師器	杯		1/4	11.8	3.9	3.5	橙	にぶい黄橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	6	SB01	5008	土師器	杯		1/4	11.7	4.45	3.4	にぶい橙	にぶい橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	7	SB01	5009	土師器	杯		1/4	11.8	5.4	3.8	橙	橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	8	SB01	6003	土師器	杯		1/4	12	4.9	3.1	橙	明黄	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	9	SB01	5002	土師器	杯		1/4	11.8	8.7	3.8	橙	橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	10	SB01	5005	土師器	杯		1/4	11.8	5.5	3.7	橙	橙	きめこまか砂粒少量		
図版168	11	SB01	5012	土師器	杯		1/4	12.8	5	4.5	橙	橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		黒色未処理
図版168	12	SB01	5011	土師器	内黒杯		1/4	14.8	8.4	5.4	明黄陶	明黄陶	中～砂粒多量 きめが若干粗い		灯明証
図版168	13	SB01	5004	土師器	内黒碗		1/4	11.2	4.8	4.2	明黄陶	橙	きめこまか砂粒少量		
図版168	14	SB01	5016	土師器	内黒碗		1/4	11.1	5.5	4.6	黒陶	明黄陶	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	15	SB01	5015	土師器	内黒碗		1/4	10.9			黒陶	橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	16	SB01	5013	土師器	内黒碗		1/4	11.8	4.1	4.1	にぶい橙	にぶい橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		黒色未処理
図版168	17	SB01	5014	土師器	内黒碗		1/4	14			黒陶	明黄陶	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	18	SB01	5035	土師器	杯	底部	1/4		3.8		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版168	19	SB01	5043	長瀬陶器	碗	底部	1/4		5.6		にぶい橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版168	20	SB01	5040	土師器	碗	底部	1/4		7.2		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版168	21	SB01	5038	土師器	内黒碗		1/4				橙	にぶい橙	砂粒多量 小石含有		
図版168	22	SB01	5034	土師器	碗	底部	1/4		7.1		にぶい橙	にぶい橙	砂粒多量 小石含有		
図版168	23	SB01	5017	土師器	碗		1/4				明赤陶	橙	きめこまか砂粒少量		黒色未処理
図版168	24	SB01	5018	土師器	片口鉢		1/4	18.8	7.9	8.8	橙	橙	きめこまか砂粒少量		
図版168	25	SB01	5019	土師器	小型甕		1/4	12.8	8.9	11.8	灰白	灰白	色調灰白色 きめ細かな黒色粒含有		
図版168	26	SB01	5033	土師器	甕	口縁	1/4	22.5			橙	橙	細い砂粒多量 小石含有 赤褐色粒多量 表面ガサガサ		
図版168	27	SB01	5021	土師器	甕	口縁	1/4		21		黒陶	にぶい黄橙	きめこまか砂粒少量		
図版168	28	SB01	5023	土師器	甕		1/4		28.1	28	明黄陶	明黄陶	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版168	29	SB01	5025	土師器	甕		1/4		25.5		明黄陶	明黄陶	砂粒多量 小石含有		
図版168	30	SB01	5028	土師器	甕	口縁	1/4		22.4		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版168	31	SB01	5024	土師器	甕	口縁	1/4				橙	橙	細かい砂粒大量 表面ガサガサ		
図版169	32	SB01	5023	土師器	甕	口縁	1/4		21.2		黄橙	黄橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版169	33	SB01	5028	土師器	甕	口縁	1/4		24.2		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版169	34	SB01	5022	土師器	甕	口縁	1/4				橙	橙	中～砂粒多量 きめが若干粗い		
図版169	35	SB01	5032	土師器	甕	口縁	1/4		22.8		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版169	36	SB01	5031	土師器	甕	口縁	1/4		24.8		橙	にぶい赤黄	砂粒多量 小石含有		
図版169	37	SB01	5025	土師器	甕	口縁	1/4		21.4		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版169	38	SB01	5027	土師器	甕		1/4		21		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版169	39	SB01	5030	土師器	甕		1/4		22		橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版169	40	SB01	5037	土師器	甕	肩部	1/4				橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版169	41	SB01	5037	土師器	甕	肩部	1/4				橙	橙	砂粒多量 小石含有		
図版169	42	SB01	5036	土師器	甕	肩部	1/4				橙	橙	砂粒多量 小石含有		

第42表 針ノ木遺跡 平安時代遺物属性表 (I)

第10章 針ノ木遺跡

図版番号	30%	遺構・区 分	調査 番号	種類	器種	部位	スケ ール	口径(cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼文	備考		
図版169		43 S301	5046	土師器	甕	胴部	1/4				緑	緑	黒い砂粒多量 小石含有 赤褐色粒多量 表面 ワザガサ				
図版169		44 S301	5048	土師器	甕	胴部	1/4				黒	黒	砂粒多量 小石含有				
図版169		45 S301	5038	土師器	甕	胴部	1/4				黒	黒	砂粒多量 小石含有				
図版170		46 S302	5047	土師器	杯		1/4		12.3	4.9	3.9	明赤褐色	明赤褐色	きめこまか砂粒少量			
図版170		47 S302	5043	土師器	杯		1/4		12.9	5.4	3.7	緑	緑	きめこまか砂粒少量			
図版170		48 S302	5050	土師器	杯		1/4		13.3	4.6	3.5	緑	緑	きめこまか砂粒少量		黒色未処理	
図版170		49 S302	5051	土師器	内黒杯		1/4		14.2	5.4	4.15	にぶい黄	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い		黒色未処理	
図版170		50 S302	5052	土師器	内黒杯		1/4		14.6	5.4	4.45	明赤褐色	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版170		51 S303	5074	土師器	杯	底部	1/4			6.2		緑	緑	砂粒多量 小石含有			
図版170		52 S303	5077	土師器	杯	口縁	1/4		15			黒褐色	黒	砂粒多量 小石含有			
図版170		53 S303	5067	土師器	内黒杯	底部	1/4			7.1		黒褐色	黒	中砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版170		54 S303	5048	土師器	内黒杯		1/4		14.5	4.8	5	緑	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版170		55 S302	5073	土師器	内黒杯	底部	1/4			4.5		黒	緑	砂粒多量 小石含有			
図版170		56 S302	5055	土師器	内黒杯	底部	1/4			8.9		黒褐色	黒	きめこまか砂粒少量			
図版170		57 S302	6070	土師器	内黒杯	底部	1/4			8.4		黄褐色	黄褐色	砂粒多量 小石含有			
図版170		58 S302	5054	土師器	内黒杯	底部	1/4					黒褐色	明赤褐色	きめこまか砂粒少量			
図版170		59 S302	5063	土師器	内黒杯		1/4			6.7		黄褐色	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版170		60 S302	5076	土師器	内黒杯	口縁	1/4		15.2			黄褐色	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版170		61 S302	5075	土師器	内黒杯	口縁	1/4		13.8			黄褐色	黄褐色	砂粒多量 小石含有			
図版170		62 S302	5271	土師器	内黒杯	底部	1/4		18.6	8.6		にぶい黄	にぶい黄	砂粒多量 小石含有			
図版170		63 S302	5256	土師器	碗	底部	1/4					黒褐色	にぶい黄褐色	きめこまか砂粒少量			
図版170		64 S302	5272	土師器	碗	底部	1/4			7.7		黒褐色	にぶい黄褐色	きめこまか砂粒少量			
図版170		65 S302	5281	灰黒陶器	碗	底部	1/4			8.8		明褐色	明褐色	砂粒多量 小石含有			
図版170		66 S302	5258	土師器	甕	口縁	1/4			8.8		緑	緑	砂粒多量 小石含有			
図版170		67 S302	5056	土師器	甕	口縁	1/4		16.1			黒褐色	明赤褐色	きめこまか砂粒少量			
図版170		68 S302	5064	土師器	甕	口縁	1/4		23.5			緑	緑	きめこまか砂粒少量			
図版170		69 S302	5063	土師器	甕	口縁	1/4		17.5			黒褐色	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版170		70 S302	5058	土師器	甕	口縁	1/4		15			明褐色	明褐色	中砂粒多量 きめが 若干粗い		黒色未処理	
図版170		71 S302	5065	土師器	甕	口縁	1/4		23.4			にぶい赤褐色	明赤褐色	中砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版170		72 S302	5063	土師器	甕	口縁	1/4		16.7			黒褐色	にぶい黄	きめこまか砂粒少量			
図版170		73 S302	5078	土師器	甕	底部	1/4			9.2		緑	緑	砂粒多量 小石含有			
図版170		74 S302	5090	土師器	甕	底部	1/4			9.6		黄褐色	黄褐色	砂粒多量 小石含有			
図版170		75 S302	5079	土師器	甕	底部	1/4			8.8		にぶい黄	にぶい黄	砂粒多量 小石含有			
図版170		76 S302	5069	土師器	甕	底部	1/4			13		黒褐色	緑	きめこまか砂粒少量			
図版170		77 S302	5061	土師器	甕	底部	1/4					黒褐色	緑	きめこまか砂粒少量			
図版170		78 S302	5066	土師器	甕		1/4		20.1			灰白	灰白	色調灰白色 きめ細か な黒色粒含有			
図版170		79 S302	5068	土師器	甕		1/4		24			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒多量 小石含有			
図版171		79 S302	5068	土師器	甕		1/4		23.7			緑	緑	砂粒多量 小石含有			
図版171		80 S302	5067	土師器	甕		1/4		17.70			緑	緑	砂粒多量 小石含有			
図版171		81 S302	5082	土師器	甕	胴部	1/4					緑	緑	砂粒多量 小石含有			
図版171		82 S302	6027	灰	刀丁?		1/4					黒褐色	にぶい黄褐色	きめこまか砂粒少量		有り	
図版171		83 S303	5083	土師器	皿	口縁	1/4		8.2				黒褐色	緑	きめこまか砂粒少量		
図版171		84 S303	5088	土師器	皿	口縁	1/4		8.6	4.8	1.8		灰白	灰白	きめ極かに細か 色調 白色		
図版171		85 S303	5086	土師器	碗	口縁	1/4		15.6				緑	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い		
図版171		86 S303	5087	土師器	碗	口縁	1/4		16	8	3.5		にぶい黄	緑	きめこまか砂粒少量		
図版171		87 S303	5084	灰黒陶器	皿	底部	1/4			8			黒	緑	きめこまか砂粒少量		灯明皿
図版171		88 S303	5085	土師器	宗塗		1/4		18				緑	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い		
図版171		89 S304	5099	土師器	皿		1/4		8	4	2		にぶい黄	明褐色	砂粒多量 小石含有		
図版171		90 S304	5098	土師器	皿		1/4		8.6	4.1	1.85		緑	緑	中砂粒多量 きめが 若干粗い		灯明皿

第42表 針ノ木遺跡 平安時代遺物属性表 (2)

図版番号	図名	区 分	実測 番号	種類	器種	部位	スケール	口徑(cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	略文	備考	
図版171	91	SB04	5091	土師器	杯	底部	1/4		3.4		黄橙	黄橙	中や砂粒多量 きめが 若干粗い		灯明皿	
図版171	92	SB04	5092	土師器	皿	底部	1/4		4		橙	橙	中や砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版171	93	SB04	5093	土師器	皿	口縁	1/4	8.5			黄橙	黄橙	中や砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版171	94	SB04	5102	土師器	皿		1/4	8.2	4	2.1	黒褐	黒褐	砂粒多量 小石含有 きめこまか砂粒少量		灯明皿	
図版171	95	SB04	5094	土師器	碗		1/4		9.4	5	3.2	にぶい橙	にぶい橙	きめこまか砂粒少量		
図版171	96	SB04	5097	土師器	碗	底部	1/4		9.7		橙	橙	中や砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版171	97	SB04	5095	土師器	内黒釉		1/4		8.8	4	3.45	にぶい橙	にぶい橙	きめこまか砂粒少量		
図版171	98	SB04	5096	灰釉陶器	皿		1/4	14.5			橙	橙	きめこまか砂粒少量			
図版171	99	SB04	5098	土師器	甕	口縁	1/4	10.8			灰白	灰白	色調灰白色 きめ細か な黒色粒含有		菊花皿	
図版171	100	SB04	5098	土師器	甕蓋	口縁	1/4	22.8			黒褐	橙	中や砂粒多量 きめが 若干粗い			
図版171	101	SB04	5106	土師器	甕蓋	側面	1/4				明赤釉	明赤釉	砂粒多量 小石含有 砂粒少量 小石含有			
図版171	102	SB04	5101	土師器	甕蓋		1/4				明赤釉	明赤釉	砂粒多量 小石含有 砂粒少量 小石含有			
図版171	103	SK01	5104	土師器	杯		1/4				橙	橙	きめこまか砂粒少量			
図版171	104	SK01	5105	土師器	内黒釉		1/4	11.2	4.6	3.4			きめこまか砂粒少量			
図版171	105	SK01	5105	土師器	内黒釉	底部	1/4	11.8	6.4	5.9	明赤釉	明赤釉	砂粒多量 小石含有 きめこまか砂粒少量			
図版171	106	SK01	5108	土師器	内黒釉		1/4		8.4		灰褐	にぶい黄橙	きめこまか砂粒少量			
図版171	108	SK01	5108	土師器	内黒釉		1/4	14.6	7.2	5.6	黒褐	浅黄橙	きめこまか砂粒少量			

第42表 針ノ木遺跡 平安時代遺物属性表 (3)

第4節 まとめ

本遺跡の縄文時代は石器のみ出土している。狩猟具の石鏃や、植物加工具の凹石・石皿・磨石等が散発的に出土しており、キャンプ地点と思われるが、時期は明確ではない。

平安時代は2時期にわたって住居址が、営まれている。SB01とSB02はほぼ10世紀のものと思われる。SB03とSB04は11世紀代のもと思われる。10世紀代に営まれた住居址は排水溝が設けられており柱の数も多く、かなり泥弱地に建てられた住居であると思われる。北東側にある湿地で、農業を生業として営んでいたと思われる。SB03はSB04によって切られており、針ノ木遺跡の11世紀代は1軒のみが営まれていたと思われる。

また、SB01・SB02に共通する土器がSK01内から出土しており、住居の居住者に關係する墓址と思われる。平安時代の墓址には、碗や杯が埋設される例が多い(牛出遺跡 長野県埋文センター 1997、北原遺跡 飯山市教育委員会 1980)。当遺跡においても上坑の南東側に杯(103)と碗(104)が底面に並んで出土しており副葬品と思われる。

参考文献

鈴木道之助 1991 『図録石器入門事典』 柏書房

長野県埋文センター 1998 「第3章牛出遺跡第2地点 第4節 2 土坑」『上信越道 埋文文化財調査報告書 14』

飯山市教育委員会 1980 『北原遺跡調査報告書』

坂井秀弥 1988 「越後・佐渡の古代土器—8～10世紀を中心にして—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器

坂井秀弥 1993 「長野県飯山市の平安期佐渡産須恵器・越後系土師器」『北陸古代土器研究 第3号』

第10章 針ノ木遺跡

直井雅尚 1996 信濃における奈良・平安時代の土師器甕について 鍋と甕そのデ
ザイン 第4回 東海考古学フォーラム

第11章 大平B遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

本遺跡は長野県上水内郡信濃町大字富濃字大平3960-53他に位置する。本遺跡は野尻湖の南西部に広がる丘陵地帯の北向きの尾根上南東部にあたる。野尻湖南岸までの距離は約1kmほどである。

遺跡は関川水系となる野尻湖とは異なり、斑尾川、鳥居川を経て千曲川、信濃川の水系にあたり、標高は703m前後で、野尻湖面よりやや高い。

遺跡の南東側には北東から南西方向に標高約636mの沖積面が広がっておりそれに沿って斑尾川が流れている。丘陵地帯の一角に小テラスが形成された本遺跡から南東側の沖積面の間には台地状の緩斜面地帯が細く連なっている。この緩斜面先端に日向林A遺跡・B遺跡、七ツ栗遺跡はこの丘陵の裾部に立地している。本遺跡と七ツ栗遺跡との比高差は約50mある。

また、本遺跡の西側は針ノ木の小盆地が広がり、北西側には針ノ木池がある。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第35図・第36図)

試掘調査により縄文時代以降の遺物・遺構の検出が予測されていたために、尾根上にトレンチをいれ調査を先行しておこなった。引き続き8m×8mの範囲内に2m×2m確認ピットを設定し、Ⅱ層面より弥生時代遺物が検出されたため、本格的な面的調査をおこなうこととなった。

その後縄文時代土器と旧石器時代石器が確認された。縄文面の調査が終了後、Ⅳ層中部からⅣ層下部にかけて旧石器のブロックを確認した。単点測量と空撮・空測は(株)協同測量社に委託した。

(2) 調査経過

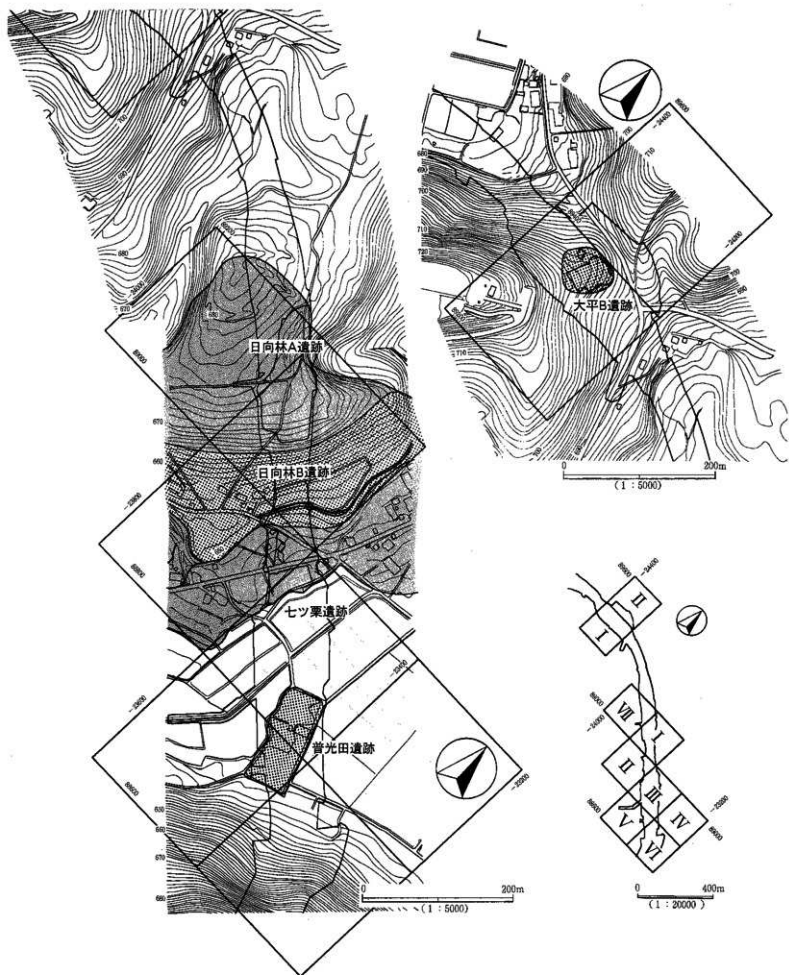
(日誌抄) 平成6年度	5月11日	旧石器・縄文時代の遺物が確認される。
4月7日 残雪処理のため消雪材を散布する。	5月13日	神子柴型石斧が出土する。
4月18日 尾根上にトレンチを設定し発掘作業開始。	6月1日	縄文面の調査終了。
4月20日 8m×8mの範囲に1箇所づつ2m×2mの確認ピット設定し、掘り下げを始める。	6月8日	旧石器のブロックがⅣ層中部～下部の石器文化であることを確認。
5月10日 確認ピットの調査をほぼ終え、面的調査に入る。弥生後期の土器出土。	6月16日	空撮・空測を行う。
	6月20日	調査終了。

(3) 調査結果の概要

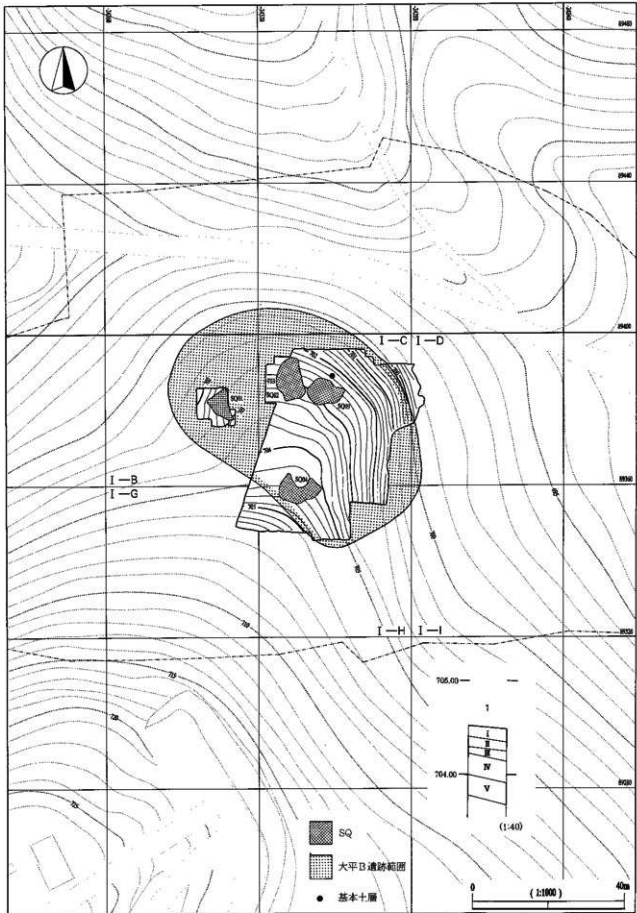
旧石器時代から弥生時代までの遺物が約550点出土した。

縄文時代は早期中葉土器群(約40点)早期後葉土器群(約20点)と前期前半土器群(約350片)が多く出土しており、縄文時代土器は全点で約400点が出土している。遺構は土器集中部が3ヶ所検出された。他に遺構はない。

弥生時代の土器は径約5m内に集中して約150点出土した。土器は4個体の甕形土器が確認された。他



第35図 大平B遺跡・日向林A遺跡・日向林B遺跡 七ツ栗遺跡・普光田遺跡
調査区分割設定図



第36図 大平B遺跡 全体図・遺構配置図・基本土層図

に遺構は確認されている。

他に旧石器時代は遺物総数約950点で、ナイフ形石器を中心とする石器群と御子柴系石斧の石器群の2時期にわたる石器群が確認されている。礫群も1基確認されている。

(4) 基本土層 (第4図・第2表)

基本層序	Hue	色調	特 徴	出土遺物	備 考
I	7.5YR1.7/1	黒色	表土・耕作土 弥生時代土器	弥生時代土器	
II	7.5YR1.7/1	黒色	薄い堆積 遺跡内には普遍的に見られる やや明るい黒色である	縄文時代遺物	柏原黒色火山灰層
III	7.5YR4/2	黒褐色	漸移層 土質はIV層と同じである	縄文時代遺物 旧石器時代遺物	モヤ層
IV	10YR5/6	黄褐色	他の遺跡より均質ではなく多少の侵食が 見られる	旧石器時代遺物	上部II上部～下部
V	10YR3/4	暗褐色	純粋なVb層のような黒色体はほとんど 存在しない	旧石器時代遺物	黒色帯
VI	7.5YR5/6	明褐色			

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

遺物集中部 (図版172)

1. S Q 0 2

調査区の中央部より弱冠北側 (I C 06・07) で S Q 0 3 と東西に並ぶところに位置し、小テラスの先端部分にあたる。範囲は4m×9m、遺物の密度は濃く、歪な楕円形状に分布する。遺物は縄文時代早期終末～前期初頭の土器 (図版173-8～10) と17点の貝殻腹縁文 (図版173-1～3) が主な構成である。

2. S Q 0 3

調査区の中央部より北東側 (I C 07・08) にあたる。範囲は6m×7m、遺物の密度はかなり密で、歪な円形に広がる。遺物は縄文時代前期中葉の土器 (図版173-12) が主な構成である。

3. S Q 0 4

調査区の南側 (I H 02・03) にあたる。範囲は12m×4m、遺物の密度はやや粗で、逆扇形に広がる。遺物は縄文早期中葉の沈線文 (貝殻腹縁文) (図版173-15～17) が15点と沈線文 (刺突文) の土器 (図版173-18・19) が10点でこれらが主な構成である。

2 遺物

(1) 土器 (図版173、第43表)

1. 早期中葉の土器 (1～7・15～19)

早期中葉の土器は沈線文 (貝殻腹縁文) の土器 (1～3・15～17) と条線文の土器 (4～7)・沈線文 (刺突文) の土器 (15～19) が出土している。

沈線文系の貝殻腹縁文が主に S Q 0 2 (17点) と S Q 0 4 (15点) から出土している。ほとんどの貝殻腹

縁文がⅡ層中から出土している。一部Ⅲ層内から出土している。

SQ02の1～3は口縁部文様帯の土器片と思われる。1は波状口縁部である。貫ノ木遺跡図版82-126の口縁部文様帯のような文様構成と思われる。

SQ04の15～17も口縁部文様帯の土器片である。17は口縁部文様帯の頸部屈曲部と思われる。文様が明確ではないが、1～3と同じ文様構成のものと思われる。

早期後葉の土器片はSQ01内に1点混入しており、SQ02内には6点、SQ04内には13点文様を確認できるものがあつた。

SQ02の4～7とSQ04の18・19は『がまん洞遺跡縄文時代第Ⅲ群土器』（鶴田 1997）にあたる。口縁下（4）や胴上部（18）に刺突文が施文されるものや、器面に櫛歯状工具による条線文が横方向（4・5）や羽状（6・7）に施文されている。胎土に繊維が混入する。

2. 早期終末～前期初頭の土器（8～10・20）

8～10は繊維を含み、胎土が20の条痕土器に類似する。8は絡条体瓦痕文が一部施文されている。地紋は縄文である。9・10は複節の縄文（LRL）土器である。20は表裏とも絡条体の条痕土器である。繊維が多量である。

3. 前期中葉の土器（12）

12はSQ03からほとんどの破片が出土している。口縁部文様帯の出土がほとんどなく頸部から底部のみである。胴部は菱形の羽状縄文であり、頸部には半載竹管による爪形文が施文されている。胴部の最大径が上半部にあり、張りが少ない。これらから北信地方前期中葉に特徴的な有尾式の土器と思われる。

4. 前期後葉の土器（11・13・14）

11・13・14は諸磯式の土器である。11・13浮線文、14は木の葉入組み文である。11はSQ02より、13・14はSQ03より出土している。

図版番号	図版No	整理番号	遺構区分	遺物番号	出土層位	時代	文様	部位	色調(外)	胎土	繊維	特徴	備考
図版173	1	229	SQ02	229	Ⅱ	縄文	沈線文	口縁部	にぶい橙 色	繊維少量	有	貝殻縞縁文	
図版173	2	209	SQ02	209	Ⅲ	縄文	沈線文	胴部	明黄褐色	繊維少量	有	貝殻縞縁文	
図版173	3	226	SQ02	226	Ⅲ	縄文	沈線文	胴部	にぶい橙 色	繊維少量	有	貝殻縞縁文	209・226・ 229・230・ 603・661と 接合
図版173	4	665	SQ04	665	Ⅲ	縄文	条線文	胴部	褐色		有	櫛歯状工具 による条線文	
図版173	5	662	SQ02	662	Ⅲ	縄文	条痕文	胴部	褐色		有	櫛歯状工具 による条線文	
図版173	6	262	SQ02	262	Ⅲ	縄文	条痕文	胴部	褐色		有	櫛歯状工具 による条線文	
図版173	7	268	SQ04	268	Ⅱ	縄文	条痕文	胴部	褐色		有	櫛歯状工具 による条線文	
図版173	8	1283	SQ02	1283	Ⅲ	縄文	縄文	胴部	褐色		有	縄文(L)	
図版173	9	206	SQ02	206	Ⅲ	縄文	縄文	口縁部	褐色		有	縄文(L)	
図版173	10	234	SQ02	234	Ⅱ	縄文	縄文	胴部	褐色		有	縄文(L)	
図版173	11	214	SQ02	214	Ⅱ	縄文	竹管文	口縁部	にぶい橙 色			半載竹管文	
図版173	12	522	SQ03	522	Ⅲ	縄文	竹管文	胴部	褐色		有	半載竹管文	
図版173	13	595	SQ03	595	Ⅱ	縄文	竹管文	胴部	にぶい黄 褐色			浮線文	
図版173	14	598	SQ03	598	Ⅱ	縄文	沈線文	胴部	灰黄褐色			半載竹管文	
図版173	15	346	SQ04	346	Ⅱ	縄文	沈線文	胴部	明黄褐色	繊維少量	有	貝殻縞縁文	
図版173	16	348	SQ04	348	Ⅲ	縄文	沈線文	胴部	明黄褐色	繊維少量	有	貝殻縞縁文	
図版173	17	343	SQ04	343	Ⅱ	縄文	沈線文	胴部	明黄褐色	繊維少量	有	貝殻縞縁文	

第43表 大平B遺跡 縄文・弥生時代土器属性表 (1)

図版番号	図版No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	出土層位	時代	文様	部位	色調(外)	胎土	織維	特徴	備考
図版173	18	368	SQ04	368	II	縄文	朱痕文	胴部	橙色	織維少量	有	刺突文	
図版173	19	571	SQ03	571	II	縄文	朱痕文	胴部	明褐色		有	刺突文	
図版173	20	599	SQ02	599	II	縄文	朱痕文	胴部	橙色	織維多量	有	朱痕文	
図版174	29	73	SQ01	73	I	弥生	櫛溝波状文	口縁部	橙色			櫛溝波状文	43点接合同一物体
図版174	30	14	SQ01	14	II	弥生	櫛溝波状文	口縁部	にぶい黄褐色			櫛溝波状文	25点接合同一物体
図版174	31	67	SQ01	67	I	弥生	櫛溝波状文	口縁部	にぶい褐色			櫛溝波状文	26点接合同一物体
図版174	32	115	SQ01	115	I	弥生	櫛溝波状文	口縁部	にぶい橙色		無	櫛溝波状文	32点接合同一物体

第43表 大平B遺跡 縄文・弥生時代土器属性表 (2)

(2) 石器 (図版174—21~28、第44表)

石器の出土量は少ない。縄文時代の石器は磨石3点、凹石5点、石錘1点のみである。石錘はSQ02の外周から出土し(21)、凹石はSQ02(22)・SQ03(24)やその外周(23)などに出土し、磨石もSQ03(27)・SQ04(25)やその外周(26・28)などから出土しており、時期を特定することはできなかった。

1. 石錘(21)

石錘の大きさは、41mm×22mm×10mmの小型品であり、ホルンフェルス製である。

2. 凹石(22~24)

22~24の凹石は安山岩製である。22は凹石A類(丸礫利用)で平面丸形・凹複数で、23はA類(丸礫利用)で平面歪形・凹複数である。24は大形の凹石で、3/4欠損したB類(歪角礫利用)である。複数の凹が中央部に集中して見られるタイプである。

3. 磨石(25~28)

25~28の磨石は安山岩製である。25断面三角形の1辺面を取るように磨り面にし、その他の面も磨面として利用している。26は表裏・側面等用いた磨石である。27はSQ04の外周に出土し、平らな1面のみ磨り面としている。28は磨り面のはっきりしない全面磨り面としているタイプである。

図版番号	図No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小ナリ名	出土層位	スケール	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	欠損部位	遺存度	備考
図版174	21	1268		1268	ICD9	II	I/2	石錘	ホルンフェルス	41	22	10	14.35		100	
図版174	22	167	SQ02	167	ICB8	II	I/4	Ps	安山岩	90	65	30	224.77		100	
図版174	23	609		609	ICB15	III	I/4	Ps	安山岩	155	134	41	806.47		100	
図版174	24	375	SQ03	375	IC14	III	I/4	Ps	安山岩	116	103	56.5	505.89	長さ・幅	25	
図版174	25	278	SQ04	278	IHE2	II	I/4	GS	安山岩	77	53	37	170.87		100	
図版174	26	1125		1125	ICB12	IV	I/4	GS	安山岩	70	66	44.5	317.98		100	
図版174	27	372	SQ03	372	ICG17	II	I/4	GS	安山岩	108	95	41	637.73		100	
図版174	28	1323		1323	ICM13	III	I/4	GS	安山岩	86	68	49	365.2		100	

第44表 大平B遺跡 縄文時代石器属性表

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1 遺構(図版172)

遺物集中部(SQ01)(図版172)

調査区の西側の緩やかな斜面に位置する（1B09・14）。範囲は7m×5m、遺物の密度は粗で、三角形に分布する。遺物は弥生時代後期後半の4個体の土器が大半を占める。

2 遺物（図版174、第43表）

後期後半の土器（29～32）

29～32は弥生時代後期後半の箱清水式甕形土器である。外面は櫛描波状文、頸部は櫛描簾状文が施文されており、内面はヨコミガキ、外面胴下半部は縦ミガキで調整されている。31は頸部に連続して櫛描簾状文が施文されている。器形は頸部の括れが小さく、胴部の張りが小さく、小型品から中型品である。32はやや受け口口縁である。他は単純口縁である。長野県中野市七瀬遺跡第1段階在地系の土器と思われる（赤塩 1994）。

第4節 まとめ

縄文時代以降の大平B遺跡は4ヵ所の遺物集中部があり、3ヵ所は縄文時代、1ヵ所は弥生時代の遺物集中部であった。弥生時代には、遺跡西側にあたる針ノ木の低湿地側に土器片が集中しており、縄文時代前期後半は遺跡東側にあたる日向林A遺跡側（沖積面）の斜面を見下ろす形で分布している。常に低湿地の獲物を見下ろす形で、キャンプしていたものと思われる。また、石鐮の存在は水辺での漁が行われていたの証と思われる。

弥生時代の遺物は野尻湖周辺では数少ない貴重な遺物である。甕形土器のみの出土であり、善光寺平から日本海を抜けるルートのキャンプ地点であったと思われる。

引用文献

- 赤塩 仁 1994 「第V章成果と課題 第7節弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」 栗林遺跡 七瀬遺跡 県道中野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書
- 鶴田正昭 1997 「第4章がまん淵遺跡第6節まとめ」 『飯田古屋敷遺跡・支照寺跡・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山高跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡』 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13

第12章 日向林A遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

本遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字富濃字日向林2,253他に所在する。本遺跡は野尻湖の南西部に広がる丘陵地帯の南東端付近に位置する。野尻湖南岸までの距離は約1kmほどである。遺跡は関川水系となる野尻湖とは異なり、斑尾川、鳥居川を経て千曲川、信濃川の水系にあたり、標高は650m前後で野尻湖面とはほぼ同じである。

遺跡の東側には北東—南西方向に標高約636mの沖積面が広がっておりそれに沿って斑尾川が流れている。この沖積面のトレンチ調査により、旧石器時代相当層に泥炭層および水成堆積層が堆積していることが確認され、旧石器時代には湖沼であった。遺跡から水場までの距離は約50mである。遺跡と沖積面の間には台地状の緩斜面地が細く連なっている。この地形面に七ツ栗遺跡が存在するが、そこから調査地点までは一連の緩斜面となっており、その北西側は丘陵地帯となっている。日向林B遺跡はこの丘陵の裾部に立地している。日向林B遺跡の一段上の丘陵に日向林A遺跡が広がっている。比高差は20～25mある。周知の遺跡範囲は高速道路の用地外で収束していたが、試掘調査の結果縄文土器片が出土したため調査が行われることとなった。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法（第35図・第37図）

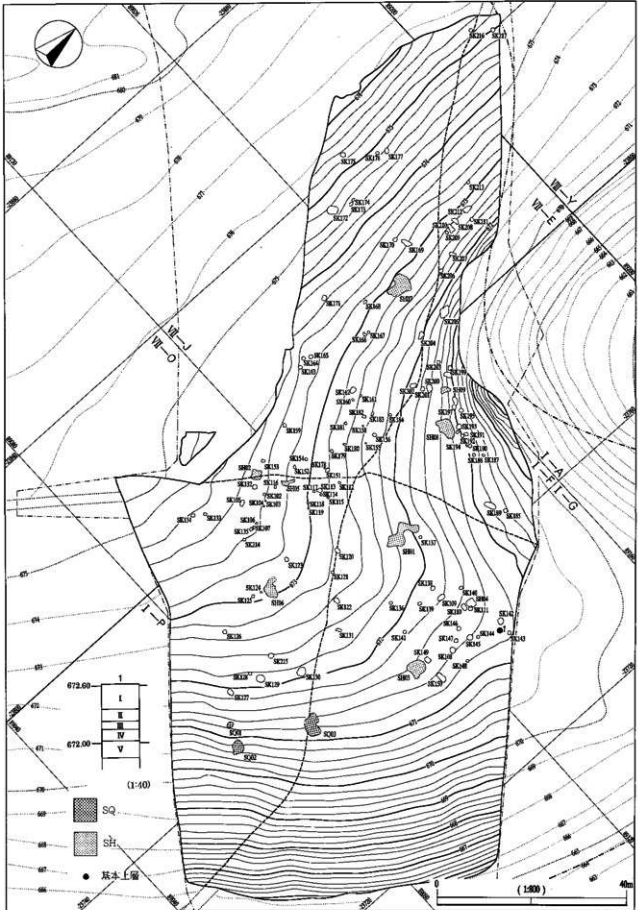
工事工程の関係で北西側の平成5年度調査区と南東側の平成7年度調査区に2分割する調査工程となった。

平成5年度調査区では当初、縄文時代以降の遺物・遺構の検出が予測されていたために、ローム層上面までの深度で、重機によるトレンチ調査を先行しておこなったが、遺物・遺構は検出されなかった。引き続き旧石器時代遺物の有無確認のために重機によるトレンチをいれたところ、ローム層中より遺物が検出されたため、本格的な調査をおこなうこととなった。

重機によりローム層（IV層）上面までを慎重に掘り下げた。次に8mグリッド内にある16の2mグリッドのうち、一番北側で西から2番目のグリッドを原則としてテストピットを設定し、人力によりVII層までの遺物の検出を行った。遺物が検出されたテストピットについては、遺物検出時点で掘り下げを中断し、周囲を含めて人力によるVI層上面までの面的調査を行なった。平成7年度は平成5年度調査区からほぼ全面からの遺物検出が予想されたため、最初から面的に調査を行った。また、グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い、七ツ栗遺跡、普光田遺跡、日向林B遺跡と合わせて設定した（第35図）。遺物の取り上げは鞠アイシーに委託して単点測量を用いた。集石・遺物集中部については一部手取り実測を行った。

調査区内にあった道路を境として2-1区、2-2区、3-1区、3-2区の4つに調査区を区分した。途中の引渡しもなく、調査は連続して行われた（註）。

調査方法は2-1区の南東及び北東の調査区域に2ヶ所のトレンチ、及び3区を横断するトレンチ1ヶ所の計3つのトレンチを機と人力を併用して掘り下げ、遺物の広がりや出土層位の深さを確認し、全面調査に移行した。全面調査は重機により表土剥ぎを行いIV層上面までは人力により全面掘り下げをおこな



第37図 日向林A遺跡 遺構配置図

た。3区に関しては2区に近い部分より遺物が検出される部分を随時拡張しながら調査を行った。最終的な調査範囲は約12,000㎡となった。

(2) 調査経過

(日誌抄)	9月21日	2-1区旧石器時代石器ブロック確認。
平成6年度	10月7日	2-2区縄文面掘り下げ終了。空撮・空測を行う。
6月20日	2-1区表土剥ぎ、縄文面掘り下げ開始。	
6月27日	トータルステーションによる遺物取り上げ。遺構は検出できないものの縄文土器片多数出土。	10月11日 2-1・2-2区で旧石器面の面的調査開始。
8月8日	2-2区表土剥ぎ開始。	10月12日 2-1・2-2区で縄文時代の土壌多数確認。
8月11日	2-2区も縄文面の掘り下げに入る。	10月31日 3-2区表土剥ぎ、縄文面掘り下げ開始。
8月12日	晴れの日続き乾燥対策のためビニールシートで調査区を覆う。	11月8日 3-1区縄文面掘り下げ終了。空撮・空測。
8月26日	3-1区の表土剥ぎ開始。	11月16日 2-1・2-2区調査終了。
9月7日	3-1区縄文面掘り下げ開始。	11月30日 3-2区縄文面掘り下げ終了、旧石器面調査開始。
9月20日	2-1区縄文面掘り下げ終了。空撮・空測を行う。	12月6日 積雪のため1日中除雪作業。
		12月7日 3-2区空撮・空測。
		12月9日 調査終了・撤収作業。

(3) 調査結果の概要

縄文時代草創期終末期～前期にかけての土器片が多数出土した。特に表裏縄文系土器片が約8,000点を上回る量で出土し、縄文時代草創期末～早期にかけての土器編年を考える上での貴重な資料となった。住居跡はなかったものの集石(7カ所)、遺物集中部(3カ所)が確認されている。土坑は116基の土坑名がつけられたが、浅いものがほとんどで、性格不明の土坑である。

旧石器時代ではA T降灰以前と思われる日向林II a・II b石器文化、A T降灰以後の日向林IV石器文化が確認され、ナイフ形石器・貝殻状刃器などが出土した。

(4) 基本土層(第4図、第2表)

丘陵下の日向林B遺跡と比べると堆積は全般的に薄い。V層は純粋な黒色帯ではなく黒色帯の土がブロック状に混在し、層全体がやや黒ずんでいる状態であり、a・bの細分はできなかった。この層が薄い傾向は、丘陵の落ち際の斜面部ではさらに顕著となり土柱図のようにIV層とV層の区分ができない場所も存在する。

I層は表土で30cm～40cmの厚みを持っている。畑地部分は大部分が耕作土であった。

II層は20cm～35cm程度の厚みで、貫ノ木遺跡などと比較すると、色調がやや明るく黒褐色を呈している。比較的やわらかくフカフカしている。

III層は厚さ5～15cm程度で場所によって異なっている。また、下面は不規則にIV層に入り込んでいる。土質はIV層とほぼ同じでやや粘性を帯びている。II層の色調が明るかったために、野尻湖調査団の黒モヤ(モヤ上部)相当層の大部分はIII層に分類されていると思われる。そのため、本遺跡でのIII層の大部分は黄モヤ(モヤ下部)に相当すると思われる。III層上部からは草創期初頭と思われる石器および、無文土器が出土している。

IV層は黄褐色のソフトロームで15～25cmの厚みがある。均質な風化火山灰層でわずかに黒褐色にスコ

リアを含む。粘質部と砂質部が3:7程度の割合で均質に混合している。日向林Ⅲ石器文化の生活面が存在する。

V a層は褐色を呈するIV層とV b層の中間的な層で、両者がブロック状に混在し全体がやや黒ずんでいる。ATが最も多く含まれるため、この層堆積中にATが降灰したと考えられる。

V b層は暗褐色で粘性がありしまりのよい比較的硬い層である。全国的に多く確認されている黒色帯として考えられる。厚さは15cm~25cmで、日向林Ⅰ石器文化の生活面が存在する。下部になるとスコリアが増し部分的にはV c層と判断できる場所もあったが、安定して分離できなかったため、V c層も含めてV b層とした。

VI層は黄褐色のローム層で赤褐色のスコリアを多く含んでいる。粘性がありしまりもよい。厚さは15~25cm。

VII層は赤褐色のスコリア層で貫ノ木遺跡と比較すると薄く、0~10cmの厚みを持つ。

基本層序	Hue	色調	特徴	徴	備考		
II	7.5YR1.7/1	黒色	柏原黒色火山灰層				
III	7.5YR4/2	黒褐色	細粒風化火山灰層	漸移層	モヤ層		
IV	10YR7/3	にぶい黄褐色	細粒風化火山灰層	ソフトローム	やや粘性が有りやわらかい	上部野尻ローム II上部~下部	
V a	10YR4/4	褐色	細粒風化火山灰層	粒子がやや粗く粘性有り	やや黒い	A 上部野尻ローム II最下層	
V b	10YR4/6	暗褐色	細粒風化火山灰層	黒色帯	粘性有り	しまりよし	黒色帯上部
V c	10YR4/6	褐色	細粒風化火山灰層	V b層より色調が明るく	V b層をブロック状に含む	黒色帯下部	

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構 (図版175~182)

縄文時代の遺構は遺物集中部(SQ01~SQ03)と集石(SH01~SH03・SH06~SH09)が検出された。また、土坑が116基検出されたが、大半が浅い土坑であり、遺構か風倒木か等不明な点が多い。今回の報告書においては、確認した土坑全基を全体図に記載し、遺構内から遺物が含有していた土坑のみ実測図を抽出して記載した。他の土坑は土坑表(第45表)に属性表を記載し、報告する。

(1) 遺物集中部(SQ01~SQ03)

1. SQ01・SQ02 (図版175)

SQ01・SQ02は調査区南東側急斜面先端部(I P04・05・10区)に並んで位置する。SQ01から1.5m南東にSQ02が出土する。SQ01はほぼ2m範囲内にかたまって土器片が出土し、SQ02は2~3mの範囲内に散在して土器片が出土した。

SQ01とSQ02は同一個体の縄文前期後半の土器(図版209-457)であった。SQ01は胴部片30片、SQ02は胴部片59片、口縁部片20片であった。胴下部から下の土器片は出土しなかった。SQ01よりも、SQ02は標高で約40~60cm下がったところで出土しており、SQ01の潰れた土器片がSQ02まで滑り落ちたと思われる。SQ01・SQ02土器片の深さの差は10cm前後である。掘り込みは確認されなかった。

2. SQ03 (図版175)

SQ03はSQ02の北側16m、急斜面先端部（I L16・21区）に位置する。出土層位は大半がⅡ層であり、範囲は径約3mである。中央部に大形の破片がかたまり、その周りに土器片が散在している。口縁部は12片、胴部72片出土しており、縄文時代前期後半の土器（図版210—460）1個体と、同時期の土器片数点（図版210—459）が出土している。460の土器は口縁部文様帯の部分のみ出土しており、胴部から下は欠損している。外周から安山岩の凹石が1点のみ出土している。

(2) 集石（SH01～SH03・SH06～SH09）（図版176～179）

日向林A遺跡では縄文時代以降の集石が7基検出された。

1. SH01（図版176）

調査区中央のやや平坦になった部分（I F19・I F24）に位置する。出土層位はⅡ層である。南北に約7m東西約4mの範囲に径2mの集中部が3ヶ所あり、南側の集石部分に礫が集中している。他の3ヶ所は礫が散漫に分布する。礫の大きさは握り拳大から頭部大までまちまちである。礫のほとんどは亜角礫（125点）であり、円礫は少なく（63点）、角礫（15点）は僅かである。亜角礫は多くに焼成部分（70点）があり、特に、南側の集中している部分は赤化が激しい。礫の総重量は29,665gである。南側の密集した礫群部分から北側斜面部へ礫が散漫に拡散したと思われる。礫群は焼成礫が多いことから、調理場であった可能性がある。

SH01内には石器（131～136・121）が11点、土器が2点出土している。石器では凹石（133～136）7点、磨石（131・132）2点、敲石2点、石錘（121）1点が出土し、土器は条痕文と表裏縄文の小片が出土している。

石器で焼成を一部受けているものは磨石（131）のみで他の石器は赤化していない。土器は南西側の集石部端に表裏縄文胴部片、石錘（121）の周辺から条痕文胴部片が出土している。

SH01の時期は表裏縄文土器や条痕文土器の集中する地点（図版183）にあり、Ⅱ層中からⅢ層上面にかけて出土している。伴出する石器が条痕文土器以降の石器と思われる、縄文時代早期後半の遺構ではないかと思われる。

2. SH02（図版177）

調査区の東中央部（VII O05）に位置する。角礫18点、亜角礫65点、円礫15点の礫98点重量約14,515gである。礫のみ出土し中央部径1mに焼成部分のある礫が密集し、その北側の俣かに傾斜する方へ赤化した礫が拡散する。出土層位はⅡ層である。焼成礫が多いことや礫が一部かたまっていることなどから調理の場であったと想定される。

3. SH03（図版177）

調査区の西（I Q07）に位置し、検出面はⅡ層、径約8m×8mに礫（21点）重量約3,600g、石器（18点）重量約8,780gである。石器は凹石11点、磨石3点、石皿2個体で、分布が散漫である。中央部に石皿（図版226—125）が3点接合し、その周りに凹石（図版177—137～140）が出土している。焼成礫が少なく、円礫と亜角礫が多く、角礫はほとんど出土していない。礫数も少なく、焼成痕跡もなく、石皿・凹石・石皿の石器が多く出土しており、植物の加工場所であった可能性がある。

4. SH06（図版178）

調査区の西（I K01）に位置し、検出面はⅡ層である。約9m×8m範囲に礫46点・重量15,130g、石器4点（重量約865g）が分布する。石器はすべて安山岩の凹石（図版178—81・142・143）である。分布はややL型になるが、散漫である。円礫（12点）は焼面がないものが多いが、亜角礫（29点）や角礫（9点）焼け面を持つものが多く、焼け石の礫群が拡散した遺構と思われる。焼成礫が多いことから、調理の

場であった可能性があり、礫は使用後拡散したものとと思われる。

Ⅱ層より出土し、Ⅲ層上面まで遺物が確認されるので、縄文時代の遺構と思われるが、伴う土器・石器の出土がなく、他の集石と同様な縄文時代早期から前期にかけての遺構と判断される。

5. SH07 (図版179)

調査区の北西側中央 (VE21) に位置し、検出面はⅡ層である。約5m×4m範囲に礫138点、重量31,447.41g、その他土器22点が分布する。分布密度は南東側に約幅1m、長さ2.5mの範囲にやや密な状態で分布し、北側の傾斜地に拡散するように分布する。礫は亜角礫と角礫でほとんどがしめられ、礫面は焼成を帯びる。土器は集石中に散在し、条痕文系の土器が15点、表裏縄文系の土器が8点出土している。表裏縄文系 (485・486) の土器は混入品と見られ、条痕文系土器以降の集石と思われる。

6. SH08 (図版178)

調査区の中央北側 (IF08) 谷方向を臨む先端部に位置する。分布範囲は約3m×4mで、礫107点、重量685.09g、その他凹石安山岩2点、無斑晶質安山岩剥片1点が出土している。分布密度は疎らで、他の集石より大きめの20cm大の角礫・亜角礫が多く、焼成している礫が多い。

石器は焼成しているものはない。凹石は亜角礫を利用した144と円礫を利用した145である。石器の様相から縄文時代早期から前期にかけての集石と思われる。

7. SH09 (図版177)

調査区の中央北側 (IF02) に位置し、SH08から北西へ1.5m地点にあたる。検出層はⅡ層からⅢ層である。分布範囲は約1m×1.5mの小さな範囲に32点の礫が分布する。32点の大半は、20cm大の亜角礫と角礫で、リング状に凹石 (141) を囲むように礫が巡り、その北側に礫が数点散在する。その中に表裏縄文土器1点が出土している。その他に円礫を利用した凹石が1点出土している。凹石は焼成していないが、礫はほぼ焼成している。

礫は炉址のようにリング状に配列し、調理場としての集石であったと思われる。表裏縄文が1点混入しているが時期決定にはならず、集石の時期は他の集石同様、縄文早期から前期であると思われる。

(3) 土坑 (図版180~182、第45表)

土坑は現場で確認されたものが116基に上る。しかし、整理期間中に土坑を再検討した結果、非常に浅い不定形のものも多く、報告書に図化 (図版180~182) したものは、遺物を伴うものや、分類したものの代表的な土坑のみを掲載した。全体図 (第37図) には調査によって確認された全土坑を掲載した。土坑属性表 (第45表) には全土坑について記載する。(括弧の分類は第16章第3節による)

第1類 (土坑分類第2類) (図版181)

平面形態円形あるいは楕円形、断面形が浅い箱型、深さ約0.2m~0.5mの土坑をこの類とする。この類に相当するのはSK111・SK123・SK132・SK136・SK138・SK139・SK140・SK142・SK143・SK144・SK146・SK148・SK165・SK190・SK193の15基である。

主な覆土にⅡ層堆積以降の土が混入している土坑はSK111・SK132・SK136・SK139・SK142・SK143・SK146・SK193である。その他の第1類の土坑はⅡ層堆積以前の土坑である。

遺物を伴う土坑は、SK132 (表裏縄文1点・フレーク3点)、SK143 (表裏縄文2点)、SK190 (押型文1点)、SK111 (表裏縄文10点・フレーク1点・削器1点・石皿1点)、SK146 (礫2点)、SK142 (表裏縄文2点・凹石1点・磨石1点・砥石1点)、SK136 (表裏縄文1点) である。これらの遺物は覆土中から出土しており、流れ込みと思われる。

SK142はリン酸分析の結果、まったくリン酸が確認されなかった (第3節参照)。

第2類 (土坑分類第10類) (図版180)

平面形は円形で、オーバーハングした袋状の深さ約0.5mの土坑である。SK108とSK145がこの類に属する。SK108は底面平らで、SK145はやや凸凹である。SK108の覆土にはII層が混入しておらず、II層堆積以前の土坑と思われる。SK145はII層混入の覆土であり、II層堆積以降の土坑と思われる。

第2類中覆土中から遺物が出土した土坑はSK108(表裏縄文3点)、SK145(表裏縄文4点・フレーク1点)である。SK108は覆土全体がIV層ブロックを含み、覆土中から表裏縄文が出土しており、縄文時代表裏縄文土器の時期以前の可能性がある。SK145はII層堆積以降の土坑で、遺物も流れ込みの可能性はある。

第3類 (土坑分類第11類) (図版180)

平面形は楕円形で、底面は平らで一部深い部分がある。断面形は有段部分がある箱型である。

日向林A遺跡ではSK109・SK127・SK162がこの形態に属する。II層の混入する覆土が堆積しており、II層堆積以降の土坑と思われる。

また、SK109は覆土中に表裏縄文土器2点と条痕文土器1点と凹石1点が出土している。II層堆積以降縄文時代早期条痕文土器の時期以降の土坑と思われる。

SK109とSK110はリン酸分析によって墓坑の可能性のある結果が出ている(本遺跡第3節参照)。

第3類 (土坑分類第13類) (図版180)

平面形は約1.4m×0.1m位の隅丸長方形、断面形が0.2m~0.3mの浅い箱型の土坑である。

日向林A遺跡ではSK110とSK149がこの類に属する。II層混入の覆土が下部から堆積しており、II層堆積以降の土坑と思われる。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	覆土内遺物	分類	備考
SK	1	1.72×1.22	34	N-6° -W		14	日向林B遺跡内 II層堆積以降の土坑
SK	101	1.44×7.4	39	N-90° -E		14	
SK	102	0.61×0.53	37	N-80° -E		14	
SK	103	0.35×0.32	15	N-90° -E		14	II層堆積以降の土坑
SK	104	0.37×0.35	12	N-14° -W		14	II層堆積以降の土坑
SK	105	1.42×0.82	30	N-60° -E		14	
SK	106	0.55×0.42	18	N-10° -W		14	II層堆積以降の土坑
SK	107	0.71×0.58	18	N-0°		14	II層堆積以降の土坑
SK	108	1.28×1.20	40	N-77° -W	表裏縄文3	10	
SK	109	1.72×1.02	32	N-0°	表裏縄文2・条痕文1・凹石1	11	II層堆積以降の土坑
SK	110	1.45×0.93	27	N-82° -W	蔽石1・凹石1・チップ1・礫6	13	II層堆積以降の土坑
SK	111	1.00×0.90	28	N-36° -W	フレーク1・削器1・石皿1・表裏縄文10	2	II層堆積以降の土坑
SK	112	0.57×0.52	24	N-77° -E		14	
SK	113	1.31×0.92	22	N-46° -E		14	II層堆積以降の土坑
SK	114	0.57×0.50	19	N-33° -E		14	II層堆積以降の土坑
SK	115	0.51×0.37	21	N-68° -E		12	II層堆積以降の土坑
SK	116	0.65×0.48	14	N-50° -W	礫1	14	II層堆積以降の土坑
SK	117	0.62×0.44	25	N-54° -W		14	II層堆積以降の土坑
SK	118	0.53×0.48	8	N-68° -W	条痕文2・表裏縄文1・礫1	14	
SK	119	0.43×0.36	10	N-76° -W		14	II層堆積以降の土坑
SK	120	1.34×0.91	20	N-79° -E		14	II層堆積以降の土坑
SK	121	1.73×0.65	14	N-89° -E	焼礫1	14	
SK	122	1.43×0.93	35	N-90° -E	表裏縄文2・フレーク1	14	
SK	123	1.02×0.80	17	N-62° -W		2	
SK	124	0.46×0.40	10	N-65° -E		14	
SK	125	0.59×0.57	30	N-19° -W		14	II層堆積以降の土坑
SK	126	0.90×0.88	20	N-68° -W	竹管文1	14	
SK	127	1.62×1.20	25	N-66° -W		11	

第45表 日向林A遺跡 土坑属性表(1)

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	掘土内遺物	分類	備考
SK	128	0.76×0.65	30	N-54°-E	間石1・礎1	14	II層堆積以降の土坑
SK	129	1.84×1.60	42	N-36°-E	表裏縄文2・磨石1・礎1	14	
SK	130	2.04×1.74	42	N-7°-W	間石1・礎1	14	
SK	131	1.32×0.60	22	N-53°-E		14	II層堆積以降の土坑
SK	132	1.02×1.02	27	N-33°-W	表裏縄文1・フレーク3	2	II層堆積以降の土坑
SK	133	0.75×0.63	18	N-52°-E		14	
SK	134	0.88×0.76	22	N-9°-E		14	II層堆積以降の土坑
SK	135	0.90×0.65	12	N-10°-E		14	
SK	136	0.81×0.64	33	N-61°-E	表裏縄文1	2	II層堆積以降の土坑
SK	137	0.62×0.60	18	N-0°		14	
SK	138	1.04×0.80	26	N-0°		2	
SK	139	0.86×0.67	26	N-0°		2	II層堆積以降の土坑
SK	140	0.84×0.72	26	N-0°		2	
SK	141	0.74×0.68	14	N-0°		14	
SK	142	1.34×1.16	38	N-73°-W	表裏縄文2・間石1・磨石1・砥石転用スタンプ 形石器1	2	II層堆積以降の土坑
SK	143	0.84×0.76	18	N-50°-W	表裏縄文2	2	II層堆積以降の土坑
SK	144	0.70×0.64	27	N-40°-E		2	
SK	145	1.25×1.12	50	N-0°	表裏縄文4・フレーク1	10	II層堆積以降の土坑
SK	146	0.94×0.86	20	N-0°	礎2	2	II層堆積以降の土坑
SK	147	0.90×0.80	12~30	N-0°	表裏縄文1	12	
SK	148	0.66×0.58	21	N-90°-E		2	
SK	149	1.38×0.96	20	N-89°-E	表裏縄文2・条痕文3	13	II層堆積以降の土坑 条痕文土器 底面から出土
SK	150	2.26×1.18	46	N-90°-E	磨石1・礎1	15	II層堆積以降の土坑
SK	151	1.04×0.70	18	N-90°-E		11	
SK	152	0.78×0.58	30	N-36°-W		14	II層堆積以降の土坑
SK	153	0.84×0.61	22	N-56°-E		14	
SK	154	0.62×0.62	19	N-0°		14	
SK	155	0.92×0.72	24	N-0°		14	
SK	156	0.92×0.72	16	N-47°-E		14	
SK	157	欠番				14	
SK	158	0.38×0.34	20	N-65°-E	礎1	14	
SK	159	0.88×0.78	22	N-84°-E		14	
SK	160	0.60×0.40	16	N-90°-E		14	
SK	161	0.50×0.44	24	N-62°-W		14	
SK	162	1.44×1.10	26	N-13°-W		11	
SK	163	0.98×0.76	41	N-45°-E		14	
SK	164	0.80×0.78	49	N-50°-E		14	
SK	165	0.88×0.84	26	N-0°		2	
SK	166	0.98×0.64	19	N-77°-E		14	
SK	167	0.64×0.56	18	N-45°-W		14	
SK	168	1.00×0.56	31	N-0°		14	
SK	169	2.44×1.04	44	N-70°-E	表裏縄文3	14	上下逆転した堆積が見られる
SK	170	0.96×0.84	32	N-0°		14	
SK	171	1.20×1.02	22	N-0°		14	
SK	172	2.38×1.84	59	N-23°-E	フレーク1・Uフレーク1・表裏 縄文2	14	
SK	173	0.90×0.62	28	N-80°-W		14	
SK	174	0.80×0.62	10	N-18°-W		14	
SK	175	1.12×1.01	29	N-27°-E		14	
SK	176	0.76×0.70	16	N-8°		14	II層堆積以降の土坑
SK	177	1.30×0.86	22	N-48°-W		14	
SK	178	0.38×0.34	14	N-90°-E		14	
SK	179	0.74×0.58	14	N-88°-E		14	
SK	180	0.56×0.45	24	N-90°-E		14	
SK	181	0.64×0.54	26	N-63°-E		14	
SK	182	0.85×0.66	26	N-64°-E		14	
SK	183	0.96×0.55	18	N-45°-W		14	
SK	184	0.70×0.57	16	N-82°-W		14	
SK	185	0.90×0.84	14	N-0°		14	
SK	186	0.68×0.66	22	N-0°	礎1	14	
SK	187	0.74×0.44	20	N-76°-E	チップ2	14	
SK	188	0.68×0.65	21	N-70°-E	条痕文1	14	底面より出土
SK	189	2.68×0.65	56	N-63°-E	表裏縄文2	14	
SK	190	0.86×0.70	17	N-70°-E	押型文1	2	
SK	191	0.92×0.68	20	N-60°-E		14	
SK	192	0.80×0.70	16	N-90°-E		14	II層堆積以降の土坑
SK	193	1.20×1.16	27	N-0°		2	

第45表 日向林A遺跡 土坑属性表 (2)

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	覆土内遺物	分類	備考
SK	194	0.68×0.58	20	N-28° -W	表裏縄文I	14	
SK	195	0.98×0.85	32	N-68° -E		14	Ⅱ層堆積以降の土坑
SK	196	欠番				14	
SK	197	2.70×1.00	34	N-48° -W		14	
SK	198	1.76×1.18	56	N-62° -E		14	
SK	199	1.08×1.02	32	N-51° -E		14	
SK	200	1.84×1.10	25	N-62° -W		14	
SK	201	0.94×0.86	14	N-0°		14	
SK	202	1.18×0.94	30	N-33° -E		14	
SK	203	0.80×0.70	30	N-67° -W		14	
SK	204	1.64×1.10	36	N-15° -W		14	Ⅱ層堆積以降の土坑
SK	205	2.92×1.82	46	N-23° -W		14	
SK	206	1.02×0.74	28	N-8° -E		14	Ⅱ層堆積以降の土坑
SK	207	1.44×0.78	68	N-51° -E		14	風倒木か
SK	208	1.76×0.88	58	N-76° -E		14	Ⅱ層堆積以降の土坑
SK	209	0.72×0.60	36	N-87° -W		14	Ⅱ層堆積以降の土坑
SK	210	2.00×1.08	28	N-71° -W		14	Ⅱ層堆積以降の土坑
SK	211	0.86×0.72	28	N-80° -W		14	
SK	212	1.95×1.12	35	N-16° -E		14	
SK	213	0.73×0.71	24	N-48° -W		14	
SK	214	0.67×0.56	18	N-88° -E		14	
SK	215	1.16×1.04	42	N-27° -E		14	
SK	216	0.78×0.77	24	N-24° -E		14	
SK	217	0.96×0.88	17	N-61° -W		14	

第45表 日向林A遺跡 土坑属性表 (3)

遺物が覆土中から出土した土坑はSK110(敲石1点・凹石1点・チップ1点・礫6点)、SK149(表裏縄文2点・条痕文1点)である。いずれの遺物も流れ込みと思われるが、SK149の条痕文土器が底面から出土していることから、縄文時代早期条痕文土器の時期の土坑と思われる。

第4類(土坑分類第15類)(図版180)

形態は第13類に類似する。長軸が2mを超える。日向林A遺跡ではSK150のみである。覆土はⅡ層を混入する覆土が下部に堆積し、その上部に火山灰のような焼土のような覆土が堆積しており、Ⅱ層堆積以降の土坑と思われる。SK150覆土からは磨石1点が出土している。

SK150内のリン酸分析結果、墓坑の可能性があることが明らかになった(本遺跡第3節参照)。

第5類(土坑分類第14類)(図版182・図版180)

形態も断面形も底面も不整形で分類できないものをこの類に一括した。遺跡全体でこの類に属する土坑数は91基である。

実測図を掲載したものはSK115・SK122・SK128・SK131・SK147・SK170・SK172・SK175・SK187・SK188である。その中で、Ⅱ層堆積以降の土坑がSK115・SK128・SK131の3基である。他に30基の土坑がⅡ層堆積以降の土坑である。

この類の土坑覆土中から遺物が出土した土坑は、SK189(表裏縄文2点)、SK188(底面から条痕文1点)、SK172(表裏縄文2点、フレーク1点、Uフレーク1点)、SK187(チップ2点)である。SK188を除く土坑からは遺物が覆土中からであり、流れ込みの可能性があり、表裏縄文土器以降の土坑であろう。SK188については条痕文土器以降の土坑と思われる。

またSK189のリン酸分析結果、リン酸が確認されなかった(本遺跡第3節参照)。

2 遺物

(1) 土器(図版185～212、第46表・第47表)

縄文時代土器は12,830点あり、表裏縄文系土器群 8,094点、撚糸文土器35点、押型文系土器群262点、沈線文系土器群3点、無文土器147点、条痕文土器1,479点、前期土器2,435点が主な土器片数である。

文 様	表裏縄文	表縄文	表裏無糸文	無糸文	羽状縄文	縄 文	押型文	無 文	沈線文	条痕文	竹管文	有孔 罎付 土器	その他	合 計
土器片数	1270	6815	9	35	7	332	262	176	3	1479	2396	39	7	12830

第46表 日向林A遺跡 縄文時代土器模様別組成表

1. 縄文時代表裏縄文系土器群 (図版185~202)

表裏縄文と土器の胎土が同様なものをこの土器群として取り扱う。

a. 表裏縄文土器 (図版185~199)

胎土は貫ノ木遺跡の表裏縄文より白色粒(長石?)を主体的に含有するものが多い。黒雲母や白色透明石英粒を主体的に含有する土器との割合は7:3で、黒雲母・白色透明石英粒を主体的に含むほうが多い。

口縁部器厚は4.5mm~9.5mmの範囲内で、6.5mmのものが主体的である。これは東裏遺跡の表裏縄文と一致するが、東裏遺跡のものの方が薄いものもある。施文原体は単節縄文「LR」が主体的である。

第1類(1~60・245) 異方向に縄文が施文されているもの。規則性のない羽状に施文されているもの。原体が「RL」のものは2・5・16・17・19・21・33・36・38・41~44・49~52である。無節縄文「L」のものは11・22・24・34、「R」のものは26・46である。他は「LR」である。口縁部は角頭状や丸頭状のものが大半を占め、角頭状の口唇部に施文されたものが特に多い。口縁部がやや肥厚化するものもあるが数は少ない。口縁部は直立するか緩く外反する器形が多い。

22は先端部を先細りさせる。器形は口縁部が直立し、胴部で膨らみをもち丸底風の尖底部に向かう。小型で口径約11.5cmである。胴部が若干厚みを増す。器厚は5mm~7mmである。23・25は口縁部が先細りをする外反度の強い個体である。

第2類(61~138) 口縁部と口唇部に施文された後、口唇部下に施文するもの。

単節縄文は「RL」73~75・77~80・83・84・86・87、無節縄文は「R」76、「L」82・180である。他は「LR」である。

口縁部が角頭状のものと丸頭状のものがある。先細りのものはほとんどなく、特に口唇部に施文された角頭状のものが多い。口縁部が肥厚するものもある。特に99など口唇部下に施文を施した時にはみ出た粘土のために肥厚となるものがある。口縁部は緩く外反するものが多いが、68・102・112・114・127・138等は外反度が強い。

第3類(139~171) 外面の縄文の条が縦走するもの。

原体の無節縄文「R」は139・142・152~154・158~162で、他は「RL」である。

口縁部は先細りする器形と角頭状のものが多い。外反後の強い140~142以外は緩く外反するものが多い。

139は口縁部が先細りする土器である。口径は約17.5cm、高さ17cm、器厚は5~6mmである。器形は尖底部から自然に外傾する器形である。口唇部の施文はない。154は口唇部に施文があるが、先細りの器形である。しかし、口唇部下が肥厚になる。

第4類(172~218) 外面の縄文の条が横走するもの。

原体は無節縄文の「L」は175・180・188・189・212であり、他は「LR」である。

口唇部に施文させたものは角頭状のものが多く、203のように先細りの口縁部は少ない。

172は口径約20cmで、口縁部が直立し、胴上部で膨らむ器形である。口縁断面が粘土を外側に巻きつけ

るように曲げて口縁部を作成していることが分かる資料である。186は口唇下の施文が縄文を押しつぶしたように観察されるが、横走させるために縄文をゆっくり転がせたためと思われる。

第5類 (219~233) 表の縄文の条が斜走しており、施文が縦方向のもの(縦位施文)。

原体は「L」が219、「R」が231・232、「RL」が220・224である。他は「LR」である。219・223など4~5mmの薄い器壁のものがある。231は口縁部が肥厚である。223は若干口縁部が玉縁状に肥厚となっている。

第6類 (234~244) 表の縄文の条が斜走しており、施文が横方向のもの(横位施文)。

原体は「R」234、「L」が244、「RL」が235・240・242である。他は「LR」である。

234~236のように器壁の薄いものがある。

第5類も第6類も口唇部に施文されたものは角頭状を示し、先細りのものは少ない。また肥厚になるものも少ない。

第7類 (246~257) 特殊な施文を一括した。

1 表面口縁部下無文帯のあるもの (247~252・254・255)

原体「RL」は247~249・252で他は「LR」である。248は口縁部の傾きがやや強い。無文帯は幅1cm前後である。254は口唇部下に5mm幅ぐらいの横位施文があり、その下1.5cmに無文帯があり、その下胴上部に横走する施文がある。

2 裏のみに縄文が施文されるもの (253)

原体は「RL」。破片が小さいため、胴部に縄文が施されている可能性もある。

3 縄文帯と無文帯が交互に縦帯状に施文されるもの (246)

原体は「RL」。施文されている帯幅は1.5cm、無文体幅は約1.0cmである。

4 絡条体圧痕表裏縄文 (256~257)

裏面は縄文横走施文しているが、外面は縄文側面を押しつぶしている。

第8類 (258~265) 「LR」表裏捺糸文が施文されるもの

表裏縄文に比べ、口縁上部が外反し、口唇部の施文ためもあり、肥厚となっている。

胴部表裏縄文 (268~275)

272は、内面縄文と無文帯を縦帯状に繰り返し施文している。

b. 表縄文土器 (276~347)

表のみ縄文が施文されるものがこの類である。

表縄文第1類 (282~284・286・298・308・309・314・316~325) 異方向に縄文が施文されているもの。規則性のない羽状に施文されているもの。

276は先細りの口縁部である。他は角頭状と丸頭状の口縁部である。

表縄文第2類 (295・305・306・307) 口縁部と口唇部に施文された後、口唇部下に施文するもの。

307は縦位施文であるが、他は縦走縄文である。角頭状の口縁部と丸頭状の口縁部である。305は口縁部が肥厚する。

表縄文第3類 (276・277・297・299・304・309・312) 表の縄文の条が縦走するもの。

276は先細り口縁部で外反している。器壁も3mmで薄い。

表縄文第4類 (287・288・290・291・294) 表の縄文の条が横走するもの。

287・288・291を除き口縁部は直立するものが多い。

表縄文第5類 (285・293・311) 表の縄文の条が斜走しており、施文が縦方向のもの(縦位施文)。

表縄文第6類 (278・289・292・296・313) 表の縄文の条が斜走しており、施文が横方向のもの(横位

施文)。

表縄文のそれぞれの部位はつぎの通りである。

口縁部 (276~299・304~325)

胴部 (326~325)

底部 (333~336・338~347)

底部は399のように丸底のようなものと、他は乳頭状のあるいは丸底に近い尖底である。

c. 捻糸文土器 (300~303・337)

捻糸文土器は縦走施文であり、口縁部も丸頭状である。

2. 縄文時代早期中葉の土器群

a. 押型文土器群 (図版203~205—248~392)

押型文には山形文と楕円文、異種多段施文のものがある。楕円文には恐らく異種多段施文の一部と思われるものも含む。

第1類 帯状施文の山形文 (348~361)

口縁部形態は角頭状に近い丸頭状のものが多い。無文帯を挟む横帯状施文である。胎土に繊維を混入するものが多く白色の長石が含有するものが多い。施文原体は3.5cm~4cm、4ないし5本の溝を彫っているものが多い。351のように山形文の山が明確に彫られていないものもある。

第2類 楕円密接施文 (366)

口縁部は丸頭状である。366のように横位密接施文の間に縦位の施文をしている。胎土に繊維を混入させている。器形は胴部のはらない砲弾形である。

第3類 異種多段施文 (362~392・366を除く)

口縁部に楕円文を横位に施文して、その下に第1種 山形文 (367)、第2種 「く」の字状の施文 (379~382)、第3種 簾状の施文 (383~387)、第4種 多重菱形の施文 (388~391)などを帯状に挟んで施文したものがある。367は楕円文を横位に施文の間に縦位施文を施している。胎土に繊維を混入させている。第2類の破片を含む可能性がある。

b. 沈線文系土器群 (図版206—393・394)

2点のみの出土である。胎土に繊維が混入している。田戸上層式併行期の土器と思われる。

c. 無文土器群 (図版206—395)

口唇部が面取りされており、口唇部内面に少しはみ出る。器形は砲弾形である。内面にヘラ状工具の横ナデ痕が残る。外面丁寧なナデである。底部は尖底と思われる。

3. 縄文時代早期後葉の土器群

条痕文系土器群 (図版206—396~413)

条痕文土器は2類に分類される。

第1類 条痕文 (397・400~404)

全点絡条体の条痕文と思われる。397は波状口縁部で、400~404はそれらの尖底部である。397は粗い横方向の条痕が施文され、外傾度の大きい口縁部である。

第2類 絡条体圧痕文 (396・398・399・405~413)

絡条体条痕文を地紋とし、口縁部文様帯の部分に絡条体圧痕が施文されている。横方向にのみ施文されるものと交差させ施文されたもの (405・411・410)、横縦の組み合わせで施文されたもの (407・409)が

ある。

4. 縄文時代前期土器 (図版207~212)

a. 縄文 (414~426)

縄文施文の土器は本遺跡では2類に分類される。

第1類 (414~416) 前期前半の縄文土器

414は羽状縄文、415は多段ループ文、416は組織縄文土器であり、これらは縄文時代前期前葉の土器と思われる。

第2類 (417~426) 前後後半の縄文土器

417~426は縄文前期後半期の土器と思われる。これらの縄文は原体が約2~3cmあり縄文時代早期初頭の縄文と違いがある。425は羽状縄文土器の上に粘土帯を張り付け竹管で刺突して、その上から縄文を転がしている。426は口唇部に歯状で連続刺突している。

b. 竹管文 (427~483)

竹管文は本遺跡では7類に分類される。

第1類 縄文を地紋とし、細い平行沈線で施文したものの (427~430・431・432・435・436)

第1種 地紋を磨り消さないもの (427~430)

第2種 地紋を磨り消したもの (431・432・435・435)

第2類 半截竹管による平行連続爪形文を施文したものの

第1種 貼り付文に刻みを有する土器 (433・434・437・438)

第2種 半截竹管による爪形文を施文するもの (440・441・449~453)

第3類 赤彩のある土器 (442~448)

赤彩する薄手の半截竹管文を有する土器である。448は胴部が球状で口縁部と胴部に括れない浅鉢形土器である。

第4類 木ノ葉状入り組み文 (幾何学的文様) があるもの (454~457)

454は浅鉢型土器である。

第5類 口縁部文様帯に半截竹管による平行沈線だけを用いて施文したものの (458~461)

第1種 平行沈線文を2条施文したもの (458)、

第2種 縦方向の平行沈線文で施文したもの (459~460)

第3種 鋸歯状に平行沈線文を施文したもの (461)

第6類 口縁部文様帯に肋骨文を施文するもの (462~477)

第1種 細い平行沈線で鋸歯状に施文したもの (462・463)

462は竹管の刺突文を鋸歯の頂点に施文している。463は縦区画の1本の沈線があり、その上に竹管の刺突文を施しており、鋸歯状文と肋骨文の中間の文様である。

第2種 鋸歯状の肋骨文 (464~474)

464は半截竹管による爪形文を鋸歯状文の上に連続施文している。また、縦区画の線が1本沈線のもの (464~466) と平行沈線文 (467~471) もがある。また縦区画の沈線上に刺突文のものでなく、半截の竹管を施文している。

第3種 いわゆる肋骨文 (475・477)

第4種 レンズ形の肋骨文 (476・478・482)

482は468の文様と格子状文様の中間の文様。胴部文様帯は結束羽状縄文。

第5種 格子状の施文 (479~481・483)

483には縦区画線がないが、区画の意味をもたせるような刺突文が施文されている。

c. 前期無文土器 (484・485)

484は破片であるが円盤状の有孔罅付土器である。485は屈曲部を持つ無文の浅鉢形土器である。これらの土器は南東側日向林B遺跡との境界部分急斜面に分布していた。一部は日向林B遺跡内に分布しているものも含まれる。

図版番号	図 NO	整理番 号	発掘 層号	遺構・ 区分	遺物番 号	スケ ール	文 様	部位	器形 特徴	文様構成 特徴	器 形	分 類	色(釉)	胎 土	接合番号(発 掘層番号)	備 考
図版185	1	41306	301		41306	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	明赤褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版186	2	38387	302		38387	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	RL	第1類	にがい黄 褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版185	3	35668	307		35668	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	にがい黄 褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版185	4	81422	306		81422	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版185	5	36992	289		36992	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	RL	第1類	明褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版185	6	47848	303		47848	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版185	7	31327	317		31327	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	不明	第1類	褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版186	8	31372	237		31372	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	にがい褐 色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		破片4点更 2片同一個 体
図版185	9	46154	339		46154	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	不明	第1類	黄 褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版185	10	34394	316		34394	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版185	11	48244	331		48244	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	L	第1類	明赤褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版185	12	35428	303		35428	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	にがい黄 褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版186	13	60131	361	一折		1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	明褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		MHT-1割
図版185	14	44582	321		44582	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	不明	第1類	明黄褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版185	15	49768	206		49768	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	明赤褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版185	16	60133	204	部1-B		1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	RL	第1類	にがい褐 色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版185	17	49599	412		49599	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	RL	第1類	赤褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有		
図版186	18	44883	328		44883	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	にがい黄 褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版185	19	39622	302		39622	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	RL	第1類	褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版186	20	32686	342		32686	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版185	21	41922	347		41922	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	RL	第1類	にがい黄 褐色	白色粒(炭石?) を多く含有	41922-41618	
図版186	22	50560	287		50560	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	L	第1類	にがい黄 褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有	50359-50360	4片同一個 体
図版186	23	44909	341		44909	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	褐色	黒炭質, 白色透明 石灰主律的に含 有	44909-44918	
図版186	24	37098	517		37098	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	L	第1類	にがい黄 褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		
図版186	25	41213	346		41213	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	真方向施文	LR	第1類	褐色	白色粒(炭石?) を多く含有		

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (1)

図版番号	図 NO	整理番 号	実測 面積 区分	遺物番 号	スケ ール	文 種	部位	裏面 調査	文様構成 特徴	器 形	分 類	色調(外)	胎 土	調査 番号(敷 地番号)	備 考
図版186	26	48147	288	48147	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	R	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	27	42203	540	42203	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	28	39007	325	39007	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	黒炭屑,白色透明 石英主体的に含 有		
図版186	29	40364	297	40364	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	30	42400	271	42400	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	黒炭屑,白色透明 石英主体的に含 有		
図版186	31	49939	231	49939	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む	49939-49952	
図版186	32	51141	355	51141	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	不明	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	33	30309	508	30309	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	R	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	34	33274	230	33274	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	L	第1類	明黄褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	35	50120	348	50120	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	36	46199	286	46199	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	37	43429	319	43429	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	不明	第1類	黄褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	38	40497	507	40497	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	39	36080	223	36085	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版186	40	31954	606	31954	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	41	51299	419	51299	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	赤褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	42	41485	285	41485	1/2	赤黒縄文	口縁部	下腹 文様 縄文	具方向縄文	RL	第1類	にぶい 黄	黒炭屑,白色透明 石英主体的に含 有	49939-49952	
図版187	43	31997	367	31997	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	暗褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	44	32683	543	32683	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	暗褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	45	33772	490	33772	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	46	37358	381	37358	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	R	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	47	44981	309	44981	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	48	31953	505	31953	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	49	42741	487	42741	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	黄褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	50	44177	488	44177	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	褐色	黒炭屑,白色透明 石英主体的に含 有		
図版187	51	49090	453	49090	1/2	赤黒縄文	口縁部	口唇部下斜垂 線走縄文	具方向縄文	RL	第2類	明赤褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	52	31981	628	31981	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	RL	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	53	42213	217	42213	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	54	30514	314	30514	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	明黄褐色	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	55	30686	502	30686	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	56	34132	221	34132	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	不明	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	57	34294	338	34294	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	58	42234	515	42234	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版187	59	50077	383	50077	1/2	赤黒縄文	口縁部	なし	具方向縄文	不明	第1類	赤褐色	黒炭屑,白色透明 石英主体的に含 有		
図版187	60	32041	227	32041	1/2	赤黒縄文	口縁部	縄文	具方向縄文	LR	第1類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		
図版188	61	50379	334	50379	1/2	赤黒縄文	口縁部	口唇部下斜垂 具方向縄文	具方向縄文	LR	第2類	にぶい 黄	白色粒(長石?) を多く含む		

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (2)

図版番号	図NO	整理番号	発掘番号	遺構・区分	遺物番号	スケール	文様	部位	裏面図	文様構成・特徴	図例	分類	色調(外)	胎土	編年	組合番号(整理番号)	備考
図版188	62	30796	209		30796	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	緑	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	63	37462	350		37463	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	64	36868	421		36868	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	66	49106	322		49106	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	黄緑	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	66	40682	316		40682	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	67	37464	234		37464	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	明黄褐色	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	68	49157	249		49157	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	不明	第2期1種	緑	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	69	30722	294		30722	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	不明	第2期1種	明黄褐色	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	70	41134	352		41134	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	黄褐色	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	71	39528	323		39528	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、具方角縄文	LR	第2期1種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む	30928-44097		
図版188	72	34441	548		34441	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文、口唇部下有段	不明	第2期3種	にがい黄緑	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	73	35690	411		35696	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	緑	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	74	50777	547		50777	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文、口唇部下有段	RL	第2期3種	にがい黄緑	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	75	36476	296		36476	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			右縁から変色
図版188	76	31226	416		31236	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	R	第2期3種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	77	41872	378		41572	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	78	32010	500		32010	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	明黄褐色	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	79	34783	422		34783	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	灰黒	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	80	46251	389		46251	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	にがい黄	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	81	41682	390		41582	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	不明	第2期3種	緑	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	82	48603	501		48603	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	L	第2期3種	緑	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	82	39629	382		39629	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	緑	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	84	31965	370		31965	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	85	42218	498		42128	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	LR	第2期3種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	86	36875	354		36875	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	明黄褐色	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	87	32360	564		32360	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、縦走縄文	RL	第2期3種	にがい黄	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	88	37824	481		37824	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、横走縄文	LR	第2期4種	緑	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	89	39297	250		39297	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、横走縄文	LR	第2期4種	にがい黄緑	白色粒(長石?)を多く含む	39405-39297		
図版188	90	32495	497		32495	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、横走縄文	LR	第2期4種	明黄褐色	白色粒(長石?)を多く含む			
図版188	91	32994	216		32994	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、横走縄文	LR	にがい黄緑	白色粒(長石?)を多く含む				
図版188	92	30259	226		30309	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、横走縄文	LR	第2期4種	明黄褐色	白色粒(長石?)を多く含む	32989-32996		
図版188	93	34058	483		34058	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、横走縄文	LR	第2期4種	明黄褐色	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			
図版188	94	46268	494		46268	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口唇部下斜走、横走縄文	LR	第2期4種	約緑	黒炭質、白色透明石質主体の胎土を含む			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (3)

第12章 日向林A遺跡

調査番号	洞 NO	遺物群 番号	発掘 区分	遺物群 番号	スケ ール	文 種	部位	器種 分類	文様構成 特徴	図9	分 類	色調(外)	胎 土	備 考
図版189	95	41431	485	41431	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版189	96	42352	263	42352	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版189	97	31564	270	31564	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	明褐色	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版189	98	37559	242	37559	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版189	99	65437	281	65437	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版189	100	41890	504	41890	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版189	101	40251	314	40251	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版189	102	40458	240	40458	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版190	103	32002	482	32002	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版190	104	37822	480	37822	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	105	30367	496	30367	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	暗褐色	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版190	106	39977	459	39977	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	107	42392	491	42392	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	暗褐色	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	108	36300	236	36300	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	明褐色	白色粒(長石?) を多く含む	2片同一割 落
図版190	109	33044	548	33044	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	110	34256	498	34256	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	111	41318	247	41318	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版190	112	50023	271	50023	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	不明	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	113	46443	308	46443	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	114	37183	252	37183	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	明褐色	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	115	42063	219	42061	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	116	30968	293	30968	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版190	117	33690	210	33690	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	L	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	118	32999	494	32999	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	119	32018	220	32018	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	明褐色	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版190	120	40207	280	40207	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	不明	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	121	31785	215	31783	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版190	122	44996	241	44996	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	暗褐色	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版191	123	31973	306	31973	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版191	124	41703	212	41703	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	白色粒(長石?) を多く含む	
図版191	125	38460	214	38460	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	にがい黄 緑	白色粒(長石?) を多く含む	
図版191	126	31966	312	31966	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	
図版191	127	49536	233	49536	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	白色粒(長石?) を多く含む	
図版191	128	34329	313	34329	1/2	赤黒陶文	口唇部	陶文	口唇部下折走、 横走陶文	LR	第2群4種	黄	黒雲母、白色透明 石英主律の包含	

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (4)

図版番号	図NO	整理番号	実測番号	遺構区分	遺物番号	スケール	文様	部位	器名	器文様構成	時期	期	分類	色調(外)	胎土	土質	総合番号(遺構番号)	備考
図版191	129	32852	310		32853	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、横走線文	LR	第2期4種	に灰~黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版191	130	34800	311		34801	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、横走線文	LR	第2期4種	明赤褐色	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版191	131	44931	292		44931	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、横走線文	LR	第2期4種	に灰~黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版191	132	43104	296		43104	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、横走線文	LR	第2期4種	に灰~黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版191	133	42097	293		42097	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、縦位線文	LR	第2期5種	に灰~黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版191	134	50202	302		50202	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、縦位線文	LR	第2期6種	暗灰	白色粒(長石?)を多く含有				
図版191	135	31559	294		31559	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、縦位線文	LR	第2期6種	に灰~黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版191	136	47313	304		47313	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、縦位線文	LR	第2期6種	に灰~黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版191	137	47944	328		47944	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、縦位線文	LR	第2期6種	黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有			遺構番号234上同一個体	
図版191	139	41262	329		41262	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	口唇部下斜定、縦位線文	LR	第2期6種	に灰~黄	白色粒(長石?)を多く含有				3片同一個体
図版192	139	49765	1		49765	1/3	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	R	第3期	黄	白色粒(長石?)を多く含有			遺物多数1個体	1個体
図版192	140	38783	324		38783	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	に灰~黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版192	141	30941	384		30941	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	真方向線文	RL	第3期	暗赤褐色	白色粒(長石?)を多く含有				
図版192	142	41126	309		41126	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	R	第3期	に灰~黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版192	145	48119	413		48119	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版192	144	33856	535		33856	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	に灰~黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版192	145	31958	383		31958	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版192	146	49370	477-581-07		49370	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	明褐色	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版192	147	46003	420		46003	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	に灰~黄					
図版192	148	32061	521		32061	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	に灰~黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版192	149	31968	534		31968	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	に灰~黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版192	150	32512	377		32512	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	赤褐色	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版192	151	32351	533		32351	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版193	152	80431	412		80431	1/2	表裏無文	口縁部	白磁器下には、すか文様有り	縦走線文	R	第3期	黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版193	153	39193	403		39193	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	R	第3期	に灰~黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版193	154	27053	369		27053	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	R	第3期	黄	白色粒(長石?)を多く含有				
図版193	156	30596	539		30596	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版193	156	22856	558		22856	1/2	表裏無文	口縁部	なし	縦走線文	RL	第3期	黄	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版193	157	41796	373		41796	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	RL	第3期	赤褐色	黒雲母、白色透明石英主體的に含有				
図版193	158	44227	418		44227	1/2	表裏無文	口縁部	陶文	縦走線文	R	第3期	に灰~黄	白色粒(長石?)を多く含有				

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (5)

第12章 日向林A遺跡

図版番号	図 NO	整理番 号	実測 番号	遺構 区分	遺構番 号	ス ケ ール	文 類	部位	基壇 調査	文様構成 特徴	級 分	色調(外)	胎 土	編 織 痕	組合番号(照 通番号)	備 考
図版193	159	33670	418		33670	1/2	赤黄陶文	口縁部	なし	縦走陶文	R	第3級	にぶい黄 褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版193	160	33067	387		33067	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	R	第3級	褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版193	161	43253	386		43253	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	R	第3級	明赤陶 褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版193	162	40446	385		40446	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	R	第3級	にぶい黄 褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版193	163	50774	374		50774	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版193	164	47478	538		47478	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版193	165	41422	372		41422	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	赤褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版199	166	31978	395		31978	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版193	167	39124	372		39124	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版193	168	41187	545		41187	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	にぶい黄 褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版193	169	31978	379		31978	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	不明	第3級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版193	170	39942	417		39942	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	明赤陶	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版193	171	50247	376		50247	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	RL	第3級	褐色	白色胎(灰石?) を多く含む	50247-50254	
図版194	172	42019	202		42019	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	明赤陶	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む	42002-42001- 42019	
図版194	173	46092	514		46093	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	にぶい赤 褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版194	174	31355	245		31355	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版194	175	41677	209		41677	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L	第4級	褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版194	176	46151	518		46151	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	にぶい赤 褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版194	177	49803	246		49860	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版194	178	36922	222		36922	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	明赤陶	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版194	179	50866	208		50866	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	にぶい黄 褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版194	180	50803	275		50803	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L	第4級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版194	181	46259	516		46259	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	横走陶文	L,R	第4級	にぶい黄 褐色	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版194	182	44549	285		44549	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	横走陶文	L,R	第4級	にぶい赤 褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版194	183	41425	238		41425	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版194	184	41566	202		41566	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	明赤陶	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版194	185	48799	362		48799	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	黄緑	白色胎(灰石?) を多く含む		
図版195	186	50976	251		50976	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	にぶい赤 褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版195	187	33151	226		33151	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L,R	第4級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版195	188	50804	232		50804	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L	第4級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		
図版195	189	34372	259		34372	1/2	赤黄陶文	口縁部	陶文	縦走陶文	L	第4級	褐色	黒黄胎,白色透明 石灰主軸の胎 を含む		

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (6)

図版番号	図NO	整理番号	実測番号	遺構区分	遺物番号	スケール	文様	部位	原位置	文様構成	特徴	割り分	色調(外)	胎土	編み目	結合番号(整理番号)	備考
図版195	190	60588	267		60588	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	191	60519	512		60519	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版195	193	51343	338		51343	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版195	193	50945	213		50945	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	明褐色	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版195	194	30641	244		30641	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む	30616-30641	51563と結び
図版196	196	38350	264		38350	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	明緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	196	43048	511		43048	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	197	31967	261		31967	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	緑	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版195	198	30226	274		30226	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	暗黒	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版195	198	49029	276		49029	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	200	2989	260		2989	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		2片
図版195	201	51264	257		51264	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版195	202	38707	391		38707	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	203	49662	622		49662	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	204	31977	256		31977	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	205	38730	366		38730	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	206	41147	265		41147	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		なし
図版196	207	39119	263		39119	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	208	50250	308		50250	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	白色粒(灰石?)を多く含む	30119-50250と結合	
図版196	209	40115	524		40115	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦走縄文		LR	第5類	的焼	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	210	50910	229		50910	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	褐色	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	211	49559	207		49559	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	212	42256	254		42256	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		L	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	213	40176	513		40176	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	214	39238	629		39238	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版196	215	48848	245		48848	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄緑	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	216	30796	368		30796	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	白色粒(灰石?)を多く含む	30796-60250と結合	
図版196	217	30344	329		30344	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版196	218	41942	236		41942	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横走縄文		LR	第4類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版197	219	51192	516		51192	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦走縄文		L	第4類	黄	黒蓋母,白色透明石英主體的に含む		
図版197	220	48690	328		48690	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦走縄文		RL	第5類	黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版197	221	41258	522		41258	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦走縄文		LR	第5類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		
図版197	222	49951	357		49951	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦走縄文		LR	第5類	にぶい黄緑	白色粒(灰石?)を多く含む		

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (7)

図版番号	図 NO	整理 番号	実測 番号	遺跡・ 区分	遺物番 号	スケ ール	文 様	部位	裏面 図	文様構成 特徴	器 形	分 類	色別(外)	胎 土	備 考	結合番号(期 層番号)	備 考
図版197	223	30677	527		30677	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版197	224	30250	333		30250	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	RL	第5類	暗赤褐色	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版197	225	36622	362		36623	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版197	226	33864	366		33868	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	白色胎(長石?) を多く含む	34051-33868		
図版197	227	30233	369		30233	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版197	228	31440	368		31440	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版197	229	46296	368		46295	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有	有孔		
図版197	230	49996	348		49996	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版197	231	36928	520		36928	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	R	第5類	縹	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版197	232	34496	519		34496	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	R	第5類	縹	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版197	233	46176	520		46176	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版197	234	44327	356		44327	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横位縄文	R	第6類	黄褐色	白色胎(長石?) を多く含む			
図版197	235	42767	532		42767	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横位縄文	RL	第6類	明褐色	白色胎(長石?) を多く含む			
図版197	236	35873	344		35873	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	黄褐色	白色胎(長石?) を多く含む			
図版197	237	36535	337		36535	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第5類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版197	238	47961	334		47961	1/2	表裏縄文	口縁部	押 正?	縦位縄文	LR	第5類	縹	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有	図版番号 326と同 類体		
図版197	239	47947	332		47947	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横位縄文	LR	第5類	明赤褐色	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版198	240	37694	525		37694	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横位縄文	RL	第6類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	241	46782	492		46783	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横位縄文	LR	第6類	明黄褐色	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	242	35906	489		35990	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横位縄文	RL	第6類	明黄褐色	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	243	36159	336		36159	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文	LR	第6類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	244	30341	493		30341	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	横位縄文	L	第5類	明黄褐色	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版198	245	32066	491		32066	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	長方向縄文	LR	第1類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	246	32765	364		32765	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	縦位縄文、縦位 状縄文	LR	第7類	明褐色	黒炭質, 白色透明 石英主軸的に含 有			
図版198	247	41700	282		41700	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部下無文帯 あり	RL	第7類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	248	37636	320		37636	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部に無文帯 あり	RL	第7類	縹	白色胎(長石?) を多く含む	32745-37636 結合第一同 類体		
図版198	249	37714	327		37714	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部に無文帯 あり	RL	第7類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	250	49261	478-S1-07		49261	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部に無文帯 あり	LR	第7類	黄褐色				
図版198	251	31244	345		31244	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部～口縁部 無文	LR	第7類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	252	31820	282		31820	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部～口縁部 無文	RL	第7類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	253	44686	266		44686	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	裏面文、裏面無 文	RL	第7類	暗褐色	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	254	42356	281		42356	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部下側のみ、 無文?	LR	第7類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			
図版198	255	42287	346		42287	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	口縁部無文帯あり	LR	第7類	縹	白色胎(長石?) を多く含む			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (8)

図版番号	図 NO	整理番号	支那 番号	遺構 区分	遺物番 号	スケ ール	文 種	部位	表裏 面	文様構成・特徴	期	分 類	色(内外)	胎 土	編 織 痕	組合番号(整 理番号)	備 考
図版199	256	36662	248		36662	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面全体に注 文?裏面全体 縄文	I	新1期	黄褐色	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	257	34729	610		34729	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面全体に注 文?裏面全体 縄文	I	新1期	黄褐色	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	258	39406	396		39406	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面の縄文	R	新3期	黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版199	259	39972	414		39972	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面の縄文	不明	新3期	赤褐色	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版199	260	39772	397		39772	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面の縄文	不明	新3期	黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版199	261	43737	396		43737	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面の縄文	不明	新3期	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	262	31971	398		31971	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面の縄文	不明	新3期	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	263	31775	398		31775	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表面の縄文	R	新3期	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	264	32410	407		32410	1/2	表裏縄文	胴部	新物 注文	表面の縄文	R	—	赤褐色	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版199	265	39364	399		39364	1/2	表裏縄文	口縁部	縄文	表面の縄文	R	新3期	にじみ 黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版199	266	50771	509		50771	1/2	表裏縄文	胴部	なし	表裏縄文	不明	—	黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	267	36678	462		36678	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	LR	—	黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	268	47053	447		47053	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	LR	—	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			3片同一 器体
図版199	269	47910	456		47910	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	LR	—	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			縁と底面
図版199	270	45779	453		45779	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	RL	—	赤褐色	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	271	37062	454		37062	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	RL	—	明褐色	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	272	47034	451		47034	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	LR	—	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	273	48852	449		48852	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	LR	—	赤褐色	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	274	31998	448		31998	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	RL	—	暗赤褐色	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版199	275	36648	456		36648	1/2	表裏縄文	胴部	縄文	表裏縄文	LR	—	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			3片同一 器体
図版200	276	36641	402		36641	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	継ぎ縄文	RL	表 第3期	黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版200	277	46774	404		46774	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	継ぎ縄文	不明	表 第3期	にじみ 黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版200	278	50624	392		50624	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	横走縄文	LR	表 第6期	黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版200	279	50980	401		50980	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	不明(斜縄文)	不明	不明(斜縄 文)	明赤褐色	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版200	280	50720	351		50720	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	継ぎ縄文	LR	表 第1期	にじみ 黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版200	281	44210	353		44210	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	継ぎ縄文	LR	—	黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版200	282	50831	262		50831	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	真方向	LR	表 第1期	にじみ 黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版200	283	44767	211		44767	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	真方向	L	表 第1期	黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			
図版200	284	40159	272		40159	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	真方向	LR	表 第1期	黄				
図版200	285	36755	282		36755	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	継ぎ縄文	L	表 第6期	黄	黒雲母,白色透明 石英主体的に含 有			大きい 器体
図版200	286	48853	553		48853	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	真方向	不明	表 第1期	黄	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版200	287	50710	446		50710	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	横走縄文	L	表 第4期	明赤褐色	白色粒(灰石?) を多く含む			
図版200	288	37360	440		37360	1/2	表裏縄文	口縁部	なし	横走縄文	LR	表 第4期	にじみ 黄	白色粒(灰石?) を多く含む			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (9)

国政番号	国 NO	管理 番号	実測 番号	遺構・ 区画	遺物 番号	スケ ール	文 様	部位	裏面 調査	文様構成 形状	部 別	分 類	色調(外)	胎 土	編 組 順	総合番号(附 属番号)	備 考
国政200	289	49602	406		49603	1/2	表縄文	口縁部	なし	横位施文	RL	表 第6層	黒褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政200	290	36901	566		36901	1/2	表縄文	口縁部	なし	横走縄文	LR	表 第4層	黒	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政200	291	56356	426		56356	1/2	表縄文	口縁部	なし	横走縄文	LR	表 第4層	暗赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政200	292	50519	561		50219	1/2	表縄文	口縁部	なし	横位施文	LR	表 第6層	黒	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政200	293	32662	436		32662	1/2	表縄文	口縁部	なし	横位施文	L	表 第5層	黒褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政200	294	49609	436		49609	1/2	表縄文	口縁部	なし	横走縄文	LR	表 第4層	黒	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政200	295	50225	371		50225	1/2	表縄文	口縁部	なし	口唇部下斜走, 縦位縦走縄文	RL	表 第2層3 層	赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む	50225-50226		
国政200	296	48089	435		48089	1/2	表縄文	口縁部	なし	横位施文	LR	表 第5層	赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政200	297	34443	437		34443	1/2	表縄文	口縁部	なし	横走縄文	R	表 第3層	にぶい黄 褐色	白色粒(長石?) を多く含む	34443-40214		
国政200	298	44661	424		44661	1/2	表縄文	口縁部	なし	真方向	L	表 第1層	赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政200	299	47900	433		47900	1/2	表縄文	口縁部	なし	横走縄文	LR	表 第3層	にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	300	44687	400		44687	1/2	表縄文	口縁部	無文	無文	R		にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	301	41920	400		41920	1/2	表縄文	口縁部	無文	無文	R		にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	302	49226	400		49229	1/2	表縄文	口縁部	無文	無文	R		にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	303	32191	400		32191	1/2	表縄文	胴部	無文	無文	R		にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	304	38568	441		38568	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦走縄文	不明	表 第2層	黒	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	305	39778	436		39778	1/2	表縄文	口縁部	なし	口唇部下斜走・縦 走縄文	RL	表 第2層3 層	黒	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	306	40570	431		40579	1/2	表縄文	口縁部	なし	口唇部下斜走, 縦走縄文	RL	表 第2層3 層	にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	307	50262	432		50262	1/2	表縄文	胴部	なし	口唇部下斜走, 縦位施文縦位施 文	RL	表 第2層5 層	赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	308	39712	549		39712	1/2	表縄文	口縁部	なし	真方向	RL	表 第1層	にぶい赤 褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	309	30009	276		30009	1/2	表縄文	口縁部	なし	真方向	LR	表 第1層	黒	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	310	50716	425		50716	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦走縄文	RL	表 第3層	暗赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	311	36708	605		36708	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦位施文	R	表 第5層	にぶい黄 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	312	41442	434		41442	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦走縄文	不明	表 第3層	赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	313	49664	605		49664	1/2	表縄文	口縁部	なし	横位施文	LR	表 第6層	にぶい赤 褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	314	48676	557		48976	1/2	表縄文	口縁部	なし	真方向	RL	表 第1層	黒	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	315	47272	592		47272	1/2	表縄文	口縁部	なし	不明(斜縄文)	不明	不明(斜縄 文)	にぶい赤 褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	316	50756	427		50756	1/2	表縄文	胴部	なし	縦走縄文	RL	表 第3層	赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	317	41832	438		41832	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦走縄文	RL	表 第3層	暗赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			
国政201	318	39294	444		39294	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦走縄文	R	表 第3層	にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	319	50478	443		50478	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦走縄文	R	表 第3層	にぶい赤 褐色	白色粒(長石?) を多く含む			
国政201	320	47113	442		47113	1/2	表縄文	口縁部	なし	縦走縄文	RL	表 第3層	赤褐色	黒炭質,白色透明 石英主体的に含む			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 00

図版番号	国 NO	整理番 号	実測 番号	遺構・ 区分	遺物券 号	スケ ール	文 種	部位	表面 調整	文様構成 特徴	割り 分 類	色調(外)	胎 土	編 織 私	組合番号(遺 構番号)	備 考
図版201	321	41430	445	41435	1/2	表編文	口縁部	なし	縦走編文	RL	表 第3層	赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版201	322	50182	554	50183	1/2	表編文	口縁部	なし	縦走編文	RL	表 第3層	赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版201	323	30748	439	30748	1/2	表編文	口縁部	口唇 部? にか ずか 文様 有り	縦走編文	R	表 第3層	赤褐黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版201	324	39234	439	39234	1/2	表編文	口縁部	なし	縦走編文	R	表 第3層	緑	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版201	325	48698	406	48698	1/2	表編文	口縁部	なし	縦走編文	RL	表 第3層	赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	326	39806	408	39806	1/2	表編文	胴部	表面 在軌	横走り			暗赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	327	32962	409	32962	1/2	表編文	胴部	無文		LR	—	緑	白色粒(長石?) 未多く含有			
図版202	328	42089	408	42089	1/2	表編文	胴部			RL	—	にんじょう 黄	白色粒(長石?) 未多く含有			
図版202	329	32771	474	32771	1/2	表編文	胴部			不明	—	にんじょう 黄	白色粒(長石?) 未多く含有			
図版202	330	40445	466	40445	1/2	表編文	底部			不明	—	赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	331	37258	478	37258	1/2	表編文	底部			LR	—	緑	白色粒(長石?) 未多く含有			
図版202	332	31954	472	31956	1/2	表編文	胴部			RL	—	淡黄褐	白色粒(長石?) 未多く含有			
図版202	333	30770	471	30770	1/2	表編文	胴部			RL	—	灰褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	334	49662	450	49662	1/2	表編文	胴部			RL	—	緑	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	335	37298	467	37298	1/2	表編文	底部			不明	—	にんじょう 黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	336	32016	463	32016	1/2	表編文	底部			LR	—	にんじょう 黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	337	41853	457	41853	1/2	表編文	底部			RL	—	赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			遺7-6変質
図版202	338	50271	658	50271	1/2	表編文	底部			LR	—	にんじょう 黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	339	50068	473	50068	1/2	表編文	底部			R	—	緑	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	340	30280	464	30280	1/2	表編文	底部			不明	—	黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	341	44513	470	44513	1/2	表編文	底部			不明	—	にんじょう 黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	342	41507	461	41507	1/2	表編文	底部			不明	—	緑	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	343	47750	456	47750	1/2	表編文	底部			RL	—	赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有	47750-47751- 47752	5片同一個 体	
図版202	344	30866	459	30868	1/2	表編文	底部			不明	—	にんじょう 黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	345	38739	460	38739	1/2	表編文	底部			不明	—	にんじょう 黄	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	346	34195	462	34195	1/2	表編文	口縁部			RL	—	緑	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			
図版202	347	49655	488	49655	1/2	表編文	底部			RL	—	赤褐	黒雲母,白色透明 石英主體的に含有			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (1)

調査番号	図 NO	整理番 号	実測 番号	遺構・ 区分	遺物番 号	スケ ール	文 様	部位	遺物 調査	文様構成 特徴	部 分	類	色調(内)	胎 土	継 ぎ	組合番号(継 ぎ番号)	備 考
図版203	348	39912	11		39912	1/2	押型文	口縁部	山形文+無	山形文+無		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	349	39930	12		39930	1/2	押型文	胴部	山形文+無	山形文+無		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	350	40286	11		40286	1/2	押型文	胴部	山形文+無	山形文+無		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	351	37451	12		37451	1/2	押型文	胴部	山形文	山形文		横	細粒石英粒、ダ ウ・シヤブまじり				
図版203	352	38348	12		38348	1/2	押型文	胴部	山形文+無 胴口 縁	山形文+無 胴口 縁		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	353	37445	10		37445	1/2	押型文	胴部	山形文+無 胴口 縁	山形文+無 胴口 縁		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	354	37443	10		37443	1/2	押型文	胴部	山形文+無 胴口 縁	山形文+無 胴口 縁		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	355	38389	17		38389	1/2	押型文	胴部	ナブ	山形文+無(ナブ ナブ)		縦横	細粒石英含有 石英少量		少		
図版203	356	38765	18		38765	1/2	押型文	口縁部	山形文+無	山形文+無		にぶい 黄褐色	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	357	37910	18		37910	1/2	押型文	胴部	山形文+無	山形文+無		にぶい 黄褐色	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	358	39266	14		39266	1/2	押型文	口縁部	山形文+無	山形文+無		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	359	39937	14		39937	1/2	押型文	口縁部	山形文+無 胴口 縁	山形文+無 胴口 縁		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	360	36430	16		36430	1/2	押型文	胴部	山形文+無	山形文+無		黄褐色	細粒石英含有 石英少量		少		
図版203	361	38442	14		38442	1/2	押型文	口縁部	山形文+無	山形文+無		横	大粒石灰・粗い長石多量 2mmの 小石含有				
図版203	362	43221	27		43221	1/2	押型文	口縁部	横溝	横溝		横	やや粗い砂粒石 灰多量		少		
図版203	363	48843	26		48843	1/2	押型文	口縁部	密接溝内	密接溝内		にぶい 黄褐色	やや粗い砂粒石 灰多量		少		
図版203	364	39028	22		39028	1/2	押型文	口縁部	横溝(組合せ家形 文)	横溝(組合せ家形 文)		黄褐色	粗い・多量の砂粒 含有		少		
図版203	365	48908	22		48908	1/2	押型文	口縁部	横溝(モガ キ、ヘ ナブ)	横溝(モガキ、 ヘナブ)		黄褐色	細粒少量		少		
図版204	366	48906	22		48906	1/2	押型文	口縁部	横溝(ヨコナメ)	横溝(ヨコナメ)		黄褐色	細粒少量		少		
図版204	367	49487	24		49487	1/2	押型文	口縁部	横溝(重層山形文)	横溝(重層山形文)		横	細粒少量 微砂 含有		少		
図版204	368	41480	35		41480	1/2	押型文	口縁部	横溝(唐椽文)	横溝(唐椽文)		にぶい 黄褐色	細粒少量 赤褐色 色砂粒多		少		
図版204	369	48528	34		48528	1/2	押型文	口縁部	横溝(唐椽文(兼 目文))	横溝(唐椽文(兼 目文))		黄褐色	石英細粒多 やや 含有		少		
図版204	370	38895	26		38895	1/2	押型文	口縁部	ヘナ ナブ	横溝(唐椽文(兼 目文)、胴口縁)		黄褐色	細粒少量 やや 粗い砂粒		少		
図版204	371	50296	20		50296	1/2	押型文	口縁部	内ナ ブ、ヘ ナブ、 ゾコ ナブ	横溝(くの手)		にぶい 黄褐色	細粒少量 白色 長石細粒多量		少		
図版204	372	51000	20		51000	1/2	押型文	口縁部	内ナ ブ、ヘ ナブ、 ゾコ ナブ	横溝(くの手)		にぶい 黄褐色	細粒少量 白色 長石細粒多量		少		
図版204	373	50336	33		50336	1/2	押型文	口縁部	ヘナ ナブ	横溝(唐椽文)		黄褐色	細粒含有		少		
図版204	374	48525	31		48523	1/2	押型文	口縁部	横溝	横溝		黄褐色	細粒少量 微砂 含有		少		
図版204	375	95480	21		49480	1/2	押型文	口縁部	横溝(ヨコナメ)	横溝(ヨコナメ)		にぶい 黄褐色	細粒少量 白色 長石細粒多量		少		
図版204	376	48922	26		48922	1/2	押型文	胴部	密接溝内	密接溝内		にぶい 黄褐色	やや粗い砂粒石 灰多量		少		
図版204	377	39426	33		39426	1/2	押型文	胴部	ヘナ ナブ	横溝(唐椽文)		黄褐色	細粒含有		少		
図版204	378	39648	29		39648	1/2	押型文	胴部	横溝	横溝		黄褐色	細粒多量 石英 等砂粒多		少		

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (12)

図版番号	図 NO	発掘 番号	発掘 区分	遺物 番号	ス ケ ール	文 類	部位	基 礎 位置	文様構成 特徴	器 種	分 類	色調(外)	胎 土	編 織 系	総合番号(整理番号)	備 考
図版205	379	50633	20	50633	1/2	押型文	胴部	内ナ デ(ヘ ナ デ) ゴ コ ナ	横溝 くの字			にがい黄 褐色	織成少量 白色 長石細粒多量	少		
図版206	380	50302	20	50302	1/2	押型文	胴部	内ナ デ(ヘ ナ デ) ゴ コ ナ	横溝			にがい黄 褐色	織成少量 白色 長石細粒多量	少		
図版205	381	50298	20	50298	1/2	押型文	胴部	内ナ デ(ヘ ナ デ) ゴ コ ナ	横溝			にがい黄 褐色	織成少量 白色 長石細粒多量	少		
図版205	382	50632	30	50632	1/2	押型文	胴部	内ナ デ(ヘ ナ デ) ゴ コ ナ	横溝			にがい黄 褐色	織成少量 白色 長石細粒多量	少		
図版206	383	49741	23	49741	1/2	押型文	胴部		横溝 組合せ文 形文			明黄褐色	織成含 粗い多 量の砂粒	少		
図版205	384	48865	23	48865	1/2	押型文	胴部		横溝 組合せ文 形文			明黄褐色	織成含 粗い多 量の砂粒	少		
図版205	385	49194	23	49194	1/2	押型文	胴部		横溝 組合せ文 形文			明黄褐色	織成含 粗い多 量の砂粒	少		
図版205	386	49747	23	49747	1/2	押型文	胴部		横溝 組合せ文 形文			明黄褐色	織成含 粗い多 量の砂粒	少		
図版206	387	49190	23	49190	1/2	押型文	胴部		横溝 組合せ文 形文			明黄褐色	織成含 粗い多 量の砂粒	少		
図版206	388	48530	25	48530	1/2	押型文	胴部		横溝 雲形並置 文			明黄褐色	織成少 雲砂粒	少		
図版206	389	48522	25	48522	1/2	押型文	胴部		横溝 雲形並置 文			明黄褐色	織成少 雲砂粒	少		
図版206	390	48526	25	48526	1/2	押型文	胴部		横溝 雲形並置 文			明黄褐色	織成少 雲砂粒	少		
図版206	391	48528	25	48528	1/2	押型文	胴部		横溝 雲形並置 文			明黄褐色	織成少 雲砂粒	少		
図版206	392	48541	25	48541	1/2	押型文	胴部		横溝 雲形並置 文			明黄褐色	織成少 雲砂粒	少		
図版206	393	34437	9	34437	1/2	貝殻敷織 文	胴部	七戸	貝殻敷織文			明黄褐色	白色1~2mm程度の 砂粒を少量 石灰細粒含有	少		
図版206	394	34433	9	34433	1/2	貝殻敷織 文	胴部	七戸	貝殻敷織文			明黄褐色	黒茶粒少な、中 粗い	少		
図版206	395	26413	8	26413	1/4	織文	胴部		織文			にがい白 褐色	黒雲母含有砂粒 微細石灰多	有		
図版206	396	35774	65	35774	1/4	条織文	胴部	ナデ	筋条体圧痕文(横 線状)			にがい黄 褐色	織成多 黒砂粒	有		
図版206	397	48786	66	48786	1/4	条織文	胴部	条織	条織文			にがい黄 褐色	織成多 砂粒	有		
図版206	398	48932	61	48932	1/4	条織文	口縁部		筋条体圧痕文			にがい黄 褐色	織成多 砂粒多	有		
図版206	399	33279	101	33279	1/4	条織文	胴部		条織文(条状押 印)			明黄褐色	織成多 白色粒	有		
図版206	400	46602	103	46602	1/4	条織文	底部	ナデ	筋条体圧痕			暗	織成多	有		
図版206	401	49407	102	49407	1/4	条織文	底部		筋条体圧痕			黄褐色	織成多	有		
図版206	402	33406	106	33406	1/4	条織文	胴部	条織	条織			暗	粗い砂粒多	有		
図版206	403	41533	107	41533	1/4	条織文	胴部	条織	条織			暗	粗い砂粒多 織 織入	有		
図版206	404	43000	104	43000	1/4	条織文	底部	条織	条織			暗	織成多量 粗い 砂粒	有		
図版206	405	35260	75	35260	1/3	条織文	口縁部	条織	筋条体圧痕文			にがい黄 褐色	織成多 黒砂粒 有 色	有		
図版206	406	47078	74	47078	1/3	条織文	口縁部	条織	筋条体圧痕文			にがい黄 褐色	織成多 茶色粒 白色粒	有		
図版206	407	40726	76	40726	1/3	条織文	胴部	条織	筋条体圧痕文			暗	織成多 黒砂粒	有		
図版206	408	45398	66	45398	1/3	条織文	口縁部	条織	筋条体圧痕文			暗	織成多 砂粒多	有		
図版206	409	42542	69	42542	1/3	条織文	口縁部	条織	筋条体圧痕文			暗	織成多 砂粒多	有		
図版206	410	44349	81	44349	1/3	条織文	胴部	ナデ	筋条体圧痕文 残存			暗	織成多 砂粒多	有		
図版206	411	39653	72	39653	1/3	条織文	口縁部	条織	筋条体圧痕文 (文部)			にがい黄 褐色	織成多	有		
図版206	412	36098	79	36098	1/3	条織文	胴部	条織	筋条体圧痕文			にがい黄 褐色	織成多 織成 多	有		
図版206	413	33404	81	33404	1/3	条織文	胴部	ナデ	筋条体圧痕文 残存			暗	織成多 砂粒多	有		
図版207	414	44423	37	44423	1/2	引状織文	胴部	ナデ	織文(駒山)			赤褐色	黒雲母が2%、黒く 密	少		
図版207	415	7303	38	7303	1/3	引状織文	胴部	ナデ	織文 ムーブ文 埋地部付			にがい黄 褐色	織成少 黒炭入 微細砂粒多	少		
図版207	416	45639	71	45639	1/3	織文	胴部	条織	筋条			黄褐色	織成少 黒炭入 白色粒多量	少		
図版207	417	46883	46	46883	1/3	織文	口縁部	七戸	織文(前期後半)			にがい黄 褐色	中粗い砂粒多	少		

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 (13)

第12章 日向林A遺跡

図版番号	図NO	測量番号	実測番号	遺構区分	遺物番号	スケール	文 種	部位	原土調整	文様構成 特徴	器 分 類	色(内)	胎 土	編 織 系	組合番号(整理番号)	備 考
図版207	418	35076	54		35076	1/3	縄文	口縁部	ヘラナゲ	縄文 LR		橙	白色麻粒			
図版207	419	31901	44		31901	1/3	縄文	口縁部	ナゲナゲ	縄文(前期後半) LR		にぶい黄褐色	やや粗い			
図版207	420	35508	46		35508	1/3	縄文	口縁部	ミガキ	縄文(前期後半) LR		黄	麻皮			
図版207	431	34302	47		34302	1/3	縄文	口縁部	ミガキ	縄文 直状口縁		明黄褐色	麻皮			
図版207	432	35143	43		35140	1/3	縄文	口縁部	ナゲナゲ	縄文(後半) LR		明黄褐色	やや粗い砂			
図版207	423	50607	40		50607	1/3	縄文	口縁部	ミガキ	縄文 LR		橙	白色麻粒多量			
図版207	424	50604	48		50604	1/3	縄文	胴部	ミガキ	縄文(前期後半) LR		にぶい黄褐色	粗い麻粒多量			
図版207	425	44537	38		44537	1/3	縄文	胴部	ミガキ	縄文・貼り付けのミガキナゲ		にぶい黄褐色	麻粒少量混入	少量		
図版207	426	45500	100		45500	1/4	縄文	胴部	ナゲ			橙	光No.40強引			
図版207	427	10016	50		50316	1/4	縄文	口縁部	ヘラナゲ	半軟竹管文 前期後半 コンパス		明黄褐色	砂粒少量 麻皮			
図版207	428	44836	122		44836	1/4	竹管文	口縁部	ヘラナゲ	半軟竹管文		黄	麻粒多量			
図版207	429	49222	123		49222	1/4	竹管文	口縁部	ナゲ	半軟竹管文		赤褐色	麻粒 砂粒			
図版207	430	31416	124		31416	1/4	竹管文	胴部	ヘラナゲ	半軟竹管文に上る微細字文		黄	麻粒少量多量			
図版208	431	31704	57		31704	1/3	竹管文	口縁部	ナゲ	木ノ葉状入り縄文 麻粒孔あり		橙	白色麻粒多量 麻皮			
図版208	432	31766	57		31766	1/3	竹管文	胴部	ナゲ	木ノ葉状入り縄文 麻粒孔あり		橙	白色麻粒多量 麻皮			
図版208	433	42922	159		42922	1/3	竹管文	口縁部	ナゲ	半軟竹管文		暗褐色	麻皮多量			
図版208	434	43554	160		43554	1/3	竹管文	口縁部	ミガキ	半軟竹管文		黄褐色	白色麻粒多量			
図版208	435	7199	138		7199	1/3	竹管文	胴部	ナゲ	半軟竹管文		にぶい黄	褐色粒 麻粒多量			
図版208	436	44147	129		44147	1/3	竹管文	胴部	ヘラナゲ	半軟竹管文 直状口縁 麻粒孔		赤褐色	粗い 麻粒多量			
図版208	437	48946	151		48946	1/3	竹管文	口縁部	ナゲ	半軟竹管文・麻皮		暗褐色	麻粒多量			
図版208	438	31427	152		31427	1/3	竹管文	口縁部	ナゲ	半軟竹管文 麻粒孔に上るミガキ		黄	白色麻粒多量			
図版208	439	34188	155		34188	1/3	竹管文	口縁部	ナゲ	半軟竹管文		にぶい黄褐色	細白色粒多量			
図版208	440	32614	161		32614	1/3	竹管文	口縁部	ミガキ	半軟竹管文		黄	白色麻粒多量			
図版208	441	32077	161		32077	1/3	竹管文	胴部	ミガキ	半軟竹管文		黄	白色麻粒多量			
図版208	442	34201	171		34201	1/3	竹管文	口縁部	ナゲ	半軟竹管文		黄	白色麻粒多量			
図版208	443	46550	174		46550	1/3	竹管文	口縁部	指	半軟竹管文		黄褐色	粗粒麻皮			
図版208	444	35100	175		35100	1/3	竹管文	胴部	指	半軟竹管文		赤褐色	粗粒麻皮			
図版208	445	34281	184		34281	1/3	竹管文	口縁部	ミガキ	木ノ葉文		暗褐色	麻粒多量			
図版208	446	46132	183		46132	1/3	竹管文	口縁部	ナゲ	木ノ葉文		黄褐色	白色麻粒多量			
図版208	447	30251	163		30251	1/3	竹管文	胴部	ナゲ	木ノ葉文		黄褐色	白色麻粒多量			
図版208	448	45153	162		45153	1/4	竹管文	胴部	内面	鳥羽字文 木ノ葉文 麻皮入り部分 下部		黄褐色	麻粒多量			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 04

図版番号	図 NO	整理番 号	実測 番号	遺構・ 区分	遺物番 号	ス ケ ール	文 様	部 位	器 皿 調 類	文様構成 特徴	類 り	分 類	色調(外)	胎 土	織 造 類	綜合番号(器 類番号)	備 考
図版208	448	36459	156		36459	1/3	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	平紋竹管文			青緑	細砂粒多			
図版208	450	44636	160		44636	1/3	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	爪彫文			黒	黒細砂粒多			
図版208	461	48135	166		48135	1/3	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	爪彫文			黒	黒細砂粒多			
図版208	452	43490	154		43495	1/3	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	平紋竹管文			明黄緑	石黄緑多量			
図版208	463	31790	163		31790	1/3	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	平紋竹管文			橙	細砂粒多量			
図版208	454	31106	65		31106	1/4	竹管文	胴部		(内面型)木ノ葉 文(横可字文)			黒	白色粒多量 砂 粒多量			
図版209	455	44755	59		44755	1/4	竹管文	胴部	E型キ	木ノ葉入組文			赤褐	やや粗い砂粒			
図版209	456	36770	4		36770	1/4	竹管文	口縁部	E型キ	平紋竹管文 横 可字の木ノ葉くず れ 彫 縁付番			橙	粗い砂粒含む			
図版209	457	40772	3		40772	1/4	竹管文	胴部	E型キ	平紋竹管文			にじみ黄 緑	黒細白色砂粒含 有			
図版210	458	46661	128		46661	1/4	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	平紋竹管文			萌地	砂粒多			
図版210	459	43169	146		43169	1/4	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	縦線文			黒	粗い砂粒多			
図版210	460	46223	197	SQ-03	46223	1/4	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	平紋竹管文HBL			明黄緑	砂粒含有			
図版210	461	32102	50		32102	1/4	竹管文	口縁部	E型キ	平紋竹管文			明緑	白色細砂多 量			
図版210	462	43290	131		43290	1/4	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	縦線文 平紋竹 管文			黒褐色	黒細砂多量			
図版210	463	43308	132		43308	1/4	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	筋管文 平紋竹 管文			赤褐	黒細砂粒多			
図版211	464	31992	127		31992	1/4	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	筋管文+横文			にじみ黄 緑	黒細粒			
図版211	465	34212	184		34212	1/4	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	縦線文			橙	キノ細い砂粒			
図版211	466	42911	183		42911	1/4	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	縦線文			黄褐	白色細砂粒含			
図版211	467	31684	138		31684	1/4	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	縦線文 波状口 縁			黒	白色粒多量 粗 い			
図版211	468	44788	58		44788	1/4	竹管文	胴部	E型キ	縦線文			橙	粗い白色粒多量			
図版211	469	34549	144		34549	1/4	竹管文	口縁部	E型キ	縦線文+爪			黄褐	粗い砂粒含 小 石含			
図版211	470	46598	137		46598	1/4	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	筋管文			萌地	白色細砂粒多 量			
図版211	471	41476	149		41476	1/4	竹管文	口縁部	E型キ	筋管文			橙	白色細砂多量			
図版212	472	30029	185		30029	1/3	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	筋管文			明緑	白色細砂多量			
図版212	473	40916	150		40916	1/3	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	筋管文			にじみ黄 緑	砂粒多量			
図版212	474	43671	141		43671	1/3	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	縦線文			黒褐	キノ細い砂粒			
図版212	475	5632	191		5632	1/3	竹管文	胴部	E型キ	筋管文			萌地	黒細砂多量			
図版212	476	31724	149		31724	1/3	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	変型筋管文			明黄緑	白色細砂粒多量			
図版212	477	30692	139		30692	1/3	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	筋管文			明黄緑	砂粒黒細キノ細 少い			
図版212	478	40519	157		40519	1/3	竹管文	胴部	ナデ (E型 キ)	筋管文			橙	白色砂粒多			
図版212	479	35189	135		35189	1/3	竹管文	口縁部	ナデ (E型 キ)	筋子目竹管文			橙	やや粗い砂粒			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 09

図版番号	図NO	整理番号	実測番号	遺構・区分	遺物番号	スケール	文様	部位	表面調整	文様構成	特徴	割り	分類	色調(外)	胎土	焼成温度	図合番号(整理番号)	備考
図版212	480	30084	136		30064	1/3	竹管文	口縁部	ナブ(ミガキ)	格子目竹管文				明黄緑	細砂粒多、キムロ少			
図版212	481	43106	133		43106	1/4	竹管文	口縁部	ナブ(ミガキ)	格子目竹管文				緑	細砂粒多			
図版212	482	3006	121		3006	1/4	竹管文	胴部	ナブ(ミガキ)	造形半載竹管文				黄	粗い砂粒多、小石多			
図版212	483	46670	134		46670	1/4	竹管文	口縁部	ナブ(ミガキ)	格子目竹管文				黄緑	細白色砂粒多			
図版212	484	2937	6		2937	1/4	有孔溝行	口縁部	ミガキ	有孔ツラ付				明赤黒	砂粒多量			
図版212	485	31748	8		31748	1/4	鳥脚無文	底面	ミガキ	有孔ツラ付				緑	砂粒多量			

第47表 日向林A遺跡 縄文時代土器属性表 06

5. 土器の分布状況 (図版183・184)

表裏縄文土器群の分布状況(図版183)は調査区西側に径約60m、約40mの半月形多くものが集中する。南西方向の斜面に沿って流れていくような分布状況である。

図版184は分類可能な口縁部だけの表裏縄文土器の分布状況である。また第1類から第8類までの分布状況は第3類の一部が北西斜面に集中するものがあるが、ほとんど散漫に分布している。

押型文は遺跡の北東斜面の先端部に分布の塊がある(図版183)。

条痕文土器群は調査区の北側から東側に分布している(図版183)。

縄文時代前期土器群が南東方向～南側に分布しており、特に竹管文の土器群はS Q01～S Q03など調査区南斜面先端部や北東斜面先端部で分布している(図版183)。

(2) 石器 (図版214～227・図版176～178・131～145、第48表・第49表)

日向林A遺跡で出土した石器は合計1,470点である。その約1/3が凹石であった。

器種名	Po	TP	AH	Ps	Dr	Sc	ES	NS	RF	UF	Co	Ax (局部磨製)	Ax (打製)	Ax (磨製)	Fl	Ch	スタンプ 形石器	特殊 磨石	石 錐	Ps	GS	Ha	SD	原 石	そ の 他	合 計
石器数	1	2	43	59	10	72	11	9	25	47	28	2	11	13	328	129	1	20	5	480	49	19	11	8	87	1470

第48表 日向林A遺跡 縄文時代石器組成表

1. 槍先形尖頭器(1)

先端欠損の細身下膨れの木葉形槍先形尖頭器である。石材は安山岩、調査区北東側で出土している。両側縁の形態が異なり若干半月形になっている。基部は丸みを持つ。

2. 有茎尖頭器(TP)(2)

安山岩製で、調査区東側で出土している。先端部と基部を欠損している。基部に返しがなく、下膨れの槍先形尖頭器に基部をつけたような形態である。下膨れの1と共通する形態と思われる。

3. 石鏃(AH)(3～28)

本遺跡の石鏃には黒曜石製(7～11・13・14・16・18・22～24)、玉髓製(12)、チャート製(15・19)、

珪質頁岩製 (20・27・28)、安山岩 (25・26) である。26は凸基有茎鏃で、1～9・11・20・28は平基無茎鏃である。ほかは凹基無茎鏃である。3～11・14は長さ12mm以下小型の石鏃である。3～11はほぼ正三角形の形態など類似しており、縄文時代の初期の頃にある石鏃と思われる。

長さ15mm前後のものは、12～14・18である。12は二等辺三角形、13は三菱型、14はハート型である。長さ20cm前後のものは15～19、約25mm前後のものは20～25、長さ30mm以上のものは26・27である。28は剥片鏃である。27は縄文時代後半期のものと思われる。脚の長い21・24～26は縄文前期以降の石器と思われる。ほかは縄文時代早期から前期にかけての石鏃と思われる。

4. 搔器 (ES) (29～32)

30は玉髓製、その他は黒曜石製である。29は親指状円形搔器である。31は「エンド・スクレイパー」といわれる基部欠損の搔器と思われる。29・31は縄文草創期特有の石器と思われる。

5. 削器 (SC) (33・34・43～45・48・49)

33は石筥状の石器である。縄文前期の石器であろうか。48・49は大形の削器である。49など打製石斧の未製品のようにも思える。頭部など搔器としても使用できよう。48は横割ぎの大形フレックを用いて、側辺にも刃部になると思われる剥離を行っている。下方の刃部は挟りが入っており、このような挟りのある削器は縄文草創期の石器と思われる。

6. 石錐 (DR) (35)

玉髓製の石錐である。縄文時代の早い時期の石錐と思われる。

7. 石匙 (NS) (36～42)

小型のものと (36～38) そうでないものがある。全点横型の石匙である。41を除き中央部に溝みがある。これらは縄文前期の石器と思われる。

8. 石斧 (AX) (46・47・50・51)

46は刃部が局部的に磨かれている。刃先のみ出土であり全体の様相が不明であるが、縄文時代草創期の神子柴系の石斧とは異なると思われる。縄文時代表裏縄文期の局部磨製磨製の石斧であろうか？ 47・50・51はいわゆる短冊形の打製石斧である。石斧類は表裏縄文系土器群の分布範囲内にあり、これらの土器群と関連すると思われる。

9. 凹石 (52～99、127～130、133・135～145)

凹石は本遺跡で大量に検出された。素材別に4タイプに分類される。

Aタイプ 円礫を素材としたもの (52～65、70～75・127・129・130・135～141・143)

127はやや扁平な円礫を利用した凹石を、礫側縁を打ちかいて礫器状の石器に再加工している。

Bタイプ 角礫・垂角礫を素材としたもの (76～97・99・128)

Cタイプ 磨石を素材としたもの (66・67・69・98・133・142)

Dタイプ 敲打痕をもつ石器を素材としたもの (68・144・145)

Aタイプのものよりも本遺跡ではBタイプのものが多く出土している。Aタイプのものは表裏の広い面に1ないしは長軸に多数の凹を持つ。71・73～75のように側面の部分にも凹面があるものは稀である。このタイプのものは単に円礫・垂角礫などの違いだけではなく、信濃町近辺の路頭から拾われる円礫垂角礫を用い、側辺などに凹面があるようである。CタイプやDタイプのようにAタイプと同じ円礫を使用しても側面には凹面はない。Aタイプの安山岩の中でも2種類あると思われる。先に述べたようにBタイプのもは、表裏の広い面だけではなく、1面から多面に凹を設けている。凹もひとつだけでなく、Aタイプ同様の長軸方向に、繋がってくぼみが設けられているものが多い。敲石として用いることで、凹石と同じような痕跡ができるとの考察もあるが、本遺跡に石器製作場があったと考察できるような痕跡はなく、

石器製作のための敲石とする凹石の用途は考察しがたい。やはり、植物の実を割ることや、火をつけるための道具等と考察するほうが、最良と思われる。SH03内には本遺跡石皿第2類と共伴してAタイプの凹石が出土している（図版177-137~140）。Aタイプのものは石皿とセットで植物の加工に必要な道具であった可能性を示唆していると思われる。また集石内で出土した凹石はすべてAタイプのものであった。

凹石の分布は図版213で示したように調査区の中央部平坦面全体に広がっている。Aタイプのものは全体に分布し、Bタイプのものはやや北東部分に多く分布し、縄文草創期終末~早期前半の土器群と分布に類似するが、土器の分布が広範囲にわたっていることもあり、石器と土器の関係がはっきりとしなかった。

10. 特殊磨石（100~116）

特殊磨石は本遺跡では6類に分類される。

第1類 平面楕円形、断面薄い楕円形の長軸一側縁を磨面としたもの（100・103・106）

第2類 平面楕円形、断面方形あるいは分厚い楕円形で、長軸の両側縁を磨り面にしたもの（102・105・107）

第3類 第2類に加えて平面も磨り面にしたもの（101・104・108・112）

第4類 平面楕円形、断面方形あるいは分厚い楕円形で、長軸の一側縁を磨り面にしたもの（109・111・113）

第5類 平面楕円形、断面蒲鉾状あるいは楕円形、長軸の両側縁を磨面としたもの（110）

第6類 平面楕円形の長軸一側縁を磨面としたもの。断面三角形の頂点部分を磨面としたもの（114~116）

特殊磨石を敲石に再利用したものは112、特殊磨石を凹石に再利用したものは111・113である。113は凹が浅く、敲打痕のように見える。

特殊磨石の分布は表裏縄文系土器群と分布は同様調査区中央東側に分布する。

11. 石鐘（117~121）

小さい扁平な楕円礫の両先端を剥離しただけの礫石鐘である。大きさも類似する。

12. 石皿（122~125）

本遺跡の石皿には3つのタイプがある。

第1類 中央部分が凹面をもち、外側に縁のあるものもの（122）

本遺跡では欠損した112のみである。

第2類 中央部に凹面があるが縁のないもの（125）

125はやや中央部がくぼむ外側縁剥離して形態を整えた石皿である。

第3類 板状の石皿（123・124）

123と124は板状の石皿。123の中央部分には凹石のような部分がある。凹石として再利用されたものと思われる。

13. スタンプ形石器（126）

正面と側面を砥石面とした石器である。砥石の形態は平面楕円形の細長い砂岩の礫を利用して、旧石器時代の砥石と思われる。その砥石を半截して両側辺を敲打して、スタンプ形石器として再加工したと思われる。半截した面を底面（使用面）としたものと思われ、底面が磨耗しており、底面側縁には敲打したことによる剥離痕が見られる。出土地点はSK142覆土内である。

図版番号	器 NO	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小ワザ名	スケール	出土層位	器種	材質	長さ mm	幅 mm	重量g	遺存率	欠損部位	備考	
図版214	1	42521		42521	I FK19	3/4	II	Po	An	136	39	9	61.22	100		草創期
図版214	2	34418		34418	I LD01	3/4	II	TP	An	66	26	6	9.98	75	長さ	草創期
図版214	3	35463		35463	I LJ03	3/4	II	AH	Ob	12	16	3.5	0.31	75	幅	
図版214	4	33401		33401	I LD01	3/4	II	AH	Ob	11.5	11.5	2	0.19	100		
図版214	5	38928		38928	I GD16	3/4	II	AH	Ob	12	12	2.5	0.23	100		
図版214	6	55005		55005		3/4		AH	Ob	12.5	12	2	0.15	100		35760と注記、間違いである 可能性なし。
図版214	7	34986		34986	I LE01	3/4	II	AH	Ob	11	12	2	0.15	100		
図版214	8	38060		38060	I PT20	3/4	II	AI	Ob	12	13.5	2.5	0.31	100		
図版214	9	37611		37611	I OD17	3/4	II	AH	Ob	9.5	12	2.5	0.18	100		
図版214	10	35853		35853	I KQ03	3/4	III	AH	Ob	12	9	2	0.17	75	幅	
図版214	11	35854		35854	I KP03	3/4	III	AI	Ob	11	12.5	2	0.17	100		
図版214	12	37470		37470	I LG06	3/4	III	AH	Ag	15	11	2	0.3	100		
図版214	13	37610		37610	I GC17	3/4	II	AH	Ob	15	14	2	0.23	100		
図版214	14	41871		41871	I FQ14	3/4	III	AH	Ob	16.5	18	3.5	0.47	75	長さ	
図版214	15	42896		42896	I KC06	3/4	II	AH	Ch	18.5	11	3.5	0.61	100		
図版214	16	31983		31983	I LH05	3/4	II	AH	Ob	18	15	3	0.63	100		
図版214	17	90025		60025	I FF11	3/4	II	AH	Ch	18.5	13	3.5	0.7	100		
図版215	18	37612		37612	I GF17	3/4	II	AH	Ob	14.5	18	2.5	0.41	100		
図版215	19	38574		38574	VIOL12	3/4	III	AH	Ch	20	14.5	3	0.68	100		
図版215	20	31013		31013	I KR08	3/4	II	AH	SS	27	17	4	1.41	100		
図版215	21	43561		43561	I KN14	3/4	II	AH	ST	21	17	3	0.72	100		
図版215	22	37609		37609	I FS18	3/4	III	AH	Ob	26.5	13	4	1.02	100		
図版215	23	49475		49475	I FR09	3/4	II	AH	Ob	59	16	4	1.27	100		
図版215	24	40722		40722	VIOT13	3/4	II	AH	Ob	24.5	15	3.5	0.71	100		
図版215	25	32013		32013	I LG19	3/4	II	AH	An	22	21	3	0.99	100		
図版215	26	43096		43096	I LN08	3/4	II	AH	An	30	24	5	2.19	100		
図版215	27	32008		32008	I LB16	3/4	II	AH	SS	32	13.5	8	2.79	100		
図版215	28	35765		35765	I G118	3/4	II	AH	HS	20.5	20	3.5	1.36	100		
図版215	29	40119		40119	I GA14	3/4	II	RS	Ob	16	16	4	1.2	100		
図版215	30	38218		38218	I GF18	3/4	III	BS	Ag	27.5	18	4	2.69	100		
図版215	31	30237		30237	I KS03	3/4	III	BS	Ob	18	16	6	1.53	75	長さ	
図版215	32	47353		47353	I GA20	3/4	IV上	FS	Ob	20.5	14	5	1.36	100		ファシットを有する
図版215	33	35797		35797	I FT20	3/4	II	Sc	Ob	32	17.5	7.5	4.63	100		
図版215	34	37482		37482	I FR19	3/4	II	Sc	Ob	19	16	5.5	1.69	100		
図版215	35	38174		38174	I GF19	3/4	II	Dr	Ag	22	18	5	1.57	100		
図版218	36	46608		46608	I LC19	1/2	II	NS	Ja	28.5	32.5	7.5	6.17	100		
図版216	37	49648		49648	I FP06	1/2	II	NS	ST	31.5	38	6.5	6.52	100		
図版218	38	36015		36015	I GB19	1/2	II	NS	Ja	30.5	34	9	7.83	100		
図版216	39	42897		42897	I KC07	1/2	II	NS	SS	40.5	59.5	7.5	14.2	100		
図版216	40	45550		45550	I FC12	1/2	II	NS	SS	35.3	55	7.5	12.99	100		
図版216	41	40908		40908	I QA04	1/2	II	NS	An	38	51.5	6.5	7.92	100		
図版216	42	46594		46594	I QD01	1/2	II	NS	SS	46	51	8	16.97	100		
図版216	43	35763		35763	I GK20	1/2	II	Sc	Tu	71.5	75	19	119.52	100		草創期?

第49表 日向林A遺跡 縄文時代石器属性表 (1)

第12章 日向林A遺跡

図版番号	図NO	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小ナリが名	スケール	出土層位	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	遺存度	欠損部位	備考
図版216	44	44997		44997	IKO10	1/2	II	Sc	An	53	59	21	98.54	100		草創期?
図版217	45	43631		43631	IKA02	1/2	II	Sc	SS	66	49	22.5	78.25	100		草創期?
図版217	46	44251		44251	IFE14	1/2	II	As(扇形磨製)	Tu	64	86	14	74.69	50	長さ・厚さ	草創期?
図版217	47	41470		41470	IFK13	1/2	II	As(打製)	Tu?	110	33.5	13	62.66	100		草創期?
図版217	48	43627		43627	IKA02	1/2	II	Sc	ST	237	86	18	334.96	100		草創期?
図版218	49	40137		40137	IGB14	1/2	III	Sc	Tu	202	56	31	331.13	100		草創期? 40138・40140と組合、計書体は接合後のもの
図版218	50	32004		32004	ILD19	1/2	II	As(打製)	Tu	111	51	26.5	129.89	75	長さ	
図版218	51	40139		40139	IGB14	1/2	II	As(打製)	Tu	91	48	22.5	124.83	50	長さ	草創期?
図版219	52	46198		46198	IKK04	1/3	III	Pa	安山岩	104	92	34	397.42	100		
図版219	53	42645		42645	IFM19	1/3	II	Pa	安山岩	106	86	34	344.19	100		
図版219	54	38672		38672	IFQ16	1/3	II	Pa	安山岩				5.89			
図版219	55	45606		45606	IFC13	1/3	II	Pa	安山岩	93	76	43	372.14	100		
図版219	56	32255		32255	ILD08	1/3	II	Pa	安山岩	59	49	29	93.19	100		
図版219	57	38230		38230	IGD15	1/3	II	Pa	安山岩	70	66	32	151.19	100		スリ石でもある
図版219	58	39388		39388	IFT12	1/3	II	Pa	安山岩	87	46	39	183.19	100		
図版219	59	49092		49092	IFT07	1/3	II	Pa	安山岩	104	70	29.5	269.18	100		
図版219	60	48247		48247	IEE19	1/3	II	Pa	安山岩	113	51	33.5	216.95	100		
図版219	61	40356		40356	IGD18	1/3	II	Pa	安山岩	169	60	43	309.21	100		
図版219	62	50631		50631	IFJ09	1/3	II	Pa	安山岩	92	76	30	279.85	100		
図版219	63	30056		30056	IKN03	1/3	III	Pa	安山岩	83	82	35	344.95	100		礫から変更 磨石から転用
図版220	64	38403		38403	IGF12	1/3	III	Pa	安山岩	96	66	34	233.38	100		
図版220	65	41273		41273	IFQ13	1/3	II	Pa	安山岩	106	60	43	284.95	100		
図版220	66	33437		33437	IXT06	1/3	II	Pa	安山岩	122	65	44	478.86	100		
図版220	67	31999		31999	ILD09	1/3	II	Pa	安山岩	84	59	30	195.17	100		磨石を転用
図版220	68	46023		46023	IKG01	1/3	II	Pa	An	38	30	25	30	100		
図版220	69	49241		49241	IFO07	1/3	II	Pa	安山岩	94	73	33	296.66	100		
図版220	70	44555		44555	IKF01	1/3	II	Pa	安山岩	81	78	65.5	330.79	100		
図版220	71	48611		48611	IGB06	1/3	II	Pa	Cr	106	92	48	582.36	100		
図版220	72	44187		44187	IFJ14	1/3	III	Pa	安山岩	111	92	56	718.45	100		
図版220	73	49852		49852	IFH13	1/3	II	Pa	安山岩	132	68	49	536.92	100		
図版220	74	46952		46952	IKI01	1/3	II	Pa	安山岩	122	96	45	601.79	100		
図版220	75	37887		37887	IGF15	1/3	II	Pa	安山岩				7.73			
図版221	76	41869		41869	IFO11	1/3	II	Pa	安山岩	83.5	62	36.5	235.04	100		
図版221	77	30134		30134	IKR02	1/3	III	Pa	安山岩	83	77	44	352.51	50	長さ	
図版221	78	40257		40257	IGD16	1/3	II	Pa	安山岩	77	82	58	391.41	50	長さ・厚さ	
図版221	79	40746		40746	IFS13	1/3	III	Pa	安山岩	120	63	38	319.92	100		
図版221	80	43585		43585	IKN15	1/3	II	Pa	安山岩	101	70	48	404.79	100		
図版221	81	45349 SI-06		45349	IKJ10	1/3	II	Pa	安山岩	152	70	37	575.31	100		石重を転用が。
図版221	82	49032		49032	IFS06	1/3	II	Pa	安山岩	98	66	41.5	237.47	100		
図版221	83	40990		40990	IQB01	1/3	II	Pa	安山岩	101	84	37.5	321.32	100		
図版221	84	41842		41842	IFQ14	1/3	II	Pa	安山岩	88	53	49	259.84	100		
図版221	85	35539		35539	ICJ20	1/3	II	Pa	安山岩	165	70	38	252.25	100		
図版221	86	47007		47007	WER20	1/3	II	Pa	安山岩	104	62	34	211.92	100		

第49表 日向林A遺跡 縄文時代石器属性表 (2)

図版番 号	整理番 号	遺構・ 区分	遺物番 号	小ナツラ 名	スケ ール	出土 層位	器 種	材質	長さ mm	幅 mm	重量 g	遺 存 度	欠損部位	備 考
図版222	87	39491	39491	I GA11	1/3	II	Pa	安山岩	83	76	54	346.86	100	
図版222	88	45651	45651	I FA12	1/3	III	Pa	安山岩	96	66	50	272.62	100	
図版222	89	49180	49180	I FR07	1/3	II	Pa	安山岩	101	86	46	332.35	100	
図版222	90	49113	49113	I GA07	1/3	II	Pa	安山岩	113	88	27	303.22	75/長さ	
図版222	91	39699	39699	I GA11	1/3	II	Pa	安山岩	104	50	61	282.21	100	
図版222	92	37488	37488	I PR18	1/3	II	Pa	安山岩	111	78	39	373.68	75/長さ	
図版222	93	41119	41119	I FR14	1/3	II	Pa	安山岩	140	70	44	337.96	100	
図版222	94	43563	43563	I KO15	1/3	II	Pa	安山岩	127	83	43.5	396.18	100	
図版222	95	32168	32168	I LE10	1/3	III	Pa	安山岩	107	78	41.5	317.53	100	
図版222	96	41755	41755	I FO12	1/3	II	Pa	安山岩	82.5	72	50.5	244.91	100	
図版222	97	34093	34093	I LF10	1/3	II	Pa	安山岩	100	71	61	347.64	100	
図版223	98	44191	44191	I FH14	1/3	II	Pa	安山岩	66	78	38.5	237.91	50/長さ	
図版223	99	40623	40623	I GG18	1/3	II	Pa	安山岩	142	88	86.5	1034.7	100	多孔石
図版223	100	51056	51056	I FP08	1/3	II	特殊磨石	安山岩	140	69	51.5	572.5	100	
図版223	101	30114	30114	I KQ02	1/3	II	特殊磨石	安山岩	120	74	44	620.82	100	
図版223	102	40103	40103	I GA14	1/3	III	特殊磨石	Gr	157	70	52	851.08	100	
図版223	103	33402	33402	I LL06	1/3	II	特殊磨石	安山岩	110	80	47	646.63	100	
図版223	104	40409	40409	I FS15	1/3	III	特殊磨石	安山岩	124	69	42.6	548.61	100	
図版223	105	39868	39868	I GB12	1/3	II	特殊磨石	Sa	120	73	57	645.13	100	
図版224	106	39311	39311	I FS11	1/3	II	特殊磨石	Sa	125	78	34	497.38	100	
図版224	107	33403	33403	I LK06	1/3	II	特殊磨石	Sa	122	70	40	560.67	100	
図版224	108	44625	44625	I KF02	1/3	II	特殊磨石	安山岩	120	60	51	577.54	100	
図版224	109	41623	41623	I FN13	1/3	II	特殊磨石	Gr	120	61	56	20.4	100	
図版224	110	30486	30486	I KQ05	1/3	II	特殊磨石	Sa	138	95	52	950.19	100	
図版224	111	51053	51053	I PP07	1/3	II	特殊磨石	Sa	137	79	54	783.63	100	両石を兼ねる・ベンガラ?
図版224	112	31341	31341	I LB11	1/3	II	特殊磨石	安山岩	147	71	53	922.17	100	両石を兼ねる
図版224	113	49197	49197	I FL08	1/3	II	特殊磨石	安山岩	127	63	51	643.58	75/長さ	
図版225	114	50496	50496	I FJ11	1/3	II	特殊磨石	閃緑岩	144	61	35	329.2	25/幅・厚さ	
図版225	115	49450	49450	I FR08	1/3	II	特殊磨石	安山岩	135	74	70	892.86	100	
図版225	116	37518	37518	I FT18	1/3	II	特殊磨石	安山岩	147	78	52	641.49	75/長さ	
図版225	117	42237	42237	I FJ16	1/3	II	石鏃	Sa	84	58	18.5	110.76	100	
図版225	118	42837	42837	I K305	1/3	II	石鏃	安山岩	95	72	20.5	219.08	100	
図版225	119	40542	40542	I PP16	1/3	II	石鏃	安山岩	92	58	21	146.23	75/幅	
図版225	120	47969	47969	明106	1/3	II	石鏃	安山岩	92	76.3	14	129.11	75/幅	
図版225	121	43931	43931	I PM16	1/3	II	石鏃	Sa	86	56	22	153.75	100	
図版226	122	50473	50473	I FJ12	1/3	II	SD	安山岩	132	92	44	496.88	25/長さ・幅・厚さ	
図版226	123	43486	43486	I FJ19	1/3	II	SD	安山岩	167	169	51	1892.9	50/長さ・厚さ	
図版226	124	37453	37453	I GF17	1/3	II	SD	安山岩	159	122	64	1370.9	25/長さ・幅・厚さ	
図版226	125	31909	31909	I LE05	1/4	II	SD	安山岩						31908・31910と併合、計測値は31907に準拠
図版227	126	60983	SK142	4	1/3		スタンプ形石器(W)	Sa	212	107	73	2480	75/長さ	
図版227	127	60035	SK169	32	1/4		Pa	安山岩	113	86	32	390.96	100	
図版227	128	60965	SK129	1	1/4		Pa	安山岩	147	66	34.5	537.26	100	

第49表 日向林A遺跡 縄文時代石器属性表 (3)